

奇譚クラス

新しい風俗文献誌

8月号



8-AUGUST '66

昭和四十一年八月号 奇譚クラス 定価 三〇〇円

昭和四十一年八月号

定価 三〇〇円

THE KITAN CLUB
Published Monthly By Tenseisya
Osaka Japan



8月号 300

◎新趣向／責と悦虐／フオート分讓品◎

強烈あぐら縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(えめ)

自刃血まみれ屍体

大手札十枚一組 一〇〇〇円
山原清子 略号(えし)

驚づかみの乳房

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦、大塚 略号(えう)

縛りあげられる女

大手札十二枚一組 一〇〇〇円
大塚、東浦 略号(えの)

縛り虐める悦楽境

大手札五枚一組 六〇〇円
大塚、東浦 略号(えわ)

血まみれ女斗場面

大手札十二枚一組 一五〇〇円
山原、東浦 略号(えみ)

くすぐり責め地獄

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦、大塚 略号(えな)

強烈くすぐり責め

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(ひか)

手吊り股間縛責め

大手札五枚一組 六〇〇円
東浦、大塚 略号(えお)

ポリウムをくびる

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(ひか)

両手吊りにあえぐ

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(ひお)

後手垂直しぼり

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(ひお)

一糸まとわぬ緊縛

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚啓子 略号(ひく)

豊胸をくびる縄目

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚啓子 略号(ひき)

浣腸とオシメ装着

大手札四枚一組 五〇〇円
大塚啓子 略号(ひそ)

☆最新撮影／総天然色／写真分讓品☆

両手吊りに悶える

大手札三枚一組 一〇〇〇円
大塚啓子 略号(てき)

後手裸身柱縛り

大手札四枚一組 一〇〇〇円
大塚啓子 略号(てか)

縄目にあえぐ裸女

大手札四枚一組 一〇〇〇円
大塚啓子 略号(てく)

豊麗裸身の縄目

大手札四枚一組 一〇〇〇円
大塚啓子 略号(てく)

後手高手小手縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円
大塚啓子 略号(てま)

長襦袢緊縛色模様

大手札三枚一組 一〇〇〇円
東浦ひかる 略号(てみ)

緋腰巻緊縛色模様

大手札三枚一組 一〇〇〇円
東浦ひかる 略号(てむ)

赤のコントラストはカラリと

大手札三枚一組 一〇〇〇円
東浦ひかる 略号(てめ)

猿ぐつわに呻く

大手札三枚一組 一〇〇〇円
東浦ひかる 略号(てめ)

柱宙吊り縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円
東浦ひかる 略号(ても)

ポリウムを縛る

大手札三枚一組 一〇〇〇円
東浦ひかる 略号(てん)

縄の苦悶を狙う

大手札三枚一組 一〇〇〇円
東浦ひかる 略号(てん)

真紅の腰巻着用

大手札二枚組 八〇〇円
大塚啓子 略号(うお)

悶える緊縛色模様

大手札二枚組 八〇〇円
東浦ひかる 略号(うて)

真紅の腰巻緊縛

大手札四枚一組 一〇〇〇円
大塚啓子 略号(うこ)

☆一宮百合子△総天然色▽緊縛写真☆

可愛い小悪魔一宮百合子の華麗なカラープリントフォト集

華麗なる緊縛裸身

大手札三枚一組 一〇〇〇円
一宮百合子 略号△るむ▽

伸びやかな若々しい脚線美をすっきりむきだしにして、シミ一つない裸身に厳しく掛った高小手の縄目にあえぐ一宮百合子嬢の美しい全身像をカラーにてどうぞ。

みだらな開股縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円
一宮百合子 略号△るの▽

肉づきのよいむっちりとした太股をがっちり開かせられた可愛らしい小悪魔の正面裸身像によって可憐な彼女の表情を緊縛ポーズの中から色彩写真によってどうぞ。

責めに疲れた諦観

大手札三枚一組 一〇〇〇円
一宮百合子 略号△るお▽

均整のとれた縛しめの裸身をどたりと投げだして、あくなき責めに疲れ果てた諦観のポーズを見せた百合子嬢の責めの美しさは、カラーによって一段と映えている。

高手小手下手縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円
一宮百合子 略号△るや▽

後手首を高々と首筋近くまで吊りあげるように厳しく縛りあげられた高手下手の姿態。輝くように美しい裸身を、あますところなく天然色にてごらんいただけます。

真紅の腰巻姿緊縛

大手札三枚一組 一〇〇〇円
一宮百合子 略号△るま▽

これこそ天然色写真の本領発揮ともいうべき緊縛フォト。真紅の腰巻を腰にした百合子嬢が厳しい縛りに悶えて、その若さに洗刺とした裸身と可憐な美貌をさらす。

羞らしいの正面縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円
一宮百合子 略号△るけ▽

裸身にぐるぐると縄が掛けられ顔を正面向けさせられるのへ、顔を紅潮させて羞恥の表情をあからさまに、ともすれば伏目勝ちになる可愛い小悪魔の羞らしい。

若肌に喰い込む縄

大手札三枚一組 一〇〇〇円
一宮百合子 略号△るふ▽

洋服を着ていると細っそり見えるが、いざ裸にしてみると案外肉がついていて豊かな感じであるが、さすがに若肌にびっちり縄が喰い込むと痛々しい感じがする。

「新版Mフォト分譲品」
稀代のサジスチン

花田沙登子嬢登場

(男性モデル二名使用)

馬乗り女王様行状

大手札四枚一組 一〇〇〇円
花田沙登子 略号△わふ▽

M男の胸から咽喉もとへ、どっかりと馬乗りに跨った花田女王様が、男の両手を前手縛りに縛りあげて自由を奪っておいで、さて両股でジワジワと咽喉を責める。

両足の首絞め責め

大手札三枚一組 八〇〇円
花田沙登子 略号△わむ▽

伸びきった両脚で男の首を挟んで締めつけ、両足を交叉して逃げないようになると、冷やかな視線で苦悶する男の表情を眺めながら振りまわし絞めつけ弄ぶ。

肩車の臀部に喘ぐ

大手札三枚一組 八〇〇円
花田沙登子 略号△わら▽

ふくよかなの裸尻をでんと首筋にすえられて、全体重を掛けられるとM男は、その重量感に圧倒される。女王様は逞ましい二本の脚をぶらぶらと見せびらかす。

臀部の咽喉輪責め

大手札二枚一組 六〇〇円
花田沙登子 略号△わや▽

逞ましくも豊かな裸の臀部がM氏の咽喉輪にびったりと坐って、息もたえだえに目を白黒させて悶え苦しむさまを、上から冷ややかに眺めて薄笑いをする女王様。

臀臭をかがす

大手札二枚一組 六〇〇円
花田沙登子 略号△わけ▽

鼻もひん曲がれとばかり顔面上に大きなお尻を据えれば、丁度臭気を発するあたりがM男の鼻と口をふさいで、たまらない芳香が脳髓の芯まで貫くようである。

足舐めの強制

大手札三枚一組 八〇〇円
花田沙登子 略号△わな▽

首に縄をからませられたM氏は、縄尻を手綱がわりに女御主人様に握られて、足先で転がされる。いやという程足舐めさせられる。

女王様の牡犬調教

大手札八枚一組 一五〇〇円
花田沙登子 略号△わね▽

サジスチン花田沙登子の真骨頂を躍如たらしめた動きのある牡犬の調教ぶりを手馴れた子飼いのM男を使用して実演した連続写真の中から迫力のあるものを選んだ。

☆最新撮影傑作△S Mフォト▽分譲品☆

股間縛恍惚表情集

大手札五枚一組 六〇〇円
一宮百合子 略号△るね▽

縛なれることに興味を抱きだし、た百合子嬢が両太股の附根を締めあげる股間縛りに対して反応する恍惚の表情を、さまざまポーズによって起る表情を集録した。

鼻のいたぶられ集

大手札四枚一組 五〇〇円
一宮百合子 略号△るえ▽

手指の先によって表情の中心である鼻をいろいろに弄ばれても、百合子嬢は後手に括られていた、で、只徒らに鼻をつきだして、いたぶられるにまかすだけだった。

股間縛苦悶表情集

大手札五枚一組 六〇〇円
一宮百合子 略号△るり▽

股間縛りの裸身を動かされることによって起る縄目の苦痛を、その全身と顔面の表情に現した美しい悦虐の模様。今や彼女はこぼれんばかりの色気を全身に湛える。

首縄股間膝頭縛り

大手札五枚一組 六〇〇円
一宮百合子 略号△るそ▽

首縄から胸、二の腕から胸、そして厳しい股間縛りに膝頭まで二重に縄を掛けられた状態で、ヨチヨチ歩きさせられる百合子は全身に縄を喰い込ませて頑張るのだ。

逆エビ強烈縛り

大手札四枚一組 五〇〇円
一宮百合子 略号△るれ▽

両手を後手に高小手に縛りあげられた縄尻を背中から足首に連結されて引絞られると、身体前面が全く無防備にさらけ出されて縄もちぎれよともがき抜く。

変型後手縛り裸身

大手札七枚一組 七〇〇円
一宮百合子 略号△るた▽

後手縛りの型をいろいろとごらんにいれると共に、二の腕にぐつときつく喰い込む有様を百合子嬢の若々しい張り切った女体によって縛りの妙味を味って頂きます。

肌に喰込む股間縛

大手札五枚一組 六〇〇円
一宮百合子 略号△るよ▽

乳房の下に掛った縄と連繫した一本の縄が女体の中心臍の上を通って、ぐつと肌に喰い込むところを、とくとごらん頂けるごたごたとしない単純一本縄股間縛り。

緊縛による表情集

大手札五枚一組 六〇〇円
一宮百合子 略号△るこ▽

緊縛によって醸しだされた、うつろとした法悦境の美しくも可憐な百合子嬢の表情を、大写しによって、はつきりと微細の点に至るまで、レンズに捕捉しました。

開股股間強烈縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号△るぬ▽

両方の肩から胸縄、胸縄へと連結した股間縛りは、寝ころがされるとき思わず両肢を八の字にひろげて、はからずもここに股間縛りの開股が予想外に展開されたのだ。

股間縛悶悦姿態集

大手札七枚一組 七〇〇円
一宮百合子 略号△るか▽

首から一氣にさがって縦縄が股をくぐって背中へ走ってゆく女体を二分する絶妙の縄くばり。横臥し或は中腰で初めての縄の深刻な味にどうしようもなく悶える姿。

緊縛感放心表情集

大手札五枚一組 五〇〇円
一宮百合子 略号△るわ▽

高小手縛り、右半分縦縄縛り、変型後手縛り、可愛らしい小悪魔百合子が種々な放心の表情で、うつろと目をうつわつたところをパチリ。

パンプスの下にて

大手札十枚一組 二〇〇〇円
新版Mフォト 略号△わそ▽

ハイヒールの先をくわえさせられ踵で踏まれ、蹴られ、踏み込まれ、さんざんに黒い妖精にさいなまれた挙句、女御主人様のお尻の下に呻吟する新しいMモデル。

臀部の下に蠢めく

大手札十枚一組 二〇〇〇円
新版Mフォト 略号△われ▽

女御主人様のお尻の下敷きにされて、顔を、首を、咽喉を、ひしやけるまで押し潰される新M男。均整のとれた美しい御主人様の体は勝ち誇ったように凛々しい。

首の股責め十態

大手札十枚一組 二〇〇〇円
新版Mフォト 略号△わよ▽

首の上に跨って股の間に顔を挟んで止めのポーズをとった女御主人様は、冷笑をうかべてM男の顔を面を見下しながら、ぐいぐいと咽喉を締めつけてくるのだった。

緊縛虐待への過程

大手札十枚一組 二〇〇〇円
新版Mフォト 略号△わた▽

女御人様の御手によって、身動きできないように縛り上げられたいと願う新しいM男を、後手に縛ってゆく乱暴な仕草を順を追うて最後の止めまで追求してゆく。

このごろ、ものを書く時間がめっきり少なくなった。書きたい意欲も構想も強いのに、他のことに追われてしまって、机に向うまともまった時間が乏しい。反面、しぶとの生活に満ち足りているからかも知れない。

都心から一時間半、何よりも空気の良い、緑多い団地の中に、平凡な一個の家庭がある。

夫 四郎 三十四才
妻 睦子 二十九才

S・Mの結びつきで、新鮮味のおとろえない家庭には、何となく明るいびやかなムードがある。夫が暴君であると同時に、明君的資質を備えているせい、妻の被虐が夫を信頼しきった物おじしいせい、暗さが全くないのが嬉しい。



妻の睦子は、一見したところ、

四つ五つは若く見える。一緒にあったころ、睦子は今よりずっとほっそりしていた。やせていることをよく責められて、しなやかな体を無理に屈伸させられた記憶が懐かしい。その睦子が女の盛りをすぎたせい、夫婦の努力が実のつたのか、肩口から背中、下腹部、太腿などにムチムチと脂肪がのって、女の健康的な匂いをいっぱいに発散させている。

「お前も随分縛りよくなった。年の割に体が柔らかいし、何といっても我慢強いのがいい」
「睦子だって、何も、初めからこうじゃなかったワ。どなたかのお

仕込みがいいのヨ。初めは、随分叱られてばかりいたワ」

妻は、夫に取られた右手首を預けるように背を向けて、夫の膝ににじり寄り、肩越しに振り仰いで夫に甘えた。

「女囚睦子、直ちに衣服を脱いで刑に服しなさい」

「ハ、ハイ」

可愛いエプロン、毛糸のソックス、カーディガン、セーター、アンダーシャツ、スラックス。妻は従順に手早く脱いで、傍に畳んで重ねた。ブラジャーやコルセットはなく、フリルのついたブルーのパンティ姿があった。

「どうした？ それ以上は脱がないのか」

「ハイ、アノ、脱ぎます」

ブルーのナイロンパンティの下には、白のブリーフがあった。妻は悩乱を見せて眼を伏せたまま、夫の前に正坐した。両手を腰に組み、項垂れて受刑のポーズをとる艶々しい女体の美しさ。

「お前の望みの罰を言ってみろ」
「ハイ、私は旦那さまのお望みに

なるお仕置でしたら、どのようなものでも喜んでお受け致します」
妻は夫に促されて、自らを縛しめる紐の入ったビニール袋を持ってきた。そして、夫の足許へ置くと、夫に背を向けて正坐し、両手を背後にまわした。

一気に両手首を首筋近くまで引き上げて更に頸に一巻きする。首紐は、唯かけるだけなら、かなり手首を吊上げても平気だが、一巻きすると凄く効果的で、喉の一番下を巻いても、流石の柔軟な悦虐女体が覚悟をきめてしまう。胸の隆起の上下を締めつけて、乳房を絞り出すようにする。腹部を三カ所、胃の辺、ウエスト、臍のやや下の辺を縛るとき、妻はことさら腹をへこませた。

上体がコッペパンか腸詰を思わせる形をしていて、顔面は首縄で充血し小さくゼイゼイと喘いだ。

以前は原稿用紙の上をペンが走るように何十枚もの分量を一気に書きあげたものだったが、このごろはペンを握っても遅々として進まない。独身時代のあの頃が一入懐しく思われると同時に、理解のある愛妻しのぶとの生活も楽しくて仕方がないのである。

平凡な家庭で 近 藤 一

「書いた、書こうと思われる

女性の読者のみなさんへ」

橘 行 司 子



これは「女性の読者」サロン（四月号）の編集子の言葉に刺激されて書いた物であるが、露骨な内容の文章”になろうとするのを、骨子はまげず表現でカバーして公開誌上に如何に発表できるかという、甚だデリケートな課題を研究しようとする一文なので、カウイ所に手が届かないくらいもあるが、どうぞ応用、参考されんことを願う。

本誌は、マニア共通の広場であ

り、ことさらデモクラシーなど出さなくても、書く発表する権利は男・女五分五分。当り前のことだが、さて四月号を手にとってみると、本文には△紅△は影も無いようである。オール男性執筆陣。サロンと読者通信にちよつと顔をのぞかせてる程度。それならば女性とは本文向を投稿してないのか、書いて無いのかというところ、書きまわヨ夫人”など編集子が言葉をうるするほどで、その心配はないよ

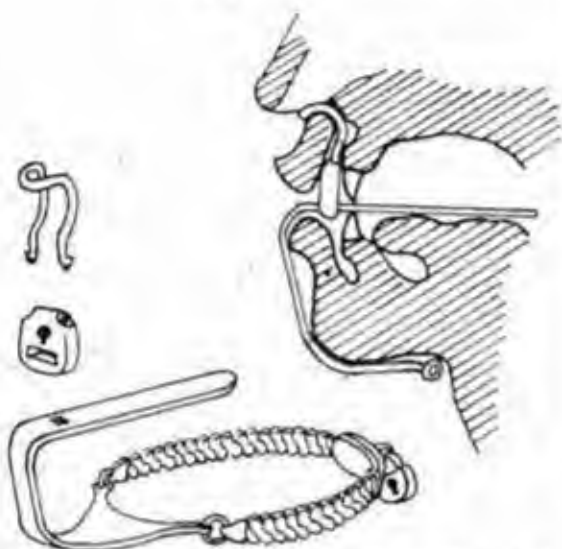
うである。そこで、女性の読者みなさんよ、いまさらウンヌンするまでもなく、あなた方は書ける腕は充分にある。それこそ、女性特有の繊細”な感覚を持つていられる。だが、特に貴重な体験をもつ病院の方々、もう少し表現技法を学んでみませんか。また、SMの素晴らしい経験を、有していられる方々。妖しい夢をペンにくくしたいと望む方々。郷に入れば郷に従え”この文句をふと、読者通信△伊那柴子△のお便りの一節を拝見して浮びました。私が職業柄性器に関する事見聞きしておりますので”という言葉。病院の世界ではマジメな表現ですね。△肛門△という文字と同様に。これが一度、告白・小説の分野となると生文字と受け取られやすい。発表場処を念頭に入れて書く必要があるのですね。私がお尻を出して”という一節もあつたが、これは△私がおしりを出して△とした方が、「性器」は、女の体のはずかしい所を――

とすると文章にやわらかみがにじみ出てくる。どうでしょうか。このような事は、何も面倒ではありません。書くスリルに通じる智的作業と考えたらよいでしょう（発表された時のうれしさを前提として）。なるべくこれは露骨な文字だと思つたら、カタッパシから△カタカナ△△ひらかな△にしてみなさい。これも手っ取り早い方便ですね。文の後先に注意すれば、読者は判断しましょうか。（ユビが、かすかにふるえ、はずかしい部分に△――この形容、判りまいようか。編集子のサロンの言葉、この人は自瀆の方法”という△自瀆△について、そのものを想像させる表現をさりげなく出してみました。みなさんは、おそらく草花がお好きでしょうね。生理的な個有名詞は、芸術的に花を賞でるお気持ち（例は上げません）。四月号の団鬼六「花と蛇」の一節、いやーね。奥様、お行儀の悪い。こんなもの、はつきりと、のぞかせるものじゃありませんわ”と千代が静子夫人に言葉をかける所がある。△こんなもの△で、あの場処を表現してるのですね。いやみのない、まことにきれいな文句です。このような△あれ△△そ

「ギャグ」

(その二)

千葉青鬼



「ボクの責め方」

宝塚二三夫

れV△あの所Vとかいう表現、考
えてみる必要がありますね。

また、本人の姿態を直接に描写
しなくても、あたりに登場してい
る者を利用、△会話Vによって、
それを説明する技法だっている。

「だめだめ、千代夫人、樽を動か
しちゃ、お酒が他へ流れ落ちるん
じゃありませんか」この一言で、
いま、静子夫人が、どのような状
態になっているのか——判りまし
ょうね。一六八頁に△酒カスVと

いう表現がありますが、このよう
な技法をよく読まれてマスターし
て下さい。

「省略法」ということも大事でし
ょう。例えば、マズイと考えた所
は、すべて、△……Vにしてしま
う。

(看護婦さんは「カンチョウしま
しょうね」と言った。……若い患
者は……しばらくたって、……もう
がまんできないわ」……便器がひ
やりとおしりに……Vというよう

に。(これでも意味は判るでしょ
う)。赤裸々、真実の告白とは、
部分的に微に入り細をうがつ(直
接的)ことより、作品全体から受
け取れる作者の、ウソかホントか
——その思想にあるのですね。そ
の点をよく頭に入れて置きまし
ょう。

その場面を直接的に描写しなく
ても、その前と、終った後を書い
て、まん中はヌカしても、書き方
(例えば看護婦さんの手記なら、

作者のその時の内部の心理を書い
て、患者さんの実際の動きにはふ
れない)によって、美しい深み
のある文章にもなりましようか。
特にこのようなモチーフの時は、
自然描写をさりげなく取入れるこ
とも大切ですね。病室の、治療室
の、窓から眺めた△雲の動きVな
ど。詩情が、異常なシーンを、少
しでもやわらげる効果をもたらせ
ます。その要領を文章に利用して
頂きたいと思います。



福田久文氏の印象

黒淵 嬰一

福田久文氏から手紙を戴いた。先ず字体に驚いた。

本当に男なのだろうか。文章も女性的な言葉遣いである。

「エレクトラを読んでみたい」という一節があった。早速無警告奇襲する事に決めた。

「〇〇様（福田氏の本名）に書籍をお届けに参りました」

先方はお役人。此方は庶民。

但し頭を下げる事には慣れていない。

人の良さそうな門衛のお爺さんは簡単に通過した。昼休みの終る時刻である。

この上なく美人で、それと同程度に横柄な女事務員に三度最敬礼して入室。

男が六人。

将棋を指しているのが二人。銀矢倉対美濃囲い。編集長より上手らしい。

碁を打っているのが二人。見ているのが一人。電話で話しているのが一人。

福田氏は直観で解った。丈の余り高くない瘦形の温厚そうな青年紳士がそれだ。

純白の滑らかな皮膚。女のように見える。

眼鏡の奥に、幾分下り眼尻の柔和な瞳。

貴族的な、それでいて理智的な顔。

要するに福田文学に登場する通りの哲学青年が其処に居た。福田文学の自己表現はそれ程に正確だった。

私も実年齢より若く見える点に自信を持っていたが福田氏には完全に負けた。

この美青年に女装させて縛ってみたい、という不逞な慾望が脳裡を一過して消えたのも、コンプレックスの為せる仕技か。「ソフォクレスを持参しました」

短信往来

再び千草忠夫さんへ

よるの・たんろう

「のおと・あと・らんだむ」（十お答え）の内、私宛の一節、うれしく拝見させて頂きました。

奇クにおいて、なぜあなたが、ローカイであらねばならないのか、なぜ駄ジャレを弄ばさねばならないのか、そのことが私には一番興味があります。

あなたのこのお言葉、ショックでした。それと共に、あなたの熱い友情を、そしてあなたの奇クへの信頼を痛いほど感じました。このあなたの考えは、マニア同志である所を一步進んで、人間と人間との深い地点によびかけるロマンが受け取れたからです。

私はK誌に投稿をはじめたときより現在まで、書くことひとつの限界を定めて表現してきました。（奇クとの連がりという意味で）あなたのお申し出は、それをうちやぶることを要求してるように思われます。（無理もないことです）ね）しかし、あなたのギモンは、誌上公開主義者である私に、それ

以上を望んでいるように……。

「朝顔的耽美論」は夜乃探郎（ペンネーム）としての精一杯の限界です。そんな所が、あなたに、まだ完全に警戒心を解くことができない」と云わせるのでしょうか。マジメな人間の寄り集りである奇クに、私の影の部分よりお見え出来なくてスミマセン。道化者をきどるキザなヤロウとお笑い下さって一番の興味うんぬんは、お忘れ下さるようお答えにならざるお答えで御諒承下さい。

御健筆を切に祈ります。
三人の方へ

福田久文より
箕田京二様。SM時評の中断しましたことは本当に残念です。だれもが余暇を割いているのでございます。そして優れた方ほど負っておられる負担は大きいのです。院長と執政官とは同一人物ではないかというわたしの推理が決定的に誤りだったようでして、わたしは一層の敬意を橋氏に捧げますとともに、平隠無事の日を、一日も早く回復されることを、お祈り申し上げます。
保藤久人様。東山の慕情を読ませて頂きました。過ぎた発言を深くお詫び申し上げます。昔、いた

役人の前に出た業者で通さなければ福田氏に悪い。電話が終るのを待って本を渡した。

「わざわざ有難うございました」對話はそれだけ。併し充分だった。書物を調べている左手を一瞥。

芸術を意味する薬指の太陽宮と直観力を表す小指の水星宮が極度に発達し、深い才能線が掌中央の火星宮付近に迄及んでいる。

怖らく福田氏も黒淵嬰一を観察しただろう。賀集子文学に書いてある程ではない、と。「お邪魔しました。これで失礼致します」

十秒程度の出会いだった。

既に一時を廻りかけている。

タクシーを急がせて会社へ。

二十分遅刻。漸く着席した眼前に、我が社名物の女事務員が現れた。重量七十キロ。それでいて仲々可愛い顔をしている。私

の課員だ。眼が廻る程の伝票束を野球のグローブみたいな手で軽く撮み、卓上にどざりと置いた。「田舎に帰っていたそうだね。よかった?」

彼女は三日程見えなかった。私は印を出しながら言った。

「見合いです。九十九回目の」

彼女はシタタカ者である。負けではいられない。

「土俵の上で見合ったのではないか」

彼女の揮姿を空想しながら擲擲した。彼女の顔が紫色に変わった。

(赤くなつた、と言いたいが地膚が黒いから紫だ)

「見合いの結果は解っているよ。

ノコッタ、ノコッタ、売れ残った」

次の瞬間、私の背骨が大きな音を立てた。福田氏の脊椎なら折れていたに違いない。



桐原紫門

ずらな中学生(旧制)だった頃、その学識に敬意を払っていたある教諭の瑣細なミスを指摘して懇切に注意され、当惑したときの気持ちを、昨日のことにように思い出しました。

河津安春様。ユニツクな戯曲を再読させて頂きました。語り手として月並であることは、神々も円柱たちも許さぬことであるといつた人がいました。奇クに貴重な作品として心から喝采いたします。

団鬼六様。わたしも七月号で二カ所削られる光栄に浴しました。奇クにはクイズがないから、一樣に二字分点線を引いて置かないで削った字数だけ空けて置いて、正解者には編集部でフォートでも贈呈するというのはいかがでしょう。鬼六談義はいつも愛読させて頂いております。大兄のご健在は、あらゆる意味で奇クの支柱でございます。



女の生首

「腰元血斗図」

前川成雄

映画通信

テレビの縛り場面から

佐度喜男

この四月から始まったNHKTVの新番組で尾上松緑と辰之助親子の共演が評判の「池田大助捕物帖」で、ちょっとした拾いものが見られた。

この第一話、大江戸を荒しまわる春雨五人男と呼ばれる兇悪な強盗一味を向うにまわして辰之助と力が活躍する話。元軽業一座にいた女中の助言から強盗一味の連絡暗号を解読した大助が捨て身の張り込みの上、見事犯行の現場で彼等を捕える。

この場面で盗賊たちが次々と大助組に縄をかけられるところは、例によってNHK捕物調のドタバタさわざで、しまりのないことおびただしく、いつもながら、がっかりさせられたが、問題はこのあ

とにあった。現場で取り押さえた四人の中、一人は実は女であったという第一のドンデンがえしのあと、残る一人のナゾを残したまますぐに場面は大岡松緑の裁きの場へと転換する。

白州に引き据えられた一味四人のうしろ姿が見え、一段高い縁側に奉行を中心にした首脳の面々が並んでいる。そしてこの罪人たちの後姿がグーッとアップになって近づくと囚衣に後ろ手本縄縛りというTVドラマなどには全く珍らしい本格的な演出に、正直なところ目を疑った。特に女囚の縄つき姿など、このごろの人道主義的な映画などでもなかなかお目にかかれただけに、この思いがけない収穫にはちょっと興奮させられた

のも小生だけではないと思う。

縛りはややゆるいようだったが一応首縄から両腕へ、そして後手の手首へと縄がまわされており、越前守に一味に裏切り者のあったことを指摘された首領が動揺して仲間を疑うあたりには、カメラは正面に回って、今度は前からこの縄目の程を十分に鑑賞させてくれるという親切さ、縄つきで並んだままののしり合う男囚と女囚の表情など全く心楽しいひとときだった。これで残る一人のかくれ家をめぐって、この女囚が石抱きか何かの拷問にかけられるということにでもなると申し分ないのだが、これも第二のドンデン返しで、あっさりとかまわってしまい、この夢も消え、せめて引き回しでもという期待もむなしかった。

ここでちょっとおかしかったのは、この罪人たちのカツラで囚衣を着せられ、本縄を打たれた女囚が捕まった時の鬘のままで通していたことで、これは当然鬘を解かれた乱髪になるべきだと思うし、この鬘一つのために、せっかくの本縄がずいぶん間が抜けたものに

なって見えたようだ。

ところで中央公論の五月号の随筆で沢沢秀雄氏がロンドンにあるマダム・タッソー館の蠟人形のことを書いたなかで「日本にもそういう蠟人形による歴史展風俗展がほしい」と云っていることだ。これは直接SMに関係のない話だが過日、この方面の研究で有名な名和氏が東京都下のデパートでマネキン人形をつかった拷問刑罰展をひらいたそうだが、小生の考えるのは、それを更に進めて精巧な蠟人形か何かで迫真的な展示場を作ったらと思う。拷問の責苦に脂汗をしたたらせて悶える囚人、磔柱に架けられた女囚の絶望的な表情などが、タッソー館の蠟人形のような本当の人間をコピーした迫真的なもので見られたら、どんなに素晴らしいことだろう。

もう一つ今度は編集部にお願い美木娘山原嬢の熱演による「女性拷問刑罰集」は前に出ましたが、あれはあれで結構と思いますが、もう一つ文献的にと云ったら叱られるかもしれませんが、女囚（江戸時代）写真集がほしいのです。この時代の囚人にかける縄目にしても、十文字、割菱、違い菱、乳掛縄、二重菱縄、あるいは



また早菱、本菱、女五方縄など数多いものがあるようです。しかしこれ等の縄目が実際の人間にかけられたものがどんなであるかは残念ながら縛りファンの大部分の方々にとっても、未知のものであることもまた事実だと思う。そこで

このファンの要望にこたえて、これらの縄目の正面、背面くらいを「文献的」に作成していただけないものかと熱望するものです。女五方にあえぐ山原嬢、乳掛縄にもだえる美木嬢など、どんなに素晴らしいことでしょう。



＜告白＞

「縛」という文字

高崎 和夫

本誌を知ってから、もう十数年になります。早いものです。その十数年の間に私にも色々なことがありました。本誌が色々と変化したように私も又変りました。

「縛」という字を見ると、いつも身の引き締まるような感じがします。これは私だけのことでしょいか。又、なぜ、このように「縛」という文字に対して、強く反応するのでしょうか。不思議に思いますが、なぜ自分だけが、「縛」ということに執着するのか、ということとを考へながら、この筆をとって

います。以前にも読者通信に縛りの好きな女性の方、お友達になつて下さい。と呼びかけたことがありますが、誰一人として希望してくれませんでした。

女の友達もない私は、淋しい思いで「自縛」Vというのを覚えしました。それによって僅かに慰められ、生甲斐を感じていたのです。相手を縛りたくてもパートナーのいない私にとっての唯一つの逃避でもあったのです。

淋しくなると私は一人で裏山へ登ります。ここは滅多に人も来な

池田大助から話が飛躍してしまつたけれど、小生が以前にも指摘していたように「拷問刑罰」ならば、やはりそれにふさわしい縄目にしていただきたい。そしてそこにこそ、責苦に悶える囚人の哀れさがにじみ出てくるものであると

思う。これこそ文献的な石抱き責め、これこそ本物の磔という写真がほしい。スタッフに不足のない諸先生方のこと、別にむづかしいことはないと思う。実現を切望する次第です。

い雑木林で人の通るような道もないのです。手頃の細い木を見つけ、縄を結びつけ、弓の様に曲げます。二本ぐらいしわめたら、先ず裸になります。絶対に誰も来ないとわかっていても、白昼の野外です。から、衆人環視の中で晒されているようにスリルがあります。

片足を一方の木の先に縛りつけ、木をしわめるために引っぱってある縄を解きます。先ず片足が上方に引っぱられますが、自分の体重で曲げた木ですから、片方だけでは、まだ身体は浮きあがりません。でも足首は引っぱられて、ちぎれそうに痛みます。次に更に残った木の縄を解くと、今度は両足を上にして逆さに宙吊りとなります。山の中で、たった一人で裸になつて二本の木に逆さ吊りになっているのを人が見たら、何と申うでしょうか。

人が何と言おうと、私は満足し

ます。一分、二分、三分。足首が痛い。木をしわめるために引っぱった縄をつたって片足だけ解きます。片足だけになると、細い木はぐっと曲って地上にと下ってきます。手が縛れないのが、ちょっと残念ですが結構楽しめます。片足宛縛るのは両方揃えて縛るより長い時間耐えておられるからです。

そんな風にして地面に大の字で寝たときの気持。スリルも今は快い刺激として身体が汗がひいてゆく様です。女性の方如何ですか。強く縛られたとき、それをほどかれたときの気持など、どなたか是非発表して下さい。

「縛」という文字が、私にとつてう、こんなことまで言わせてしまいました。縛ってみたい、縛ってもらいたい。縄に興味を持ち又縄に恐怖を持つ私の拙い告白です。

同好の方々、特に女性の方のお便りをお待ちします。



(第二十六回)

辻村 隆

芳野眉美に紹介したユリコを、
遂にカメラ・ハントすることが出

来た。別掲で書いたが、暑くなつたら小原真澄と水泳を兼ねて、熱海か伊豆か、それとも志摩か和歌山の方へ出掛ける約束をした。勿論カメラ・ハントの方が主題であることはいままでもない。花田沙登子をカメラ・ハントしたらと芳野眉美はいってくるが、私がSであるから縛られたりノマされたりは、どうも私の性に合わない。これがM女性であれば何を捨てても飛んでゆくところであるが――

カメラ・ハントを書いていると同好の士やなじみの友人、果ては読者通信欄に於てもいろいろと美望の言辞を浴びせかけられることしばしばである。しかし私とてすべてがすべて、この調子にうまくいっていないことを、お断りしておきたい。でないと、辻村隆はまるで百発百中のように思われているのだから――。私にしても随分空鉄砲や待ちぼうけ、又もう一步というところで逃げた魚と多彩であるが、カメラ・ハントと銘打った以上、何らかの恰好でカメラフラッシュを發表せざるを得ない以上失敗は必然的に書いていないに過ぎない。いずれハント失敗談でも書き出せば、それこそ十指に余る

くらいあるのだが、自分の恥をさらす様で、馬鹿げているから自然頬かむり状態になっている。そうなる女性の中に、SMの対象にでないことを、お知り願いたいのである。

書きついでに、最近の失敗談を簡単にひとつふたつのせておきます。皆様の御用心の為に――。

箕田氏からの回送で、モデル志望の女性あって、年令二十才、B Gとのことで写真同封のそれはスゴい美人。団令子によく似た女性である。場所は滋賀県野洲郡の守山町というところ。この道化師、喜び勇んで、四月七日遙々守山町の指定の場所まで出掛けたが、いっかな待てど暮せどやって来ない。とうとう鼻水吸って引揚げたが、どうやらこれはヒヤカシで、辻村隆なるオトコの間抜けぶらを見てやろうとの、悪質なる魂胆であるらしかった。羨望がねたまになつてこんな調子でハネ返ってくることもある。ドウモ本当にバカを見たハナシである。

ついでにもう一つ失敗談。六月号で紹介した『夜が乱れる』の佐

代理部だより

○従来分譲しておりました中で、R組百集、Z組百集、Y組百集、B組五十集などは、すでに分譲打ち切りになっておりますが、近いうちにE組百集並にA組五十集も打ち切りにしたいと思っておりますので、ご希望の方は、早い目にお申込み下さるよう、お願いいたします。

○従ってG組百集、K組五十集はここ当分の間、分譲を継続いたします。八美しき縛しめ第六集V限定版写真集「緊縛美女艶姿百態」(略号美6)の残部が少くなりました。以前の八文献Vで懲りましたので、少し早い目に予告しておきます。今のところ、まだ数十部は残っておりますが、以前に(美3)が売切れたときも、何んとか探してくれと頼まれ、とうとう参考品として保存してある分まで渡してしまったことがありますので在庫中に何卒お願いいたします。

○引続いて、限定版写真集として最近のモデルによる百姿集を企画中です。いずれ誌上に広告できると思いますが、予告したものは企画中のものに対するお問合せ

伯あけみさんが新たなM女性を紹介するということで、道頓堀の喫茶Rで落ち合った。同業のカメラ仲間屋のBGさんである。食事を奢りぼつぼつ、話をもちかけて、既にあけみが一度プレイらしきものを撮っている、大丈夫と思っただのに、もう一息でスルリと体を

かわされた。少し酔わせてプレイにという段取りで、ミナミのコンパで一杯のんでいるうち、トイレにと立ってその帰帰ってこない。見事に逃げられた。佐伯あけみは気の毒がって、来週こそというが私は一度やり損なうと気持はもう戻らない。

結局あけみと、御堂筋のくらがり、軽いキッスを交わして別れた。その夜の消費に比例して、高いキスについた。これもほろ苦い思い出のひとつ。今回は失敗談ばかり。少し弁解めいたが皆様も幾分か溜飲を下げて下さい。

が多いのですが、どうか毎月の新刊をご留意下さるようお願いいたします。○今月号のカメラハントのテーマとなった一宮百合子さんのフォトを御期待に込めて分譲を開始いたしました。せいぜいお求めの上、ハツラツとした百合子嬢の若々しい緊縛姿態をお楽しみ下さい。○尚、いつもお願いしていることですが、ご注文には必ず雑誌では何年何月号、写真類写真集では略号をお書きの上、お願いいたします。何々が沢山載っている号とか、こうこうした写真とかいう御注文ではお送りいたしかねます。写真の特写ご希望の節は詳細ご記入の上別に御照会して下さい。



SとMのフォト

井 倉 俊 二

(A) 山原清子嬢と大塚啓子嬢の熱演によるハM場面決定版Vの八組全部、いずれも今までにない素晴らしいものでしたが、殊に山原嬢がM男の上に馬乗りになり、自分の唾液をM男の口に吐いているときの乳房の垂れ具合に魅せられました。いつも垂れ気味の山原嬢の乳房が、エキサイトしてくると、

かなり膨張して熟れた桃のような形になるというのも、新しい発見でした。(B) グラビヤ写真集の大塚啓子鈴木晃子、山原清子三嬢によるレズリング「女斗緊縛競艶写真特集」楽しく拝見しました。やはり、なんといいっても、女性と女性の争い縛り合いは美しいですね。山原嬢

に縛りあげられて投げだした足の爪先をエビのように曲げた大塚嬢の動きのある緊縛姿態も、なかなか良いものでした。(C) ハ刺青の魅力を探ぐるVで久しぶりに山原清子嬢の迫力のある縛り写真を見て、思わず生ツバをのみ下しました。編集構成になみなみならぬ苦心の跡が伺われ、縛り写真の醍醐味をたんのうさせて頂きました。最高の感激で拝見したといっても過言ではありませう。そして欲を言えば、これがカラーであったなら、と惜しまれました。今迄は大塚、梨花、絹川さんのファンでしたが、このグラビヤ限定版ハ美7Vで、山原さんも大好きになりました。彼女の大胆なまでのポーズと迫力に万腔の拍手を送ります。今後のご活躍を心から祈ります。

○局留にて注文品お受取りの方々は、只今のところスムーズにしておりますが、時たま、受取りにられないで返戻されてくる分があります。再送に際しては更に郵送料が入用ですし、小包ですと返送料も負担させられます故、どうか留置期間の十日間の間に必ず御受領下さるようお願いいたします。○毎月の新刊は当方から、十八日乃至十九日ごろ発送しておりますから、二十五日に局においていただければ、今までのところ支障なく、お手元に届いております。

ゴムの雨合羽と奥さん

津田 亜紀子

初江が寝床を離れたときは、時計はもう十時を過ぎていた。夫の修二が二週間の予定で北海道へ出張してから四日目であった。

梅雨どきの雨が朝方まで降っていたのが止んで初夏の強い日ざしがカーテンのすき間からさし込んでいた。トーストを焼いて一人の朝食にとりかかろうとしていたとき玄関でブザーが鳴った。

「ごめん下さい。牛乳屋です。先月の分いただきに上りました」

牛乳屋の少年は黒いゴム合羽に同じ黒のゴム帽子、ゴム長靴といった恰好で手帖と鉛筆をとり出した。

「あら、御苦労さん、まあ今日は完全武装ね」

「ええ今日はうちを出るとき、ひどく雨が降ってたもんですから」

「そう、ハイこれ。でも雨が止んで、かえって重そうね」

「そうなんです。暑くてね」

初江がよく見ると、ゴムの雨合羽は、まだまだ新しいようである。

「おニューなの？」

「ええ、今日おろしたてです」
「これから、この団地の中、回るのが？」

「ここだけで二百軒ばかりお得意があるんです」

ふと初江の胸に、ある考えが浮かんだ。

「ねえ、その雨合羽ぬいでいったら？ 預っておいてあげるわ。帰りにお寄りなさいナ」

「本当ですか。そうしていただければ大助かりです。これ着て歩くの、暑くて暑くて——」

「この団地で、どの位かかる？」

「そう、二時間ぐらい」

牛乳屋の少年が雨合羽をぬいで初江に預けて立ち去ると、初江はすぐそれを浴室に運んで水道の水で裾にはねている泥をきれいに洗い流した。

黒いゴム面が水にぬれて、つやつやと光り、ぬめぬめと輝いて手を触れるとプリプリとした手ざわりが快かった。

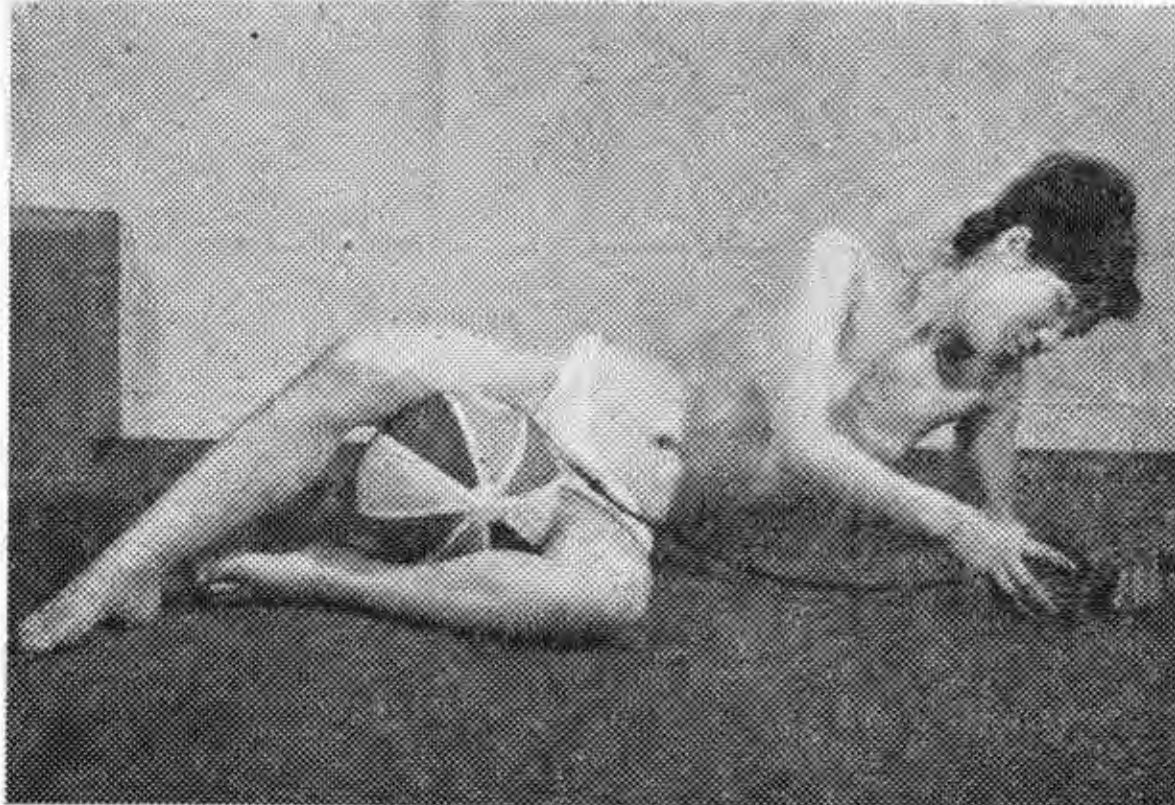
修二と結婚する前の初江は、一人暮らしのBGとしてアパートに住

んでいたもので、ゴムの感触に魅せられて一人秘かにゴム合羽、ゴム浮輪、氷枕、ゴム円座などを蒐集して毎日のように特殊プレイをたのしんでいた。結婚がきまったら、そうした蒐集品を全部始末して、ゴムプレイとすっぱり縁を切ったつもりであった。

しかし、結婚して半年、今日のように夫が出張していると、目の前にゴム合羽を見ると、何の感情もなしに、それを扱うわけにはゆかなかった。

やがて初江は思いきったように北側の四帖半のカーテンを引き押入れから敷おとんと毛布、枕をとって出した。「いつもってわけじゃないものね」自分に言い聞かせるように、つぶやいて初江は浴室からゴム合羽を持ってきて敷おとんの上にひろげた。夫が風邪をひいたとき使った

ゴムの氷枕に水を入れて、ゴム合羽の下に敷いた。ゴム合羽は真中のあたりが盛り上って、一層ぬめぬめと黒光りに光っている。もう初江は躊躇しなかった。玄関の戸締りをする、襖をしめき



って素早くブラウス、スカート、スリッパと脱ぎすてた。両足をひるげるようにして、ふとんにうつぶせに倒れ込むと、胸から腹部、太股、足とからだの前面いっぱい、黒光りするゴム面が、吸いつくように密着した。

一時間ほど後、初江は浴室でゴム合羽をまた洗い流していた。しずくをタオルでぬぐって浴室のかけ竿にかけ、身体をきれいにぬぐって身じまいをすませたとき、プザーが鳴って牛乳屋の少年が訪れた。

「すみません、奥さん」
「あら早かったのね。雨合羽に、ところどころハネがとんでいたの、洗い落しておいたわヨ」
「これは、どうもすみません」
「お安い御用だったわ」
少年は雨合羽を受けとると羽織

って、口笛を吹きながら出ていった。
暫くして初江はベランダの窓から自転車にのって雨合羽を着て走りゆく少年の姿を、放心したような表情で眺めていた。次第にその姿は小さくなっていった。

黒淵嬰一氏との出逢い

福田久文



一つの奇譚、一つの博学、一つの善意、一つの個性そのものが、わたしと出逢い、並んで歩き、茶房の小さな机に向いあい、また並んで歩いて、同じ駅の構内で別れていった。その間約三時間、敬意と信頼において恥じるところはなかったが、わたしはこの人の前に自分が限られた貧しい知識の持主であり、幼児のように退屈な存在であることを知って小さくなっていた。ほんの僅かばかり身につけている詩的情操だけが辛うじてわ

たしを支えていたといえる。そしてそれを「母がその子を見るように」この人に認めて頂いていることはわたしの喜びである。たとえわたしの「悪女」が「現実の血と骨を纏って現れた」としても、多分わたしの驚きはきのうの出逢いとさほど変らなかつたことであろう。お逢いする直前に勤め先の浴室（小使や守衛などのために設備されている大衆浴室）へ勇気を出してはいったのは、何もわたしにホモ傾向があるわけではない。こ

の人へのわたしの敬意であった。君子の交りは水のようなという。わたしたち（全く同年であるというだけであえてこの表現を許して頂こう）は、そのとおりであったし、今後もそうであろう。
黒淵氏に誠実であるように、この機会に皆様にも誠実でありたいと思います。わたしは最低の役職をもって地方支分部局に勤務する一介の事務官に過ぎません。「蛇のような革帯」がすでに全くの創作なのです。「ホテル特別室」も「深紅の歌」も登場人物、情景のすべてがわたしの創った架空のものなのです。わたしは妻とさえブレイなるものをしたことがありません。そのなかでだけ平穩に生きていけると思っていた幾何学の研究への憧れに比べましたら、プレイのできない負担など小さいものです。そのうえわたしにはわたし

の作品のなかの「わたし」がしているようなことをすることとよい奇巧的作品を書くこととは両立しないと思われまふ。思っているばかりでなく、論文を書いて主張する用意があります。人物や情景について皆様をたぶらかしても、思想や感情には誠実でしたし、今後、も誠実であるつもりです。その誠実が、もし、わたしに奇巧的作品の執筆の中止を命じたとすれば、「貴族」のまねをして自分の誠実に従いたいとさえ思っています。どうもペーソスを述べたようですが、いつのまにか自分のようなものでも、いくらかでも孤独に耐えられる力と爽やかに人とききあえる強さを手に入れているのに気づいています。末筆ながら、芳野氏久我氏はじめわたしの創作をまに受けられた方々のご寛恕を乞う次第です。（五月二十七日早朝）

最近世相諷刺寸評

黒井珍平

東京の実況報告であります。五月十五日、去る四月二十七日の警視庁のNHKニュースにつづき私の住んでいる八区広報新聞Vに記事あり、又各駅各ポストに方一米大のカラーポスターあり、読まない、見せない、売らない、と大きく、さすがは戦前とちがい宣伝もうまい。絵も見事。

こどもには見せない(結構)。大人は読まない、売らない、とはいやはや、さし首でも見せられるようで、青少年条例では、もどかしくなったのか、いつの間に、どんな法律ができたのか。ちなみにこのポスター、主はどこかとよくみれば、ひらがなでいいしちやうとある。やっぱり……。

○ 戦時中「たて一億の底力」「ゼいたくは敵だ」に始まる宣伝、やがて都、区、町内会と巧みに滲透した手と同じ。今又、その中に町内会というしくみの監視の目がつくられようとしている。(アメリカではウソ発見器が大流行とか。

就職にあたって、思想性欲のあり方までわかるしくみ)

先日、週刊新潮五月十四日号の梶山季之の小説が発禁になったがこれも一つの運動か。骨のずいまでしゃぶりつくして、徹底的につぶす。(しかも一切お上の命令をおくびにも出さず、下からのものも上りというが上意下達なることは明らか)

○ 昨日、日本大体操祭あり、見てきた。たつといお方も見え、その警備の物々しさに驚き、乙女らのエロティシズム、マスゲームすでに国にうつり手おぼえたり、ナチスの統一ぶりを思う。
一九六六・五・一五。ベトナムダナンに内乱始まる。

○ 史書をひもとくと、享保七年十一月、幕府出版物取締令を書物問屋へ布達(一九二二年)。同時代さまたまの騒動あり。享保の大飢饉おこる。
一、其而一通之事は格別、猥成

儀異説等を取交作り出し候儀、堅く可為無用事。

史家いわく、このおふれ書で幕末にいたるまで、書肆作家を大きく規制することになった。(歌麿や馬琴他凡ての作家は、その以前に活躍せり)

○ 明治に入つては、明治四十一年三月二十二日、有名な出歯亀事件により、同四十年一四十二年、當時世の注意を引きかけた社会主義の問題と行政上の便宜から風俗取締を名とし、無理無体出版物の発売禁止にのり出した。

昭和十二年、徳田秋声「縮図」谷崎潤一郎「細雪」安寧秩序を乱し風俗を害するものとして発禁。やがて大東亜戦争へ突入。
まあこういったところ、朝潮夫

人(イギリス)事件をマスコミとらあげ、この間、こういうマスコミにおいては、批判、良識一つたになし。



鳥獸戯画

室井亜砂路画

最近の税務署にても、何々すべしとはいわない。だから自由だとか、良い世の中だという。恐ろしい警察はないという。しかし、税務署長の「いよいよ春めいてまいりました。皆さま、おすこやかでいらっしゃいますか。さて、あなたの今年度の所得税につきましてお話をしたく……」と、まわたで首しめる気味悪さ、決して中味は変っていません。

言論は自由だという。しかし本当にそうでしょうか。「子供に見せない」までは好いでしょう。しかし「大人は売らない読まない」は一体どういう理由か？ お上の命令より、世間一人一人の目からSM者（奇クが好きで読むだけの人など）を犯罪人にしたて抹殺しようとしている。こんな事が行われている。おそろしいことだ。

低俗化より脱せよ!! 奇ク

(提 唱)

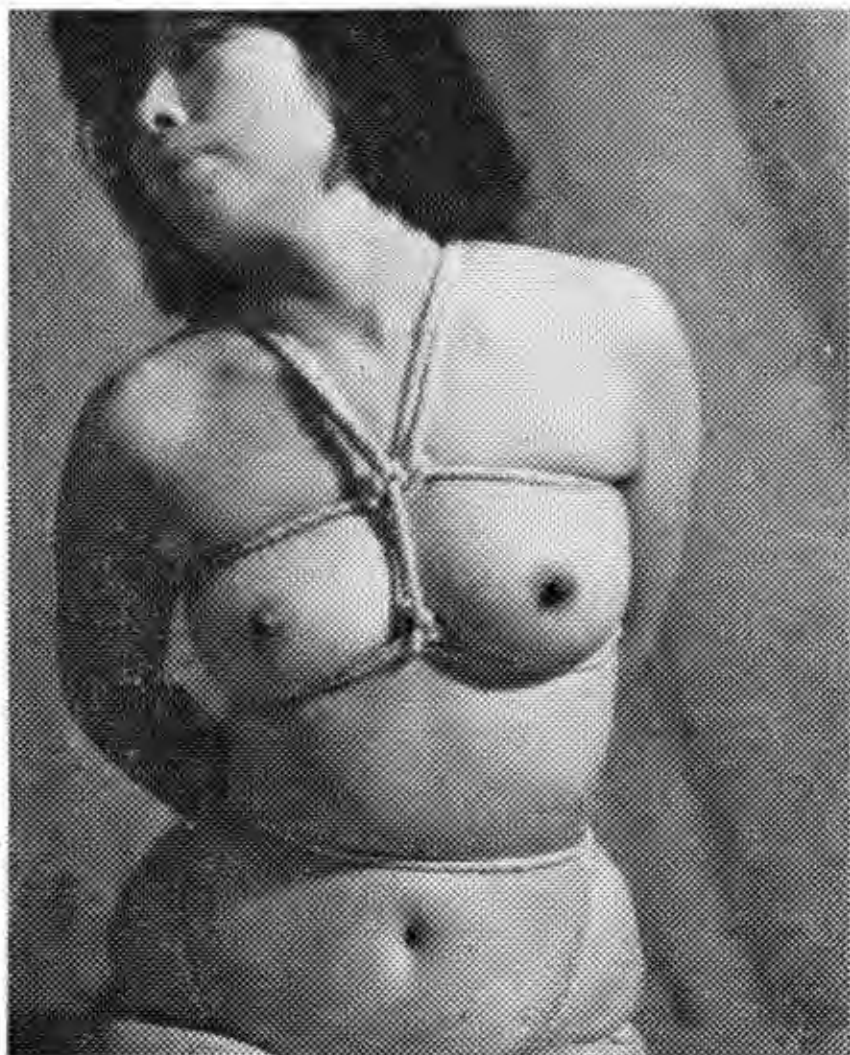
花 山 馨

グラビア写真および口絵を撤廃したがために、会員他誌より見劣りする事夥しいと編集子が気にしているようであるが、さらにサシ絵も全廃しなさいと敢えて提言する。異常性欲の極端な絵画描写（フォト等）は全て資料分譲品に委せばよろしい。見る雑誌から読む雑誌にと宣言するならば、活字を通して読者に血となり肉となり得る智的内容を提供する。考える雑誌に敢然脱皮する勇を振るわなければ愈々以て質的低下は免れないだろう。

格調高いSMフィクション（時代現代を問わず）、真摯な変態性欲の告白、手記もある筈だ。そして異常性愛（露出、視姦、擦淫、自己恋慕の各症、マゾヒズム、サディズム、フェティシズムが主分野）をテーマにした心理学、法医学、風俗学、あるいは史学、性医学等からの分析した意欲あるエッセイ等残念ながらこれらの作品が真に少ない。も早やティーンエイジャー、ミラー族の一文作者やエカキに対する憧憬的讃辞などはもちろんのこと、一部投稿者間の

愛妻ゆう子の縛りポーズ

新田 英雄



プライベートな座談的記事に貴重な本文のページを埋める愚は今後やめるべきだ。

現代のエスプリとして恥かしくない新しい風俗文献誌と銘を打つならば、解釈と鑑賞に耐えるだけの、品位ある本文の内容充実を図れ。総花的な編集方針はこの際改め、文字通り個性ある特種文献誌

たらんとする勇気が編集子にありや？ よって低俗なる読者が減ったとて、それでいいではないか。奇ク百年の大計、さらに大発展を遂げるため、敢て苦言を申し上げる。

“人生より難しい芸術はない。他の芸術、学問にはいたるところ数多の師がある。”

私の幻想

女スパイ啓子の最期

黒田 寿

北風吹く寒い朝、啓子は独房より外へつれだされた。いよいよ今朝、銃殺による死刑を執行されるのだ。

啓子は全裸のまま、薄く雪の積ったなかを歩いて、白壁の前に立つ。目かくしもいまいしめもない。十二人の射撃隊員は、そんな啓子の美しい肢体を、まぶしそうにみつめている。

十二人のうち実弾の入っているのは八人から十一人で、射手は自分の銃が空砲であることが期待できる。死刑囚が美女であるだけに特にそう望みたかったらう。

隊長が啓子の前に進みでて直径十センチの白い的をつけようとす。さすがの啓子もちょっとたじろいだ。左胸部にあてるのだが何でとめるのだらう。普通はピンだが自分はいま全裸姿だ。どうせすぐに穴だらけになる身体といつても、最後の瞬間まで余計な傷はつけたくない。

幸いに、セロテープというものがあつた。これを使用して左乳房

の上におしつけるように白い的がつけられた。

隊長は部下の所までさがって啓子の方をみつめ首をひねった。地上には雪、バックは白壁、それに雪をあざむく、白い肌。これでは白い的がちつともめだたない。

隊長は一計を案じマジックインキをとりました。的のかわりに、豊かな乳房をこれで黒くぬりつづす。啓子にとってはあまり有難くはなかったが、ピンを刺されるよりはましと思つたのか、何も言わなかった。

「目標は、あの黒い一点！」
隊長は剣をぬいて叫ぶ。



「狙え……射て！」
銃声と共にとびだした十発の弾丸は、ことごとく黒い的に吸いこまれた。

啓子の身体は一瞬はじきとばされるように後の壁におつかり、次いで前方にはたたりと倒れた。

編集部だより

○七月号の印刷が半分以上も進行しているとき、「週刊新潮」の五月十四日号が発禁になったというニュースが入ってきた。梶山季之の「女の警察」Vという連載小説が該当個所だというので直ちに読んでみたのだが、どうも今迄考えていた尺度にしては甘いので、折柄印刷にかかろうとしていた「花と蛇」を一応ストップさせた。

○勿論、先の雑誌倫理研究会の席上でも、三月、四月、五月は特に「要注意V」という情報交換もあったので、原稿のままで十数度慎重に検討したし、活字になつてみての感じは、初校、再校の段階でも校正とは別に、十分に考慮してきたつもりだが、週刊新潮を読んで、どうも自信がなくなった。

○そんなわけで、七月号の「花と蛇」は、機械に待ってもらつて、これはと思うところを、手当り次第に伏字にもつていったので、殊に奇異に感じられたかと思う。この点、作者並に読者の方々に事情を明らかにしてお詫びしておく。
○K県の見福委から、広告面の写



海釣り女性専科

その方の心配は

ご無用です

栗瀬長

たいへんな釣りブーム。女性アングラーも、だいぶふえたが男の子にくらべたらほんのチラホラ。同じブームの山登りには、パパママの心配をよそにボクもワタシもだ。これはどうしたことだろう。だがこれにはワケがある。ズバリ、「オシッコ」の問題である。このごろの釣場は、どこも釣人でいっぱい。人目につかない場所を見つければ、銀座で駐車場を見つければ、おさらいのこと。おんなひとりぼっちのプランにしても

隊長が傍にかけより足でもってあおむけにしてみると、哀れ啓子はその左乳房をあとかたもなくふつとばされて息絶えていた。だが、これだけではまだ許されない。トドメが残っている。普通は額に、女性の場合は額を傷つけぬように口をこじあけて、喉から

延髄をうちぬくのだが、啓子もあろうものがこれでは満足しないだろうと、おへそに射ちこんだ。啓子の死体は首にロープをくくりつけ、傍の木の枝から、吊された。三日間の晒しの附加刑だ。四日目によく胴体の晒しが許され、切断された首だけが獄門

台上に梟けられた。七日目、積みあげた薪の上に、まだ生前の面影をのこしている啓子の首をのせ点火する。最後に残った灰は刑場にまきちらすのだ。美しい女スパイとして名をとどろかした啓子は、こうしてその一生を終った。

女船頭では荒海はおぼつかない。女の子を釣りに誘う。ホレてる子なら一応OKだが、必ず後から「でもねえ……」とシリ込みだ。気のきいた男の子ならずとも察しがつく。行くとなったらさあ大変。前日からボクサーの減量なみに水気はとれない。それでも船中、歯がみの難行、ガマンの苦行を味わわないですむとはかぎらない。実は女性には女性流の釣り専用の処理法がある。特別デザインの水ゼスカーを作る。いわゆる腰巻き型スカー

トだ。思い切って裾を開いたサーキョーに仕立てる。両ワキにレインコート式のポケットホールをあける。派手なプリント地など、ちよつとイカしたフィッティングウエアのパーツに見えたら成功だ。小道具がいる。一個ずつの石コロを入れた台所用のゴミ用ポリ袋数枚と、お手製のボール紙ジョーゴ一個。ラッパ口のサイズは自分に合わせて。ビニール塗料での防水工作も必要。隠密にスカートの中での処理はちよつとの心臓ならやさしい。済んだら、そつと水面に置く心持ちで捨てる。おとなしく、沈んでゆく。袋口は締めないこと。空気が出ないと、おかしい色の珍しいクラグが、プカリプカリとヒトサマの方へ流れて行く。

真挿入はうまくないという勧告を受けたので、早速七月号から廃止に踏みきった。一部読者の方からよいアイデアだと喜ばれたのだがどうも、読者に歓迎されそうなのとをやらかすと忌避に触れるようだ。写真や絵については、相当注意してセーヴし、例えば五枚あっても、その中で一番穏当なもの一枚を掲載し、他を留保するというようにしているのだが。

○芳野眉美氏の感化を受けたわけでもなからうが、一宮百合子嬢は大の八古寺巡礼ファンである。中でも奈良を中心とした天平、飛鳥の遺跡には、大いに関心を持っているというので、新緑の一日、法隆寺から飛鳥方面へ、ドライブに誘った。

○奈良公園の鹿と無邪気に遊ぶ彼女、帰途につくと、今日のお礼にモデルになつてもいいと言いだした。すでにカメラハントされて脚光をあびている一宮百合子だが、誌上でもう一度、あどけない顔をあらわしてほしいものだ。

○五月上旬、雪崎京人氏の指導によって女相撲のフォト撮影。今回はストロボによって、連続の投げ動作の極まりをキャッチしたので貴重な文献になることと思う。



私の御主人様

ドレイ・シロ

私の御主人様は都内の有名な病院の女医をしておられます。御主人様は色が白くて肥っておられます。二十六才で独身の美人です。

私はドレイ・ネームをシロと呼ばれて御主人様に飼われております。身長一七四糎、体重五二斤、胸囲七八糎、二十五才の瘦犬瘦馬でございます。

私は御主人様に飼われてから二年になります。私は普通の人が見たら大変驚かれるようなスタイルをさせられております。私の頭は少女のようにミツアミをしているのです。御主人様は「まるでインデアンのようなね」といってよく笑われます。私は体には衣服という

ものは一切着けてはおりません。部屋の中はオシリを高く上げ、四つ這いで歩かせられております。

私の首には厚い革の首輪がはめてあり、鼻にはステンレスの鼻輪がつけてあります。鼻輪をつけることは御主人様にとっては、お手のものでございます。私の腰には首輪と同じ厚い革の腰輪がはめてあります。それにはハドレイ・シロVと私のドレイ・ネームが焼き込まれております。

お風呂場で汗みどろになって御主人様のお体を洗わせていただく時、御主人様のお残しになった食べ残しをエサにしてノドをならして食べる時、週三回強制的に施さ

れる浣腸。私は涙の出るほど幸せなのでございます。

先日の日曜日、御主人様はめずらしく私を馬になさいました。馬というのは小型のリヤカーで作られた馬車で御主人様が考えられたのでございます。私は、首輪、腰輪、鼻輪の身に特製のシッポをつけ、頭から革の帽子をかぶせられます。それは耳と目を出し口の部分に金の輪がついており、それが長く手綱になり御主人様が車の上にのられ、それを持たれます。

私はその手綱とムチによりシッポをなびかせながら、そのリヤカー製の馬車を引くのです。田圃に囲まれた御主人様の邸宅も、はじめのうちは鳥肌が立ちますが、広い庭をまわるうちに体が真赤になり口からヨダレがダラダラと出てまいります。

私と御主人様の出会いは後で又お許しを得て書かせていただく事にいたします。私も一匹のドレイとして御主人様や皆様の御指導を受けたく思っております。御主人様は毎日忙しい日々を送っております。「近いうち、シロの飼育係に女の人を一人募集しようかしら」とおっしゃっております。ではまたお便りいたします。

蒸発した女高生の飼育

○学校からの帰り途、突然蒸発した女高生が半年ぶりに発見されるという事件が東京で起った。

○それがなんと女の家から目と鼻の先のアパートの一室で四十二才の男と同棲していたというのだ。

○誘拐魔と呼ばれたこの四十才の飼育が巧妙であったのか、この18才の小娘が脅迫された結果なのか全く異常ともいえる六カ月間にわたる同棲生活である。

○買物にマスクをして顔をかくして外出する少女、目と鼻の先の自宅へ何故逃げてゆかなかったのだろうか。二人でテレビを見て笑っていたという家主の証言は、何と解釈してよいだろうか。

○多数の人々に祝福されて天下晴れて正式結婚した夫でも、一人の妻を飼育できずに、離婚するヤツもいる世の中で、この誘拐魔は飼育の名人でもあるのか。

○ある日突然、学校の帰り途から雲がくぐれた少女の行動は、今もって謎に包まれている。平常は真面目でおとなしい生徒だったというが、娘心の不可解さよ——。

(遊治郎)

本誌の信条

- 一、本誌は特殊な風俗文献を研究する成人を対象にして編集しておりますので、十八才未満の方には絶対販売いたしません。
- 一、本誌は平和で穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象としておりますが、青少年の保護育成に関する条例には抵触しないよう十分注意して編集いたします。
- 一、新聞紙やその他に本誌の広告は一切いたしません。従って発行部数は最低限定にとどめ、部数の増大を企むための努力はいたしません。
- 一、徒らに煽情的な写真や刺戟的な絵画によって読者を獲得しようとはしません。その為グラビヤ写真と口絵は廃止いたします。
- 一、本文中の挿絵も極力数を減らし、読む雑誌としての体裁を漸次徹底してゆきます。

奇譚クラブ

昭和四十一年八月号

(一九六六年・八月号／第二〇卷第八号・通刊第二二七号)



増田喜代司・みゆき夫妻対談

「春宵一刻縛千金」

辻 村 隆

とき 四月十日 昼食後のひととき
ところ 辻村隆宅 応接間

——×××××××—— 辻 村 隆
「××××××××××」 増田 喜代司
(××××××××××) 増田 みゆき

——今朝は随分ねむかったでしょう。なにしろ午前一時頃からかかって終ったのは午前四時前。その割に撮らなかつたのだけど、いろいろと支度時間に掛ったからネ——

「新宮明夫さん御夫妻のあとで、いい工合にチョンマゲやかずらを借りておいて頂きまし

たので面白かったですよ。同じ扮装をして、違った夫婦がプレイしてみる。これは変った思い付きですネ。ボクの好きな鼻責めはなかつたですが、あれはあれで又楽しいですネ——それに、あんたが車を借りてきて、わざわざ積んできた鬼と亡霊も傑作だったネ。よくあのような鬼の鉄棒がつくれたですネ——「ええ、友人が大学の学会に作ったものを借りたんです。芯に棒を使って、新聞紙をふのりで焚いてベタベタくっつけ、黒く色を塗ったんですが、恰好の重さだしよかったですよ。白い着物も鬼の角のついたかぶりものも一切気持よく貸してくれましたよ」

——その代り見せてやらないと、いけないだろうネ——
「だから、二人並んだおとなしいものを二、三枚撮ってもらったんです。一寸弁解に苦しんだけど」
——私は昨夜の夫婦プレイの様子をカメラ・ハントしたかったが、これを書くと、貴方たちの分は三回ものことになるのでネ、遠慮したんだが、家へ帰ったら早速あんたの『鼻責めシリーズ』で書いて下さいよ。こんどの場合正確にいつて鼻責めはなく、コスチュームの夫婦プレイなんだけど、変っているから面白いと思うよ——

「ボクは折角こうして、色々の扮装が揃っていたのだから、辻村さんに簡単な台本をかいといただいて8ミリをとればスゴくよかったと残念に思っています」

——咄嗟のことで私も撮り乍らそう思ったけど、夜も丑満刻にやってるんだから、カメラ材料屋だって起きていないし、8ミリフィルムがなかったから仕方なかった。でも惜しかったと思いますよ。例えば時代ものの扮装では、娘が男と姦通している。それが地獄へ行つて鬼に姦通の罪を責められている。それが



夢だったというようなストーリーをね——
(私思いましたけど、あの夜中、白い着物を着た亡者姿と、鬼の扮装の主人とで、くらやみの街を歩いたらどうなるかと、そんなヘンなこと考えていました)

——恐らく気絶するでしょうネ。私はカメラの方で頭が一杯だったから、そんな突飛な思いつきは考えもしなかったけど、愉快そうでいいじゃないの——

「ボクも書きたい事は山々なんですけど、机に向つてイザ原稿を捻げると全然ペンが進まないんです。何とか書き方考えて下さいな」

——いや、あの昨夜のありさまを、卒直にありの俣その俣かけばいいのですよ。いろいろと技巧をこらすより、反って、ありのままの方がリアルでいいですよ——
「ちょんまげの方は、どうしても、新宮さんと比較されるでしょうネ。ボクの方とくらべ

て、どうでした」

——あの時は私の失敗で、折角綺麗な新宮夫人のお顔を眉墨を太く描いてめたくり、反っていい顔をダメにしました。昨夜はあれに懲りて余り顔を触らなかつたから、みゆき夫人の素顔が出ていいんじゃないですか——

「辻村さん宅の御家族が沢山おられるし、土曜日で皆おそくまでテレビ見ておられるのでなかなか機会が来ず、実の所少しイライラしました。しかし二時間半許りで、三度趣むきの変ったものが撮れたので本望ですよ。ボクの鼻責めシリーズも、四季の歳時記的にいろいろ試みていますが、すぐアイデアが底をついてよく似たものになってしまいます。今度又一度御出張下さい」

——奥さんの鼻の穴の方、その後少し大きくなりましたか——

(ええ、やっとマッチの軸が通るようになりました)

——避妊のリングを外したそうですネ——
(ええ)

「もう二月を終ると、ひのえうまに引っ掛らないでしょう。だからいつでも産んでいい体制にしたんです」

——警戒警報解除って、ところですネ——

「ところが、家内はすぐにでも妊娠するつもりでおるんですが、こればかりはね、いかに亭主のボクが張切っても、やはり子供は授かりものなんでしょう、今の所何にもそのケがありません。リングは妊娠に支障ないと医者はいつてゐるんですが」

「しかし、可能性は非常にあるわけですよネ。そこで以前頼んだ例の……」

「ああ、妊婦フォトでしょう。辻村さんから頼まれなくてもとる気でいたんです。ボクとしても絶対のチャンスですからネ。三カ月ぐらいまでは余り腹の方も変らないと思いますので、四カ月から臨月まで毎月とるつもりです。おなかの真中へ、何カ月とマジックで書いておきます」

「奥さんは御承知なんですか？」

（主人の頼みですし、協力するつもりでおりますが、いろいろと支障があるんじゃないかと、案じたりしています）

「以前、田中美佐子さんの、妊娠十カ月の緊縛がありました、同月に無事男児を分娩されていますから、大丈夫でしょう——」

「辻村さん、十カ月の逆吊りは無理でしょうかね？」

「さあ、残念乍ら私も未だやったことがあ

りませんから何ともいえませんが、伊藤晴雨さんの『責めの話』の中に、臨月の奥さんの逆吊りフォトと共に、その時の状況を書いておられますが異常なかつたそうです。まあ肉体的にも、精神的にも長時間の逆吊りはいけないでしょうが、フォトとるための、ほんの一分そこそこなら大したことないでしょう。しかしあんた一人でやるのは一寸無理でしょうな。私が手伝いに行きましょうか——」

「是非お願いします。二人掛りなら妻は小柄な方だから、やれるでしょう」

「そう、カメラ位置をきめておいて、エヤー・レリーズを手許に引っ張っておいて、高い台にのせて足から吊り上げ、一人が体を抱えていて、一人が台を外し、そっと下に下げると、その瞬間レリーズを押せばいい、二、三枚とったら、すぐ体を抱き上げたらいでしょうね——」

「早く出来ないかなあって、随分精出してゐるんですけど……」

「精を出すって言葉は、こんな時にピッタリだね——（大笑）」

「最近夫婦プレイ用に、新らしい社宅に転宅したのを契機に、おもしろいものをつくりましたよ——」

「何なの？——」

「妻の名付けで、スレープ・マシンっていうのですが、夕方会社から帰っては、コソコソと、それこそメシもロクロクたべず、半月かかりでつくり上げました。ここへフォトを持って来ましたが、この一枚は、ボクが妻にスレープ・マシンに雁字がらめにしぼりつけられたところです。近頃では妻の比例はS七のM三位の割合になってきて、ボクの方がMになる時が多いのです。どうです相当凝ったものでしょう」

「ウーン、これはズイブン凝ってるネ。足に自在車がついてるから、移動自由だし、ポルト止めだから伸縮も自在な様ですね。それでこのスレープ・マシンのフォトにうつっている革具は何なの？」

「これは総革製の、妻の体にピッタリ合してつくった全身拘束具です。顔から太腿まで、ピッタリと拘束してしまします。いずれボクのシリーズで、この妻の拘束されたフォトをのせようと思っています」

「これを使って、一度誰か他のモデルでとらしてほしいな。しかし、スレープ・マシンってのは重そうだから、どこへも持運び出来ないし、あんたの家へ出張するより仕方ない



ね——

「それを愉しみにしているんですよ。そうすれば、そのモデルさんと妻との連縛をとらして欲しいですね。一人をスレーブ・マシンにかけ、一人は全身拘束する。バックを黒幕にでもしたら、一寸した西欧式SMプレイフトが出来ると思いますよ」

——是非近いうちに実行に移すよ。新らしいモデルさんなら尚更いいがネ——

「ボクの希望を、もしかなくていただけるならば、モデルはマズミさんでお願いしたいで

すね。妻の前だが、ボクはすっかりあの娘にイカレちゃった」

——奥さんが、ここにいらっしゃるんだよ——

（いいですね。この人、いつもこんなんですから……。奇クを読んでは、このモデルをとりたいとか、このモデル好きだとか、そんなことしょっちゅうです。私、いちいち気に止めていませんわ）

「それがボクの根拠なんです。ここで始めて白状しますがネ。そういう工合にいつて妻の心を刺激すると、そのあとのプレイの時、

妻のボクを扱うプレイ振りが、極めて粗々しく、きつく強いんですよ。それで何かボクに対してウッポンをはらしているんでしょうがその方がプレイ仕甲斐があつて嬉しいんですよ。だから尚更いつてやる」

（そんなことありませんわ、勝手に邪推しているんですわ）

——そうでもないでし

ようネ。潜在的なゼラシーが、しらすしらすに働いているかも知れないからね——

「ここであつてしまつちゃ、もう今後効果ないかも知れないなあ。その他ボクはボクなりの考えで、わざと妻の勤めている会社の同僚の友達綺麗な子の写真を部屋にベタベタとはりつけて飾つてあるんです。これも妻に対する刺激剤のつもりなんです、これも効果なくなつちやつたかな」

（それで、あんなに大きく引伸してはつてあるの。何だか変なことすると思つたわ）

「バレタカ……」

——鼻責めの方は相変らずやっていますか——

「それはもう必須条件ですからね。ボクのプレイから鼻責めを除いたら、本当は何も残らないかも知れません。昨夜など鼻責めが全然ないもんだから、本当いうとあつてなかったんです。でも昨夜は辻村さんのされるプレイについてゆくつもりだったから仕方なかったですが、あの衣裳で、もし二人きりなら、恐らくかなり鼻責めをとつていたでしょうネ」

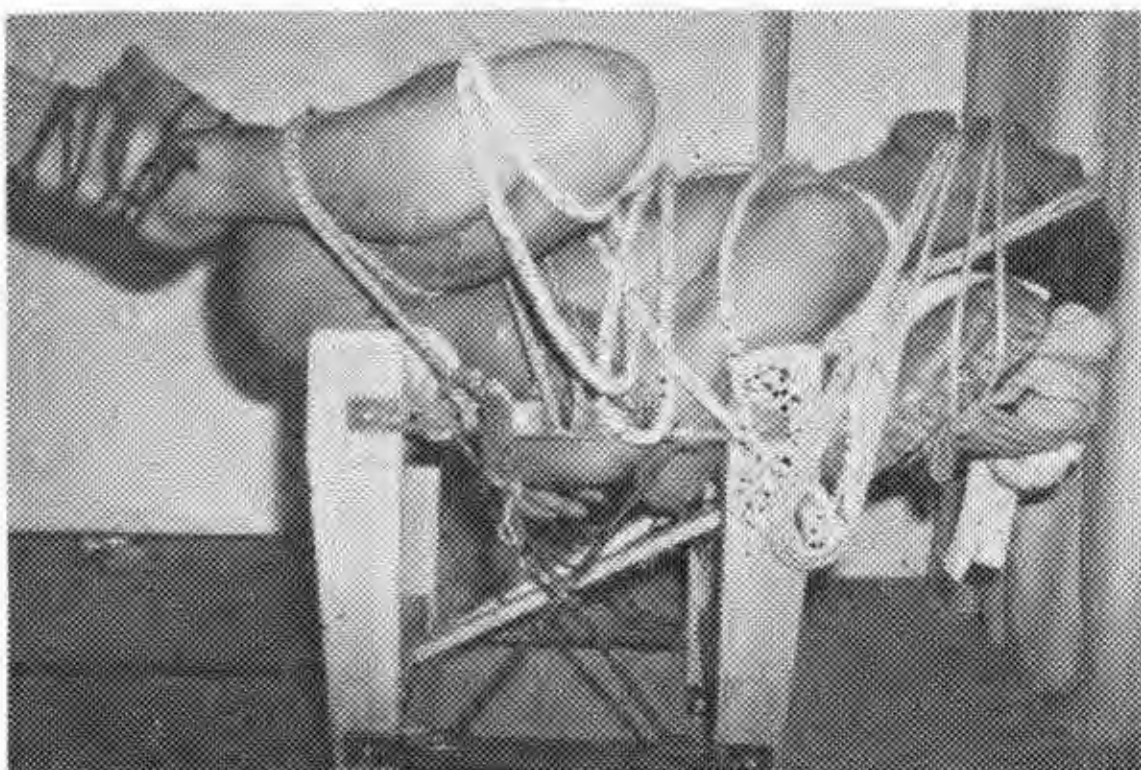
——M七〇生と文通始めて、一度訪問してきたそうだな——

「あのことは、未だ奇クで触れていませんでしたネ。一泊しましてネ。そうですね、延べ

時間にして約十時間ぐらい、プレイプレイに耽溺しましたが、流石にボクも妻もぐったりとなった。それなのにM七〇生は未だ未だ物足りなさそうで、あとから来た札状によりますと、あの時のプレイは約四〇パーセントの満足感だって……。彼が百パーセント満足するとなると一体どういうことになるのか、何か怖くなりましたよ」

——『耽奇の果て』とかいう小説があったがあれみたいに、己れ自身、己れを殺さねばならぬ羽目になるだろうネ。私も彼を最初にとった時、かなり手加減した筈なのに、いきなりショックから気を失なってしまって、あわてふためいたが、今から考えると、あれが彼の他人を交えての初めてのプレイだったから自分自身その感激と、コーフンの余り気を失なったんだらうね。しかし、男プレイだったから、さして反響なかったよ——

「M七〇生が来た時は、ボクもみゆきも二人ながらSになって、彼に力任せの革バンドの雨をふらせ、鼻と下腹部にローソクの火傷をうっかりつけたのですが、帰る時、平気でした。あのM性にはとてもついて行けない感じですよ。でも鼻責めに関してはボクの方が一枚上の様でした。彼にくらべてボクの鼻孔は相



当鍛えられているようでしたよ」

——刺青の山原清子の第二回懇談会の時、例の愛知の美枷輪生と彼女がプレイした時は、相当ひどかったよ。何しろ美枷輪生の鼻にくさりを通して、部屋中ズルズルと引曳り廻し

たんだからネ。ボタボタと鮮血はたたみをそめるし、彼の鼻は真赤にはれ上っていた。見ていた一同の方が「もう止めてくれ」といい出しかねなかった雰囲気だったが、そんなにひどい死に損なうような扱いをうけていながら後日編集長に來た美枷輪生の便りには、甘美なる鼻責めの降服のよさを讚美し、もっと続行してはしかったと書いてあった——

「Mの境地に陶醉しきると、そうした激しい加虐もすべてが、悦楽につながるのでしょうね。でも、Sとしてやってる方はヘトヘトにつかれましたよ。しかし立場が逆になって、ボクがM七〇生なら、一寸辛抱出来そうにないな」

——増田さんは夫婦でチヨネチヨネと、鼻をいじり合って愉しんでいる方だからね。それくらいの方がいいのさ——

「読者通信をいつも精読しているんですが鼻責愛好者は案外少ないですネ。五月号で久しぶりに鼻責めの記事にお目にかかりました。千葉の鼻責生という方が、ボクに鼻責め競争を提案して来られています、大いに面白いと思います。ボクのはナは、ハナ肇より大きいハナでしょう。だから相当にアナも大きくなっているんです。妻の小指ならすっぽり突

き抜けてしまします。自分ではかなり自信あるつもりですが、世間には未だボク以上の人もありますから、編集部を通じて、この鼻責め競争を実現させてもらえないでしょうか」

——ああ、あれは私もよみました。プレイというより、むしろ鼻穴くらべの力くらべ見たいなものでしょう。しかし同好者としてお互いのハナをくらべて見たい気持は分るね——

「M七〇生は、ハナでは、私の方が一枚上です。M性では遥かに及びませんが、この千葉の鼻責生も、一人前の奴隷になるため、もう一つ奥に、更に小穴をあけるとかいつておられますが、M性は負けそうです。しかし、いくら何でも同好者が現われると、矢張りうれしくなりますね」

——奥さんへの鼻責めは、どうなの？——

「これ以上アナを拡げると、気付かれるからイヤだというんです。妻の鼻は少し低目で小さい方ですから、とても男のボク同様には無理です。アナにロープやくさりを通して、四つ這いにして引廻したり、柱に縛りつけておいたりしますが、ボクの妻に対する鼻責めはやはり、鼻いじめの方ですネ。圧迫して見たり、エネマシリンジで鼻へ水を注いだり、鼻鉤で吊り上げたり、開孔器で鼻孔を拡げたり

ペンチで挟んだり、そんな鼻プレイの方が多いんです。最近はいやがらなくなり、よく協力してくれますよ」

——私の考えは、鼻責めはSMプレイ全般が広義のものとするなら、いわばその一部分の狭義のものだと思うんです。だからこそ、最初は鼻責めから出発したあなた達のSMプレイも、最近は段々と視野が広がって、いろいろと鼻責めを伴なわない、緊縛プレイや浣腸プレイもとっているでしょう。重点は鼻にあっても、その責めのみでは余りにも範囲が狭くて、何カ月もそれ許りやっていると、もう責めのネタが尽きてしまう。そうじゃありませんか？——

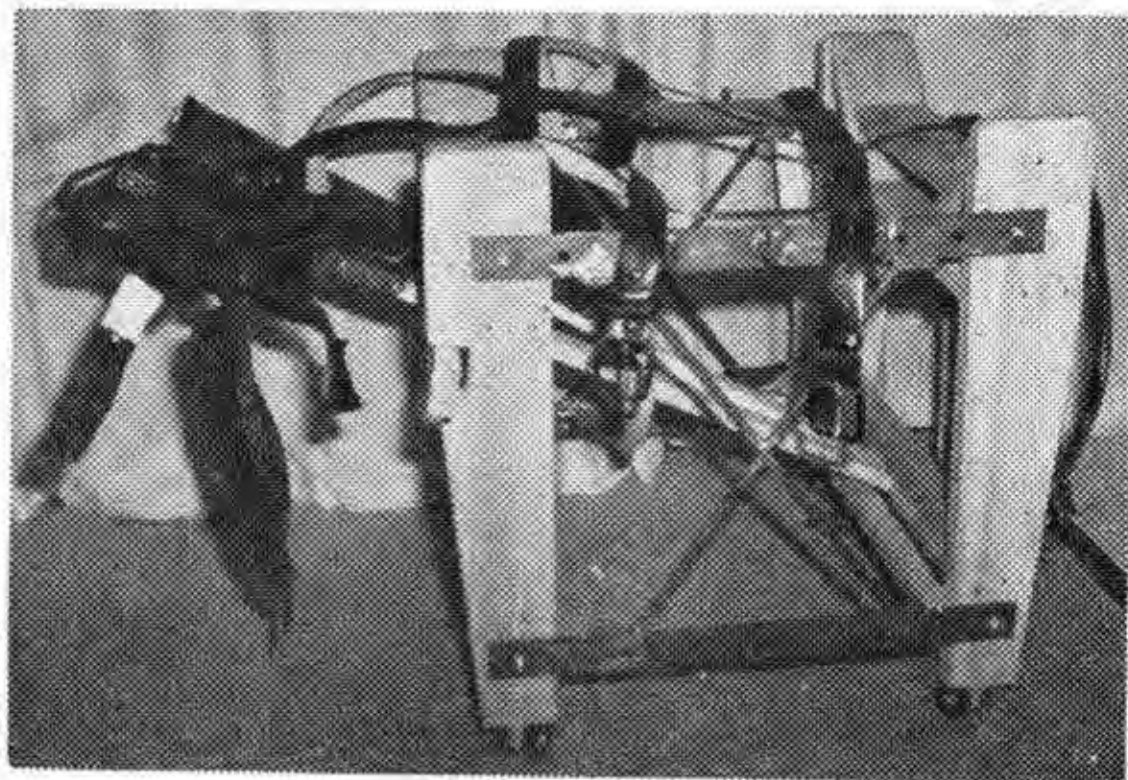
「そうです。その通りです。だから、スレーブ・マシンも、その一つのあらわれだし、革の嵌口具や責具もそうなんです。何でもやって見たい興味で一杯です。しかしいろいろなプレイの場合、必らずといってよいほど、鼻責めが、それに一枚加わっているといったのが、今のボク達のプレイでしょうね。ボク達のプレイも辻村さんの仰有る広義のものになってきましたが、鼻責めがそのプレイに一枚加わっていないと、どうもワサビのない刺身みたいなものなんです。それというのもボク

等の場合、SMプレイめいた第一歩は鼻責めから始まったのですから」

——中学、高校の校長の訓示じゃないが、初心忘るべからず、ってとこですな——

「ボクにもっと文才があれば、どしどし発表したいものは沢山あるんです。三月のヒナ祭りに、『みゆきのヒナ祭り』という自分の題材で、全裸で縛ったみゆきをダイリビナに仕立ててとりましたし、例のM七〇生とのプレイのフोटもあるし、スレーブ・マシンのみゆきもあるし、二人で行なうプレイの数々がフोटになってもう千枚近くあります。勿論、奇巧に発表することを考えてとっているわけではありませんから、殆んど露出したものの許りで、とてもものせられたものじゃありませんが、のせる気になれば下半身トリミングでカットすればいいんですから、のせられると思うんです。でも貴重な誌面を毎月、毎月ボクやみゆきのフोटでさいて頂くのも悪いので遠慮しています」

——そんなことはないよ。美枷輪生だって、新宮氏だって、時々とればのせていますよ。ましてそんなに変わったのが沢山あれば、ドシドシのせるべきですよ。ただしあんたには悪いが、フोटはやはり男より女の方ですネ。



みゆき夫人なら人気絶頂になりますよ。増田さん自身のは、奇クよりむしろ風奇向でしょうね。あそこはホモが多いから——
「じゃあ、勇気を出してのせる事にします。でも文が下手だし、ちっとも進まないから、

原稿五枚書くのに数日もかかるんです」

——編集長も、喜代司の鼻責めシリーズがいつぱんこつきりで、これじゃシリーズにならないやとボヤいていたよ——

「ほんと、シリーズと銘打ち乍ら、いつぱんきりのシリーズなんてボクぐらいでしょ」

——奥さん、少し書いて見ない？——

（私なんか、とてもとても、そんなことダメですわ。この人が書けないのに、私に書ける道理ありませんわ）

——ヘンな理窟だな夫唱婦随ってわけか——

「妻も私同様筆下手なんです」

——鼻責めで思い出したが、春の彼岸に天王寺さんで、いつか私が書いた『讃岐の蛇娘』の、例の蛇娘の小屋掛けがあって、あんたに知らせたけど、アレ見に行った？——

「ええ、すぐ妻と二人で飛んで行きました。

いくら小屋掛けでも、近頃の物価高の折柄、あれだけのものを見せて入場料五十円は安すぎますネ。ボクは一日に何回やるのか知らないが、僅かな収入で相当むづかしい演技をやる彼女に、すっかり同情しましたよ」

（雑草をムシヤムシヤたべて、その毒消しだといって、すぐあとで、ちり紙に火をつけ、それを焼いて真黒にこげた紙もたべていまし

たけど、ぞっとしましたわ）

——雑草喰いは書かなかったのではなく、書くのを忘れたんです。蛇の方許り記憶に残っていないネ——

「鎖を鼻に通してしごき、蛇を通してしごくのを眼の辺りに見ましたよ。いくら何でもボクは蛇を鼻から通して口からは出せないですわ。それに十数本のローソクに火をつけて、口中に熱蠟のしづくをまるで湯のようにたらしっていたでしょう。その前に口中に水を含んでいるにしても相当熱いでしょうに、その口中一杯になった蠟涙をパッと吹き出すと、それが火に点火して、火焰を吹き出した見たいでした。この眼でジカに確かめ得て、ボクは辻村さんのカメラ・ハントが、つくりものでないことを改めて信じたわけです」

——箕田編集長と私とで、もう一度見にいったんだが、彼も流石に驚いていたよ。四国の時は夏で、薄い紗のような胸も露出な下着姿だったが、彼岸の四天王寺では、キラキラ光る着物にハカマ姿のいで立ちで、最初は一寸人違いかと思ったが、彼女の芸を見ているうちにやはり本人であると知ったよ。彼女以外一寸あの芸当は出来ないものネ——

「ボク達鼻責め同好者の夢ですけど、全国に

相当数ある、鼻梁に穴を貫通させた人々との文通を、奇巧で斡旋してもらいたいと思うのです、美枷輪生にも逢いたいし、千葉の鼻責生、又少し違うが、佐々木耳環生なども親しく文通出来るよう、取計らってほしいのです。皆さんがボクも含めて、こうしたアナの製作者ですから、秘密保持のため、読者通信欄には、本当の住所が書きにくいから、これは編集部で何とか便宜計ってもらえないと、ボク達が実際に逢える機会がないのです。M七〇生の場合、幸い辻村さんの御紹介で逢えましたが、そのことを切望しているんです」

現在在庫『本誌既刊、限定版写真集』案内

○限定版写真集「豊満と清楚」女体緊縛グラフ集

頒価 一〇〇〇円 略号「限二」

○限定版写真集「美しき縛しめ」第四集

頒価 一〇〇〇円 略号「美4」

○限定版写真集「女性刑罰拷問特集」日本版

頒価 一〇〇〇円 略号「美5」

○限定版写真集「緊縛美女艶姿百態」

頒価 一〇〇〇円 略号「美6」

○限定版写真集『刺青の魅力を探ぐる』

頒価 一〇〇〇円 略号「美7」

○限定版写真集「女斗緊縛競艶写真特集」

頒価 一〇〇〇円 略号「美8」

——出来るだけ、貴方がたの同好者の趣旨に合う方法で便宜計らっていただく様、私よりも編集部に依頼しますが、何しろ、通信欄の趣味が、読めば判る通り千差万別でしょ。前例をつくって、そのひとつを認めると、我も我もということになって、奇巧はまるで同好者の交歓クラブになり兼ねないからね。だから私にしても、いろいろ知り合いの同好者が増田夫妻を紹介しろっていつてくるが、とり合わないことにしているんです。M七〇生の場合、あんと本当の意味での珍らしい同好者だから紹介したけど、そんなことで又通信

欄を通じてうまく、二人だけに分る方法を考えることですね。——

「無理と分っていい年ら、いわば同病相憐れむのたぐいですネ」

——増田さん夫婦はスゴク仲がよくて、しかも若い。これからですよ。気候もいよいよ一番プレイし易い候になって来ました。大いに張りきって、若い人生を謳歌して下さいよ。

「春宵一刻縛千金」ってとこですね——

「最後にお伝えしますが、妻の友達で、ホラ鼻責めシリーズで、ボクのオリの中のお正月のプレイ中に訪れた子ネ。どうやら一緒にプレイ出来そうです。四、五日前、ミナミで一緒に三人で食事した時、妻とボクとで勧誘したら、うまくハナシにのって来ました。あの子も本当はどうやらMの方がつよいらしいですよ」

——とすると、いよいよ女二人に男一人の連縛ってとこかな、男二人に女一人だと願（なぶる）と読むが、女二人に男一人だと、なぶられるってわけだ。大いに飼育して下さい。うまくゆくようだったら私も出張させてもらいますよ——

「頑張りますよ。どうも長い間有難うございました」



手記

「奥さんの

鼻は

私のもの」

斎藤金雄

あなたは女の鼻というものを、どう思っていますか。それはただ、顔の真中についている呼吸をするだけの道具とだけしか、考えてないのですか。もし、そうだとしたら、それは、なんてもったいないことでしょう。

私は女の顔の道具の中で、鼻位素晴らしいものはないとさえ思っているのです。実際、女の鼻、中でもいかにもやわらかそうに肉が

ついた鼻や、肉がたっぷりついて、脂らがキラキラ浮いている鼻をみると、つまみたくて眼がくらみそうになるのです。思う存分いじりまわしたら、どんなにすばらしいことでしょう。

過去において私は、何回も女の鼻をつまみましたが、それぞれ形が違うように、味も千差万別でした。でも、一様に同じなのは、私

に鼻をつままれると、苦しそうに、パーと口を開け、眼をぐったり閉じることです。私はその女の表情に、限らない欲びを感じるのです。考えてもごらんなさい。私がこんなことをしなければ、正常な形をして開いているはずの女の鼻の孔が、私によって水ももれぬ位きつくふさがれ、いつもかわいく閉じられた唇が、苦しきのあまり開かれ、ぐったりと観念したように眼をとじて、抵抗すら忘れて鼻をもてあそばれている女の姿を……。

それはなんとすばらしいことでしょう。しかも、女の鼻の肉はコンニャクのようにやわらかく、オモチャみたいに私の思う通りにおどるのです。この味を一度知った私は、すっかり女の鼻の虜になってしまったのです。

昭和二十五年の四月初めのことです。私は二十一になったばかりの若さでしたが、恋人も職もなく、ただ毎日、家でブラブラしていました。その私の単調な生活に、ある日、突然、変化をもたらす事件が起ったのです。というのは、隣家に新らしく越して来た奥さんが、翌日、私が一人家にいる時、挨拶にやって来たのです。その顔を見た瞬間、私はおどろきと興奮でワナワナとふるえました。その奥さんの鼻が、私が今まで見たどの女性より

も逸品だったからなのです。程よい肉づき、形のすばらしさ、横にねかせたら、きつと孔の形もすばらしいに違いないのです。しかも脂ら性なのか、鼻全体に脂らが、ギラギラついているのを見て、まんじりともしないでみづめる私に「じゃ、お母さまによろしく仰しやって下さいね」と云って帰っていった二十七、八才位の（あとで三十二才と分ったのですが）その奥さんは、それ以来、私の頭の中の全部を占領してしまったのです。

なんと美しい人なのか。なんというすばらしい鼻の持主なのか。あの鼻をたった一度でもいいから自由にすることが出来たら……。

ああ、私はそう思うと、いても立ってもいられない気持でした。そして、あの鼻をつまんだ時のことを考え、その時、あの人はどうするだろう、眼をとじ、口をあけ、はげしく抵抗するだろうか、どんなにびっくりするだろう。なんとかして、いや、どんなことがあってもあの鼻をつまみたい。それには、何かいい口実がないものか。チャンスはないものか。その日から、奥さんの顔を見たり、挨拶するのが唯一つのなぐさめになりました。

越して来て五日ばかりたった日の午後、私が郵便受けに手紙を取りに行くと、偶然にも

奥さんも、郵便受けをのぞきに來たのです。

「あら、あなたも？」私を見てにっこり笑います。笑うと、まるで二十三、四の女性のように可愛いのです。「ええ」と云うと「女の方からお手紙でも？」と、小首をかしげて私を見て云うので「いえ、そんな人、いませんよ」私がドギマギして答えると「ごめんなさい」と云って又笑います。そして「これから、夜はすごく暗いんですね。昨日夜おそく帰って來たら、びっくりしましたわ。鼻をつままれても分らない位」その言葉にハッとして奥さんを見ますと、その高い鼻に陽が当って、脂らがういて、いつもより、はるかに魅力的で、思わずつまみたい欲望にかられました。

翌日、私が夜、近所のタバコ屋から、ピースを買って出て來ますと、なんとという偶然でしょう。奥さんが、春らしい和服姿で、通りかかったのです。バスから降りて來たのでしよう。「今晚は」と声をかけると「あら」と美しい眼を丸くして、「銀座に行つて來ましたの」とにっこり笑います。並んで歩きながら私は彼女の鼻を見ます。高く形のいい鼻。ああ、とためいきをつきます。

「あなたにお会いしてよかったわ。これから

先がすごく暗いでしょ。こわいから走ろうと思つてたの」

「この間、この近所で女の人が、鼻と口を押えられて、こわくて、失神してしまつたんですつて」「まあ、こわいわ、いやねえ」と、マユをひそめて「それで、何もされなかったの？」

「暴行されたんですつて」「そう、鼻だけならいいけど、口まで押えられたら、声も出せないわね」「僕がもし奥さんのこと知らなくて襲うとしたら、鼻だけ押えますよ」と云うと「声を出しちゃうわよ」と笑います。

「でも、奥さんの鼻はすごく高いから、押えた位じゃ、すきまから息ももれるから、つままなくちゃだめだ」

「ふふふ。苦しいでしょうね」「奥さんはこわくて失神しますか」

「あたしって臆病だから、きつと、すぐのびちゃうわ、ふふふ」

と笑うのが、たまらない感じなので、「じゃ、やってみましようか」というと「あら送り狼？」とにらんで「いじわるね」と小さく云うのが、若い娘みたいなのです。

「送り狼か。でも、その鼻をつまんでみたい気がする」と云うと「あら、昨日のこと？」

とにらむので「ちょっとつまませて、分るかならないか」と微笑して足を止めると眼を足の方におとしています。ああ、つまませてくれるのだと思うと指がふるえました。

夜目にも白く高い鼻をつまもうと指が、あわや鼻にさわろうとした瞬間、「ふふふふ。だめよ」吹き出して私の手を払うと、再び歩き出して、自分で鼻をなでながら、「あたし鼻なんて、つままれたことないんですもの。いたいわ、きつと」奥さんの手によってなでられてやわらかく動いている鼻をみると、つまみたくて、つまみたくてたまらない、という衝動にかられましたが、それも出来ないまま、とうとう家の前まで来てしまいました。

奥さんと別れたものの、なんだか、御馳走を食べない中にしまわれてしまったみたいない味気ない気持で、家に帰りました。ああ、今日もだめだった。目の前に、あのすばらしい鼻を見ながら……。なんということだ。なんと情けないことだ。

それ以来、奥さんと会う度に、ああ、一度でもいいからあの美しい鼻を摘んでみたいと鼻を熱っぽく見つめるのです。つまんだら、どんなにやわらかいだろう。女性の鼻をいくどかつまんだ経験のある私は、脂らのついた

鼻の方がつまんだ時の味がいいことも知っています。そして、つまみたい、つまみたいと熱望していた私の願いが叶えられる日が、とうとうやって来たのです。

四月七日の三時頃、私は回覧板を持って隣へいきました。母が留守だったので、いつも母が持っていたのを、私が代って、持って行ったのです。玄関をあけて「ごめん下さい」声をかけました。「はい」中から美しい声が出て、やがて、奥さんが出て来ました。紫の地に白い花模様のシックな和服でした。ここやかに私を見て「あら、回覧板ですね」と云って「何かしら」と手にとって見て、「ご苦労さま」と云って「ちょっとお上りになりませんか？」とにっこり誘います。「いいんですか」「ええどうぞ。この間送って下さったお礼、それに丁度いなかから名物の甘いものを送って来たのよ。だからごちそうするわ」中に入るのへ、つづいて入りながら、はじめてみる隣家の座敷を興味深く見廻しました。

奥さんの趣味でしょうか、民芸的な調度品が、美しく飾られています。今まで、レースあみをしていたのか、あみかけの白いレースが座ぶとんの上に置いてありました。「レース編みがお好きなんですか」私はさぶとんに

坐ってききました。台所から、茶道具を運んで来た奥さんは「退屈だから、編んでるの」と笑うので「僕も毎日退屈で困っています」すると奥さんは「ほほほほ。じゃ、ゆっくりしてらっしゃいな」と云って、さっき郷里から送って来たと言った栗まんじゅうをすずめてくれます。私が食べると、自分も口に入

れて、「わりあいおいしいでしょ」と云って上品に口をうごかしています。「そうですね」と云って「私もそう答えながらも、彼女の鼻をみつめました。」「いつも何してらっしゃるの」「食べながらきくので」「さあ、本を読んだり、ラジオをきいたり」「あまり映画なんかは、ごらんにならないの？」「ええあまり」「そう」お茶をおいしそうに飲んで、それを見えます。じっと見つめていると、それに気づいて「何をそんなにじっとみてらっしゃるの、あたくしの顔に何かついてますか？」と笑う。「ええ、ついていません。すばらしく美しいものが」奥さんは食べながら「ほほほほ。なアに」と首をかしげて聞くのが、何んとも云えない位魅惑的なのです。

「鼻です」と云うと「あら、あたしの鼻は、だめよ」「どうしてですか。そんなに魅力的

で形のいい鼻って見たことありません。だから横顔がとても美しいんですね」「いやだわあたしの鼻はだんどですもの」「そんなことないですよ。ずっと筋が通って高くして」「でもここらへん（と小ばなのあたりをさして）がいやだわ、肉が付きすぎていて」

そういつて自分で鼻をつまむと、すごくやわらかく肉がうごくのです。それをみて私は半ば自制心を失い、狂ったように、それをみつめ奥さんの方ににじりよりました。奥さんは「でも、ハナって云えば、もうお花見ね。きれいでしょね」と横をむくので「そんな花より奥さんの鼻の方がいい、よく見せて下さい」とそばにびったり、寄り添って云うと「だめだめ」と手でかくします。

それがかえって、私の欲望をかり立てました。その手を鼻からもぎとろうとすると、反対の手で又かくします。まるで子供のあそびです。私はその手もとろうと、すると「だめよ」と身をひいた途端、はずみで奥さんはころがりました。すそが乱れてハッとする位白い脚が見えました。勢いでそうなってしまったのです。奥さんは、事のなりゆきにびっくりして「何をなさるの」と云ったかと思うと私をつきとばそうと必死にもがきます。「お

願いです。奥さん。もっと静かにして」「いや、いやよ」

「その鼻をつまむだけなんです。その位のこいいでしょう」「いやよ、どうして、そんなことおっしゃるの。どうしてあたしの鼻なんかつまみたいの」

怒ったように云います。しかし、なんという幸運でしょう。彼女が十日ばかり前に引越しの時に使ったものでしょうか、麻なわがすぐそばに丸めてあるのです。しめたッ私は少し上体を伸して、それをとろうとすると、彼女もそれを知って、そうさせまいと私のわきの下をくすぐります。私がくすぐったそうにすると「ふっふっふ」と笑って「しばらくうってのね。そんなことさせないから」とくすぐり続けます。でも私は遂になわをとることに成功しました。彼女はそれを知ると、更に抵抗しはじめました。私が両手をしばらくうとすると私の手にかみつきます。私はいきなり、奥さんの鼻をはげしくつまみ上げました。ああ、とうとうつまんだのです。なんというやわらかさでしょう。その肉の触感想像以上でした。「いたい」彼女は苦しそうに云って、口をはなしたのを機に、とうとう私は手首を背後でしぼり上げてしまいました。

奥さんはまだハアハア、あらく息をして私をじっと見ています。

私も、彼女を見下ろして、ああとうとう奥さんの鼻を思う存分摘むことが出来ると思うと、ヒザがガクガクふるえました。思わず私にっこり笑うと、怒ったようににらんで、観念したのでしょうか、眼を閉じてしまいました。私は歎びにふるえる声で「奥さん。とうとう私の念願が叶いましたね」とすると、彼女はそれに返答するかわりに眼をとじたまま「誰か来るわ。ほら」と云います。「ね、おかしいわ、こんなことしてるの見られたら。そこをあけられたら、丸見えよ。もうおこして、みつともないでしょう。ねえ」私を下から見て云います。

耳をすますと、たしかに人の気配がしますが、それは郵便屋らしく、自転車の音がそのまま、遠去かっていきました。彼女もそれと想ったのか、再び「ああ」とためいきをもらして、ぐったりとなっていました。

足を見ると、さっきまで、あんなに暴れていた両脚は力なく開いたまま投げ出されています。それを見ると、女を征服した喜びに打ちふるえました。もうこれで、あんなにもつまみたかった鼻は、私の思うままにもてあそ

ぶことができるのです。ほら、仰向けになつた女の鼻が、まるで私が手を下すのを待っているように、形よい孔をあけて、そこにそびえてるじゃありませんか。かすかに呼吸をしているこの鼻の孔もやがて私にふさがれて、今閉じられてゐる唇が、苦しさにたまりかねたようにひらくのです。

私はそつと廊下のカギをしめるために立上り、「このままでゐるんですよ」と、まるで征服された動物に命令するように、横たわっている奥さんに云いました。彼女は聞えてゐるのに、死んだようにだまっています。私はすばやくカギをしめて、ひきかえしてくると彼女は手首をしばられたまま起き上つたところでした。

「どうして、こんなにあたしをいじめるの。ねえ」と鼻にかかった声で云うのが、かえつて私を夢中にさせて「もっともつといじめた」と云うと「いじわる」とにらむのが、何とも云えない位、色っぽいのです。

「奥さん。僕は今まで、この日のために、どんなに神に祈ったことでしょう。そして遂に今日、こうして僕の望みが叶えられたんです」「ふっふっふ」眼を閉じて含み笑いをするのがたまりません。「何がおかしいん

です。「神さまは、こんなことお許しにならないわ。あたしが馬鹿だったからなのよ。あなたを座敷に上げたりしたから、いけないのだわ」「一度でいい、僕は奥さんのその鼻をつまみたかったです。最初にあなたを見たときから、なんて魅力的な鼻なんだろう、あの鼻をつまんだら、どんなにやわらかいだろう、あの肉の厚さ、脂らがうき出ているすばらしさ、そう思うと、気が狂いそうでした」「じゃ手をほどいてくれたら、一度つまんでいいわ、ね、だから」

「とんでもない。それは前のこと。もうこうして奥さんの自由を奪つた以上、一度どころか、何回つまもうが、どうその鼻をもてあそばうが、それは僕の自由なのですからね」

私がそう云うと、「もうだめね」私にと自分にともつかないように云つたかと思うと「ああ」とためいきをもらすので「観念した？」という「もうおしまいだわ」と眼をとじます。」

ゴクリとつばをのみこんで彼女の鼻をみると、びっくりする位孔が形よくあいてゐるのです。まるで私につままれるのを待ってるかのように……。やがて私によってその孔もさまたまな形にかえられ、ふさがれることでは

よう。さつきあんなにきれいにセットされていた髪の毛は、かなり乱れて顔にかかつて、それがかえって、たまらない魅力を発散しています。「じゃゆっくりと」とその孔がつぶれるのを楽しく見ながら、鼻をつまむと、ああ、なんて柔かいのだろうと、指がふるえましました。はなすと孔がもとの形に戻ります。

私の指に、彼女の鼻の脂らがべっとりつきました。「ほら、こんなに脂らが」と指を見せると、「さつきふいたばかりなのに」と云います。そして、「どうしてあたしの鼻なんかつまみたいの」「丁度、ダイヤモンドが高価なダイヤを求めるように、鼻マニヤにとつて、あなたのその鼻は、たまらない魅力なのですよ」というと「分らないわ。あなたって変つてゐるのね」と笑います。

私は「今度はもっときつく」とつまみ、はなしてはつまみ、はげしくそれをくりかえします。すばらしい味です。肉がもり上つて、孔がつぶれてふさがつて。苦しうに白い歯を出して口をあけ彼女は眼をきつくつむり「いたい。いたい」とあえぎます。「鼻がもげそうよ」と悲鳴を上げて「ねえ、もし止めていたいわ、苦しい」と足をばたつかせて云うのですが、そんなことにかまっちゃいられま

せん。

「ああ、なんてやわらかいのだろう。ああ、なんてやわらかい」私は熱にうかされたようにくりかえして高い鼻をつまみつけます。

奥さんの鼻は真赤です。「おこるわよ」と云いながらも、眼をとじたままつままれているのです。その中、「どんな顔して、あなたがあたしの鼻をつまんでるのか、よく見てやるわ」と云ったかと思うと、眼を見開いたままつままれています。そして、なおもつまみつけける私を見て「まあ、そんなこわい顔してつまんでるのね、ふっふっふ」と笑ってにらみます。

私は、いくらなんでもじっとみつめられては、つまみにくいので（床屋さんも女の人で顔剃りの時、よく鼻なんかつままれても、眼をあいてる人は剃りにくいそうです）私はつまむのを止めました。すると奥さんは、「ふっふっふ、あまりが悪いのね」いい気味だと云わんばかりの表情で、「だから、もうそんなこと止めるのよ。さ、ほめて」私は彼女を眼かくしするためのタオルか手拭をさがして、方々見まわしていると、人が来るのを心配していると感違いしたのか、「ほら、誰か来るわ」と云って「早くほどこないと」と手を動

かして私を見ます。私はやっとタオルを見つけ、立上りました。

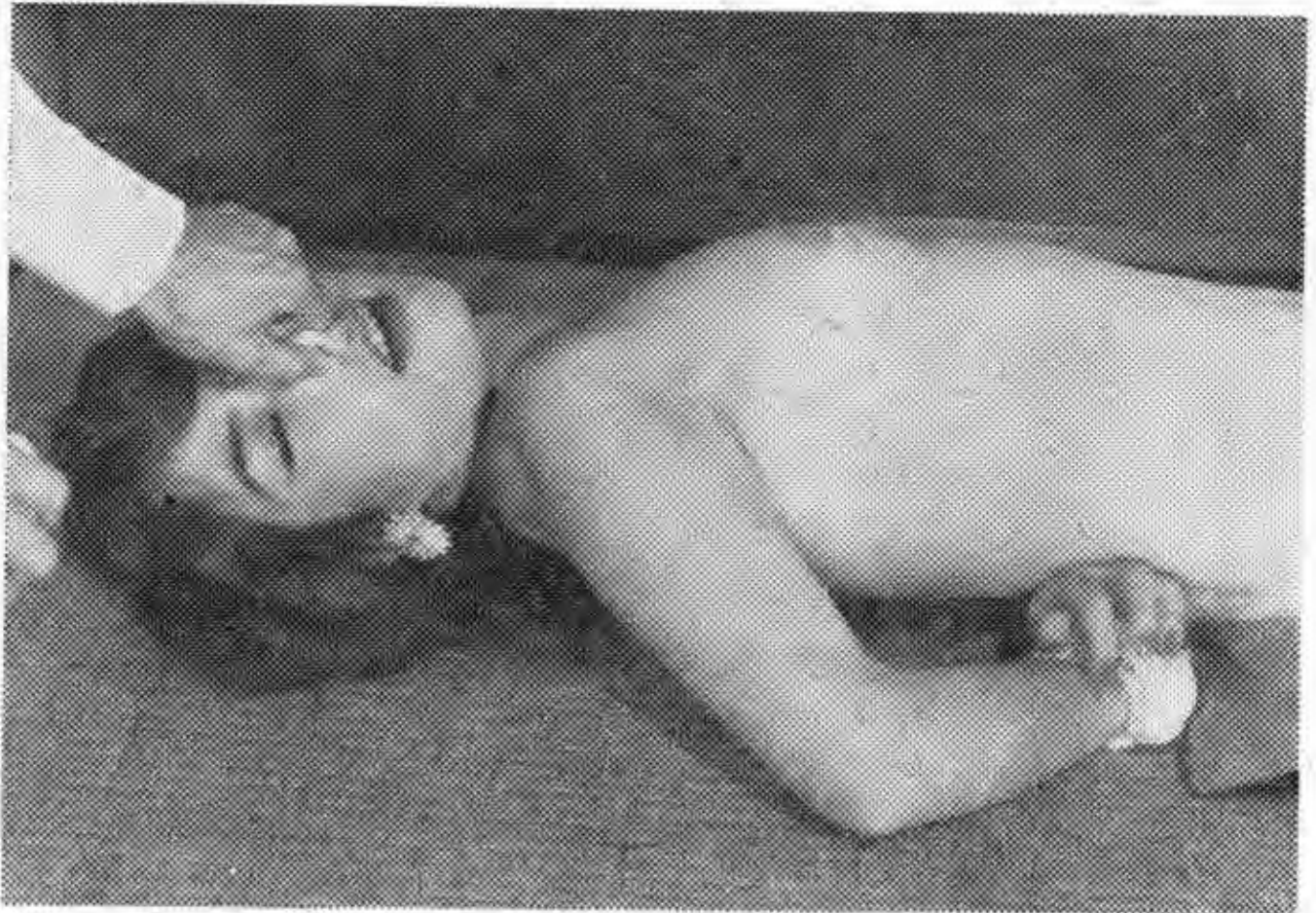
「おこしてくれないの？ ねえ」と私を見るので「人なんか来ないさ。来たって、カギはかけてあるし、奥さんがだまっていれば行っでしまふよ」「あたし大声出すわ」「いいよ口を押えるから」「いじわる」と、又にらむその眼へいきなり眼かくしをして「何をするの」と云う彼女へ「鼻をつまんでるのをみられたくないからね」というと「ふっふっふ」と笑うので「何がをかしいの」ときくと「なぜ、こんな眼に会うのか分らないものに、せっかく甘いものを御馳走して上げたのに、なぜ、こんなひどい目に会うのか分らないもの。こんなことされるの分ってたら、上げたりしなかったものと思ったら、なんだかおかしくなっちゃって」と眼のない顔の鼻と口が笑っています。

「こんなすばらしい鼻をしてるから悪いんです。そして選りに選って、私みたいな大の鼻マニヤの隣りに越して来たのが運のつきですよ」私は女の腰ひもをときはじめると、「何をするの」ときくので「足をしばるんです」私が彼女の足をしばる間、なぜか、彼女は静かでした。「観念したようですね、それがいいですよ。もうその鼻も僕の自由です。これから思う存分、その鼻を楽しませてもらいますよ」

奥さんは眼かくしされたまま、死んでしまったように口をききません。高い鼻が形よく眼の下にあります。可愛くむすんだ唇を無理につまんでひっぱると、ピチュと音がして、白い歯がのぞきました。あんなにはげしく抵抗した女とは思えない位素直に横たわっている奥さんが、少々哀れでした。ゆっくり又女の鼻をつまみます。クニャとやわらかく厚い肉が私の指と指の間に……。パーと女の口が開いて「もう止めて」あえぐのをみて「これからだよ」そして女の体からはなれて、彼女の食べかけのまんじゅうを皿の上からとって、彼女の歯形のついたまんじゅうを私が食べる。「何をたべてるの」と奥さんがききます。「さっきのまんじゅう」といって彼女の

アゴに手をやって唇をひらかせました。

素直にあいた女の口の中へまんじゅうを押し込むと「ふっふっふ」と情なそうに笑って「あなたのたべかけを食べさせるの」「さっき奥さんの食べたのを僕が食べて、又奥さんに食べさせたのです」というと笑ってかみ始めました。



私はきゅうすをもって来て女の上半身をおこすと、「甘いもののお茶がほしいで

は今まで、四、五人みただけだけど、つまんだ味はまた格別ですよ。今それを三つ四つ保

しよう」と云つてのまそうとする
と「まるでお人形ね」と云つて、
二口ばかり飲んで、「もうたくさん」彼女の体を又ねかせて、つま
揚子を手にもって、「口をあいて」
と云うと「今度は何を入れるの」
ときくので「歯の掃除」というと
「ふふふふ、いいわよ」という彼
女の鼻をつまんで、あいた女の口
の中に揚子を入れてていねいに食
べかすをはじり始めると、まるで
歯医者患者みたいにおとなしく
しています。しまいには「もう止
めて。はずかしいわ」と鼻をなら
します。「うら側も」「ね、はず
かしいわ」と又訴えます。私は止
めました。人の来ない中に、もっ
とすばらしい彼女の鼻をたのしみ
たいと思つたからです。

存するために、とらせていただくと思うんですが」「一体どうするの」「まあ、じつとして」私は用意して来た針を出すと、ギョッと鼻をつまんで肉をより上らせておいて、その脂らのかたまりをほじくるように、かるく針をつき立てました。

今までおとなしかった彼女は「いたいッ」と飛び上りました。なおもほじくると「助けてッ。いたい。うう、いたい。いやよ」と泣きそうな表情でわめき「ねえ、何でそんなことを」そしてはげしく顔をふります。「そんなことすると、余計いたいよ」「何なの、ねえ何なの。ナイフで切ってるの」「まさか」「だってすごく痛い。死にそうよ」又鼻をつまむとはげしく顔をふりますが、私の手は鼻からはなれません。孔が八の字をせまくしたみたいにタテにつぶれて、上唇までもち上げる位きつくつまんでいるのです。

「もう本当に……こんなこといやだ」と云つたかと思うと、しばらくした手の指を、私のもものあたりにあてて、つねろうとしはじめました。それがかえって私を更におおります。

「さわぐと血が出るよ」「まさかあなたは」「何?」「あたしの鼻を切ろうっていうんじゃないんでしょね」女の声は恐怖に変わって

来たようです。「それこそまさか、ですよ」

「じゃ何をしようというの」「だから、さっきも云ったでしょう。脂らのかたまりを、とるだけです」

「そんなことしたら、穴があくわ」「又もとどおりになりますよ」

「そんなことないわ」

「第一あなたの鼻をキズつけるようなことはしません。これからも大いに、もてあそぶつもりなのですから」

「これからもう」

「そう。これから」

「いやいや」

「いまによくありますよ。今に鼻をもてあそばれるのが大好きになります。いや、好きどころか、又やっていると、私にせがむようになります」

「ならないわ。なるもんですか」はげしく云って、さっと横をむいて眼を閉じます。「ああ。なぜ、こんな目に会うの」そう云った眼尻から涙があふれて畳の上におちたかと思うと、すすり上げます。手をしばられているので、手ばなしの泣き顔です。私はタオルで涙をふいてやりながら、「気の毒だけど」と泣いて赤くなった高い鼻をつまみます。そして

肉をもむのです。なんというやわらかさでしょう。「泣いた女の鼻はすぐやわらかいんです。ほら、こんなに」つままれ、もまれながら奥さんはまだ泣いています。私はポケットから、十円玉を出すと、女の鼻の片方の孔につっこみました。形のよかったその孔は横にひろがり奇妙な形です。

「いたいわ。馬鹿なことはよして」

女の声もすっかり力が弱っています。十円玉をはずして「左むけ左」私は女の鼻をつまむと左に曲げます。今度は「右むけ右」右に曲げるのです。まるで、ゴム製品のようにやわらかく形のよい高い鼻が曲ります。奥さんは口をあいたまま、私のなすがままにつまませています。「私が勝った。奥さん。あんなにも、あなたがつまませないと頑張ったこの鼻を、こんなに自由に私はできるのです。あんなにつまみたいと思っていたこの鼻を、ほら」と又つまんで肉をもみながら、「こんなにも、はげしくつまむことが出来るんです。しかもあなたは抵抗することを忘れたのかと思う位、おとなしく横たわっている。どうです、奥さん」

昨日までは、この奥さんのこんな姿をどうして想像し得たでしょう。こんなにまで、こ

の美しい奥さんの鼻を自由に出来ると、どうして考えることが出来たでしょう。しかも、今私は、この鼻をまるでオモチャのようにもてあそんでいるのです。とその時です。「ごめん下さい」と玄関に女の声がして。それは母でした。すると奥さんはハッと眼をあけると「たすけ」あわてて私は、その口をふさぎました。

母は又「ごめん下さい」と云っています。奥さんは体ごとものがいて「むむむむ」と、あばれます。私は奥さんをにらんで「私の云う通りしないと又ハリで」母は更に「うちの息子がお邪魔してませんでしょうか」私は「いいえと云うんだ」と奥さんに云います。「いいえ」奥さんは大きな声で云います。ハリで又鼻をつつかれるのが、たまらなかったのです。母は去っていききました。

「あぶなかったわね」と奥さんは云って、あきらめたように眼を閉じて「助けて上げたんだから、もう私を助けて」と云います。「うん、そうだな」「もしあたしが、ここに来ますよ。あたしをこんなことしてるんですよ。云ったなら、大へんなことになったわ」とにらんで「わるいことをしていると今に誰かにみつかるわ」「こいつ」と云って又鼻をつま

み、はなしてはつまみ、つまんでははなし、まるでものにつかれたようなすさまじさでつまむと、「いたいわ。もういやだ。うふん」と、ハナをならして「鼻がはれるわ。はれるわ」眼をとじて云うのへ返事もせずつまんでると「きこえないの。ねえ、きこえないの」と眼をとじたままくりかえします。「やわらかい」私がうめくような声を出すと、「もう十分満足したでしょう。ねえ」

「まだこの位じゃ」

「どの位つまんだら満足するの」

「一日中」

「まあ、じゃあたし、何も出来ないわ」

「鼻毛をそりたいんだけど」

「そこに、ハサミがあるわ」と眼でしらせるあたりを見ると、針箱があります。そこからハサミを持ってくると、奥さんの鼻の先をつまみ上げて、穴をひろげました。

「あら、あたしのをそるの」

「そうですよ、もちろん」

鼻をつままれながら私を見て、「いたくしないで」と私の手もとを見ています。散々孔の形を変えて、まるで彫刻家が、作品を少し作ってはながめるように楽しみながらつまんでは曲げ、孔をひろげては指を孔の中に入れ

て、中に落ちた毛のこまかいのを、ほじくり出したり私は彼女の鼻毛を、すっかりきれいに切り終りました。

奥さんは、死んでしまったのかと思う位動きません。完全に自由を奪われた女が、如何に無力かを味わっているようです。反対に私は、女の自由を奪って征服した喜びが、どんなに素晴らしいものかを、しみじみ感じました。

それから「さあ、もう今日は終りだ」と、なわをほどこいてやっても、身動き一つしません。のびたままです。「奥さん、生きてるんでしょう」鼻の先の肉をはじくと、プルンと肉がおどっています。でも、奥さんは眼をじたままなのです。

「もう、終ったんですよ」

やがて眼をあけると、ゆっくり立上り、私の前をフラフラした足どりで鏡台のある部屋まで歩いて行くと、鏡台の前にだらしなく坐ると、えりもとをなおし、それがすむと、化粧をはじめました。プンといい匂いがして、顔をパタパタはたいています。私が行くと、鼻をぐっと鏡に近づけて、どうもなかったことをたしかめると、自分の手でしきりに鼻をなでさすって、ため息をついています。

私がうしろに立つと、鏡の中の奥さんが私を見ます。そして、にらんで「ハリで穴があったかと心配しちゃった」と云うので「ははは大丈夫ですよ。じゃ、僕これで帰ります。どうもありがとう」と云うと「お母さんに云いつけて上げる」と云うので「それだけは」と今度は私が頼むと「ううん、云うわ。だってひどいわ。あんなことするなんて、この鼻をあんなにつまむなんて。きっと明日までに鼻がはれるわ。少しいたいもの、さわると」と又にらみます。

「メンソレ、つけて上げる」

「いいわ。自分でつけるから」

「本当に云わないで下さいよ」

「しばらく、鼻をつままれたりしたの、生れて始めてよ」

「ごめんなさい」

私は低姿勢でした。母に云われたら、それこそ大変だからです。すると奥さんの顔に微笑がうかんで、

「安心なさい。云わないで上げる」

「たのみます」

「その代り、もうしないで」

「でも鼻をつまむ位は」

「だめ、もうだめよ」

「あと一回位」

「いや。今度したら云いつけてよ」

云いながら鼻の頭を、パフではたいています。そして「ふふふふ」と笑って、立って茶のみ道具を片づけています。「どうも御馳走様でした」というと奥さんは「いいえ」と云って、意味深げに笑って思い出したように「ひどい目にあっちゃった」と云って私を見て「主人が知ったら、なんて云うかしら」そんなことを云いながら、さっきの麻なわを片づけています。私は隣家を出て、家に帰

りましたが、心は満足感でいっぱいでした。

私は家に帰って自分の指を見ました。「さっきこの指で、あの美しい奥さんの鼻を思う存分つまんだのだ」と思うと、うれしさと胸がおどりました。あんなにあこがれていた鼻を自由にすることが出来たのです。

私は小さな箱をあけました。中には粒状のものが二つ、紙の上にのっています。さっきあれほど彼女を泣かせてとった鼻の脂らのかたまりです。思わず私の頬に快心の笑みが浮かびます。

「これは僕のダイヤモンドだ」誰にとはなしに、そう呟やいていました。

「女の鼻」は、私にとっては本当にダイヤモンドのようなものです。そのなかでも、この奥さんの鼻は、私には素晴らしいのです。見るだけではなしに、眺めるだけではなしに、自分の手にとってみたかったです。

それが今、とうとう美しい女の鼻を弄びたいという悲願が果されたのです。私は奥さんの鼻は自分のものだという気持を実感としてしみじみと味うのでした。

〔最新版〕 ニューモデル悦虐写真五十集

K組五十集 大手札判印画紙(9×13) 焼付

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円

K1 全裸刺青自慢緊縛(山原)
K2 恍惚たる責の境地(山原)
K3 苦悶の表情海老責(大塚)
K4 海老責にあえぐ女(大塚)
K5 全裸のぐるぐる巻(玉田)

K6 豊満な臀部を晒す(刑部)
K7 厳しき縛りに酔う(山原)
K8 荒縄で仕置される(美木)
K9 土壇に観念した女(美木)
K10 ムチ打たれる女囚(美木)
K11 縛り人形を眺める(山原)
K12 開孔器で鼻を弄ぶ(山原)
K13 足首と首を連繫す(大塚)
K14 後手の複雑な縛り(玉田)
K15 裸縛りに恥らう女(山原)
K16 夫にされる鼻責め(増田)
K17 緊縛にあう若妻姿(増田)
K18 猿轡で鼻を虐める(増田)

K19 開股縛にあう女囚(美木)
K20 罪状を訊かれる女(美木)
K21 股間縛りの全裸像(山原)
K22 荷造り縛りで晒す(玉田)
K23 革拘束衣で括らる(大塚)
K24 庭木に立縛りなる(木村)
K25 柱に晒される裸身(玉田)
K26 セーラー服しぼり(大塚)
K27 高手小手首縄緊縛(山原)
K28 黒輝豊満刺青縛り(山原)
K29 踏みこまれた女(山原)
K30 古墳にて吊り準備(木村)
K31 拷問にあう裸女賊(山原)
K32 ロープブラジャー(山原)
K33 厳重な後手縛猿轡(刑部)
K34 エビ縛りにあう女(木村)

K35 イルリのある風景(大塚)
K36 麗しき裸身を晒す(大塚)
K37 亀甲縛り正面裸像(刑部)
K38 豊満乳房縛り上げ(山原)
K39 全裸を投げだして(山原)
K40 縛しめに哭く乙女(木村)
K41 エビ責め放置十分(木村)
K42 豊かな全裸を緊縛(玉田)
K43 観念アグラ縛り図(玉田)
K44 笑顔を縛る強烈さ(刑部)
K45 猿轡の下にあえぐ(刑部)
K46 縛りに典子の素顔(刑部)
K47 伸びやかな裸縛り(刑部)
K48 エビ縛り刺青姐御(山原)
K49 立木より逆さ吊り(木村)
K50 裸身の緊縛と羞恥(玉田)



戯文列伝

河津安春

一の章

四原寛氏はホテルのテラスに立って、流れる汗を拭いながら、西の空を眺めた。南国の落日は速い。垂直にジャングルの彼方に沈まんとしている。残照は三つの塔を神秘のベールで覆い、ワットを取り囲むモート湖は血潮のように真紅だった。

四原氏は既に十日余りも、このホテルに滞在している。名はグランド・ホテルと言っても木造バラックで、十三世紀のクメール建築様式を模している。客はワットを訪れる旅行者のみである。彼は到着した最初の夜を思い出した。そうだ、不時の客が多かった。夕食前、一汗流すべく、バスルームに入った彼は

突然、ワーンという羽音と共に、何百、否、何千とも知れぬ蝗の大軍に襲われた。暗黒のジャングルから、不用意に開かれたバスルームの窓の灯りを目掛けて突進して来たのである。仰天して四原氏がバスから飛び出した事は勿論である。それでも彼はこのホテルを動かうとはしない。アンコールワットの魅力はそれ程強烈だった。周囲一里といわれるワットの内部を、四〇度の炎暑に悩みながら、彼は徘徊し続けた。皮膚の色は日に焼けて、恐らく皮膚下に迄浸透しているせいか、深味を常びた褐色である。

然し愈々、明日は出発だ。ビザの期限が切れるのだ。走るようにして、電話器を取り上

げ、こんな時刻にと驚くフロントに車を頼んだ。発つ前に、もう一度ワットを見ておきたかった。

運転手に待っているように命じて、彼はゆっくりと内院に歩いて行った。殆んど建物の石は亀裂を起していた。自然の風化というより、強烈な生命力を持つ南国の植物群が、一ミリの間隙も見逃さず、根を張り、枝を延ばし、ついに石を破壊させる。葉の色も緑などというようなものでは無く、殆んど黒に近く、底深い、無気味な生命力を示していた。

既に暗黒となっている一つの室に、四原氏はなれた足どりで進んで行った。

六人の女神のいる室だ。爛熟した古代印度

文化を示すように、この世のものとは思えない程豊かな、丸々とした乳房と、腰部を持っている。それぞれ、気ままなポーズで、微笑を浮べて立っているが、その肉付豊かな足は跪いている男の頭を踏まえている。足の重みに堪えかねて、背を曲げ、手足を突っぱり、苦痛にあえいでいるが、醜悪なその顔は、恍惚として必死に女神の姿を仰ぎ見ようとしている。四原氏は目を閉じた。目を閉じてても、脳裡には判然と立像の姿は浮んでくる。

始めてこの地を訪れたのは、印度の青年貴族だった。そして蛮族の酋長が若い女である事を発見して青年は驚いた。しかも若い女酋長は、部落民の先頭に立って、勇猛果敢に闘い、更に青年を驚かせた。当時、最新の武器を持つ印度人には抗し切れず、捕えられた女酋長は一糸まとわぬ裸身と、その美しさで青年の魂を奪った。彼の最初の贈物は印度の絹のサレイだった。彼は故国への手紙に、男共は色が黒いが、女は色白く、皆美しいと書いた。この青年と女酋長は結婚してフナン王朝を開く。四原氏は微かな物音を耳にして、冥想からさめた。白檀の香りが漂ってくる。人がある筈は無い。夜は妖魔が跳梁すると言われているのだ。「ミナーナ」囁きは風に木の

葉が揺れるように、微かだった。四原氏は見た。黒く隈取られた美しい大きな目を。半ば開かれた真赤な唇を。雲のように漂う雪白のサレイを。勝れた織工は、一反のサレイを二〇〇瓦の目方に仕上げると言われている。小さく折り畳めば、少女の掌の中にかくれるとも言われている。その綾羅がフワリと彼の肩を包んだ時、四原氏は現実を踏み越えたと思像される。

「私の名は……」

四原氏は呆然と思い出した。インドの青年の手紙を。妻の名前の意味は、柳の葉です。ああ、ウイロリーフか。

「お前は、毎日毎日この部屋に来て冥想している」

囁きは優しいが威厳に満ちていた。

「お前は、遥るばるジッポンから、この地に來た。何のために？ お前には判らないだろうが、真実は私がお前を呼び寄せたのだよ。私はシバとインドラのお許しを得て、百年に一度、現世に姿を現わす。お前を呼んだのは私を崇拜し、私に仕え、私の使い奴として、私の美しさを世に伝えるためなんだよ。この前には、マゾツホという男を、呼び寄せたけど……」

女神は言葉を切ると、「ウルサイッ」と足でトンと地を打った。「ワッッ」という叫び声が響いたが、直ぐに消えて行った。

「男なんて、虫ケラみたいなものなんだよ。私の美しさの虜となり足許に這い寄ってくるだけのものなのよ。ホラッ、ホラッ」

トン、トンと足が地を打って「ワッッ」「ワッッ」と絶叫がつづいた。「三匹目」声に微かな笑いがあつた。「あのマゾツホは一生私に身を捧げると忠誠を誓い、生涯守り通した。男としての逞ましきは無かったが、どういう訳か、唇の力がとても強かった。それだけが取り柄だった。力強い唇の奉仕！」

女神は嬉しげに又足を踏み鳴らし、虫ケラ男が一匹、悲鳴をあげて、死んでいった。

「お前は、どうして私に仕えるの？ 矢張り唇かい？」

四原氏の身体はスーッと地上に倒れた。女神の柔かく冷たい、小さな足が彼の顔を踏んだ。香料の塗られた足指が、彼の顔をまさぐり、舌を挟み、唇を撫でた。

「この横着者！ こんな弱々しい唇で、私に奉仕しようとは、身の程知らぬにも程がある踏みつぶして欲しいのかい？」

俄然、女神の小さな足は磐石の重味となつ

て四原氏の鼻をひしゃげ、唇をひんまげ、息も出来ぬ苦しさに悲鳴をあげさせた。

「お許し下さい、女神さま。哀れな私めには御奉仕致します、何の特技も御座いません。」

このまま踏み殺されても、私めには、身に過ぎた果報で御座います。ただ貴女さまを崇拜する心だけは、誰にも負けませぬ。もしお許しを得られるならば、私めは拙いながらペンを採り、生涯、貴女さまの美しさと残酷さを称えつづけるで御座いましょう」

許された四原氏が如何なる奉仕を女神に捧げたかは誰も知らない。又、四原氏も語らないが、六女神の立像のある部屋は、内陣奥深い位置にあって、しかも屋内には全然トイレの無いヒンズー寺院である。トイレは外壁近くに数カ所設けられているが、六女神の部屋からは、かれこれ一キロ近くあるのではないだろうか。

日本へ帰った四原氏が、一心こめて残酷で美しい女神への讃歌を書き続けているのは、読者も御承知の通りだが、ペン女皇が人間便器をこよなく愛好している事と照合して、私には四原氏の奉仕の実態が想像出来るような気がする。

噂によれば、四原氏の股間には女神の小さ

な足跡が歴然と残っており、女神讃歌の執筆を怠けると痛み出すと言われている。

二の章

夜尾氏は午睡からものうく目覚めた。天井には、縄と鞭と女の織りなす、あらゆる姿態が画かれている。昨日のパーティでの真白な脂ののった女体への鞭の手応えが、気持ちよく思い浮んだ。起き上って床に足をつけた夜尾氏はふと表情を変えた。冷たい床はギリシヤの大理石だ。床の所々にあるマットは、中国四川の刺繍が施されている。あたりは静かで何の物音もない。時々、外で小鳥の囀りが聞えるだけだ。

「オヤ、ここは、どこだろう」

一瞬、頭の中で何かが烈しく回転した。

「そうだ。パノラマ島だ。昨日、乱歩先生から、しばらく保管を頼まれたんだ」

フーツと吐息を洩して、思い切り伸びをしたとたん、キリキリと頭が痛んだ。二日酔だな。だが少し腹がへったようだ。と、呆然とあたりを見廻していた夜尾氏は、突如「大変だッ」と叫んで飛び上った。考えて見れば、ここには、地下室に監禁されている女獣達以外、誰一人居ないのだ。俺の食事は無論のこ

と、下の女獣共の餌まで、俺が作らなければならぬことになる。昨夜は酔っ払っていて、つい良い気持ちで保管を引き受けたが、早まったかな。ふくれっ面をして、夜尾氏はグルグル部屋を廻り出した。

隅っこに転っているスリッパをつっかけたが、グッショリと気味悪く濡れているので、周章で蹴飛ばした。オヤオヤ、この調子では、掃除洗濯まで俺の仕事になるかな。パノラマ島の王様の積りだったのに、酷い事になった。仏頂面でブツブツ言っていた夜尾氏の顔がパツと輝いた。天啓だ。簡単じゃないか。下の檻から女獣を一匹ずつ引っ張り出して、順番に当番にすれば宜い訳だ。

すっかり機嫌を直した彼は、口笛を吹きながら、踊るような足どりで地下室に向った。それでも出口で鞭を一本、手早く引き出す事は忘れなかった。

階段を下りて、地下室の扉を押した彼は、充滿した動物的な女達の体臭にクラクラッとした。二日酔いの頭には刺激が強過ぎる。

二、三度、頭を強く振ると、夜尾氏は勇を鼓して中に這入った。通路の左右に六個ずつ檻が並んでいる。

檻には木の名札がかけてあった。清子、ひ

かる、洋子、啓子、美佐子、悠紀子、文代、良子、葉子、マリ子、典子、ルミ、フンフンと頷きながら歩いていた彼は、最後のルミでフツと足を止めた。ハテ、どこで見たかな、見覚えある顔だが……

檻の上部に更に二枚の木札が掛っていた。調教中、今一枚は危険。危険だって？笑わせるなよ。たかが雌一匹、いずれ俺が叩き直してやる。もう一度ブルツと頭を振ると、夜尾氏は通路の途中で立ち止った。美しい女獣達は気持ちよさそうに眠っていた。保管者、否事実上の王様の見廻りだと言うのに、何と言う横着な雌たちだろう。彼は鞭を頭上に大きく一転させると、ピシッと、烈しく床を打った。女獣達はピクリともしなかった。二度、三度、烈しい鞭の音に、漸く女達はものうげに身を動かしした。

「起きろノ犬にも劣る女獣共奴」

夜尾氏は怒り心頭に発して叫んだ。一番近くの檻の啓子は白い裸身を起して、可愛いらしい口で欠伸をした。

「あんまり大きな声をお出しになると、反響で何にも聞えなくなりますのよ」

と柔しい声で言った。そうよ、そうよと女達が口を揃えた。中には小さな声で、何て下

品な男でしようと言う女もいた。

「今日から俺が、この保管者になった。俺の命令には絶対服従だ。いいな。俺の鞭は凄く利くことを、よく覚えておけ！」

「アノ！保管者さん。言い難くて舌をかみそうだわ」

文子が甘い声を出した。

「今夜は私、軽いお食事が頂きたいの。しばらくふりに、日本風のお吸物や、鯛の塩焼きのようなものが欲しいと思いますわ。でもデザートは吟味して下さいね。サンキストはこー、二カ月、味が落ちますから、イスラエルのオレンジを、お願い致しますわ」

美佐子が円い目をクルクルさせて、

「私、スペインのメロンがいいわ」と言った。

夜尾氏は物も言えず、鼻から怒気を吹き出した。

「アノー、保管者さん」

一番若い良子が鼻をならして言った。

「昨日のパーティーで、下着がすっかり汚れてしまいましたの。すみませんが、お洗濯をして下さいね」

スラリとした手が檻のすきまから出て、白い下着類を通路に落した。広がったレースが

花のように見えた。

「アラ、私もよ」

「私も」

忽ち通路に十二の花が咲いた。

「ブブ無礼者！」

夜尾氏は精一杯の威厳を見せて叫んだ。

「お前達の下着の洗濯など、俺に出来るか」

「アラ！だって保管人というのは、私達が何時も美しく、元気でいられるように、お世話して下さいのが、お仕事なんじゃ御座いませんか？」

典子が蜜のような声で言った。一言も無く天を仰いで長歎息をした夜尾氏は、今度は語調を柔げて言った。

「実は、料理、洗濯、掃除なんて仕事、俺は全く出来ないんだ。それでお前達と相談して順番に一人づつ交代で、その仕事をして貰おうと思って来たんだが、どうだろう」

「アラアラ、私達こそ、そんなお仕事は不得手ですわ。お昼寝の時間も無くなるし、それに、そんな女中さんのようなお仕事は厭ですわ。ネー皆さん」

「そうよ、そうよ。第一、御自分のお仕事を私達に押しつけようなんて、ほんとうにズルイ管理者だわ」

カッとなった夜尾氏は、物も言えず、身を震わせていたが、そうだと叫んだ。こんな獣ずれした女共に何を言っても無駄なんだ。向うに一人調教中というのがいたっけ。一寸年を喰っているようだが、その代り話も判ってくれるだろうし、旨くいけば、この女獣共を押さえてくれるかも知れない。頭にきた夜尾氏は、もう前後を考える余裕もなく、ルミの檻の扉を開けた。危険とあったが、ルミには手錠がはめられていた。

「ナア、ルミ、話は聞いたろう。お前なら、その辺の女獣共と違って、判ってくれるだろう。承知してくれるな？」

薬をもつかむ気持ちで、彼は猫撫声を出した。ルミは太り肉ではあるが、均斉のとれた身体だった。目が少し吊り上っているのと、口辺に浮べている薄ら笑いが少し気になったが、膝をついた夜尾氏はルミの手錠を外してやった。

ルミは未だ膝をついている彼に、一顧も与えず、立ち上ると大きな伸びをした。ルミは物うげに彼を見下していたが、険のある目がキラリと光るや、逞ましい足が上って彼の肩を蹴飛ばした。不意をつかれて、無態に引っくり返った彼の手から、鞭がスツと抜きとら

れた。

「オイッ、何を……」

彼の声は激しい鞭の一撃で、忽ちにして消し去られた。周章で、鞭を避けんとする両足に生命あるものの如く次の鞭が巻きつき、彼を床に引き倒した。彼が少しでも身を動かそうとすれば、忽ち鞭はその動きを止めた。女獣共を鞭で馴らすのは、彼の最大の喜びであつたが、彼自身は鞭の味を知らなかった。その熾烈な鞭の痛さは、彼の骨の髄から、気力も、意志も、更には人間らしい気持ちも一切を奪い去った。

ボロ布のように跼まった彼を見下して、ルミはニコリと笑った。檻から調教中の木札を外すと、ルミはゆっくりと彼に近寄った。無難作に足をあげて彼を仰向けに蹴倒すと、胸の上にズッシリと重い、大きな尻を乗せて、先刻まで彼女につけられていた手錠を彼の手にはめた。それから、御丁寧に調教中の木札を針金で彼の首にとりつけた。

「お前、私を忘れたの？サディステインの大姫御、春日ルミをサッ。もっとも、ここ暫く奇クにも御無沙汰しているけれどもね」

ルミは彼の上に腰かけたまま、彼のポケットから煙草とライターを取り出して、美味し

そうに煙を吐いた。

「私はね、願を立てたの。世の中を美しく平和に保つために、男共に鼻輪をつけて、女の足にくくりつけますってね。特にSなどと生意気を言っている男をさきにね。お前、先刻料理、洗濯、掃除は不得手だとか言ってたわね。ナニ、心配は要らないよ。みっちり仕込んでやるよ。それから、どうすれば、女御主人様がお喜びになるかって事もね。鞭の痛さと、お料理の仕方の方のどちらを速く覚えるかは、お前の心が次第サ」

ルミは面白そうにフッフ…と笑った。

「私の鞭より先きに、料理が覚えられるなんて、考えられないけどね」

ルミは最後にもう一度、腰をゆすって、彼をギョウツと言わせてから立ち上った。ピシッと鞭がなって、第一の命令が飛んだ。

「ソラッ、洗濯物だよ！」

打ちのめされてフウフウ言っていた彼は女の一声に飛び上った。痛む身体と不自由な両手で、床の白い花を次々に、かかえあげた。鞭打ち、蹴とばし、彼を追い立てて行くルミの後ろ姿を、檻の中の女獣達は無関心に見送っていた。

三の章

千田無仁氏は読んでいた草双紙から顔をあげると、ホッと吐息を洩した。拡げられているのは、山東京伝の白縫物語である。国貞画くの美女達は皆、太り肉で、少し筋骨逞し過ぎるが、勇婦白縫が投げ飛ばした敵兵の背をしっかりと踏みつけた足の指の一つ一つが、力に満ちて反りかえり、歌舞伎風の見栄を切ったその姿態は、強い女の美しさを誇示するかのように艶冶を極めていた。

千田氏は夢見るように呟いた。

「俺は馬琴よりも、美しく、強い女を讃美の念を、こめて描きあげた京伝を愛する。同じように、ジードよりも、ヴレリイを愛するのだ」

先日読んだヴレリイの楽劇『セミラミス』が、華かな想像のステージに思い浮ぶ。

舞台正面に金の鳩の意匠で飾られた玉座がある。玉座は高く八つの階段の上だ。

激しい鞭の音と共に、鎖で繋がれた捕虜達が兵士に追い立てられてくる。捕虜達は舞台に一列に並び、跪ずかされる。

音楽は一段と高くなり、最高の権力と栄華を表現する。

女王セミラミスが軽快な戦車に乗って登場する。戦車は黄金の鎖で繋がれた、敵方の八人の王達によって索かされている。

女王は鱗模様の鎧をつけ、片手に鞭、片手には大弓を持っている。

王達は戦車から解き放たれ、乱暴に鞭で追われ、玉座への階段に体を横たえる。次に捕虜達が突き倒されて、戦車から玉座まで敷物のように敷き詰められる。

女王は戦車から躍り出て、捕虜達の体を踏みつけながら、玉座に駆け登る。

玉座に腰を下して、女王は勝ちほこった面持ちで捕虜達を見る。敷物の中に一人の美男子を発見した女王は、笏を振り上げて駆け寄る。男の髪を掴み、邪怪に首を持ち上げて眺める。そして男を踢ませたまま、髪を掴んで舞台前面に引っ張って行く。

女王は馬市で馬を見るように男を見詰め、その肩や、腕に手を触れて見て、嬉しそうに笑う。

何と言う華麗な舞台だろう。

千田氏は又、数年前、来日した紐育シティバレエ団の『檻』の舞台を思い浮べる。

美しい雌蜘蛛達に一瞬の快楽の後、殺されて行く雄蜘蛛。踏まれ、蹴られ、締めつけら

れ、死の最後に至る迄、雄蜘蛛の身体は喜びの為に痙攣している。担ぎあげられた雄蜘蛛の死骸に、女王蜘蛛は傲然と打ち跨り、舞台を一巡する。よく訓練されたバレリーナ達の均斉のとれた肢体と、強靱な太股を持つ雌蜘蛛達の印象は実に強烈だった。

優雅な女流エッセイスト、岡部伊都子女史でさえ、「ああ！私もあのようにして男達を殺したい」と叫んで、同伴の女人を驚ろかせたと、随筆『艶』に書いている。秘められた女人の魔性、否、本性を索き出す為には、もっともっと勝れたM文学が発表されなければならぬ。

千田氏はここ数日、通い続けているもう一つの舞台を思う。華かなステージでは無い。場末の佻しいストリップ劇場の舞台である。千田氏のお目当ては、このストリップガール達では無い。新らしく登場したヌード剣劇と称するものである。約三十分の短い舞台で、筋も何も無いが、只、美しい女座長の艶やかな肢体が、三人の男を相手に荒れ狂うのみである。

「やっちめえ！」

親分の命で、二人の乾分が力を抜いて斬りかける。一人は忽ち腕を取られて投げつけら

れ、四つ這いの背中に女の白い足が乗ると、グイと力をこめて、ペシャンコに踏み潰す。次の一人も他愛なく投げられて、二人の乾分が重ね餅になったその上に、腰を下して女座長は鼻で笑う。

「ふん、ざまあねえや！」

「もう勘弁ならねえ」

親分が斬りかける腕をかくぐり、ピシッと小気味よく平手打ちを喰わせる。グルリと一廻りした親分に、今度は反対側からもう一度、高手打ちで逆に一回転させ、膝を上げて跨間を蹴りあげる。痛え、痛えと踞まるのを足を飛ばして顎を蹴ると、仰向きに倒れる。

「これ迄、非道に苦しめた女達に代って、私が恨みを晴らしてやる。ホラ、女の泥足で男の面を踏まれて思い知るがいい」

女座長は親分の顔に足を乗せて、グイグイ踏みこむ。

何よりも千田氏を索きつけたのは、女座長の肢態の美しさである。踊りの素養があるのか、極まり極まりの型は流れるように女の色気を漂わせる。男を踏みつける足には、靴ずれの跡もなければ、座りだこの薄黒い跡もない。足の裏さえ、汚れのあとなく真っ白である。己が肢体を大切に磨きあげた女の感

じである。更に立ち廻りは形だけの芝居の型では無かった。真実に力がいっているのか踏み潰された男はギューと声を出す。顔を踏みにじられる親分の如きは、苦しうに呻きながら、手足をヒクヒクさせていた。

考えている内に、千田氏は無性にこの女に逢いたくなった。美しく見せようとする女は多い。然し、この女は違う。見せようとするのではない。美しく磨きあげているのだ。意を決した千田氏は勢いよく立ち上った。

……………

千田氏の熱意が効を奏したのか、数日の後鈴川由美と言う女座長に逢う事が出来た。何よりも氏を驚かせ、喜ばせたのは、彼女が氏の名を知っている事であった。これは彼女が奇巧の内容に、理解を有する事を意味する。彼女の美しい肢体への讃辞は、彼女を喜ばせた。

彼女は舞台へ出る前に必ず風呂へ入る。彼女は香料について好みを有している。特に常用しているのはタブである。これは足指の間に迄、注意深く使用される。最初は顔を踏まれる座員が厭な気持ちにならないようにとの配慮だったが……と言葉を濁した。

千田氏には直ちに理解出来た。今はあの親

分は、この柔かく、しかも魅惑的な香りに包まれた女座長の足で顔を踏まれる事に喜びを感じている。これは親分になる座員のみではない。三人の男達は皆、この女座長に投げ飛ばされ、踏みつけられ、腰の下に押し潰されながら、喜びを覚えていたのだ。千田氏は、あの激しい立ち廻りの所以を理解した。

「先生、こんど演し物をお願ひするのは厚かましかったです。こんな事をお願ひするのは厚かましいと思いますが、何か私のために台本を書いて頂けませんでしょうか？」

「喜んでお役に立ちたいとは思いますが、さあ、僕に書けるかな」

「でも先生は、女勇士の武者振りを、あんなに美しく書いていらっしゃるんですもの」

「あれは僕の夢の世界なんだ。僕の夢の世界に生きている女人の像なんだ」

鈴村由美は妖しく微笑えんだ。

「先生、今日は私をその夢の女と思って頂けません？私、先生のお作を読む度に、私もこんなに美しい女武者になって、男を組み敷きたいとも思っていましたわ」

呆然と鈴村由美の顔を見詰めている千田氏を尻目に、彼女は御所車の楽屋浴衣のまま、スラリと立ち上った。

「サア、三日月城の女城主、鈴村由美が、お相手を致しましょう」

彼女の声音は厳しかったが、唇は笑っていた。魅せられたように千田氏は立ち上って、フラフラと彼女に近寄ったが、斗志は全然無いから話にならない。忽ち指を逆にとられて高くねじ上げられた千田氏は足を爪立てて、堪えようとしたが、思わず「痛い、痛い」と声をあげた。

「フッフ……」と含み笑いをしながら、鈴村由美は委細構わず、そのまま、部屋中を引き廻した。爪足立ちの哀れな姿で、千田氏は、ヨチヨチと歩かされた。やっと指を離された千田氏がホッと一息ついたとたん、見事な足払いで尻餅をついた。御所車の浴衣の裾が大きく割れて、美しい滑やかな太股がチラリと見えたかと思うと、タブの惱ましい香りと共に千田氏は蹴倒された。

鈴村由美はゆっくりと千田氏の胸板に胸がると、ズッシリと腰を下した。何という重さだろう。もうとても跳ね反せない。千田氏は陶然として来た。上から見下しているが、稍吊り上った目がキラリと光っていた。

「口程にも無い弱い男。これで妾に手向かうとは、身の程知らぬにも程がある。懲らし

めの為、少し折檻をしてくれようぞ」

彼女は悪戯っぽく、グイグイと腰をゆすつた。

「エエイ、問答は無用じゃ。はよ首を打て」千田氏は健気に言った積りだったが、彼女が腰を揺すって一層強く押さえつけたので、息を絶えだえ、声も途切れ勝ちだった。

「ホホホ……、こんな汚らしい首をとって何になるう。どうじゃ、命だけは助けてとらす程に、その首切り落したものだと思ひ、妾の自由にするがよいかえ」

彼女の笑い声と共に、千田氏の顔は温かい暗黒に包まれ、タブの強い香りに、千田氏の理性は麻痺して行つた。

……………

「先生、ここん所、少し書き換えて頂けませんか。何だかやり難いようですわ」

鈴村由美は、机の上の台本から目を離して言った。

「宜いよ。早速、考えて見よう」

易々として台本作者は、彼女の腰の下から顔だけを覗かせて答えた。いかにも幸福そうな顔だった。

四の章

福井久人氏は京人形のように端正な奥さんと、朝の紅茶を飲んでいた。この強い葉草にも似た香りはリプトンでは無い。氏の好みのダージリンの紅茶である。印度人は特にダージリンを尊重するが、彼等でさえ、飲み過ぎると下痢を起こすと言われている。

快晴の日曜日の朝である。福井氏は側のウインストンのパックから煙草を取り出した。この赤と白の大胆なデザインの煙草は、氏が映画「ピンクパンサー」で、渋い二枚目デヴィッドニグンがポケットから取出して、女に勧めた時の印象が、とても好ましかったのだ。味もラッキイストライクと似た甘い香りでもとても柔かい。奥さんが娜やかな指で、ライターの火を付けた。

「今日は一寸出かけるよ」

福井氏は不機嫌そうな口調でポツリと言うと、奥さんは淑やかにハイと答えた。

福井氏はチラリと横目で奥さんの顔を見たが、毛程の変化も見出せなかった。こんな時は決して胸騒ぎがする。一体何を考えているのだろう。結婚して五年、一言の不平も不満も洩らさず、柔順そのもののような奥さんだ。だが氏は時々、美しく整っているが、能面のように無表情な奥さんに不安を感じる。

真実に叔母との密戯を知らないのだろうか。もしや知っていて、内心、俺を軽蔑し切っているのではないだろうか。その不安をかくそうと、反動的に氏は暴君的な態度を取る。

然し今日は叔母ではない。先日、ホテルで逢った有閑夫人である。あの夫人も叔母と同様、美しいとは義理にも言えない。だが夫人のあの時の投げやりな冷酷さは俺を戦慄させた。恐らく行きずりの一時の遊びと考えたのだろう。その残忍さの前に、俺は呻きながら痙攣した。だが何故、再び俺を呼び出すのだろうか。不思議な期待と恐怖が、氏の胸を締めつけた。

× × × × ×

福井氏がホテルの部屋を訪れた時、夫人は既に彼を待っていた。

「オヤ、遅れましたか？」

「イエ、私が少し早く来過ぎましたの」

「安心しました。この前の様子では、もうお逢い出来ないものと思っていました」

福井氏は嬉しそうに向い合って、腰を下した。

「そのつもりでしたの。でも、今日は……」

ああ、私、とても面白い奴隷を見付けましたのよ。貴方より年は大分、上ですけれどね。

よく肥えていて、それに背は五尺八寸もあるの。私、旨く彼のM性格を索き出してやったの。始めてでしょう。一寸鞭をあてると、それは大きな声で、ヒイヒイ泣くの。どんなに酷く蹴飛ばしても、柔かい肉で、私の足は少しも痛まないし、踏んずけると、丁度ラバーマットのように凹みますの。それに顔が丸々としていて、鼻が低いから、とても座り心地が宜いんですの。フッフ……」

話を聞いている中に、福井氏は惹きつけられるように、夫人の足許に座っていた。

「では何故、僕を？」

「今に判りますわ。それよりバスを用意して頂戴。流して下さるわね」

バスから出ると悪戯っぽく夫人が言った。

「そうそう。好い物があるのよ」

それは細い金色の鎖だった。両手、両足をそれぞれ四〇センチ位の長さで固定され、中間のリングで二つの鎖を連結すると、福井氏は四つ這いの形になり、手足が自由に動かせるのは二〇センチ程の範囲に限定されてしまった。

「歩いて御覧！」

夫人の命令で歩き出した福井氏は、忽ち手足がもつれて、つんのめり、タイルで鼻柱を

打って、キュツと叫びた。その可笑しな格好に夫人は思わず、大笑いだった。

「鈍いのね」

夫人はこう言い捨てると、バスタオルを纏ったまま、スタスタと居間へ向った。その白い踵に鼻をすりつけるように、福井氏はヨチヨチ追って行った。ソファに腰を下した夫人は、足許に蹠った福井氏の背に足を休めた。

その時、ドアにノックの音がした。福井氏は驚いて飛び上った。こんな所を人に見られては大変だ。だが夫人は、予期したものらしく、立ち上ると、どうぞと言って、逃げようとする福井氏の首を片足で踏みつけた。だがサヤサヤという衣ずれの音で、訪問者が女であると知り、福井氏はホッとした。

「どうぞ、こちらへお掛けになって」

福井氏は首を踏まえられたまま、横目で訪問者を見たが、真白な朱子足袋と、その上にチラリと覗いている奇麗な足首が見えるだけだった。

「ホラ、この通りなんですのよ」

夫人はそう言いながら、足をグリグリ動かした。その女性は未だ一言も、口を利かないけれど、荒い呼吸が聞えるようだった。

「これの性質とか、躰けとかは、先日お話致

しましたわね。男なんて、表面は威張っていますが、私達女性が少し注意をして、訓練しますと、皆、こうなりますわ」

夫人は福井氏の顔に足をかけると、グイと彼女の方に向けた。

「これが今日の目的でしたの。そう、貴方を新らしい御主人にお渡しする事なの。如何？嬉しいでしょう？ サア、新らしい御主人に御挨拶するのよ」

夫人が足を福井氏の腹部に当てて、グルリと蹴返したので、四つ足を空に向けて、仰向きになった。ソツと訪問者の方に目を向けた時、福井氏はそこに能面のような無表情な顔を発見して仰天した。奥さんの顔は、だが少し変っていた。荒い息づかいで、口許が少し開いて、白い歯が覗いていた。目は何かの欲情を押さえているかの如く、ギラギラと輝いていた。大変だ。こんなぶざまな格好を見られるとは。福井氏は必死に身体をよじって四つ這いになると、奥さんに尻を向けて、ヨチヨチ逃げ出した。

「馬鹿ネエ、何所へ、そんな格好で逃げる積りなの」

夫人の声も耳に入らなかった。只、少しでも奥さんから遠く離れたかった。然し、不自

由な身体で二米も行かない内に、夫人の艶やかな両脚が彼の前に立ち塞がった。盲滅法にその脚の間に首を突っこんだ福井氏は、忽ち柔かいその脚で首を締めつけられた。

「奥さん、鎖を解いて下さい、お願いです。妻にこんな姿を見られるなんて堪りません。サア、速く、お願いです」

「何を言っているの。これで貴方は奥さんの奴隷として一生、安心して暮せるのよ。コソコソ、人目を忍んで叔母さんに逢う必要も無くなるのよ。私の親切が判らないの？ サアもう虚勢を張るのは、お止しなさい。奥さんに奴隷の御挨拶をして、お慈悲をお願いした方が宜いわよ」

「厭です！ そんな事は出来ません。そんな事を妻にするなんて……」

激情で、福井氏の声は途切れた。

「そう？ 貴方がそこ迄言うのなら、私にも覚悟がありますわ。犬にも劣る卑屈な奴隷根性を持っている癖に、人並みの顔をしようとする、その見栄を今ここで、一かけらも残らないよう、私が叩き出してあげますわ」

夫人の言葉には怒りと共に、福井氏の無力な反抗を嘲笑する響きがあった。夫人の打ち下す鞭は強かった。福井氏がこれ迄に味った

ことも無い程痛烈で、容赦なく皮膚を裂き、肉を破った。これはもう遊びでは無かった。鞭打ちごっこではなかった。女性と雖も、本気になれば、これ程強烈な力を蔵しているのかと、福井氏は驚いた。

彼は呻き、悲鳴を挙げ始めた。それを喜ぶかのように、夫人の鞭打は益々力強くなって行った。奥さんの前で、死んだって醜態を見せるものかと、決心していた福井氏だったが夫人の宣言通り、そんな決心は粉々になって叩き出されるようだった。喰いしばる口から洩れる悲鳴は次第に高くなって行った。夢中で許しを乞う言葉が洩れたが、夫人は素知らぬ顔で鞭を振るい続けた。

涙を流しながら福井氏はヨチヨチと、奥さんの足許に這い戻った。奥さんがどんな表情で彼を見ているか、そんな事を思う余裕もなかった。あるのはこの苦痛から逃れたいと言う事だけだった。奥さんの白い足袋を目の前に見た福井氏は、神の庇護を求めるかのように、爪先きに唇を押しつけた。一瞬足はピクリと動いたが、奥さんは足を引かなかった。

福井氏の奴隷の祈りを許容したのだ。

「ホホホ……。奥様、その鎖と、この鞭を、プレゼントとして差し上げます。何卒、お幸

わせにね」

夫人は手早く着物をつけると出て行った。部屋には福井氏と奥さんだけが残された。奥さんは、部屋に来てから、未だ一度も口を利いていない。何を考えているのだろうか、福井氏はひどく不安だった。

「貴方、こちらを向いて、私の顔を真直ぐに見て頂戴」

不自由そうに首を廻した福井氏は、撃たれたように目を瞠った。静かな能面の顔が激情に震えている。湿いを帯びて光っている目はヒタと福井氏の顔にすえられていた。

「これが貴方の本当の姿でしたのね。これ迄私の前では虚勢を張っていらしたのね」

口調は厳しく、断ち切るようだった。

「違うよ。これは一寸した遊びの積りだったんだ。俺は……」

温い裾風と奥さんの体臭が、福井氏の吸覚を刺激して、艶やかな白い脛がチラリと見えただかと思うと、奥さんの足は福井氏の顔をグッと踏みつけて、最後迄、言わせなかった。

「弁解はもう沢山ですわ。あの方から、この間、何もかも伺いましたし、先刻は、この目で、よく見せて頂きましたわ」

奥さんは足に力を入れると、グリグリと揺

った。

「貴方はこうされるのが、とても嬉しいんですってね。ホラッ」

奥さんは氏の身体の一部に目を止めた。

「俺は御免だ。女房のお前に、こんな目に会わされるなんて、真平だ」

奥さんの顔に一瞬、凄絶な表情が走った。

「そう？あの女の鞭は好きでも、私の鞭は厭なんですの？いいわ。試してやる」

立ち上ると白い二の腕も露わに、奥さんは鞭に素振りをくれた。やがてピシッ、ピシッと鞭は、既に光刻の痛烈な鞭打で無惨に切り裂かれている皮膚に打ち下された。左程、力がこめられているとは思えなかったが、激痛に忽ち、福井氏は悲鳴をあげた。

「勘弁してくれ。俺が悪かった。詫るよ」

「アラひどく簡単に降参なさいますのね。何だか信じられせんわ」

奥さんは更に鞭を振った。

「助けてくれ。痛い。痛いよ」

福井氏の目から涙が流れた。それを見ると奥さんは声をあげて笑い出した。

「本当に降参したらしいわね」

目を閉じて、フウフウ言っていた福井氏が遠慮勝ち言になった。

「もう鎖を外してくれよ。な」

「駄目ですわ。未だ色々テストがありますの。私にはとても信じられないようなテストですけど、貴方がとても喜ぶんですって。ホホ……。そうよ、始めに奴隷の洗礼だったわ。貴方がどんな顔をして、この洗礼を受けるかと思うと、私、可笑しくって……」

奥さんは、けたたましく笑った。

「サア、行きましょう。バスルームよ」

鞭の福井氏の尻に鳴った。弾かれたようにヨチヨチ歩き出した福井氏の後を、奥さんは笑いながら追って行った。もう能面の面影は完全に消え去っていた。

五の章

辻浦先生は定着を終えたネガを、灯に透かして見て、思わず呻った。

「今度こそ間違い無い。あのモデル達奴。故意にやっているんだ。叛反だ」

先生が鼻息を荒らしくして怒るのも無理はなかった。モデルの耳の辺りが、ブレているのだ。

最初の一枚は、漆黒の髪の一筋一筋迄、鮮明にと覗った先生の期待に反し、黒髪は真白にぬけて、その上周辺部は、墨がにじんだよ

うに、ボケていた。モデルのN子は

「先生、試しにルーペをお使いになって見たら？少し視力が衰えるのではありませんか」と洒々と言った。

「俺は未だ老眼じゃねえよ」

先生は真っ赤になって怒った。二枚目は、笑いを湛えているような、モデルの口許だった。海老責めにされて、笑う奴があるかと、先生は怒鳴ったが、O子は

「先生がその古ぼけたグラフィックスの横から、顔をしかめてシャッターを切られるのを見ると、つい可笑しくなりましたの。先生、リンホフの新型が輸入されたとか広告に出ていましたが、お買い換えになったら？」

と平気な顔だった。

「馬鹿野郎、駈け出しのアマ公じゃあるまいし、今更、露光計の付いたカメラ等、持てるもんかい」

昨今、チョイチョイ、リンホフ購入を考えていた先生は、痛い所をつかれてむくれた。そして三枚目は耳がぶれているのだ。猫ではあるまいし、耳を動かすとは何事だと先生はカンカンだった。

外では二人のモデル達が、何が可笑しいのかクスクス笑い合っている。足音荒く暗室の

扉を開けた先生が

「コラッ！」

と怒鳴ると、タイミングよくN子が、

「アラ、先生、今、ボンのマダムから、女の人を一人紹介したいが、構わないかって、電話がありましたわ」と言った。

「クソッ、ゲイマダム奴！」

と言う先生の口調とは反対に、顔は嬉しうだった。

「いい女だと言ってたかい？」

「白人ですって。ラスベガスから来たんだそうですわ」

「白人だって？ ウーム、よし。直ぐに来てもらうように、電話してくれ」

白人女の責め写真、こいつは素敵だ。クサクサしている時だ。憂さ晴らしに、一つ思い切りいじめてやるぞ。先生は椅子に座ると、煙草をくわえた。もう機嫌は直っていた。そして心の中では、このモデル達も、余り怒鳴りつけて、モデルは厭だなどと言ひ出されては困るからなと考えていた。

やがて、ノックの音と共に現われた白人女を見て、先生はギョッとした。凄いボリュームだ。五尺九寸程もあるだろうか、見上げるような身長だ。ブロンドの髪は美しいが、バ

ストとヒップのふくらみときたら、見ただけで圧倒されそうだった。

握手をした先生の手は、女の柔らかい手の中にスッポリ包みこまれて、親指が少し覗いているだけだった。

「私、イサベラ。変ッタ遊び大好きデス。ボンノマダム、貴方ヲ紹介シテクレマシタ。ステイツデハ、私、沢山沢山ノ男ヲイジメテ遊ビマシタ」

先生はプーッとふくれた。ゲイマダムの野郎、何を血迷ったのだ。こんなマンモス見たいな女にいいめられて堪まるか。

先生は机の上の二、三枚のプリントを取り上げると、イサベラに突きつけ、思いつ切り怒鳴った。

「アイム・ナツオヴザタイプ！」

イサベラは平気な顔で笑った。

「オウケイオウケイ。貴方、私ヲ縛リタイ。ソウデスネ？」

そう言うのと、無難作にコート、スカート、スリッパと脱いで行った。ブラジャーを外すと、圧迫から解放された大きな乳房が、ブルンと勢いよく飛び出した。黒いストッキングと、ハイヒールの姿になると、

「ヘーイ、始メマシヨウ。カモン！」と先生

を呼んだ。

先生は何だか自信を失って来た。こんな巨大な肉体を持った女を見るのは、生れて始めてである。それに、少しは女らしい恥じらいを見せれば又、意欲をそそられるが、ヘーイカモンとは何だ。盟友、夜尾氏から贈られた赤白まんだらビニール紐を取り上げる先生は何か気重そうだった。二人のモデルは、先生のそんな様子を面白そうに見ていた。

漸く、イサベラに近寄ると、先生の顔は丁度、乳房の辺りだった。膝をつかせて、先生の腿より太い腕を後手に縛り、残った紐を胸に廻そうとして先生は驚いた。手が届かないのだ。周章でた先生の顔は真ッ赤になった。見ているモデル達が吹き出した。

苦い顔をして先生は、何とか二回、三回と紐を廻して、グイと締めあげたが、何だか空気の一杯つまったダンブカーのタイヤを縛っているような気がした。先生が一仕事終えて流れる汗を拭っていると、イサベラの笑い声が飛んで来た。

「貴方、縛ルノ下手クソネ」

イサベラが二、三度深呼吸をすると、紅白の紐はだらしなくゆるんだ。憤然とした先生は、この恐るべき巨大な肉体に対して、戦斗

を開始した。それは文字通り、悪戦苦斗だった。女を縛る楽しみなんて物ではなかった。まるで機械工場の発送掛りの仕事をしているようだった。

やっと一仕事を終えて、今度は大丈夫と、煙草を喰わえてライターの火をつけようとすると、又、イサベラの笑い声で、先生は鼻を焼いた。

「見ナサイ、ホラ」

巨大な肉体の筋肉が、実に微妙に動いたかと思うと、再び紐はずり下った。ガツカリした先生は、両手を拡げると、諦めたように椅子に腰を下した。モデル達も啞然として見詰めている。

「私ノ得意ノショウ、言ウノヲ忘レテイマシタ。ダンス、縄拔ケ、ソレカラ鞭ネ。私ノニツクネームハ、フィッピンング・ヴィナス（鞭打ちヴィナス）デシタ」

イサベラは笑いながら立ち上ると、モデル達に言った。

「私ノ縄拔ケ、見セマシタ。次ハ鞭ヲ見セマシヨウネ。サアコノ人、裸カニシナサイ」

小悪魔のような二人のモデルは、もう大喜びだった。

「ネエ、先生、構わないでしょう？」

忽ち先生はパンツ一枚の哀れな格好で立っていた。

「デワ、先ズ始メニ跪キマス。ニール！」

イサベラは命を下すと、鞭で軽く先生の肩を打った。勿論、先生がそんな命令を聞く筈は無かった。

イサベラの鞭は先生の両脚の膝少し上に巻きついて、グッと前に引いたので、思わずガクンと膝を付く、次の瞬間、鞭は首に巻きついて引き下げられる。倒れまいと先生は両手をついた。

モデル達は拍手喝采である。横から見ると丁度跪いた形になる。

「オウ、貴方、トテモ上手ネ」

イサベラは嘲笑するように笑うと、

「コンドウ、踊リマシヨウ」

鞭は先ず先生の左足に巻きついた。倒れまいと先生は右足でピョンピョンはねる。次にその右足に鞭が飛ぶ、今度は左足ではねなければならぬ。イサベラの鞭は実に巧みであった。十分余り、先生は鞭の命ずるままに踊らされると、ヘトヘトになって、その場に踞みこんだ。

「ドウ？面白イデシヨウ」

イサベラとモデル達が笑いあっている間、

先生はボンヤリ考えていた。

どうも近頃は変だ。写真もどうしても巧くあがらないし、パノラマ島は女達に占領されたと言う事だし、今日は又、ヘンな外人女が現われて、逆に俺を玩具にしている。

再びイサベラが近寄って来た。先生はその太股を見てため息をついた。それはもう、先生の思考の範囲を越える巨大な怪物だった。

「アナタ、縛り方教エマス。イイデスネ」
いいも悪いもない。アツと言うまに、俯向

挿絵画家を募る

○本誌の内容にふさわしい挿絵を描いて下さる方を求めます。腕に自信のある方は、どうか奮って自作画をお送り願います。

○用紙は必ず白い画用紙に墨又は黒インクにてお書き下さい。鉛筆画や青インクは製版できませんのでお避け下さい。大きさは御自由ですが、原寸或は二倍、三倍ぐらいが適当です。アミ目やハイライト版は最初は避けて下さい。

○今まで多数の御応募を頂きましたが残念ながら発表に耐えるものが認められませんでした。何卒傑作をお寄せ下さるようお願い致します。

きに引き倒され、巨大な肉体がその上に乗せられた。息も出来ない重さである。

まるで赤子の手をねじるように、先生の手足は縛り上げられた。

「貴方、エビゼメ、好キネ。モデル達、ソウ言イマシタ」

首の上にイサベラの膝が乗せられると、まるで嘘のように先生の顔は足にくっついた。その頭髪を掴むと、イサベラは先生の顔をグイと仰向けた。フラッシュが輝いて、シャッターの音がした。N子だなど先生は、苦しい息の中で考えた。

やっと先生が解放されると、

「私、コノネガモライマス。日本ノスーヴェニアネ」

とイサベラは出て行った。正に風の如く来り、風の如く去る趣きであった。

×××××××

数日後、先生の許へ一通の封書が届いた。イサベラからである。中に巨大なイサベラの肉体に押しひしがれた先生の顔のプリントが同封されていた。腹立たしいのは、ピントが凄くシャープな事だった。

手紙を読んだ先生は頭を抱えて首垂れた。

ミスター・ツジウラ

貴方ニコノプリントヲ、オ送りスル事ヲ喜ビマス。

コレニ依り、私ハ貴方ニ、一ツノ提案ヲシタイト思イマス。ソレハ、コレカラ以後、貴方ハ最早、サディストデハ無く、マゾヒストデアルベキダト言ウ事デス。若シ貴方ガ希望サレルナラバ、私ハ今一度、喜ンデ貴方ヲ訪ズレ、ソレヲ証明シタイト思イマス。

尚、貴方ガコノ提案ヲ、アクセプトシナイ時ハ、コノプリントヲ奇クニ添付シテ広ク配布スル用意ガアル事ヲ、才知ラセシマス。
貴方ノイサベラ

【後記】

その名、天下に周ねき辻浦先生に、御無礼を働きまして、申し訳御座いません。

聞く所に依りますと、最近サディスティン達の国際秘密結社（S-I-S-S）が、結成され、女007、モニカ、ヴィッティも加入したとか言われています。日本にも既に支部が設けられ、その実行計画の一項に、奇ク編集局の乗っ取りが挙げられているそうです。

然し、さすがの日本のサディスティン達も、辻浦先生には歯が立たず、アメリカ本部に応援を求めました次第、悪しからず、御寛容下さい。

創作

或る春闘

山口 広

創作「或る春闘」

年度変りをひかえてこの東神戸にあるY製麻の従業員組合の動きは活発であった。梱包材料に、化学製品の進出がめざましいが、麻袋や麻縄、ロープ類、不況だといわれながらも盛んな輸出入のためにやはり需要は依然として衰えていない。給与がよいといわれているこのY製麻も人手不足の波がおしよせ、五百人に余る女子工員も七割が九州、四国或いは北陸からの出身者である。寮も狭いながらも三年前に新築され、中小企業では模範的とされている。

三月末のある夜、この従業員組合の中央執行委員会が工場の倉庫の片隅を改造した書記

局で開かれていた。パンフレット、アジビラポスターなどが散乱した、この書記局の部屋は十二人の執行委員が揃うと手狭な感じを与える。この温和しい人のどこにあれだけ理論を並べて執拗に喰い下がる斗志があるのかと不思議がられる経理課の係長心得である平井委員長が口をきった。

「まだ、三人ばかり来られていませんが、今日の中執を開会します。特に今日はベースアップの最終的結論を出しますので、その問題は後にまわして、皆が集ってからにするとして、その他の事から先にすませましょう」

静かになった席上を、おだやかな顔で眺めわたした平井の目が山川良子の瞳に止った。

良子は、徳島県の田舎に育った女子工員である。中学を出てすぐに入社して七年になる中堅の女子工員で頭のよさと協調性に富む性格から、同僚の信望も厚く組合の中央執行委員にも二期連続で選ばれている。

「まず、学歴差別の撤廃要求に関して提案者の山川さんの説明を聞きます。山川さん」

平井に指名されて、良子は立った。

「この会社は、他の会社と同じく職階制は極めてきびしく、給与は職階給の形をとっています。この面には今は触れません。しかし職給といいながら、それは学歴を極端に重視しています。先日調査でわかったことです。が、同じ職種にありながら学歴の差で給与が

余りにも不均衡です。例をあげますと、高校卒で事務員に採用された人の給与は短大卒で入社した人に較べて二年分も、更に大学卒に較べると七年分も低いのです。つまり大学卒で入社した人の給与と高卒で入社して七年経った人の給与が大体同じなのです。これは勤労意欲を低下させるものです。しかもおかしいのは入社してからの学歴は考慮されないのです。夜間大学や通信教育によって得た学歴は考慮されないのです。高校を出て、入社後大学を出た人は高卒の扱いしか受けていないのです。会社に尽す貢献度からいっても、とても不合理です。学歴だけ高くても仕事の出来ない人と、たとえ学歴は低くても立派な仕事をする人とはむしろ逆にすべきです。会社は……」

「短大を出ても仕事が出来ないって、私のこと、それとも西村さんの事、どっちなの？」

紺の上っぱりを着てはいるが、派手な化粧をし、マニキュアまでした秘書課勤務の太田英子がかきと、眉をつり上げて叫んだ。

「太田さん、まだ山川さんが発言中です。やめて下さい。それに山川さんは個人の事を話しているではありません。疑問があれば後で発言して下さい」

平井に制されながら、有力なコネで入社し品行に、とかくの噂を撒いている、この我が俤娘は黙らなかつた。

「女工のくせに生意気だわよ。モンペはいてくせに、サラリーが安いのは当り前よ」

良子は英子からモンペとのしられたグレイのストラックスと裾をしぼった上衣の作業服の胸を張って、平井より早く口をきった。

「太田さん、ここでは工員も事務員もありませんわ。組合員として話しているのです」

「女工は女工だわよ」

「何よ、つんつんして。事務員こそ、生意気よ。私たちも人間だわよ」

女子工員の代表たちに口々に攻撃されて、遂にきりつと眉をあげたまま英子は良子をにらんだ。

「おぼえてらっしゃい」

このやりとりを聞いていた小使の相田が英子の方に、にやりと半ばあわれみの微笑を送った。平常の反感も含めて口を開いた。

「お嬢さん、おぼえてるってのは、負けた奴のいうことでせ。ふあっ、はっ、は」

平井の制止を背に、憤然と書記局を出る英子の眼にはくやし涙が一杯たまっていた。

良子は英子が退席したので、気の毒なこと

をしたという軽い後悔と、嫌な人が居なくなつたという安心感をおぼえた。会議は予定に従って夜遅くまでベースアップの要求金額や貫徹の為の戦術が討議された。

その頃、料亭『おく川』の離れに、人事課長、伊場の膝にしなだれかかる英子の姿があった。

「ねーん、もう一杯ちょうだい」

どてらの袖口から手を入れられ、身をくねらせて甘える英子に、

「それで、ベアの最低線はいくらだい。ストに入るつもりはあるのかい」

場ちがいと思える組合の委員に英子を選ばれたのは、我が俤ながら頭の切れる英子を、組合の内情を探る為に送り込もうとした伊場の工作であった。昼間は、会社では全くの他人である様に振舞える英子は伊場にとっては申し分のないスパイであった。

布団に腹ばいになった英子は、良子のことをたずねた。

「課長さん、中執の山川良子って女工、御存知？ 生意気だわ」

「山川良子、ああ製袋工場の。よく出来る娘だよ。来月の移動で班長になるよ」

「ふーん、班長にね。生意気だわ。あんなの駄目よ、発令は取消せないの」

「次長の推薦だからな。頭もよいし、ふふ君と同じ位かな。学歴の低いのが惜しいよ」

フィルターのついたピースをふかしながら急に黙り込んだ英子に、伊場の質問が始められた。嫉妬と憤怒の気持が渦まいてゐる英子に今夜の執行委員会の様子が聞かれた。半ば上の空で答える英子に、起き直って苦り切った顔を見せる伊場が強い口調でなじった。

「駄目じゃないか、君。来週は団交だよ。

べ・アの要求額がわからなくちゃ話にならないよ。そんな時に退席するなんて、君はどうかしてるよ。ちゃんと聞いてくる様にあればどいておいたのに」

「いいわよ、課長さん。月曜の部課長会議までにわかればよいんですよ。私が聞き出すわよ。良子の奴、生意気だわ」

半ば自分にいい聞かせる様につぶやいて、煙をぽつと吐き出した。

それから二日経った金曜の朝、会社から五百米ばかり離れている寮から作業衣姿の女子工員が三々五々つれ立って長い列を作って正門へ注ぎ込んでいる。グレイの裾の短いジャ

ケットの様な上衣とスラックスの女子工員にまじって、背広姿の男子社員や、色とりどりの女子事務員の華やかな姿も門に吸い込まれる。良子は門の近くで後から追い越したタクシーから降りる英子を、ま近に見た。いつもは女子工員を全く無視している英子が思いがけなく話しかけて来たので良子は却ってどきまぎとなった。

「おはよう。山川さん、よい日だね」

友達と話していた良子は驚いた。

「おはようございます。はい、よいお天気ですわね」

二日前のやりとりと打って変わった英子の愛想に思わず立止った。英子の含み笑いも気にする余裕がなかった。

一日の仕事を終えた良子は寮の三階の東隅にある自分の部屋で、サッパリしたワンピースに着換えて、スモッグにかすみながらたそがれてゆく景色をぼんやりと眺めていた。来週の会社との団体交渉を考えていた。要求を通すために斗わなければ……。

「山川さん。電話よー。山川さん」

寮母のしゃがれ声が響いた。

「はい」

めったにない電話に何か胸がさわいだ。

「もしもし、もしもし、山川ですが……」

「立田さんが、その三丁目の交差点で車にはねられたの、大したことはないけれど貴女を呼んでいるの、すぐ来てよ。すぐよ」

「えっ、桃ちゃんが、もしもし」

ガチャンと切られた電話の女の声は、少しくぐもっていたが聞いたことがある感じであった。思い出すには短い、そして余りにも驚かされる内容であったので、名前もいわない相手に不審を抱かずに、サンダルをつっかけて三百米ばかり離れた三丁目の交差点に小走りで急いだ。二つ目の曲角の手前に一台の白っぽい車が止っていたが、平素は駐車している車などめったにない道であるが良子には目に止らなかつた。角を曲った時、もう一台の車の傍で若い、黒っぽい服装の男にぶつかりそうになって、良子は横をすり抜けようとした。右腕をつかまれた。

「山川さんだね。来てもらおうじゃねえか」

若い男の右手にパチンとナイフの刃が飛出した。その閃きに一瞬声を立てられなくなり立ちすくむ良子の体は、静かにエンジンをかけたまま停車していた車に押込まれた。一声鋭くクラクションを鳴らした車は、乱暴に急

発進をした。三丁目の交差点を走り過ぎたのでわれにかえた良子は叫んだ。

「降して、お友達が大変なのよ、降して」

「うるせい。俺達のいうことを黙ってきくん。聞けなきゃ、きれいな顔が傷だらけになるんだぜ」

「私をどうするの、本当よ。お友達が怪我をしたのよ。降してよ」

「おお、サブちゃん。括ってしまいなよ。暴れさせると、あとがうるさいぜ」

運転している若い男が前を向いたまま左手で麻縄の束を後席に抛った。狭い後席で右手を逆にねじ上げられ、横を向いてドアにもたれた左手も背に合わされる。黒い縄がまといつく。

「わめかれると、うるさいでな」

口に巾広の絆創膏を念入りに貼りつけられると、それまで余りの怖ろしさに助けを呼ぶことを忘れていた良子は、急に身をよじって何事かを叫び出した。

しかし口をふさがれてしまったのは「むむむ」と呻き声だけしか出なかった。頭を抱えられ眼にも同じように絆創膏がはりつけられ、視力がうばわれると、もう呻きも上げる気になれなかった。眼に絆創膏をはりつけられる前

に見上げた男の顔に見おぼえはなかった。こんな目に合う理由がわからなかった。車が何度か曲ると、もうどこを走っているか、長い時間か、ほんのしばらくかも、見当がつかない。

ブレーキがかけられ、前にのめる体をサブちゃんと呼ばれた男に支えられる。狭い座席では、そして自由をうばわれた体ではサブの手を逃がれる事はできない。遂に車がキキキとタイヤをききませて止った。車から引出され、両側から男たちに支えられて砂利道を歩かされる。ドアが開かれた。

「さあ、サンダルを脱ぎな」

はばしになって上げられた部屋には厚い絨氈がひかれていた。

「はい、ここまでだ」

背をぼんと押され、ソファの上に倒れた。

「はい、お二人とも、ごくろうさん。これお礼よ」

良子たちの後から歩いて来た女がドアの外で、どこか聞きおぼえのある声でサブたちに話しかけた。

「へい、お嬢さん。誰か知らんけど、こんなに面白い仕事をして金が貰えるんなら、いつでもやるぜ。俺達あ、大抵あそこにいるから

な。よう、行こうぜ」

部屋に入った女は良子を見無視してダブルベッドのサイドテーブルの電話に手を伸した。「八七の六五四三につないで」

その声、良子は女の声にはじめは気を許して呻きを上げた。呻きながら視力を奪われながらもこちらを向いて見上げる良子を見て微笑を浮べる女は電話を待った。

「もしもし、健二さんと呼んで、英子よ」

英子、太田英子だ。二日前の中執会議の口論、恨めしそうに自分をにらんで退席した英子の目を想い出して、立上って二三步、歩き出して椅子につまづいて倒れ、もがく良子を見降しながら電話は続く。

「英子よ、面白いことが始まるからすぐ来てよ。いつもの所、離れがとってあるの。あれを忘れないでね。早く来てよ。待ってるわ」

自分のいいたいことだけを話して、半ば命令的に受話器をかけた英子は、やっと横坐りに体を立て直した良子の前に立った。花模様のワンピース姿の良子は後手に縛られ、胸に二巻麻縄をまわされ、口と目に絆創膏を貼られて呻いている。

「山川さん、私よ。この前はよくも皆の前で



恥をかかせてくれたわね。今日はお返しよ。
ふん。女工のくせに威張っているあなたの泣
声が聞きたいのよ。ほほほほ」

立上ろうと、体を前に傾けた良子の頭に英
子の手が伸びた。髪をつかまれて前に引倒さ
れ、ばたばたと、もがく脚に英子が飛びかか
る。足首を新しい麻縄が縛った。膝を後に折
られ足首が手首につながれて結ばれると、も
う寝返りもうてない。

「山川さん、良子だったわね。ここはホテル
の離れだから、大きな声を出しても聞えない
のよ。聞えても来る様な人は居ないわよ。健
二さんが来たら遊んであげるわ。そうして待
っておいで」

テレビのスイッチが入れられた。
歌謡ショーらしい。もったりと貼り
つけられた絆創膏は、うつむけにな
った顔を絨氈にこすりつけてもはが
れる様子はなかった。微笑を浮べな
がら、もがく良子の様子を見ていた
英子は、良子の折り曲げられた足を
引っぱって、ソファの後に引きずっ
た。ワンピースの裾がまくれ上り太
腿が絨氈にこすれた。

ドアをノックして、女中に案内さ
れて健二と呼ばれる青年が入って来た。腕と
胸の真中に太い赤の横縞の入ったグレイの毛
糸のセーターを着た二十を過ぎたばかりの学
生風の青年である。大きなギャゼットバッグ
を肩にかけ、手には五百ワットの照明ランプ
をぶら下げたまま話しかけた。
「英子さん、どうしたんですか。ここならこ
んなもの、いらないでしょう」

「健二さん、待たせたわね。これ見てよ。う
ちの女工なの。私に恥をかかせたから、面白
いことをして遊んでやるのよ」

「英子さん、あなたが一人です」
「ううん、M、ほらジャズ喫茶の、あそこで
見つけた男の子にやらせたの。私の名も知ら

ない不良よ」

「でも英子さん、この人が訴えたりすると大
変ですよ」

「だからよ。あなたに写真を撮ってもらいた
いの。恥しい恰好をさせて写真に撮っておけ
ば泣寝入りするわよ。ついでに泣声もテーブ
にとるのよ」

「英子さんって、こわい人ですね」

「ふっふっふ。そうよ。私に恥をかかせたり
すると大変よ。貴方だってそうよ。さあ用意
してよ」

二人の会話の様子では、英子が完全に主導
権を握っているらしい。英子のむごい計画を
聞かされ、良子は手足を縛る縄が解けるとは
思わなかったが身をもだえて大声で叫んだ。
だが叫びは口を覆う絆創膏に殺され、背中の
手を結んだり開いたりするだけであった。

「健二さん、裸にさせてよ。私も手伝うわ」

良子は足首を、背の手首に締め上げた縄を
解かれ、自由になった足を無意識にばたつか
せた。英子は健二に命じた。

「健二さん、まずこの恰好を撮っというよ。
そうよ、下からよ。——待って、脱がせてし
まうから」

もうすっかりまくれ上がったワンピースの

裾をはだけておどる良子の足に、英子は飛びついた。白い腹に喰いこむパンティのゴムに手をかけて下に引っばる英子の手を拒むように良子の脚は堅くしめられた。苛立った英子はパンティから手を離れた。

「健二さん、何か棒はない。どうしても脱がしちゃうわ」

洋服ダンスから衣紋竿が持出された。英子の声に、棒で叩かれるのかと体を固くする良子の足首が、健二の両手でせい一杯大きく開かれて、思わず腰を浮かせて痛みに呻いた。

英子は衣紋竿を良子の膝の裏にあてて麻縄で縛りつけた。良子はもう寝返りもうてない。

「健二さん、鉄か、剃刀はないかしら。早く探してよ」

「一寸待って下さいね。バスルームにあるかも知れませんか」

良子は——いやよ、太田さん、縄をほどいてよ——といったつもりであった。しかし自分にも、もちろん英子にも呻きとしか聞こえなかった。

「ふっふっふ。動くと、お尻が切れちゃうわよ」

英子の手で軽便剃刀があった。良子は呻きながら肌に冷気を感じた。次の瞬間、むき出

しになった下半身にスポットライトの熱い光をうけて悶えた。シャッターの落ちる小さい音を聞いた。

「健二さん、フィルムは新しいのにしてくれた？ DP屋に出せない様なのを撮るんだから、貴方が現像するのよ」

「大丈夫ですよ。見事なのを仕上げますよ」

「今度は上も脱がせるの。暴れたら全部破っちゃうわよ。裸で帰ったかったら、暴れてもいいわよ。さあ、暴れなさいよ」

脚を閉じられないそのままの姿で、体を仰向けに転がされた良子の体は後手に縛られたまま、足を開いて前に投げ出して坐った形に支えられてしまう。健二が前にまわって両腕をしっかり押える。後にまわった英子が後手を縛る縄を解いた。背のファスナーが引下げられる。上に引上げられた手からワンピースが手荒に抜取られた。どこかがびりりと破れた音がした。手を自由にする隙はなかった。

「服さえあれば、こんなものは着なくってもよいのよ、ねえ、山川さん」

言葉でもいたぶりながら、英子の手はブラジャーとシューミーズのストラップを切った。

鋭利な剃刀で音もなく切りとられた下着が肌を離れた。

「山川さん。ブラジャーは、これで、いいのよ。ほほほほ」

再び手を背に高くねじ上げられ、乳房の下に強く麻縄がまわされ以前にまして強く縛られた良子の体に、ライトが前から、後からあてられた。

「ライトって熱いわね、私も脱いじゃうわ」

衣ずれの音が続いた。

「駄目よ、健二さん。私を写さなくても、いいのよ」

幾分甘ったれた声が響く。良子は後手に縛り上げられた体を悶えた。後手は弛むどころか一層ひしひしと体をしめつける。

「さあ、顔を撮ってやって」

英子が良子の目を覆う絆創膏にかかった。

眉とまつ毛が数本一緒に引きはがされ、痛みが痛んで開くことが出来なかった。ライトからそむけた顔を押えて、口に貼られた絆創膏がはがされ、言葉を回復した良子は、

「太田さん、止めて。早く早くほめてよ。」

私は、何も貴女のことをいったんじゃありません。やめて下さい」

「何よ。女工のくせに生意気だわ。来月は班長になると思っていばって行くくせに」

「班長に？ 私何も知りませんわ。早くほど下さい」

足を大きく開いて投げ出した形で坐っている良子の目に、やっと英子と健二の姿が入った。ピンクのレースをあしらった対になった派手なブラジャーとパンティだけを身につけた英子の伸び伸びとした姿と、ライトを操り、カメラを構えたスポーティな服装の健二は、いかにも上流の有閑ボーイといった風体であった。

「生意気な女工よ。これ。組合の中執なんて威張ってるの」

声と共に縄にせかれて大きくあえぐ乳房がぎゅっと英子の手で責められる。パールピンクのマニキュアをした爪がぶっくりした乳房に喰い込む。

「むー。ああ。許して。あー」

「許してなんてことは、もっと前にいうことよ。これはどう」

「あっ、あー」

英子の手が大きくあえぐ乳房の真中で上を向いているピンクの乳首をひねった。良子はあまりのショックに後へ倒れた。

「良い声が出るわね。その声を録音してあげるわよ。健二さんレコーダーを入れてよ」

「こんなことはやめてよ。太田さん。私は何もしてないわよ。早くほどいてよ」

「さあ、もう一度叫ぶのよ。ほら」

「あっ、あーっ」

「英子さん。うまく入ってますよ」

「健二さん。貴方も脱ぎなさいよ。一杯やってからにしたら」

冷蔵庫からビールとつまみのピーナッツを取出した英子はテーブルの上に並べた。

「僕は、これの方が良いですよ」

「どれ？ ああそれは喰べないで。面白ことをするんだから、残しといて。ウインナの方にしてよ」

後手に縛られて足をあられもなく拡げられた体に羞恥を感じ真赤に染った良子を見ながら、二人はビールを注ぎあった。

「この娘、よい体してますね。きれいな肌で、胸も腰も一人前ですよ」

「生意気いわないでよ。健二さん。そんなにこの娘が気に入った？ ふふふ」

良子と英子の体はいずれも美しかった。背丈は英子の方が少し高いか。しかし縛られているせいもあるが良子の乳房の豊かさは英子より勝っている。二本のビールが空になった「さあ始めましょうよ。まず、あやまらせる

のよ」

ビールの軽い酔いに、ほんのりと染った肌の英子があられもなく足を開いて仰向けに縛られて横たわる良の傍にどっかりと、あぐらをかいて坐った。

「山川さん、良子、この前の中執でいったわね。短大を出ても仕事の出来ない人があるって。それ誰のこと。私のこと？ それとも西村さん？——え、どっちなの」

「むむ、あっ。やめてよ。誰って個人のことをいったのではないわよ。たとえばっていったでしょう。あああ」

乳房に真赤にマニキュアをした英子の爪が立てられ、苦痛にゆがむ顔や体のうねりが刻明にレンズに捉えられる。

「たとえば、どうなのよ。西村さんがお仕事が出来ないの？」

「あっ、あー。いい痛い。西村さんは、いーよく出来るっていわれてるわ。あー」

「それじゃ、私のことじゃないの。女工のくせに生意気よ」

「太田さん、もうやめて下さい。ああーやめて」

「私のどこが悪いのよ。ちゃんと、人並みに仕事をしてるわよ。遊んでなんか、いないわ



よ」

「こんなひどいこと、やめてよ」

「まだまだ。もっと聞きたいことがあるわ。」

「私に謝るのよ。失礼なことをいったって」

「いやだわ。ほんとのことだもの。誰だって
いってるわよ。太田さんは会社遊びに来て
るって。あつ、むーっ」

乳房をつかん

だ両手に力を入

れ、眼尻をつり

上げて立った英

子は、新しいビ

ールを抜いた。

良子の乳房に英

子の爪あとが、

くっきりと浮か

び上る。

英子は良子の

頭の上に坐る

と、太く、白く

むっちりとした

腿で良子の顔を

挟みつけた。

「ふふふ、私

の仕事ぶりを、

たっぷり味あわせてあげるわよ」

鼻を真赤な爪がつまみ上げる。

「あ、あーっ」無理に開かせられた口にビ

ール壘が逆さに突っ立てられた。頭を振ること

もできず、ごぼごぼに注ぎ込まれたビールが

咽喉を通る。口から溢れたビールが白い泡を

立てながら頬に、胸に流れる。むせかえる度

に鼻からも逆流して涙のように流れる。かな

りの量が良子の胃に流しこまれた。

「健二さん。もう一本とってよ」

今度は口を開くまいと頑張る良子の顔は鼻

をつままれて、真赤になった。

「ふふふ。健二さん。見てよ。こんなに頑

張ってるわよ。いやなの。口をあけないの。

それじゃ、こうするわ」

鼻をつまむ手を離され、大きく息をつく顔

の上にいきなり壘が逆さにされた。顔中にビ

ールをあびて

「むっ、わあー」

開いた口に壘が、又しても差込まれてしま

う。顔を濡らしてビールを無理やりにラッパ

のみさせられる良子の姿が何枚も撮られた。

三本目が用意された。もう縛られた身のあら

がうことの空しさを覚って、良子は涙を流し

ながら英子のなすままにまかせた。

なじみのないビールの酔いが急速にまわっ

て来た。背中に敷かれた後手の痛みも次第に

やわらいでくる。顔から首筋から胸までもほ

んのりとほてってくる。羞恥と酔で紅潮した

肌は美しく輝く。ビールに濡れた肌も内から

の酔いで冷たさを感じない。目もとも紅に染

まり、うっとりした表情になってくる。

「ふっふっ……。どう、おいしかったでし

よ。まあそうして放っておくわ。今にもっと

面白いことをして遊んであげるわね。健二さ

ん、もっと飲まない？」

英子はビールで時間をつぶしながら何事か

を興味深く待っていた。かけっぱなしのテレ

ビを見ている者はなかった。いつか番組はド

ラマに変わっていた。英子は決して黙って飲ん

ではないなかった。言葉は流暢に口から出る。

「あら、良子さん、あなたは弱いね。もう

真赤になってるわね。私が月給泥棒だって。

そうじゃないことを見せてあげるわよ。ふっ

ふっふ。健二さん、良子を、どうしたら面白

いかしら」

良子は次第に内からいじめられはじめた。

縛られた不自由な体をくねらせながら、次第

につのってくる尿意をこらえようと歯をくい

しる良子の動きに英子の眼は輝いた。

「さあ始めるわよ。どういい気持ちでしょ」

「太田さん、ひどいことしないで、早くほ
どいてよ」

「ほどこいてほしいの？　そして、何がしたい
のはっきりいってごらんよ」

英子の手が意地悪く腹部に伸びる。

「む、むー、あ、あー許して。いー、お、お
トイレに行かせて、お願い」

「そんなにしたいの。させてあげようか。ふ
ふふ。健二さん、そっちを持ってよ。バス
ルームに運ぶのよ」

羞恥と酔いで紅潮した良子の体は、両足を
英子に持たれ、後手に縛られた両脇に健二の
手が差込まれて浴室に運ばれた。

「さあここなら大丈夫よ。きれいに流してあ
げるわ。さあ、早くするのよ」

尻に背に、後手に冷たいタイルの感触を感じ
て、ついつてくる尿意に呻く良子は、そんな
形では、とても出来なかった。

「どうしたの。早くしてごらん。健二さん、
狙っててね」

顔の傍に置かれたマイクを避けるように横
を向きながら良子は哀願した。

「おおお願い。ほほほどこいて。あ、あっちへ
行って。そそそそんな……。ううっ」

呻き、あえぐ良子の体を、英子の手がいた
ぶる。

「まだなの。ここを押したら。どう？　こっ
ちをくすぐったら出るかしら。これは？」

良子の呻きと哀願をおさめて、レコーダー
は無心にまわっている。英子のあくどい強制
で遂に良子の忍耐の限界がきた。体中に吹き
出す汗と脂とまみれて高いしかし弱々しい悲
鳴が上った。

「良子さん。すごいわよ。沢山出すわね。ほ
ほほ……」

消え入りたような羞恥に唇をゆがめて鳴
咽をはじめた良子は、その鳴咽すら続けられ
なかった。縛られたままの良子の体は浴槽の
中に運ばれた。英子は良子の髪をつかんで
いきなり頭まで湯の中に浸した。

「良子さん。どうだった。まだこれからよ、
面白いことは……。私に恥をかかして悪かつ
たと思っている？　さあ、あやまんないさ
よ。もう私の事を悪くいわないって。それと
も、もっとお湯が呑みたいの」

良子はもうこの恥かしめ、この苦しみを逃
れることしか考えなかった。もういうなりに
なって、一秒でも早く解放されることを願っ
た。

「太田さん。悪かったと思います。もう貴女
の事を悪くいったり恥をかかせたりしません
から、どうぞ許して下さい。は、早くほどこ
いて下さい」

「ふん。やっぱり、あなたの方が悪かったで
しょ。これからは私のいうことは何でもきけ
るかしら」

「は、はい。何でもききますから、……。早く
ほどこして下さい」

「その前に聞くことがあるのよ。この前の中
執で、私のことを悪くいわなかった？　誰が
悪口をいっていたか聞かせてよ」

「……」

目を伏せる良子の乳首を英子のマニキュア
をした爪がつまんだ。

「あっ。あー。い、いたい。むー」

「誰がいったの。誰なの」

「い、い、あっ、離して。木村さんとお、

岡本さんです。でも、でも」

「でも、何なのよ」

「でも、他の話が直ぐ始まったので、それ以
上何も出ませんでした」

「そう。それは何のお話？」

「ベースアップです」

「アップは、どうするの？」

英子の聞きたいのはこれであった。操った
り、抓ったり、良子の辱しさを狙った手は休
みなく動いた。その間にもベースアップ要求
の金額や組合のとりと戦術をくわしく尋ねた。

良子は英子が何故、そんなにしつこく聞く
のかわらなかった。

「モンペはいた女工のくせに、えらそうな口
ばかりきくから、こんな事になるのよ。班長
さん、わかって」

「良子さん、え、女工の班長さん。これ読め
る？ 読んでごらん」

ボールペンを走らせたメモ用紙を目の前に
つきつけられ良子はためらった。

「読めないの。こんなのが。さあ、どう？」

「イ、イッチ、リーブ・イレブ、デイチ」

「ほほほ、こんなの読めないの。ドイツ語
は読めないのね。それじゃこれは？」

「……」

「英語よ。英語も知らないの？」

「アイ、ラブ、ユー」

「そうよ。上手だわ。意味わかるでしょ。ふ
ふふ、もう一度大きな声を出して」

「アイ、ラブ、ユー」

「そうよ。そうして口にしたら、どういうこ
とになるか知ってて？ 教えてあげるわ。ふ
ふふ」

英子の考えることに想像もつかない良子に
背を向けて、英子は冷蔵庫のドアを開けた。

「健二さん、これを使うのよ」

良子は、英子の考えを知ると、大きく目を

見開いて高い叫びをあげた。

「いやっ。いやよ。止めてえ
助けて——」

逃れるすべは、なかった。

声も立てられないで悶える
良子の顔を、健二のカメラが
クローズアップで捉える。

「あーっ。こんなこと。止め
て」

「何よ。班長さん。止めてな

んて口がきけるの？ ほれ、こうしたら、ど
う？」

英子の手が伸びる。

「あ、あーっ。あ、むう。ひーっ」

「英子さん、もうフィルムが終りですよ。
あと三枚しか残ってませんよ」

二本のフィルムに責められ、呻き、許しを

乞う良子のあられもない姿が撮られてしまっ
た。その声に改めて良子は屈辱を感じた。英
子は少しがっかりした様子を見せたが、新し
い責めを考えついた。

「健二さん、この女を犬にしてやるから、上
手に撮ってね。さあ良子、犬になって三遍ま
わって、ワンっていうの」

長い間、体を締めつけていた縄をやっと解
かれたが、湯に濡れ、汗と脂のしみ込んだ麻
縄は、きつく締っていたので腕がしびれて自
由に動かせなかった。

「さあ、四つん這いになって部屋を三遍まわ
るのよ。落したりしたらまたやらせるわよ。
さあ」

衣紋竿で尻を叩かれながら部屋を這いはじ
めた良子の目から涙が溢れ、嗚咽が洩れた。

「健二さん、早く撮って。ほら、白い牝犬み



たいよ——。待って、牝犬なら、尻尾が要るわ。もう一度、押えつけてよ」

英子の声に立上ってドアの方へ逃れかけた良子は後から体を把まれ、足を払われると、どうと床に倒れた。良子の哀願を楽しみながら英子は忙しく働いた。

「もう離してやってよ。この尻尾、いかすわよ。ほほ……」

笑いこけながら、衣紋竿で追い立てる英子は、勝ちほこった女王の気持を味わった。

「ワンって、いってごらん」

健二のカメラが狙い続ける。

「ワ、ワン」

「小さいわよ。もっと大きく吠えて」

「ワ、ワン……。もう許して、太田さん。もう許して」

床につつ伏して泣き出す良子に、冷やかに英子は止めをさすようにいった。

「牝犬の女工さん。これから私のいうことは何でも聞けるわね。聞けなきゃ、お前の恥しい写真をばらまくからね。もう会社にもおれなくなるわよ。ふふふ」

「英子さん、これでフィルムも終わりですよ」「そう。自分でやってね。DP屋になんて出せないものね。ほほほ」

チンピラの不良に車に押し込まれたあの町かどで、良子は縛られた縄をとかれて、英子の車から放り出された。下着は着ようにも、びりびりに破り裂かれてしまっていた。素肌にところどころほころびたワンピースをまとって転がった良子は、すわり込んで眼と口を覆っていた幅広い絆創膏をはがして、きつと眼をすえて遠ざかってゆく英子の車のテールランプをにらみつけた。

深夜の街は人通りもなく街灯だけが春霞にかすんでいた。

翌日の土曜も良子は寮の部屋に閉じこもって、工場を休んだ。同室の桃子は、軽い風邪位にしかなかった。

人事課長の伊場は英子からの情報をもとにして、月曜の部課長会議を待たずに対策を練り始めた。手始めに経理課長を通じて、組合委員長である平井に、ベースアップの団体交渉のある水曜の午前中まで、東京の出張所への出張を命じた。部課長会議の相談が洩れても、委員長を欠く組合には早急な対策がうちにくい。今年こそは、組合に圧倒的に勝ちたい。そして部長への道を確保したい。委員長を出張させるだけでも足らずに、すべての執

行委員の動静を調べさせた。製袋工場からの欠勤者名票の中に山川良子の名を見つけて、にやりと含み笑いをもらした。英子の電話によると恥しい姿にされて、散々に辱しめられた良子の写真が月曜か火曜に見られるのとこのことである。

良子は英子に辱しめられた口惜しさと、耐えられないはずかしさと、更に写真にまで撮られてしまった怒りと共に、これからどうしたらよいか判断できなくなった。みんな出勤してしまった静かな寮の中で何度も頬を涙で濡らした。

水曜の団交は、会社側の回答は極めて少なかった。組合が要求した四千七百円の賃上げに対して、会社が提示した額は僅か千二百円プラスアルファであった。組合の譲歩予定の三千五百円の額を知り、而もストは極力回避したいという中執の意向を知ったの回答であった。胸を張った英子の眼をさけて、眼を伏せて一番はしの椅子に小さくなっている良子の姿を見て、一瞬不審の感じは持ったが、平井委員長は交渉を有利に進めようと、経営者におつつかって行った。

伊場は英子と、良子の辱しめられた様子を

写したあの写真と、悲鳴や泣声を収めたテープを楽しみながら、異常な刺激に一層燃え立った昨夜の逢瀬を想い出した。

縄にせかれて、突き出した豊かな乳房、後手に縛り上げられて、空しく背中中にぎりしめた手、衣紋竿にせかれて大きく開けられたむちりした太腿、涙を流しながら大きく崩れる顔、それらが清潔な作業服をまとって末席に目を伏せて坐っている良子の姿にだぶってくる。策士と云われる伊場は、どの会議でも決して多くは語らなかった。しかし陰では精力的に策動するので、誰もが伊場の考えていることを察することが出来なかった。今日の会議でも特に沈黙をまもっていた。策動よりも英子に責められている良子の様子が喉にちらついて、組合に対する反感さえも感じていなかった。

団体交渉が双方とも妥協点に近づけないで終わったのは九時に近かった。組合も会社も今日だけの団交で解決するとは思っていなかった。たので次回を約して話し合いは打切られた。

二日後の夜、英子は伊場とはなじみの料亭『おく川』の離れで、昨夜開かれた組合の中執で練られた戦術をぶちまけていた。

「課長さん。昨夜はこれだけよ。ストにも入れそうにないわ。でも委員長は粘りがあるわよ。大人しいけど芯は強いわよ。課長さんより逞ましい感じよ。ふふふ」

「いやなことを云うなよ。その笑い方は気になるよ」

「ふふふ、課長さん、気になって。大丈夫よ。私は大学出でなきゃ相手にしませんわ」

「それで、あの娘はどうした？」

「あの子？良子ね。大人しくなったわよ。何にも云わないの。ほほほ。私に見られたら眼を伏せちゃうんですもの。ほほほほほ」

「君は可愛いお嬢さんだね。——あの写真持つてるかい。もう一度見たいもんだな」

「伴奏入りがいいのね。待ってよ」

床の間にある電話ににじり寄った英子は受話器を取った。

「もしもし、ささなみだけど、テープレコーダー持って来てよ。今すぐよ」

テープをかけてから英子は伊場に抱かれながらバッグの中から写真を取り出した。

豊かな乳房を伊場にまかせながら一枚ずつ写真が取出された。

「はは、あーっ。見ないでーっ」

テープから、良子の泣くような悲鳴が流れ

る。

「見ないでなんて云ったって、ほら、こんなに出たのよ。ふふふ」

「山川って娘、きれいな肌だな。英子、君もこんなにしたいな」

「いやよ。課長さん。冗談はやめてよ」

「冗談？ いやそうじゃない。こうしたら、どうだい」

「いや!! 私はいやよ。あつ。あー」

激情にかられた伊場の手は英子の手を逆に握って背へねじ上げた。熱れきった体をもたえる英子の動きを充分に味わった伊場は、新しい思いつきが湧いたので、膝の上で悶える英子の頬に軽く唇をよせてささやいた。

「風呂にしようよ。おいで」

まだテープは、まわっている。

——は、早く、ほどこいてよ。ああ、あつ、いや、いやよ。そんな、そんなこと。ああ——

先に上った伊場より一足おくれて浴室を出た英子は髪にタオルを巻いたまま鏡の前に立った。張り切ったバスト、体を動かす度にわたわと揺れる乳房、きゅっとくびれたウエスト、それに続く豊かな、逞ましいとも云えるヒップ、腕をあげてポーズをとった英子の体はトルソーのように均勢がとれていた。自

分の体に見とれていた英子は鏡の中に伊場を見つけて甘ったれた軽い叫びをあげた。

「いやよーん。課長さん。今行きますわよ」

伊場と英子が『おく川』でもつれ合っている頃、良子は寮の部屋で長い手紙を書いていた。平井委員長、そして郷里の母にあてた訣別の挨拶であった。同室の桃子が映画でも見に出たのか、一人になれた静けさの中で頬に涙しながらペンを走らせていた。

英子の内通によって、組合の斗争計画はすべて会社側に事前に手をうたれ、或は高圧的に、或は懐柔策にかかって、総力を結集することが出来なくなった。最後の手段であるストを決意した平井の指導も英子をはじめとする伊場にひそかに説得された中執の数人のためにぶちこわされてしまった。遂に会社側の最初の提示額に近い千八百円プラスアルファという低い額で妥結せねばならなかった組合は、全くの完敗であった。この間約二週間、成果は上げられなかったが、平井委員長の精力的な、誠実な活動が特に目立った。しかし会社側にとっては伊場の表面に表れない組合の先手をおさえた策動と、その情報源となつた英子の陰での活動が最も効果的であった。

平井には、この二年間、自分と共に活潑に

活動してきた良子が、今度の団交に入ってから少しも動かず、発言すらしなことが不満であり、不審の念すら持った。

土曜の夜に春斗の反省会を開くという通知に、良子は思いつめた表情で平井の居る経理課に急いだ。今まで何一つ発言しなかった良子の思いつめた表情と、何事かを訴える懸命の願いが聞き入れられ、急に日曜の朝に繰延べると通達が変更された。

すがすがしい晩春の朝であった。いつもの会合が夜であるので、今日の反省会は違った感じで、いつになくきばきと議題が消化されていった。良子は始めから無言であった。

中執幹部の情勢判断や経過報告を噛みしめるように聞き入っていた。そのうち以前からもやもやと疑惑を感じていたことが一皮ずつはぐれてゆくようであった。もう自分の用事は終わったのだと生あくびを噛み殺しながら坐っている英子を見て微妙な点に気がついた。

もう一度最初からの経過をたどって見るとどうしても、今迄の中執の会合の内容は、すべてが会社側につつ抜けであったとしか考えられない。これは委員長の指摘する通りである。委員長ははっきりと云わなかったが、そ

れどころかみんな自分の不手際であったと他人を傷つけるような言葉は出さなかった。

「これで反省会を閉じようと思います。他に何か? はい、山川さん」

「私も今年の斗争は、完全に負けたと思っています。委員長ははっきりとは云われませんが、負けた原因は色々あるでしょうが」ここで言葉を切って、一瞬英子に視線を投げてから、唇をふるわせて続けた。頬が紅潮してきたのは興奮と先日英子に死ぬほどの辱しめを受けた記憶が浮び上って来たからであった。

「この中にか、親しい人の中に、この話し合いの様子を会社におちまけていた人が居たとしか考えられません。つまりスパイです。その人は、今こそ全組合員の為に深く反省すべきだと思います」

流石に英子の名を口にするにはできなかったが、着席した良子は今迄の胸のもやもやがすーっと消えた感じで平井に目を注いだ。急に白けたものが部屋全体に流れた。伊場の分裂策動に乗った者は急に目を伏せたり、視線をあらぬ方にそらせた。互いに猜疑の眼で見合った視線がやがて英子に集中した。

あわてた英子は、立ちもしないでしゃべり

だした。

「私、何もしてないわよ。私だって一生懸命やっただよ。何も証拠はないわ」

にやりと笑った相田が口をきった。

「ふっふっ……、語るに落ちるとは、このことだね。お嬢さん。わっはっははは」

「云ったわね。おぼえてらっしゃい」

にらみつける英子の視線を感じ、思わず目が膝に落ちてしまう良子であった。

平井の巧みなとりなしと指導で、それ以上の波乱もなく反省会は終わった。

昼食もあじけなく終わったので執行委員たちは二三人ずつ門を出て帰途についた。良子はわざと皆から遅れて事務所の便所に入った。英子の視線をことさらに引く動作であった。

便所から出た良子を英子が秘書課のドアから呼びとめた。

「良子!! ちょっと。よくも云ったわね。どうなっても、いつつもり?」

もう良子は目を伏せなかった。秘書課の部屋に入った良子を見て、バッグを開きながら「良子、あんなことを云った以上は覚悟してるわね。これをばらまいてもいいのね。何よ。その眼。ばらまかれなくなかったら、今

夜七時に元町までおいで。国鉄の西口よ。こらしめなきや」

英子はもう一度良子を痛めつけようと思った。今度は伊場と二人で思い切りいじめようと思った。良子の覚悟には気付かなかった。

良子は物を云わずに英子に近づいた。グレイの作業服を着てきた目的もこれであった。

ポケットから取出した切出しナイフを英子の脇腹につきつけた。

「来るのは、あなたの方よ。太田さん。大きな声出すと刺すわよ。さあバッグを持って、来るのよ」

今まで完全に優越していただけに、良子のすわった目を見ると、大きな声を出すことはできなかった。

「止めてよ。危いわ。アッ、イッ、行くわ、行けばいいんでしょ。そんなのしまつてよ」

虚勢をはって見ても、切出しナイフでつかれて、意志に反して良子の云うままに動いた。良子は英子の右手を抱えこんだ。ナイフを突きつけたまま事務所を出て倉庫へと、工場の間を歩いていった。遠くから見ると仲のよい友達が手を取りあって歩いているように見えた。

倉庫の裏の人一人がやっと入れる通用口は

平素は使われていない。その為施錠も不完全であることを知っている人は少ない。良子は静かに小さな鉄の扉を開いた。錆びついた蝶番がギーッと広い倉庫の中に不気味な響きを残した。英子は押し込まれても拒むことは出来なかった。

「何するのよ」

少し大きな声を出しても、倉庫の中の反響で自分の耳にすらはつきり切りとれないのだがかえってくる。良子が無言であるだけに一層気味が悪くなって来る。

倉庫の隅の半端物置場まで英子を引っばつて来て、やっと良子が口を開いた。

「坐んなさい。坐るのよ。足を出して坐るのよ。嫌なの。そうよ。この縄で足を縛るの。もっと固く」

英子は爪先のきゅっと尖った中ヒールをはいたまま、ストッキングの上から足首を命ぜられるままに縛った。

「許して、悪かったわ。ねえ、山川さん」

良子は耳をかさなかった。相変らずナイフでちくちくと英子をおどしながら、

「さあ英子、寝ころんで。うつ向けに」

やっとナイフを離れた良子は麻縄を手にして、右膝で英子の背を押さえた。

「うううーっ。い、い、いたっ」

呻く英子の手を一本ずつ逆にねじ上げた良子は固く手首を縛った。ピンクのジャージのカーデガンもブラウスもチェックのスカートも、きれいにセットされた髪も糸屑と埃にまみれて、急に見すばらしくなった。

手と足を縛られて自由を失うと、英子の高慢さが消えた。仰向けにひっくり返され、もう早くも涙ぐんで、

「許してよ。ねえ、山川さん。もう何でもあげるわ。ねえ、許して、悪かったわ」

「許して、なんでもっと前に云うことよ。って云ったくせに。許せないわよ。英子。写真は、これだけ？」

「そ、そうです」

「テープは、これね」

声も出せずにうなずく英子はやっと今までの数分間の驚きが怒りに変わって唇を噛んだ。

にらみつける目を見下して、良子は右手を振り降した。

「ピシッ」

頬に良子の手形が赤く残った。

「ネガはどこ？ 誰が持ってるの。ふん、云えないの？」

英子の頬が二度鳴って、音と共に頭が左右

に揺れた。

「どこなのよ。ネガは？云うまで叩くわよ」

「や、やめて」

「どこなの。私を怒らすの」

「ロッカーよ、私の秘書課にあるわ」

「鍵は？」

「そこよ、バッグの中」

英子のコードバンの大き目のバッグが逆さにあけられた。コンパクト、口紅、煙草とライター、ハンカチ、鍵束が床に散った。

「これね。取ってくるまで大人しくさせなくちゃ」

英子は太い麻縄を二本も噛まされて、声を封じられた。呻きをあげるほかはどうすることもできなくなった。その上、もう一度うつ向けに返されて、足首を縛った縄尻を手首に通され、締め上げられると自然にやや開いた膝頭を振ることと頭を左右に曲げることしかできなくなった。

嬉しそうな表情で、良子は鍵をちらつかせながら帰って来た。埃の中に左の頬を床につけて転がされている英子の髪を握ってぐいと仰向かせながら、良子はフィルムをつきつけた。

「これだわね。よくも二本も撮ったわね。お

別れにたっぷり仕返しをさせてもらうわ」

意味のわからない呻きが続いた。良子は、はじめは英子がスパイであったことを白状させようと思っていたのだが、自分のあの羞しい、責められた写真を見ると頭にカーッと血が昇った。復讐だけで頭が一杯だった。

手足を背中にまとめられ、逆エビ縛りであぐら英子の服にナイフが入れた。派手なカーデガンが、ブラウスが切り裂かれて、床の埃にまみれた。丸い肉づきのよい真白い肩がむき出しになる。

左肩に赤いキスマークが鮮かであった。腕を伏せたように形の良い大きな乳房が床の埃に押しつぶされる。

麻の糸を切るための、鋭利なナイフがスカートもスリッパも、ぼろ布に変え、英子は忽ち裸に剥かれてしまった。

「ふ、む、う、う、……」

英子は呻き続けた。呻き、悶え続けたので肌はしっとりと汗ばんでいる。

「まあ、こんなに汚れているわ。ここ、見て恥しいわね、お嬢さん」

顔の前に、下着の汚れた部分をつきつけられ、首筋が、頬が、紅潮してくる。良子はロープの猿ぐつわを解いた。ねばった唾をため

☆男性モデル募集☆

左記要領にて「男性モデル」を募集いたしますから御応募下さい。

一、御希望の方は年令、職業、身長、体重、好む傾向、連絡場所（局留は不可）併記の上お申込み下さい。

一、当方の求めているものは、輝美、男性ヌード、同性対象Mモデル、異性対象Mモデル、女装扮装等です。口絵には掲載いたしません、分譲写真として公開可能の方です。

一、採用の方には、撮影の日時場所など詳細連絡の上お打合せします。

一、写真撮影を好まれない方でMプレイのみ御希望の時は、その旨、お申出下さい。但し費用の御負担の出来る方に限ります。

△編集部△

たまま、

「や、山川さん、も、もう、ゆ、ゆるして、あ、む、ううう」

とぎれとぎれに許しを乞う英子の口にパンティがねじ込まれた。ロープでもう一度おさえられ、英子は自分の体臭を口一杯に味わって、耳まで真赤にして呻いた。

色の白い肌のまだ汚れていない背面は、や

や紅潮し、金色の腕時計と、パールピンクのマニキュアがアクセントをつけ、輝くような美しさであった。

手と足をつなぐ縄を切られると、長い間、逆海老に締められていた反動で膝がだらりと伸びた。埃にまみれながら荒い息を続ける全裸の体に太い麻ロープの鞭が飛んだ。

「むっ。むーっ」

呻きながら、後手のまま、ごろごろと転ったが、不自由な体では、逃れることも出来ない。きめの細い、真白な英子の肌は、胸に、背に、腹に、尻に、そして股にまで鞭をうけて、赤い鞭跡が見えるより早く、涙と汗で埃をこねまわして、どす黒く汚れた。

「汚ないお嬢さんに似合いの服を作るわよ。ふふふふ」

麻ロープを投げすてた良子は自分の思い通りに喜んだ。半端物置場を探して、出来損いの古い麻袋を引きずり出した。よく云われるドンゴロスの袋である。埃まみれのドンゴロスを見て、英子は一際高く呻いたが、良子には却ってその呻きが快い響きに感じられた。

足からかぶせられたドンゴロスの袋は、体を左右に転がされながら次第に上の方に引上げられていった。だだだの袋は殆んど全身

を覆った。胸を引上げられるとき、粗いドンゴロスに乳首をこすられて、呻きが高くあがった。鞭跡をドンゴロスが責め続ける。

顔だけを出したこの「汚れたお嬢さん」の体は、ドンゴロスの袋ごと、麻のロープで締められた。

「どう、お嬢さん。月給泥棒のスパイには似合いの服だわ」

うすよごれて、涙と汗で埃と糸屑をこねまわした英子の顔からは、派手な化粧の高慢なお嬢さん秘書のかけらも見えなかった。

荷物を二階に吊り上げるホイストの鉤が首の後にかけられた。配電盤にかけ寄った良子が、スイッチを押した。ずるずるとドンゴロスの袋が床を引きずられ、斜めに立ち袋の底が床を離れて、大きな振子のようにゆれはじめてスイッチが切られた。大きな「みの虫」がぶら下っている姿にそっくりである。「お嬢さん、もうお別れだわ。私はもう会社をやめるのよ。この写真は焼いてしまおうわ。もうすぐ三時の巡視よ。守衛さんに降してもらってね。さよなら」

写真とテープを持った良子が、もう一押し英子の「みの虫」を揺らして去っていった。

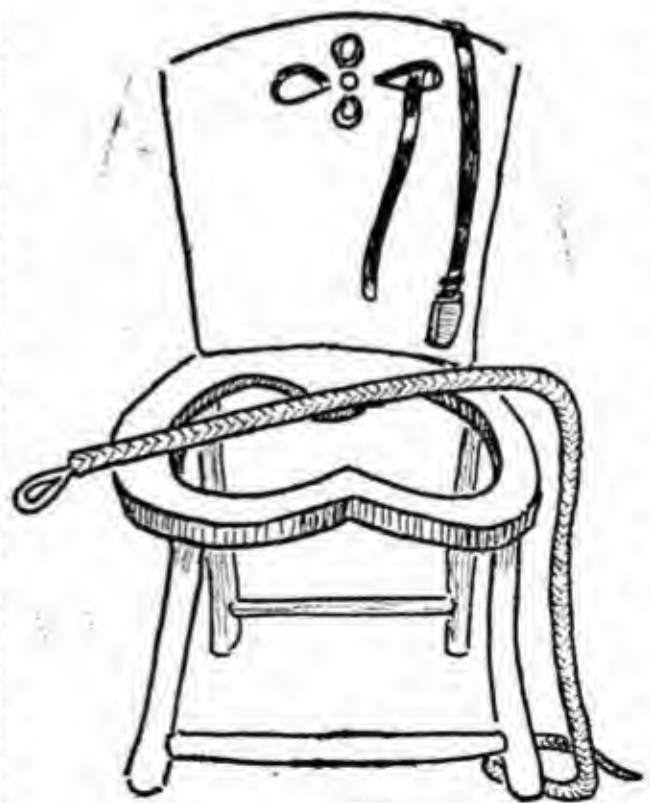
(完)

連載サディズム小説

心 傷 た む 遍 歴

△第二十章 織りなす糸 (四)▽

西 条 操



その朝、第四監舎看守長ミシエル女史は、

いつになく早目に出動した。特殊使命を帯びた仮女囚四一〇号が居る間は、気を張って居らねばならない。朝食の卓に就いたばかりの女囚達を見渡し、視線は真先にシュザンヌへ注がれる。忽ち其のサインを受けて、女史は飛び上った。身分がバレそうだと、と言う緊急信号だ。自室に飛び込んだ女史は電話器を掴んだ。

「もしもし、マルタ？ ああ、よかった。あら、もう来てるのね」
「当り前よ」

「あのね、寒くなりそうだって!!」

書類を整理して居るエレヌ補佐が怪訝そうな眼を上げた。予定を繰り上げて、今日すぐに此の補佐役にも事情を知らせておかねばならない。

今度はマルタ保安課長が飛び上り、部下を呼びつけた。

「四監の四一〇号を連れておいで。余罪取調べよ」

保安課のスカートは肩すくめて出掛けて行った。こんなことは、監舎の平看守がやることだ。ふくれ面の彼女は横柄な態度で伝票を

ミシエル女史に渡し、スプーンを取り上げたばかりのシュザンヌを引き摺り出した。

「四一〇号ッ。ちょっと来な。おや？ お前は一昨日の女だね。六年ぐらいで済む女じゃないと思ってたよ。ひめごとが又々バレたんだってさ」

一番端のミシュリーヌが立ってやり、シュザンヌは脚鎖を鳴らせて長椅子を離れた。

「おんや？ もう、お仕置を受けてるのね。手を背に組んだりして、いやにしおらしくなかったじゃない？ お仕置の利き目かしら。さ、手を出しな。そうそう、ヤケに神妙なこ

と」

小気味よい金属音が鳴り、シュザンヌは思わず口を歪めた。

「あら、何よ、その顔は!!」

一撃を頬に受けてよろめいたシュザンヌは（まだ知らされてないのね。本気で撲ってるわ。ああ、痛い）

と嘆いたのだった。

出向いて来た検察関係者のための取調室は保安課の隣りにある。そこでは、マルタ女史が保安課の手空き全員を集めて待つて居た。

「どうしたの？ シュザンヌ」

シュザンヌは要領よく事情を告げ、女史はミシエルを呼び出した。

「もしもし、四五三号を見張ってるのよ。いい？ 四五三号。いえ、まだ洩らしては居ない様よ」

電話を切った保安課長は、部下達を見回し「実はね、みんな。そのひとは婦警さんなのよ。勿論現職よ」

訳を打ち明けた女史は更に部下に命じた。

「分ったわね？ じゃ四五三号を連れて来るのよ。急いで。名目は、そうね、来信の内容について緊急取調の要あり、としようかね。」

連行先は刑務課長のところ」

見るからに畏怖の念を生じる様な制服が足早に出て行き

「じゃ、シュザンヌ、楽にしててね。私は忙しいわ。監視庁の調査も全然アテにならないじゃないの」

保安課長女史もアタフタと去った。

「腰掛けていい？」

シュザンヌは片眼をつぶって保安課員達に言い、固い小椅子に腰をおろした。

「今、課長さんがおっしゃった様な訳なの。よろしくね。ところで、何か穿かせて下さらない？ 昨日の朝から、はだしの貴婦人なの。コンクリートで足の裏がすりむけたわ」

男の課員が飛んで来て、足許にスリッパを揃えてくれた。

「あちらへ行って楽にしたらどうです。ソファもありますよ」

「ありがと。ねえ、これ、はずしてよ」

シュザンヌは両手両足に鋼鉄を鳴らせた。

「あら、そうね」

とスカートがやって来て

「ごめんね、シュザンヌ。知らなかったもんだから撲ったりしちゃって」

と肩をすくめる。

「でも、あんた、大したもんだわ」

「いいのよ、そんなことは。早くはずしてたら」

シュザンヌは焦れてもがいた。

「ホホホ。そりや、はずしたげるけどさ、先刻課長の言った『極めて貴重品』てのは何なの？ お金じゃなさそうだわ」

「そうよ、そうよ。隠されると余計知りたくなるわ」

他のスカート連も同調して好奇心を示す。

「私の睨んだとこじゃ、重大な文書ね」

「そう言えばさ、あの五三〇号の時は、人払いなんかして、ずい分と念入りに何回も調べたわねえ」

「水爆のスパイかしら？」

「まあ、怖い。白状するまでは、そのままにしておくわよ。いい？」

保安課のスカート達は、口々にしゃべり合い、憤慨するシュザンヌをからかった。

「いいわよ、もう外してくれなくても。その代り、残虐なる取扱いを告発したげるから」

シュザンヌをなだめて戒具を除いてくれたのは男の課員だったが、それならそれでまた「あのひと、シュザンヌの脚に触わりたかったのよ」

保安課の大柄女達は、そう囁き合うのだった

た。

ミシュリーヌは、朝食を済ますか済まさないうちに、手錠を荒々しく叩き込まれて引き立てられた。

「あの子、一体どうしたって言うのかしら。可哀想に震えてたじゃないの」

「誰かが、余計なことを、書いて来やがったのさ」

「あの子はウブで真正直なんだから、あたしや心配だよ」

「いやに肩入れしてんだね。でもさ、あの女っぷりだろ。思い詰めた男が居てさ、何とかして逃がしてやろうってんじゃないのかい。

男って、案外頭が悪いんだから。迷惑するのは檻の中のあたし達さ」

「馬鹿だね、お前さんは。あの子は男に逃げられたんだよ。女はね、きりようと氣立てだけじゃ駄目なのさ」

「じゃ、何よ？ でもねえ、あんな女を捨てちまう男が居るんだものねえ。罰当りだよ、ほんとに」

女囚達は氣ずかわしげに見送って囁やき合いい、クラリスが暗然と呟いた。

「アドリエンヌと関係はないと思うけど。でも、何だか悪い予感がするわ。ミシュちゃん

もう戻って来ないんじゃないかしら」

クラリスの言葉は適中したのだった。

シュザンスが、保安課長室のソファに憩うて、ホッとした頃、ミシュリーヌは刑務課長室で、主の居ないデスクの前に立たされて居た。圧倒されそうな保安課婦人看守のきびしい監視を受けて立ちすくんで居ると、あらぬ恐怖に脂汗の滲む心地だった。そっと両手を上げて額を手の甲で拭うと、忽ち嗚りつけられた。保安課の取調のきびしさ、恐ろしさは、ぶち込まれて一カ月もすれば自然に知る様になる。

ミシュリーヌの全身が恐怖にわななき、立ちすくむ両膝も萎えた頃、女丈夫の太い手が肩を小突いた。連れ込まれた所は、二階の所長室に接した会議室。

「脱ぐんだよ」

踵を蹴られたミシュリーヌは、革サンダルを脱いではだしになり、おそろおそろ扉を潜った。厚い敷物が足裏にふわふわと、頭も上げ得ない女囚は雲の上を歩む心地、そして、大きな会議机の周囲には、此の刑務所のお歴々が額を集めて居た。

「ああ、四五三号だね。ちょっと取調べることになったんだが、正直に言うんだよ」

「ハ、ハイ」

老いた所長の声はやさしかったが、少し離れて立ちすくむミシュリーヌの声は、絶対の支配者達からの鋭い視線に射すくめられ、消え入る様に震えた。

「四一〇号、つまり、お前の前の席の女囚だけど、以前に会ったことあるの？ いつ？どこで？」

訊問に答えながら、ミシュリーヌにもおぼろげに事情が悟られて来た。彼女は頭の悪い女ではないのだ。

その頃、婦人法務事務官イヴェットは準備室で、四二〇号に移監準備を施していた。四二〇号は四監から転舎して来た赤毛の四十女、妻ある愛人の心変りを恨んで其の家に放火して六年、漸く半ば近くを勤めたところだが、ずっと以前にリヴィエラ海岸一帯で働いたお目見え泥棒の数件がバレて、取調のためにカノンヌへ押送されることになったのだった。

「いいドレスじゃない？ よく似合うわ」

四二〇号の体は年よりもずっと若く、ムッチリと男好きがする。腕むき出しのドレスを着る四二〇号に眼を注ぎながら、イヴェットはそう言った。ミシュリーヌと同じ監房に居た此の女囚から、彼女のことを護送途中で聞

きたいと言う気持ちもあって、我知らずそんな言葉が出てしまふイヴェットだった。

「あら、気持の悪いこと言わないでよ」

と、四二〇号は口をとがらせる。

「これ、真夏のドレスなの。それにさ、もう流行おくれに決ってるわ。第一、コルセットやブラジャーなしで着る様には仕立ててないのよ。あーあ、靴下もないのねえ」

女囚は指先でハイヒールをこすり、溜息とともに素足を入れた。

「あんたが連れてってくれるの？」

「そう。規則を守っておとなしくするのよ」

「いまましいわねえ」

「なんだって!!」

「いえね、あんまりお若くていらっしやるからよ。それで、あんたひとり？」

「保安課の男が一人来るわ」

「まあ、嬉しい。どうせ若手じゃないだろうけどさ、男は男よね。そんなら、あんたが来るこたないじゃないの。税金が勿体ないわ」

四二〇号は赤毛を掻き撫でながら、憎まれ口を叩く。

「ねえ、お願いだから、せめて口紅だけ塗らせてくれない？ あたしの身にもなって見てよ」

女囚の言うことは大抵同じ様なものだ。

「何をガタガタ言ってるの。もう、いい？」

イヴェットはきめつけ、分厚く幅広い革バンドを取り上げた。

「あら、やっぱりそれ、あたし用だったの？ 腰の線が台なしだわ、そんなごついのを締めたんじゃ」

イヴェットは委細構わず巻きつけて締め上げ、尾錠部分の鉄蓋をカチリと閉じた。

「こっち向いて」

今度は手錠を両手にガッチリとかける。

「あんた、まだ若くて綺麗なのにさ、こんな商売するこたないと思うけどねえ。あーあ、ずい分ときびしいのね。腰が苦しいわ。ドレスだってタクれてるし。ね、ちょっと待ってよ。ああ、きついわよ、これじゃ、汽車に乗るまでに手首がすり剥けるわ。もすこーしゆるめてよ」

「それ以上ゆるかったら、ことだわ」

イヴェットはきびしい顔で、手錠を腰革の金具に結び、錠を鳴らした。

「ほんと、いまましい道具だこと」

女囚は背を屈めて肩紐をいじる。

「気が滅入っちゃうわ。転んだらどうなるのさ。このまま、こうして連れて行く気？」

「そうよ、当り前じゃないの。お前は反抗歴があるからね。規則よ。辛抱おし」

イヴェットは革ロープを後ろ腰にカチリとつけ、二、三度引っ張って腰バンドをゆすぶってやった。秋風を吹かせた男を恨み、その妻をそねみ、そして世を拗ねている此の四二〇号は、服役成績がひどく悪い。女囚達との間に人間的な触れ合いを持ちたいと念願しているイヴェットだったが、こんな四二〇号みたいな女囚に対しては、冷たい態度にもなってしまうのだった。何しろ、イヴェットは未だ若いのだ。

「さ、おいで」

イヴェットは、再確認した鍵をポケットに納めながら、革ロープを強く引張った。

「あーあ、冷たいのねえ。囚人て、ホント、情けないこと。ひとを縛って、犬みたいに引張って歩いて、あんた、いい気持？ でもさ、こんなことばかりしてて、おばあさんに申し訳ないと思わないこと？」

「お黙りッ」

イヴェットに尻を叩かれた女囚は、久し振りのハイヒールによろけて膝をつき、思わず動かす両手がガチャガチャ音を立てた。

「血も涙もないのね。扶けてくれたら、どう

なの？」

身悶えて独力で立ち上った女囚は、横眼でイヴェットを恨めしげに見た。

「何度も言う様だけど、ちっとは、あたしの気持にもなって見たら？ 六年でもひどいの、それでもまだ足りないって言うのよ」

女囚は赤毛をはね上げて嘆息する。

「そんな昔のことまで今更ほじくり出さないでもいいじゃない？ もう済んだことよ。十年も経ってるわ、時効じゃなくって？」

「お黙リッ。黙って歩くのよッ。犯した罪は全部償わなくちゃいけないの。馬鹿ねッ」

「だって、どうしてあたしだけがひどい目に逢わなくちゃいけないの？ 口惜しいッ」

「いくらそんなこと言たって、ダメ、なの。嵌口具かけるわよ。脚に鎖つけたげようかしら。歩くのが精一杯で、余計なこと考えなくなればいいわね」

イヴェットは冷然と言い放ち、腰ロープを引絞ってからお尻をもう一度叩いてやった。こんな女囚の口からは、ミシュリーヌ奥様のことを聞き出す気もなくなる。

イヴェットは四二〇号を曳いて刑務課長の室へ入った。もう少し早いか、或いはおそれれば、そこで立ちすくむミシュリーヌの姿を

見出したことであつたらう。不在のマルチーヌ課長に代って、若い課員が四二〇号に言い渡した。

「……いいわね？ 護送中といえども、刑は執行中なのよ。社会の人達に対して妙な目付きや態度をとらない様に。口なんか利いたりしたら、ひどいわよ。途中の反則は特に重く罰します。社会から隔離されてる身だと言うことを忘れないことね。分った？」

四二〇号は、世にも口惜しげに身悶え、そして、ふてくされた。

「分りましたわよ。つまり、あたしは此のひとの囚人なのよ」

と、イヴェットを忌々しげに見やり、「この制服の娘さんのお言いつけ通りにしてりゃいいのよね。ところで、保安課のお方はまだ？」

「お黙リッ」

イヴェットは頬に平手打ちをくれてやり、腕を掴んで引き立てたのだった。

ミシュリーヌは、会議室の壁際で、デスクに背を向けて立ちすくみ、此の身の処置が議されるのを待っていた。本館三階の個室に入られて出さないと言う意見は、前例がないとマルチーヌが反対した。保安課で身柄を預かる

と言うマルタの提案は、可哀想だとミシエル女史が言い、どうしても可哀想なのさ、とマルタ保安課長が眼を剥いた。

「ねえ、リヨンあたりへ移監したら？」

「冗談じゃないわ。うちのこととはうちで始末しなきゃ。それに、リヨンあたりの連中は口が軽いのよ」

「要するにだな、四五三号を四一〇号から遠ざけることだね。そして、四五三号が黙っててくれりゃ、それでいい訳だ。あの女は言っで聞かせりゃ分ると思うがね」

所長が発言し、転舎ということにはほぼ決まり、三監のジョアンヌ看守長とシュザンヌ婦警とが招かれた。

「ね、お願い」

シュザンヌはミシュリーヌの手を握って言った。

「私のこと、黙ってて頂戴。詳しいことは言えないけど、お願いよ」

ミシュリーヌは微笑み、シュザンヌの眼を見詰めて静かに答えた。

「分りましたわ。誓って黙ってます。御成功をお祈りしますわ」

「ありがと。安心したわ。あなたも早くね」
シュザンヌは椅子にくつろぎ、ミシュリー

又は立たされたまま言い渡された。

「では、四五三号、お前を第三監舎に移します。この婦警さんのことが洩れたら、それはお前のせいなのよ。分ったね？」

「ハイ」

ミシュリーヌはキツパリと答え、お茶を啜る会議机をあとに曳かれて去り、主の居ない刑務課長デスクの前に立って、事務処理の終わるのを待たされた。

其の頃、パリ拘置所では婦人看守アネットが、受刑女囚リリアンヌを曳いて、二階の所長応接室への廊下を歩いていった。リリアンヌの家族達が面会に来たのだ。正義感の強いアネットは、上流階級に対する此の様な特別扱いが不満だった。しかし、上司の命令ともなれば仕方がない。

「脱ぐのよ。はだしにおなり」

扉の前で、アネットは規則通りに女囚の履き物を脱がせてやった。

「あの……」

と、女囚は悲しげに両手を示し、アネットが握る革ロープを見やる。

「それは駄目。脱がなくていいの。腰ロープがないだけでも有難く思うことね。さ、入って」

リリアンヌはアネットの後ろに隠れる様にして入った。広い応接室には、金のかかった身なりの男女が数人、そして、ジョセフィーヌ所長補佐の顔も見える。

「二〇五号を連れて来ましたッ」

アネットは女囚を押し出して前に立たせ、踵を鳴らせて、わざと大声で言った。うなだれたリリアンヌの肩が震え、居並ぶ男女の眉がひそめられる。ジョセフィーヌまでも眉をしかめ、女囚の素足を見て頭を振り、そしてアネットに軽くうなずいた。

「はずしてお上げなさい」

アネットは黙って唇を曲げ、わざと音高く手錠をはずし、革ロープを束ねた。

「あなた、席をはずして頂戴。あとで呼ぶから」

「どこで待機してますの？」

アネットは意地悪く訊ねる。

「そうね。喫茶室にでも居てよ。私につけていてくれていいわ」

アネットは足音高く去り、扉の閉まるのを見届けたジョセフィーヌ補佐官は愛想笑いを振りまきながら、女囚に椅子をすすめたのであった。

リリアンヌの家族達は同情といったわりを示

しつつも、どこか冷たく、リリアンヌの方も自分の殻に閉じ込めようとする気配が見えないこともない。上流階級の連中とは、案外こんなものなのだ。ジョセフィーヌが自身で飲物を配り、リリアンヌさえも自然な態度でそれを受け、どこか取り澄ました会話も一段落したところで、それまで黙って居た男が割り込んだ。此の男はダルラン家の顧問弁護士だが民事専門だ。

「では、と。リリアンヌさんをですな、マダムではない様にする手続はすぐに取らせて貰います。で、管理させて頂いてる財産に就いて、ちょっと御指示を仰ぎたいんですがね」家族達は、自分には関係ないとばかりに私語し初めた。

「フォッケウルフ航空機工業の株券のことなんですがね。いい買手が出て来ましてな。まあ売り時だと存じますが。如何ですか？マイヨール氏にも支払いが残ってますし」

「まあ、まだ弁護士料を払わなくちゃいけませんの？ これで!!」

リリアンヌは囚衣の胸を引張って、番号布を撫でた。

「契約ですからな。彼も全力を尽したんですよ。運が悪かったんですなあ」

「いいですわ。株券を売ってお払いして頂戴な」

リリアンヌは、葉巻をくゆらす弁護士に憤然と言ひ、そつと手首を撫でた。

「では、これに御署名を。なあに、寒くなるまでには家に戻れますよ。マイヨール君も運動してくれてますからな」

「お願いよ。みじめで、苦しくて、毎日が堪まらないわ。ところで、あんな株をこんな値で買いたいとおっしゃるのはどなたなの？」

リリアンヌはペンを描いて訊ね、弁護士が答えた。

「マダム・シュバリエとおっしゃる方で。未亡人ですがね。なんでも、家をニースあたりで買うつもりだったそうですが、暫く見合わされたと言ふことですか」

その頃――

コンピエーヌ婦人刑務所では、キャスリーヌ看守に取扱われて、ミシュリーヌが三監の鉄格子扉を潜った。折角、同囚達にも顔馴染ができ、看守達の気心も少しは分り、とりわけどこか気の合うクラリスとも同房だったと言ふのに、その四監からほうり出されたのは心細かった。しかし、囚われの身ともなればどこで刑を執行されようとも致し方ない。ミ

シュリーヌは第十一監房の最前席を与えられ眼前で閉じられる鉄格子扉を悲しく見て眼を伏せた。クリスチーヌが一つ後ろへ移され、モニカは第六監舎へ転舎ということになったのだ。六監では、モニカも今までの様な訳には行かないだろう。

その日の夕食も済み、全女囚を入房させ、ホツとした詰所でキャスリーヌが言った。

「今日四監から来たのは、なかなかいいわねえ。テモ神妙よ、いじらしいくらい」

「そうね、十一房は良過ぎるわ。気をつけなきゃいけないのは三五五号ひとりね」

と、マジョーリが答えた。三五五号とはエドウィージュのことだ。

「おとなしいだけじゃないわ。あんな美人は空前ね」

「空前だろうけど、絶後じゃないね。じき、

キャプシーヌ・エイメが来るよ。例の傾城の美姫」と、ベルディーヌ。

「あら、あんなの何よ。化粧落して裸にさせりゃ幻滅よ、きつと。そこへ行くと、あの四五三号は大したものね。肌なんかスベスベして、体中が光ってるわ。女の私でもウツトリするくらい」

そう言うキャスリーヌは、先刻ミシュリー

ヌの検身を担当したのだ。

「いやに肩を入れたもんだね」

と、ベルディーヌが太い声で言う。

「あの女は少し背が低いよ。それに、女はきりょうじゃないさ、心根だよ。さあて、私もう帰るよ」

「あら、点呼まで居てよ。マリーは休暇取っちゃうし、モレシェンヌは急病だと休んじまうし」

勤務割に気苦労しているフォンティーヌがこぼした。

「だからさ、イヴェットを、わざわざ出張させるこたないのよ。受取りに来させりゃいいのに。マルチーヌも案外ダラしないんだもんねえ」

ブツくさ言いながらベルディーヌが腰を下ろした時、遠くの房で甲高い声が聞えた。

「十一房だね。新入りを苛める様なのは居ないけど」

「そんなんじゃないわ、ベルディーヌ」

早くも腰を浮かせたマジョーリが、忽ち思い当った様に救急箱を驚掴みにし、飛び出して行った。

「マジョーリは、ほんとに働き者だよ。女房にする男は幸わせだよ」

当直看守より先に駆けつけて行くマジョーリを見送って、ベルディーヌがしみじみと言った。マジョーリの予想は適中していた。入獄のショックによって中断していたルーシーの生理が急に初まったのだ。必要品を与えられたミルドレーヌの手により、処置は手際よく終わり、そこへベルディーヌが現われた。

「マジョーリがヤキモキ心配してたけど、どうやらこれで、そのお嬢さんも一人前の女囚になった様だね。さ、これを首につけるんだよ」

と、赤い札のついたゴム紐をほうり込む。

受け止めたエドウィージュが

「よかったわねえ、お嬢さん。まだ、アガっちゃってた訳じゃなかったのね」

と更に後ろへほうった。そう言うエドウィージュも首に赤札だ。シモーヌが眼を伏せ、ミルドレーヌが怒りの色を浮べ、当人のルーシーがク、ク、と忍び泣いた。

「あら、泣いたって仕方ないよ、お嬢さん。規則なんだもの。ねえ、担当様」

自分の赤札をいじりながら、エドウィージュが嘲笑い、ベルディーヌに媚びた。

「それをつけてると、薬をさせて頂けるわ。あたしなんか待遠しいくらいよ」

クリスチーヌも軽薄に笑い、たまりかねたマジョーリが

「お黙りッ。余計なこと言うんじゃないの」

と、たしなめた。女性として当然の生理とは言え、また、少しは取扱いに手心を加えて貰えるとは言え、その赤札を首につける恥かしさは、ミシュリーヌも既に覚えがあった。

今は他人事とは言え、ミシュリーヌもうなだれて唇を噛み、嚙り上げながら首にゴム紐を巻くルーシーの気配に、我がことの様に頬を染めたのだった。

翌々日の夕方おそく、イヴェットは監舎にやって来た。本来なら、その翌朝から出勤すればいいのだが、フォンテーヌに泣きつかれて夜勤を引き受けていたのだ。監舎では夜の点呼待ちの一刻で、マジョーリがねぎらって迎えてくれた。

「……ところでねえ、イヴェット。一名入れ替ったわ。一四七号が六監行き。そして、四監から四五三号」

茶碗を持つイヴェットの手がビクリと止まった。わが耳を疑う心地だった。

「えっ!! 四五三号?」

「そうよ。十一房の六番。ついだから教えといたげる。えーと、一九×三年、プロヴァ

ンス県の生まれ。三十才ね。有価証券偽造および不正行使、ならびに業務上横領で四年……」

イヴェットは耳掩いたい心地、思わず恨めしげにマジョーリを見やり、マジョーリは何故か、そんなイヴェットに片眼をつぶって見せて続ける。

「ここへ来て、まだ二ヶ月にならないわ。でも、成績はいいし、マルチーヌのお墨付きも来てるわ。えーと、小柄だけど、顔も体も愛らしくて綺麗よ。金髪で眼は深い青。そんなことは見りゃ分るわね」

(見なくとも分ってるわ)

と、イヴェットは胸に叫んだ。

「生まれも育ちも裕福だったらしいわ。そして、何と、クープドリユーエ伯爵の奥様だったって!! 四年で伯爵と死別、昔馴染の男と一緒にになってパリに出て来たんだけどねえ、その男のためにこんなことになったのよ。でもちっとも、拗ねたり恨んだりしてないし、とても素直な女。子供は居ない様ね、少くとも戸籍上はね」

イヴェットは「もうよして」とばかり、茶碗を音立てて置き、さりげなく答えた。

「一人ずつタライ回しするなんて、手間のか

かることをするものねえ。でも、あのモニカが居なくなつて気苦労が減つたじゃありませんか？」

「そうね。これが天の配剤かも知れないわねえ」

マジヨリーは、反応をうかがう様な眼で言った。イヴェットは、飛んで行きたい気持ちを抑え、明朝提出するべき報告書をひろげる。

「そうそう。それでねえ、その四五三号だけど、いま、広間でベルディヌのお仕置きを喰つてゐるわ」

イヴェットは我知らず腰が浮いた。

「ルーシーがアレになつたの。そして、食欲がないもんだから、スープなら、と分けてやったのね。それをベルディヌが見付けたの。一号捕縄かけられて坐らされてゐるわ。ベルディヌの方は、点呼になつたら解いて入房させてくれて帰って行っちゃったけどね。可哀想に、夕食も途中で取上げよ」

イヴェットは、窓辺に飛んで行きたいのを抑えて、窓越しに薄暗い広間を探した。

「そこからは見えないでしょ。戒具棚の前あたりよ。あなた、行って解いてやったら？ベルディヌはああ言つたけど、もういいと思うわ。責任は私が持つことよ」

ベルディヌの捕縄は苦しく痛いことだろう。矢も楯も堪らなくなつたイヴェットは報告書とペンをほうり出し、マジヨリーに感謝のまなざしを投げ、一目散に飛び出して行ったのだった。

しかし、彼女の足は、広間への曲り角でピタリと止まつた。ミシュリーヌ奥様と、こんな風に再会する心の準備が出来ていなかったのだ。お逢ひした時には、こうして、ああ申し上げて、と日夜想つて来たイヴェットだったが、思いもかけず其の場となると、早くも胸がこみ上げて来て、うろたえてしまう。当直デスクからフィリスが声をかけた。

「マジヨリー勸告ね。そろそろ出る頃だと思つてたわ。そこを曲つて右手の壁際よ。電灯つけたげようか？」

「いいわ」

イヴェットは答えて息を整えた。

「ベルディヌはね、通路のまん中に坐らせたのよ。それを、マジヨリーがそこへ移したの。膝を崩しても分りゃしない。でも、いいわ。私、捕縄はいやだもの。何だか、むごたらしくて」

そう言うフィリスは、何かと言えば、すぐに手錠を叩き込むのが常の婦人看守だ。

あとで思えば、マジヨリーはその時既に、イヴェットとミシュリーヌの關係を感付いていたのだ。だからこそ、裸か身に捕縄姿のミシュリーヌを、入るや目につく明るい通路から引込める心使いを示したのだ。

凝然と立ちすくむイヴェットの耳に、低く喘ぐ息使いが聞え、意を決した彼女は靴音を忍ばせて角を曲つた。そのコンクリート床には、通路の灯に仄白く照らされて、ミシュリーヌ奥様の痛ましい姿があつた。近寄つたイヴェットは声もなく立ち、うなだれた金髪を見下ろした。

（綺麗なお肌。ちっとも変つてらっしゃらないわ）

その胸に、二の腕に、腰に、そして首にさえも捕縄が喰い込み、イヴェットは胸つぶれる思い。しかし、いきなり二人だけになれた此の又とない機会に、是非申し上げておかねばならぬことがある。

キチンと折つて揃えた両膝が微かに動き、ピタリ合わせた両腿が乳色に悶え、僅かに眼をあげた女囚は、イヴェットのスカートのあたりを悲しげに見やりつつ、遠慮勝ちの哀願の声をかほそくあげた。

「かんにんして下さいまし。悪うございまし

た。赦して下さいまし。ベルディーヌ様にお言葉添えして下さいまし。お、お願い」

イヴェットは物も言わず、急所の結び目を解いた。乱暴とも見える急激な解き方だった。喰い入った捕縄が少しゆるむ。通路の向うの女囚達に聞える様に、イヴェットは大声で言った。

「お立ち。特別のお慈悲で解いてあげます」
喜んだ女囚は立とうとしてよろけ、呻いて膝を落とす。

(誰も見てなくても、キチンと坐ってらしたのね)

忽ちイヴェットは涙ぐみ、よろめく裸か身を扶け支え、そのふくよかな柔らかなみに更に胸こみあげ、そして、丁寧に捕縄を解きながら、耳に囁いたのだった。

「落ちて聞いて聞いて下さいましね、ミシュリーヌ奥様。私を覚えていらっしゃる？」

女囚ミシュリーヌの乳色の体がピクリとわななき、そして硬直した。

「——あなたは——ああ——イヴェット」

女囚は呻くように呟やき、振り向こうとした頭をガクリと垂れた。

「まあ、おぼえていて下さったんですね。嬉しい。昔、お世話になったイヴェット・ヴ

ラディです。お久し振りでございます」

イヴェットは歓喜して臉を熱くし、ミシュリーヌは双腕をもだえた。両手首の固縛はまだ解かれていない。

「——ああ、イヴェット——こ、こんな……」

「じっとして下さいまし、奥様——」

しかし、ミシュリーヌは床に崩折れて顔を伏せ、イヴェットは屈み込んだ。

「ああ、イヴェット。あなた、ここにいたのね。私、こ、こんな——恥かしい——」

ミシュリーヌは声をふるわせた。広間の薄くらがりの中で、灰白い体が見る見る赤く染まる。

「お静かに、ミシュリーヌ奥様。ね、よくお聞きになって——」

イヴェットは、最後の一条を取り除いてやりながら、声をひそめて早口に囁やいた。

「陰になり日向になって、きつと庇ってさし上げます。御恩返しをさせて頂きますわ。ですから、元気をお出しになって。さ、お立ち

になって下さいね」

ミシュリーヌはよろめいて起き上がり、初めてイヴェットの顔を見た。昔のままに美しいかばせ、その大きな瞳もそのかみのままに、喜びと哀愁と恥らいを湛えて深々と、イ

ヴェットの眸をひたと見詰めて縋りつくようだった。忽ちイヴェットは胸一杯、ひしと抱き締めて差し上げたいばかり、こらえにこらえた涙がせきを切って頬を濡らす。そのかみの伯爵夫人と小間使いとは、それぞれの想いをこめて見詰め合った。かくてはならじと気を取り直し、心を鬼にして柔らかな肩を、いまは制服も凛々しい婦人法務事務官が小突いた。

「めそめそしないで、早く着なさいッ」

そして、鉄格子に背を向けて手早く顔を拭い、房内衣に屈み込むミシュリーヌに囁く。

「奥様。これから、他人の前では、二人でお芝居しましょうね。お分りでしょ？ ね、どうか、分って下さいまし」

ミシュリーヌは囚衣をかぶり、金髪を包み直しつつ、ちらと見上げてコックリとした。

「お願いよ、イヴェット。決して迷惑はかけないわ」

ミシュリーヌはピタリと床に脚を折り、ひれ伏して大声で叫んだ。

「ありがとうございます。イヴェットさま——」

見下ろすイヴェットはおろおろとし、またしても涙が溢れる。二人は気がつかなかった

が、当直デスクでフィリスと駄弁っていたマジヨリーが微かに眉を寄せ、悪賢こそうなのが鉄格子の中で囁き合った。

「おかしいじゃないのサ。どうしてあの新入りがイヴェットちゃんの名を知ってるんだろねえ」

「あの娘のことだから、おおかた自己紹介して挨拶したんだろよ。ま、いいじゃないか」

マジヨリーが、頃合いよしとやって来て、さりげなく言った。

「水道がゆるんでるわ、イヴェット。その子は私が入れるから、締めて来てよ。さ、おいで。苦しかったろね」

と、ミシュリーヌの腕を抱えあげる。マジヨリーはそう言うが、どの蛇口からも洩れてはいない。イヴェットは感謝の眸を投げ、シヤワー場のあたりへ遠ざかりながら、ほのかに悟った。涙の跡を女囚連中に見られるのは憚られたし、さればこそ、マジヨリーも、それを察して、細かい心使いを示してくれたのだろう。蛇口を一つずつ締めて行く真似をしながら、こみ上げる暖かさに喉を熱くするイヴェットだった。

（折を見て打ち明けるわ。そして、力を貸してもらわなきゃ——）

イヴェットはそつとハンカチを納い、第一房最前席にうなだれる女囚の姿に遠く眸を投げてから、頭を立てて詰所に戻った。握る捕縄の束は、これがミシュリーヌさまを縛っていたのだと思うと、床に投げつけて踏みにじつてもやりたいような、抱き締めて頬ずりしてもやりたいような気持だった。

点呼が済み、点呼中の反則者をジャンヌが呼びあげた。四五三号は遂に呼ばれず、イヴェットはホッと全身をゆるめる。今夜の「叱責」のゴムホースは、彼女が振るうことにされているのだ。クリスチーヌの腿を打ち据えるイヴェットは、隣りに正座するミシュリーヌの視線を感じると、自分のしていることを恥じて泣きなくなった。

（そんなお眸で御覧にならないで、ミシュリーヌさま。これが仕事なんですの。ひどいこととおさげすみにならないで下さいましな。そして、あなたにこんなこと、させないで下さいまし、おねがいです——）

最後の一発は遂に腕が萎え、クリスチーヌの方が怪訝そうな面持ちだった。

本錠の鍵を錠箱に突込んだまま、イヴェットは第十一監房の鉄格子の前で立ちすくむ。すぐ眼の前の女囚ミシュリーヌの眸を感じる

と、鍵握る手が硬張るのだ。ミシュリーヌ奥様の大きな双眸は、安堵と信頼に満ちてまっすぐに、ひたとイヴェットを見上げていた。

「どうしたの？ 錠の工合、おかしい？」

立ち会うジャンヌが帰宅を急ぐのか、不審げに手許を覗き込んだ。イヴェットは氣を取り直し、鍵を回わした。断絶感を胸に叩き込む金属音、聞き馴れたその音に耳掩いたいイヴェットは、逆に回わしたい衝動を抑え、泣きたい思いで鍵を抜く。

（おいたわしいミシュリーヌさま。代って差しあげたい——。おゆるし下さいまし）

しかし、女囚ミシュリーヌは、響き渡った施錠音にも表情一つ変えないで、邪心のない眸でイヴェットを見詰め、ちらと合った瞳に微笑さえも浮べた。ミシュリーヌは、そのかみのコモ湖畔を思い出したのだ。春の館の一日、大切なスープレッドをこわしたイヴェットを、笑って許したミシュリーヌだったが、不注意な小間使いは引き続いてシャルルの愛用服にアイロン焦げを作ってしまった、さすがのミシュリーヌも腹を立て、お仕置を加えたことだった——。

（可哀想だったけど、一晩物置き部屋に閉じ込めたわね。外から鍵かけたら、泣き出した

わ。おぼえてない？ 翌朝、詫びたときのイヴェットったら、恨めしそうに涙溜めてたじゃないの。私、おぼえてることよ。いま、ちやうど反対になっちゃったのね——」

その夜、イヴェットは遂に一睡もせず、足繁く巡視しては十一房の前に佇ずみ、安らかな寝顔をひたと見詰め、さしぐむ涙を押えかねては立ち去るのだった。そんなイヴェットをマジヨリーは黙って打ち眺め、深いまなざしを注いでくれていた。

「ね、マジヨリー。四——四五三号——を、どうして一番前にしたのかしら？ 心掛けのいいひとだと思っんですけど」

房内の席順は、原則として、タチのよくないのを前の方にする。

「さあねえ。ジョアンヌ女史が決めちゃったのよ。ま、いいじゃないの。前の方が涼しいわ。あら、また巡視？ 精の出すこと」

イヴェットは、翌朝はれぼったい眼をし、後ろ髪引かれる想いで帰宅した。その日は監舎外労役、クリスチーナと並んで列を歩むミシユリーヌの腰には、キャスリーヌのお転婆がきつくかけた腰鎖が喰い込んでいた。

いつかは、いや、明日にでも、イヴェットはあのミシユリーヌ奥様を縛らねばならなく

なるのだ。指示があればゴムホースで打ち据えねばならないし、指示がなくなるともビンタの二、三発は真似事にせよ見舞わねば、あやしまれてしまうだろう。そして、奥様の裸か身が後ろ向き四つ匍、こころを間近に見なければ

だ

イヴ

支度を初め、そして——

（でも、見て御覧なさいな。わたしのミシユリーヌさまのお綺麗なこと。どうお？ 飛び切りじゃないの）

先刻の全裸体操、何年振りかで明るい光に眺めたミシユリーヌ奥様のお肌は、ますます美しく輝いて昔を凌ぐばかり、イヴェットにとっては神々しいほどにあえかなのだった。

イヴェットは、ミシユリーヌの労役姿を喉に描き、そんなイヴェットにマジヨリーが声をかけた。

「ほんとに御苦労さまだったわね。でも、フオンティーナの無理を聞いてあげただけのこと、あったんじゃない？」

イヴェットは堪まらなくなり、二人だけなのを幸いと、取り纏がるばかりに訴えた。

「あの、実は——」

「ま、いいじゃないの。話があるなら、いずた、ゆっくりね。先はまだ永いのよ。あなたのお話かしら。さ、帰りましょうよ」

ことを聞かない方がいい場合は、世くらもある。マジヨリーはイヴェットを抱くようにして、深い声で言った。

女囚四一〇号アドリエンヌことシュザンヌ婦警は、第四監舎の第四監房で、いささかイライラ気味だった。九月も既に残り少な、作戦開始して既に二十日になるというのに、セルマ・ジャンメールの口からは、知り度いこととのヒントさえ得られないのだ。

今日は日曜日、口実を作った保安課のスカートに連れ出され、二時間ばかり息抜きして来たシュザンヌは、セルマの背を忌々しく睨んで溜息洩らすのだった。

「何の用だったの？ アドリエンヌ。絞られたようには見えないけど」

「なあにサ、つまらないことよ。ホラ、いつか話したでしょ。セルマ。ミシエルのパパアとあたしとのこと。なにかカンぐってやがるらしいわ。やんわりとネチこく調べやがったのよ。まさか、あんた、タレこんだんじやあるまいねッ」

「じよ、じよ、談いわないで。あたし、お前さんに脚鎖の借があるんだよ。お前さんがミシエル婆さんをマルめこもうとコロがそうと知っちゃいないことよ」

「そうお。なら、いいわ」

「二体、お金、どこに隠してんの？」

と、クラリスが割り込む。

「秘密 秘密。あんた、あたしより先に出るんじゃないの。昔の商売柄、誘導訪問しようっていうのね。剣呑なこと。ねえ、セルマ」

クラリスがえくぼ寄せて笑い、そこへ、イザベル鬼看守が現われた。

「あら、担当さま。またぞろ、紐がこんぐらかっちゃったんですの?」

「お黙りッ。吠え面かきたくなかったら、私を見てシャチホコ張りな。新品の“くつわ”が昨日届いたとこだよッ」

「イキのいいのが二、三匹要るんだよッ。こ

ら、四一〇号と三二六号、出な」

「またァ？ 先刻は保安課、こんどは、さし
ずめ憲兵隊かな。ロシヤの外交官とデイトし
たことがバレたのかしら。でも、財布には指
一本触れ……」

毒ずきながら出たシュザン又は、張り倒された。イザベルは知らないのだから無理もないが、それにしても痛いピンタだ。

二人は腰を連鎖され、ガツチリと前手錠をかけられた。イザベルの見幕を見て、エレー

又補佐が困つた表情を浮べ、シユザン又は片眼をつぶして見せた。シユザン又はは、どこかへ来た。

へ傳ひて行くの數日後に回れる。日曜の午後
に當り職員の間より志を逸れんとする者が慢々
に傳ひて行くの數日後に回れる。日曜の午後

テニス試合は僅さ様をこころなげで
其の難用をさせるために引張り出されるの

だ。先刻保安課でシュザンヌはそれを知り、秋の陽を浴びたくなって志願したのだった。

「だって、家族のひとたちも来るのよ。途中でイヤだと云ったって駄目よ、シュザンヌ」

「いいわよ。それに、三二六号のクラリスと

二人だけになりたいの。あのひと、すごくカ
ンが鋭いのよ。私のこと、勘付いてるんじゃないかと思うの」

そこで、四監からはその二人が使役に出る

ことになったのだが、イザベルに担当させたのはエレーナの失敗だった。シュザンヌとクラリスが日頃口にするストレスの毒舌、それに腹を立てているイザベルだから、あの調子だと、手錠のままでコキ使うかも知れない。

一方、三監からは、ルーシーとミシュリー
又とがマジョーリに連れられてやって来た。
従順であってノロマではなく、見物衆に不
快感を与えないというのが条件だから、三監
の人選も先ず妥当なところだ。

テニスコートの入口あたりで、ルーシーが

足を停めて顔を掩った。本館前庭の一角にあ

テニスコートでは、開始直前の試合を控え

見物衆が多勢集まっているのだ。それも制

華やかな軽装の女性たちが

来しげにしている。近くには未成年者矯正施

取もあることだし、ほとんどは関係職員や家

欲なのだが、ルーシーにとっては耐え難い思

なのだ。

マジヨリが鍵を取り出し、ルーシーはも

によりミシユリーヌも、いそいそと身をすり

させた。

「あの、これは？」

ルーシーが腰の鎖をまさぐる。

それは駄目。辛抱しなさい」

「お、お願い。決して不心得なこととはしません。誓います。ですから——おねがい」

ルーシーは手首を揉みつつ哀願した。

「それは分かってるわ。逃げるなんて思っ
てやしないわ。でも駄目。規則なんだから」

「ね、ルーシー。無理なことお願いして御心配かけない方がいいわ。どうせ、ホラ、私
ちはこんな服を着てるんだもの」

ミシュリーヌはそう云ってルーシーをたし
なめたものの、やはりマジョーリの制服の背
に隠れるようにしてコートに入ったのであ
った。

テニスコートは金網の囲いが広過ぎるた
めに、ミスした球は遠くに転がる。その球を拾
い集めるのがミシュリーヌたちの仕事だ。

三監と四監からの四名はシングルのコ
ートを受け持たされた。ミシュリーヌを認めて、
クラリスとシュザンヌが反対側からコート越
しに手を振った。

「あなた、知ってるの？ あのひとたち」

ルーシーが、見物席に背を向けたまま訊
ねる。

「ええ。四監で同じ房だったのよ。ね、ご
んなさいな。あの二人、手錠もはずして貰
えないのよ」

「あら、ほんと。でも、あのひとたち、案
外に平気な顔してるわ。恥かしくないのかしら
ねえ」

総務課のタイピスト娘がサーブ球を早々と
受け損じ、クラリスが笑い声さえ立てて陽気
に身をひるがえした。腰鎖が張ってシュザン
ヌが眉しかめ、二人の両手に手錠が光る。

ダブルスのコートでも歓声や応援が湧き、
ミシュリーヌたちは走り回った。

「ね、誰も私たちのことなんか気にもしてな
くってよ」

「そうね、ミシュリーヌ。あなたは手を出さ
ないでいいから、私について回ってよ」

「ええ、そうするわ。でも、球を持って行か
なくちゃ」

拾った球は審判員の手許へ持って行って返
さねばならない。

「もう二つ三つ溜ってからでもいいわ。ね、ミ
シュリーヌ。このひとつたら下手ねえ」

ルーシーは試合が進むにつれて、我が身の
姿もとかく忘れ勝ち、ゲーム状態に気を奪わ
れて身を入れる。無理もない。ルーシーはソ
ルボンヌ大学でテニスの選手だったのだ。

激しい打ち込みにラケットが漸く届き、球
勢に押されてそのラケットが弾けて飛んだ。

ミシュリーヌはラケットへ、ルーシーは球
へと鎖を引張り合い、二人はよろけて尻餅を
つく。ふりむいて眺めたショートパンツが唇
から歯をこばした。相手の強さが忌々しいの
と、テレ臭いのと、その両方を嘲笑にこめた
のだ。見物席からも笑いが起り、ルーシーが
涙を浮べた。ショートパンツの娘は医務課の
看護婦、ミシュリーヌの手からラケットをひ
ったくった。

「あの——相手は左利きですわ」
と、ルーシーが口を出した。

「ドライブが逆ですもの——」

「あら、コーチしてくれるのね。でも、御免
こうむるわ。ボール拾いに行かないの？」

女囚ルーシーは唇を噛み、長いまつげをし
ばたいた。

「イザベルったら、ほんとに意地悪ね」

と、金網際の草むらに球を探しながらシュ
ザンヌがこぼした。

「まったく忌々しいこと。あんだ、手が痛く
ない？」と、両手をガチャつかせる。

「痛いのは瘦我慢するわ」

と、クラリスが鋼鉄環をずらせる。

「だけど、私憤から差別待遇して威張ってや
がるのが癪なのよ」

「あたしたち、ちょっと口が過ぎるものね」
「分ってりやいいの、分ってりや。土下座してそう申し上げて、空涙の一雫でも流して、お慈悲願ひ上げて見たらどう？」

「まっぴらだわ。あ、あったわよ。たしか、もう一個、ここに転がったわね。ボンヤリしてないで、これ持ってよ、クラリス」

「ポケットへ入れたらいいじゃないの。スカートの裏側あたりの大きなポケットにさ」

シュザンヌの眸がキラリと光り、元婦警と現職婦警の二人の眼がカチリと合った。女囚の獄衣にポケットなんかがある筈もない。

「審判がこっち見てるわ」

シュザンヌは眼をそらせ、球を掌に身を起こす。

「球を持って来いってサ。でも、あんなジジイじゃ、いそいそとは行けないわねえ」

「そうとも。まじめなお向いさん二人に任せとくがいいわ」

「だいたい、球の数が少な過ぎるのよ。ケチなのは刑務所の悪い癖だわ」

「そう。サツよりもひどいわね。私たちの稼ぎ、どうなってるのかしら」

またしてもシュザンヌの顔が引き締まる。
「こんなものだけはフンダンにあるのよ。だ

から、ポケットこさえる布なんかは買えないって」

シュザンヌは手錠を引張り、左利きの娘に背後から毒づく。

「こぼさないでねッ、交換台の名花さん。あたしたちはシャムの双生児で、その上に両手が小児麻痺なんだから。あ、いたい——」

シュザンヌは顔をしかめて手錠をいじる。クラリスが腰鎖を引張って草むらに屈み、シュザンヌをじっと見た。

「ね、ここではアドリエンヌさんとやら……シュザンヌはハッとして球を取り落した。あなた、ここを出てどんな仕事をまたぞろ

おっぱじめるのかは知らないけど、こんなものを無暗矢鱈と、ひとの手にかけるもんじゃなくってよ。いい？」

二人は見詰め合い、クラリスがニコリとした。

「御存知のように私は元婦人警官。自分じゃ更生したつもりだけど世間じゃ転落っていうらしいわ。私、あなたが好きになったの。だから、見所ある後輩を探してたの。フッフ」
シュザンヌもクラリスの気質は好きだ。二人の女性はお互いを理解し合い、微笑み合った。

「世間さまでおっしゃる罪ほろぼしとやらをする気になっちゃった。きつと、あのミシュリーヌに感化されたんだわ。だから、悪い女とは付き合えないのよ。でも、自分じゃ、ゲームのつもりよ、逃げたり捕まったりは」

イザベル婦人看守がやって来て叱りつけ、二人を立たせてビンタを喰わせた。女囚の分際で仕事をサボリ、しゃがみ込んで話ばかりしているのだから、張り倒されても仕方がない。球を運んでの帰途、クラリスが囁いた。

「お目当ては、お金じゃなくって、書類でしょ？ それも、手紙ね」

「ええ、そうよ」

シュザンヌは思い切ってうなずいた。

「セルマの奴、値打ちに薄々感付いてるらしいわ。焼いたり捨てたりはしてない。それは確かね」

シュザンヌはギョツとし、焦燥に駆られて腕を絞る。

「突拍子もないところに隠してるらしいわ」「それが分からないかしら？ ああ——」

「あわてちゃ駄目。先輩としての忠告よ。ホホ。あの女、アブランシュの町の銀行に貸金庫借りてるわ。多分、母親の名でね」
シュザンヌは畏敬の眼でクラリスを見た。

「でも、おそろく、そんなところには隠してはいないことよ。ま、力合わせてボチボチやらない？私の方はタップリと時間あってよ」

「ええ、おねがい。力貸して頂戴。でも、早くやらなきゃ。いえ、私はいいのよ、半年かかったって一年かかったって。だけど……」

「分かっているたら。私の方が経験年数は長

四人の個性のある美女の 縛られポーズの代表的作品集

限定版
写真集

豊満と清楚

頒価一部一〇〇〇円 略号「限二」

登場モデル 長野 良子—大塚 啓子
五月亜紀子—新井マリ子

グラビア印刷による女体緊縛写真ばかりのアルバムです。内容は若々しい豊満な肉体美を誇る長野良子、大塚啓子の二人の女性の美しさを最高度に發揮した縛られポーズの大胆奔放な素晴らしい場面のかずかずを画面いっぱいに所狭ましと活躍させました。更に前記二嬢とは対照的に、清楚にして純情な初々しいフェイスと伸々とした若鹿のような肢体の持主である五月亜紀子と新井マリ子の痛々しいばかりの緊縛裸身を以て誌面を飾りました。

いのよ、いまのどこじゃ——。真剣なのね、あなた。ああ、思い出すわ、昔は私も——」

クラリスは一瞬深い眸で秋空を眺めた。

「でも、真剣過ぎて危なっかしいの。こう云っちゃ悪いけど、見ておれないくらい。カンずかれたら、どうするのよ？あ、ヘタクソ。あっちの娘にはラインを引き直してやらなくちゃ。また、草むらで宝探しの巻——」

シュザンヌは鎖鳴らして這い回りつつ、縄がりつくようにクラリスに云った。

「ね、クラリス。信用していいわね？ その代り、うまく行ったら悪いようには……」

「おっと、それは云わないで。もし、私のために何かしてくれるんだったら、私はいいから、あのミシュリーヌにしてやってね。ところで、通称アドリエンヌは警視庁じゃなんて名前なの？それ教えてくれなきゃ、なかった話にするわよ。名だけでいいのよ、姓は知りたくないわ」

「あの、シュザンヌです。生まれは……」

「ストップ。そう、シュザンヌね。ま、こんどパクられるときには、あなたの手錠受けるつもり。でも、もうヘマはやらないわよ。ホホ。一生懸命やって、警部ぐらいにはなってるね」

向うでミシュリーヌが嬉しげに手を叩く。三監のシングル選手モレシエンヌのストリートが見事に決まったのだ。

「あのミシュリーヌってひと、ほんとにいいひとねえ」

「あ、そうだね、シュザンヌ。あのひとの転舎は、あなたのせいね、きつと」

「そうなの」

シュザンヌは説明し、クラリスは溜息ついて恨めしげだった。

「ね、ね、シュザンヌ。先刻の瘦我慢は取消すわ。うまく行ったらさ、ミシュリーヌと一緒にになれるようにしてくれない？」

「約束するわ。同性愛なのね、ホホホ」

「バカ。なぐるわよ。あーあ、これだからポリがイヤになっちゃったの。真白き雪の下には黒い土が必ずあるって、すぐにそんなことしか考えないんだもの。水晶の上に降る雪だってあるのよ」

「ゴメンなさい。約束するわ。剣にかけてと云いたいんだけど——そうね、じゃ、この忌々しい道具にかけて約束するわ」

二人はお互いの手錠を打ちつけ合って笑ったのだった。

愛
読
者
原
稿

△マゾヒズム小説▽

嗜
虐
の
朱
唇

福
田
久
文

嗜 虐 の 朱 唇

恐しい夢を見て、その恐しさのあまり、これは夢だと気がついたとき、人は自分の意志で目を覚まそうとすることができる。それと同じように恐しい現実には巻き込まれた者だけが人間の素朴な生存の恐しさを知り、その根底にあってそれを支えて遍在する形而上の生存に目覚めるのではないだろうか。その生存は清らかな精神そのものである。そしてそれはまた素朴な生存のなかで苛まれている魂に対する慈悲の涙に溢れた精神でもある。

しかしその清らかさや慈悲は天真な少女のそれとは全く異質の厳しさをもって人を煉獄に繋ぐ。この形而上の生存に目覚めかけた者には過去のいかなる過失も弁解を許されず、

容易に振り離すすべもない、その暗い過去を負ったまま、人は魂のあがきをあがかねばならない。

尖塔のしたには赤いネオンが毒々しく輝いているが、車を降りて小暗い植込みのなかにはいると、アーチ型の大きな玄関は真冬の夜の寒気のなかに暗かった。それは陰湿な墮獄の情慾に身をほてらせている者にとっては地上の楽園に他ならないが、その暗さ、惨めさ醜さに身を沈めてようやく光明を認めた者にとっては心身を冷酷に苛まれる煉獄の館ではないのか。背丈のある肩を並べて彼女は囚人を収檻する刑吏のような何気ない歩みを運びわたしは音立てて開いた自動扉に、煉獄の響

きを聞いて呑み込まれていった。

暗い螺旋階段を三階まで登りつめて、女中は一層暗くなった長い廊下に行く。わしを引き廻しているかのように女中は黙々と歩き続ける。黒い帽子に黒いオーバーを纏った彼女はわたしのすぐあとの薄暗がりのなかに影のように付き添って追い立てる。ようやく煉獄に赴いた魂を胸中にして懊悩する者のうなだれた歩みが愉しいのか、その影は寄り添って来て引かれて行く者の肩のあたりを片手で抱きかかえ、その手に酷薄な興味をこめて贅をまさぐる。

低い含み笑いを洩して、彼女はわたしの耳元に囁いた。

「はい浮気やね」

廊下を廻って歩きつめた端のドアの前で女中はようやく立ち止ってスイッチを入れた。

「どうぞ」

むっとした暖い空気とともに眩しい明るさがそこにあつた。暖い空気に触れると、黄色い電燈の光は一段と濃くなるのだろうか。わたしの抱え込まれた呵責の密室は毒々しく色鮮やかだった。深紅の羅紗を張りつめた天井に金色のけけばしいシャンデリヤの安物が垂れ下がり、左側はベッドを内蔵して黒く透くカーテンが静まり、右側は青灰色の壁の上部にガラス窓が並んで漆黒の冬空を見せている。正面、黒いカーテンの向う端に接して浴室のドア。そのドアの右に暖炉があつて、右側の青灰色の壁に接している。床は白い斑のついた濃緑。応接三点セット、三面鏡、テレビ、冷蔵庫が左側の壁寄りに並ぶ。入口の左右は洋服ダンスとトイレが立っている。すべてが金色のシャンデリヤの光を夏の太陽のように過度に受けて静まっていた。

女中が鍵を小卓の上に置いて立ち去ると、入れ替りにドアを叩いて彼女の許可を得た別の若い女中が現れ、声低く茶菓を卓上に置き入浴の用意を済ませて消えるように去った。

黙って茶を吸っていた彼女は、すぐ卓上の鍵を取って入口のドアに錠を掛けた。その冷酷な物音の次に洋服ダンスを開く音を立て、服を脱ぎ始めた。わたしも彼女の側に立ち寄りてやむなく洋服掛けを取った。

男の脱衣は如何に沈み勝ちにゆっくり行われても女のそれよりも早い。タオルを取って浴室のドアへ向おうとしたわたしを、ブラジャーを外しかけていた彼女が咎めるように呼び止めた。

「待って。そこで床の上に坐んなさい」
顎をしゃくって応接セットのあたりのプラスチック床を指し示した。

浴衣を着た彼女は、肘掛けのない低い椅子を小卓と平行に置いて腰を下ろし、床の上のボストン・バッグを引き寄せて、ソーセージ大のゴム棒、筍のような長煙管、手錠、画鋏の紙箱、鎖付きの太い頸輪を次々と小卓のうえに置きながらいった。

「おずおずして、いじらしゅうて、あんたを初めて誘ったときそのままの、新鮮な感じだわ。いや、それ以上かしら？ フ、フ。お風呂より先にいじめたくなった」

最後に取り出した黒いネットを頭に被り終えると、彼女は手錠を手にして立ち上り、目

を背けてうなだれるわたしの背後に回った。手錠の輪と鎖が床に触れて鳴る音がし、輪の一つで腰を小突かれた。腰を上げよというのだ。眼前に並べられた小道具を見ただけで、どうして弄ばれるのか、よく分るのである。

「どんなことにも、あなたの気の済むまで耐えるから、もう今日限り、僕を束縛しないでくれ。いや、いけない。こんなことをいっては、却って彼女の気持を荒^{すさ}ばせ、その情慾を昂^{たか}らせる……」

辛うじて声を呑んで天井を仰ぎ、腰を浮かせて膝で立った。

手錠が音立てて足首に締った。次に頸輪の両端を持った彼女の手がわたしの喉でその止め金を締めた。わたしはいわれるまでもなく両手を上げて両腕を後頸部でX型に組み下ろした。わたしの手をそのまま固定するため鎖を手首と頸輪のしたに何度も潜らせては引き締めながら、彼女は声を掛けた。

「わたしはね、あんたが可愛いよそのお嬢さんを貰うのなら、それも却って面白いと思つてたんよ」

寝室で思うままに弄んでいる自分の養女とわたしとを結婚させてわたしを手もとに置くという不穏な意図は挫折したのだ。彼女の



失意をその声の響きに聴くような気がした。

「さ、お利口、お坐り」

そういつて片手でわたしの肩を押しつけ、片手を延して画鋏の箱を取った。手錠が痛いために心持ち腰を浮かせて正坐した両脚の周りに、それは無数に零れ落ちて来た。

彼女はわたしの背後のベッドのカーテンを開き、ベッドの壁に嵌められた大鏡の覆いを払ってから、椅子に戻ってまたわたしと向い合った。

膝のうえでシガレットケースが開かれて、

煙草が一本撮み出された。うなだれているわたしの視線のそとでジューというマッチの発火する音がして、強い煙草の匂いが漂い、筈そのままの竹の地下茎に付けられた厚い真鍮の吸口が垂れ下がって動く。眼を上げると、火のついた煙草を撮んで持ち、煙管だけを左右ににじって、煙草の吸い口を煙管の火口に詰め込んでいるのだ。物慣れた静かな手つきである。

身軽に責折檻を愉しみ、いつでも捉えて逐情できる身支度をした初老の女は、眼前に引き据えたわたしの視線を捉え、長煙管を持ち上げて横啜えに吸い口を嘗める。白っぽいホテルの浴衣には、色どり華やかな長襦袢の艶かしさも、黒く透き通るネグリジェのエロチシズムもない。それは獄卒の仕事着のように殺伐だった。あっさりとしかも細心に化粧されたその顔、かつて歪んだ情慾を昂らせて高く慕わしい婦人を仰ぎ見るように眺めたその嗜虐の表情も、いまはただ醜悪で、朱唇を長煙管の吸い口に歪めて、ぎらぎらとした視線を放つ。

心の呵責に比べたら取るに足りないと思っただ性的拷責も、冷たい床の上で一片の情慾もなく目睫の間に迎えると、心の呵責を追いや

って余りある。
／＼やめてくれ／＼

と叫びたい衝動を抑え、煙管を吸って頬を落した彼女の顔をまじまじと見詰める。酔眼に見る女の顔のようにひととき色鮮やかに浮き上り、しかもそれでいて時空を超えた幽界から窺っている鬼女の顔のような遠さが感じられた。

朱唇を洩れる白濁した煙が薄く拡がって降り、冷たい微笑がその顔に拡がった。

「どう、あんたも一服しない？ いいものよ」
現実の女の低い声だった。吸い口が迫って来ると見るや、それは唇を突き通り、歯に強く当って歯茎に走った。ひとときの幻想から覚めたわたしは、思わずそれを奥歯に挟み、何もこんなに粗暴にしくなくてもという不満を籠めて強く噛み締めた。何よりも嫌いな苦みが舌に拡がる。と、嘔吐を伴う鈍重な痛みが口に湧き起った。吸い口が突き刺すように押し込まれたのだ。一突き、また一突き。舌を喉を、軟口蓋を、吸い口が襲った。それは予期しない初めての拷責だった。

「素直にしないさい！ 突き倒されていいの！ 鋏だらけの体、バスで洗ったげましようか？」
わたしは苦い煙を吸ってすぐはき出した。

「そうぞ。いい子、いい子。さ、もう一服」
片手を後ろへやって窓際の三面鏡を開き、
体を少し引いて彼女は鏡の面を眺めた。

「どう？見てごらん。見なさいったら。いい
恰好じゃない？だれかさんに見せたいわ。僕
結婚シマシタ。なんなの、年上の女だと思っ
て。いい気になりなさんな」

最後の強い一突きとともに侮蔑の言葉をい
い終えると、処刑のまえに囚人に煙草を与え
た刑吏のような何気ない表情に帰って長煙管
を持ち直し、スリッパを外した右足をわたし
の両腿の上に置いた。そして、わたしの左の
腋のしたに火種を求めるかのように煙管を咥
えて顔を寄せ、惨たらしく頬を落して吸い口
を吸ったのだ。毛がジッジッと音立てて焼け
疼痛は頸の芯を刺した。

「やめて！」

という声も出ずに、わたしは激しく頸を左
右に振って悲鳴を上げた。

「ギャーッ」

それは行き過ぎを示す合図であり、いつも
の彼女ならさっとやめるのだ。

「じっと！」

左手が素早く頸輪を掴んだ。彼女は歪んだ
朱唇に吸い口を咥えたまま、白い煙を洩して

火を当て続け、わたしには目も呉れずにわた
しの背後を眺めていた。一瞬見開いた眼にそ
の熱中した表情を捉えて、彼女がそこに開か
れているカーテンの奥の鏡を見ているのを知
った。

「大袈裟な、たしなみなさい！」

罵倒の言葉を口にした彼女の顔が少し傾く
や、その唇はまた吸口を求め、煙草の火が右
腋の処女地を求めて迫った。齒を疼くばかり
に噛み締めて、眼を固く閉じ、突かれた齒茎
の血が滲むに任せた。

「眼、開けて」

長煙管を咥えたままの窸つた声。朱唇はま
た音を立てて吸い口に締った。ぎらぎらと光
る眼が苦悶するわたしの表情を捉えて放さな
い。

焼火箸で腋のしたを切り裂かれたような激
痛も、彼女が頸輪から放した手を胸もとに差
し入れて椅子に凭れ掛くと、ただ火傷の疼き
を残すだけだ。うなだれたわたしの鼻先を、
熱い火口が突き上げた。

「顔は上げていなさい」

いわれるままに彼女の眼を避けてガラス窓
を見上げた。肥り気味な黄色い体に浴衣をは
したなく纏って、歪んだ行為に耽る女が、た

だ醜くかったのだ。とりわけ根強い悪性と情
慾を湛えて輝る眼を避けた。その暗い光を放
つ眼に魅せられて墮獄の情慾をいだくのを恐
れたのではない。脆く、醜く、惨めなもの
として、見るに耐えぬ「もののあわれ」を覚え
たのだ。また奇妙なことに、その外ならぬ彼
女の眼に、ただいたずらにけだもののように
身を晒しているわたし自身も物苦しく、恥し
いのだ。

「責め苛む者だけが罪深く、責め苛まれる者
は無垢だ」といい切れるだろうか。情慾を昂ら
せて異性を苛む者の手に喜んで身を委ねる者
は、いうまでもなくともに無明の子であるが
苛む女の手に落ちて一片の情慾も持たぬ者
も、ひとたび個体を離れた清澄な観想のなか
に彼がはいるとき、苛む者の因って立つ無明
の世界が自分自身の持ち物に他ならず、その
抜き難い暗黒が自分自身の責任だという非条
理な想いが芽えないうか。だからこそ、
眼前にいる無明の化身のような女を如何とも
できない非力が苦しかったのではないだろう
か。わたしの恵まれない智力にはよく分らな
い。V

窓に見られる漆黒の夜空を凝視していると

ふと心身の痛みを離れて、その形のない唯一の自然のなかにわれを忘れた。が、それも数刻。彼女はまた喋り始めて、わたしを惨めな肉体に引き戻した。

「その表情、いいわ。それに、すらっとした胸、締った腰もと。白鳥のような感じ。いじめたくもなるわ」

煙草を笞のように持ち直した彼女は、その手を差し延べて、腋のしたの火腫れに雁首を近づけた。

「ホウ、鳥肌立てて。羽根耨られて帰れない歎きの白鳥ね。マタ、マタ、綺麗なお目めは開けてて頂戴。これっ！」

思わず体を後ろへ引いたわたしに短い金切り声を上げるや、乳房をいじっていた手で、わたしの喉を挟るようにして頸輪を握り締めた。わたしの上体の傾くのを幸い、雁首を押しつけ、煙管を握った手を小刻みに振動させたのだ。白い歯を覗かせた彼女は椅子を跨いで両足を踏ん張り、吐く息を荒くして責め立てる。身を震わせてその操りと痛みに耐えていると、喉の奥から込み上げる呻きとともに齒茎の血が生臭く顎を伝って滴り落ちた。

長煙管が小卓のうえに放り出されたのと、彼女が椅子に坐ったまま覆い被さって来たの

が同時だった。頸輪を握っていた手を……降ろし、残る手で肩を抱きかかえてわたしの口を求めた。血を吸り取った舌が強くわたしの歯に押しつけられ、体が揺られた。口を開けというのだ。氣力なく口を開いて眼を閉じると、血とニコチンの臭みを微かに溶して濡れた舌と唇が、吐く息の臭いと脂粉や香水の匂いとを濃く漂わせて、弾みのある執拗な動きを始めた。情慾を揺り起そうとするその魔性の動きに、わたしは身震いして眼を見開いた。

眼を閉じて目捷にある女の顔。抜き難い無明の化身。

暗雲の垂れ籠める空を見て、空は黒いものだ。人はいうだろうか。それははかないもの過ぎゆくものなのだ。空の青さはそのためにいささかも浸されはしない。彼女は空の青さを持たぬ女だっただろうか。

わたしを三年数カ月も彼女に結びつけ、この私刑の日をもたらしたのは、彼女によって煽られた破壊的な情炎のためではなかったのだ。わたしは辛うじて残っている誇りに掛けて、そういい切ることができる。

彼女は婦人には珍しく詩や宗教に強い関心

とかなりの理解とをもつことのできる人だ。彼女が読んで欲しいといったテキストが、わたしが暗誦するまでに身につけたボウのあまり知られない小品「妖精の島」や「エレオーノラ」だったのは、驚きと喜びの交錯する感慨をわたしに与えた。わたしたちは早速その週の土曜日の午後から彼女の屋敷の応接室のテーブルに向い合って、同じテキストを開いたのだ。彼女の語学力は予想以上に充実していた。混み入った構文を僅かな説明でよく呑み込んで、理解の滲み通らぬ箇所が次々と氷解していく喜びを表情と短い声に溢れさせていた。それは教える者にも同じ喜びを与えずには措かない爽やかなものだった。またその極めて象徴的、形而上学的内容についてはよく分らぬときには、潤むような眼でわたしを見詰めたがらわたしの言葉に聴き入って、信じようとした。それは優雅ないじらしさだった。一分の隙もなく和服を身につけ、ノートをやめて読み終えた箇所を俯き加減に低く朗読する中年の婦人に、わたしは始めて空の青さを身につけた女性を見る思いがした。そしてそれはあの頃のわたしには貴重な救いはなかったか。育ちのよくない無教養な小娘に無残に初恋を踏みにじられて放心していた

わたしにとって。

それに、配偶者を持たぬ若い体が門地や教育の手枷、足枷まで受けて苛酷に情慾を虐げ遂に苦しみあまり、中年の婦人のまゑに身を投げ出したとき、その新鮮な体を自分の好みに従って自由にするのはその女の一つの好意ともいえる。敢えて体を委ねたものにとっても、通り一遍の扱いを受けるよりはむしろ手や口を拘束する必要のあるほどあくどく弄ばれる方が、生傷や極度の苦痛を受けぬ限りよりよく喝きを癒してくれるのであり、また手や口を拘束されていることは、一人の門地のある者として甘受できないようなことをされた場合、耐え易いのだ。

あるいは、彼女の激しい性の飢餓と利発とが、わたしの意向にかかわりなく、あくどい手の込んだ行為に耽るのだともいえるだろうが、彼女はそれを最上のものとして反省なくそれに浸っていただろうか。

初めて彼女の屋敷に泊ったとき、歎異抄の和綴手沢本を蒼然とした奥座敷の文机に見たことがある。そして、その部屋で、情炎の余烬をようやく鎮めたとき、鬢のほつれを掻き上げて、

「わたしって、ほんとに罪深い……」

と呟いた彼女を知っている。あるとき、嵐のあとの空の青さを彼女の横顔に見なかったか。

△この眼を閉じた顔、執拗にわたしの舌を弄んで離れない体、これはあなたの仮想なのだ……▽

無明の立ち籠める彼女の顔に、訴えるようにそう念じた。

ようやく眼を開いて口を離した彼女は、舌なめずりをして口に残る唾を喉へやり、怒りとも昂りとも決め難い感情の籠る低い声を洩した。

「えらい気がないのね」

口もとを引き締め、眼に強い光を湛えてわたしを見据えたまま、身を傾けて股間に降していた手をさっと小卓のうえに上げ、二三度叩くように荒々しく手探りをした。長煙管を掴んだと見るや、その黄色い羅字竹のひと節をわたしの片手の人差指と中指のあいだに勢強く挟み込み、その二本の指をそのまま掴んできりきりと締め上げた。

自分自身の悲鳴が自動的に喉を突いて出るのを知り、懸命に声を殺したが、それは喉を振動させ、呻きとも悲鳴ともつかぬ陰に籠った響きとなって密室に溢れた。

「ぶつっとノ（黙って）」

肩を抱きかかえていた手でゴム棒を掴んでわたしの口に押し込んだ。

「噛んで、しっかり銜えてるの。もたもたしたら、こうよ」

ひととき強く指を締め上げて、押し込んだゴム棒をゆすつてから、それを放した手でわたしの頸を引き寄せ、反り返った椅子の凭れに上体を倒して行った。

「ウ、ウーン」

言葉にならない鼻に掛る声を出して、わたしの脇腹を片足で叩きつけた。犬畜生を促すようにせき立てたのだ。

長煙管を挟んで握られたままの二本の指には、挽ぎ取られるような痛みが間隙を置いて湧き上り、彼女の荒い呼吸は、ようやく無明の呻きに変って行った。

指の責苦が去り、鼻先の臭気からも解放されたわたしは、始め坐らされたままの正坐に返った。ただ手錠を避けて腰を浮かす力などはない。手錠が足首に喰い込むに委せていた。

長煙管の吸い口とゴム棒の痛みの残る口と喉は、次々と加えられた拷問のために渴き切

って苦しいほどだ。車を降ろされてから初めての短い言葉がわたしの口に出た。

「水を……」

タオルを床へ棄てた彼女は黙って立ち上りトイレにはいつて水音高く手を洗うと、冷蔵庫からセロハン包みのつまみとビールを取り出して椅子に戻った。そして、わたしの眼の前でグラスにこんこんと音立ててビールを注ぎ、わたしの言葉など聞かなかったかのように、喉を鳴して飲み干した。

「甘露、甘露。ところで、何かいい忘れていることはないか知ら？」

そういつてはまた注いだグラスを口のあたりで持ったまま、椅子の背に凭れかかり、眼を細めて口もとに厭な微笑を浮べた。

「ご聡明な方には何をいえばよいかお分りでしょう？折檻なしで気持よく聴かせてくださらない？」

微笑を消して彼女は真面目を装った。

「いやなの？　そお？あんたの結婚生活の今後のことは、わたしの腹一つなのにねえ。もうそろそろあんたも年だから、いい代りがあればって、心掛けてはいたんよ。でもねえ、一言もいわずに新婚旅行まで済して来たとおっては、わたしもちよっとねえ」

「何をいつても、したいだけのことはする。ピエロの真似だけはやめよう。妻への配慮さえなければ、遂情を終えて痴呆のようにしゃべり出した女と毒々しいこの密室とを許容することさえ笑止なのに」

怒りではない。悔しさでもない。ただ馬鹿らしさがようやくわたしの胸裡に生じていたのを憶い出す。

「あ、そお？やっぱり。ドウゾ許シテクダサイなんて、いうのいや？」

心にもない冒瀆の言葉を真に迫るまで何度も繰り返していると、いつのまにか狂ほしい悶えが心に渦巻いて来るのをわたしは知っている。酔の廻り始めた女の、齒の浮くような言葉が続いた。

「いいわ。じゃ、いい声で何かお唱い」

わたしはうなだれたままふと讃美歌の一節を思い浮べた。

みいつをなみしみわざをあざみ

ながくめぐみにそむきまつりぬ

心の煉獄がまた新しくわたしを脅かした。へ肉体の苛責よりも惨たらしく人の心を締めつけるのはこの煉獄の悔恨だ。これは、住み慣れた地獄を立ち去るために、これからひとり夜となく昼となく負い続けて果てること

のない業苦の影なのであろう

耳が引っ張られた。体を乗り出した彼女の顔は酔いが廻って赤鬼のように赤く、ビールの臭いを発散させながら、にちゃにちゃと燻製のいかを噛んでいた。

「エノ」

鼻に掛る、低い、短い掛け声とともに、鉄拳を固めてわたしの顎を打ち上げた。

「歌モ厭デス。エノ僕ハ黙ッテイマスカラ、エノモットイジメテクダサイ。エノそうでしょう？エノエ、エノ」

言葉の切れ目ごとに鉄拳を当てた。こめかみに、鼻に、また顎に。耳を力任せに片手で引っ張りながら。

女は愉しげに腰を上げ、痛む腋のしたに両手を差し延べてわたしを立ち上らせた。

「バスへ行くまえに、このうえでもう少し」わたしは腰を宙に浮かし、背中は小卓に、

手錠で繋がれた両足は床に立てて、仰向けに置かれた。後頭部でX型に組み下ろされた両腕が枕の役割を果たして、わたしの姿態の全貌が黒いカーテンの奥に見られた。

彼女はビール壺と土瓶を持ってトレイに立った。

わたしは自分のその浅ましい姿態に加えら

れようとしている、いくつかの責苦を思い、眼を閉じて小卓の非情な硬さと滑らかさのうえに身を竦ませた。と、胸に湧き起る声があった。

△責め苛まれる者はただいたずらに苦しみを受けて悶えるのだと思いますか？その悶えは運悪く地上に生れたために持たざるを待なかつたもの、怜悯な動物と大差のない智力や地上の生物のいずれよりも凄じいかずかずの意慾から、あなたを解き放つのです▽

△あの女の表情と仕草にお前はその手のうちをひとつひとつ正確に読み、その醜悪な心の動きを自分の心に繰り返している。それはお前に懸け降ろされていた天上への通路、あのみずみずしい精神の香気をすべて汚され尽して、凌辱者と同じものになってしまった何よりの証拠ではないか。愚かな奴。こんな女の手に落ちるよりは、芳しく芽えていた精神を胸にしたまま、野獣に肉体を喰いちぎられたほうが良かったのだ▽

△地獄と煉獄を通過して来た者だけが本当の輝きを見せるのです。あなたの今の心身の悶えそれは呵責しているあの女の心とは異質な天上のものです▽

水を流す音がやまない。天使のような声と

悪魔のような声が、こもこも殆んど肉声をもって胸に迫った。

△あの章女のような妻、お前には過ぎた敬意と情愛に溢れてお前の帰りを待ち侘びる者にこれは何という不貞だ、欺瞞だ。お前は告白なしにあの白魚の手を取った▽

△あなたと階老の契りを結んだ人は本当の輝きに溢れたあなたを慕える人です。そのため苦しみに悶えるあなたに何の不貞の歎きがありません。それに、あのひとには、まだ人の世の醜さを知らしてはなりません▽

トイレのドアが胸奥の声を吹き飛ばすように音高く開かれた。彼女がそこから笑顔を見せて現れ、両手に提げたビール壺と土瓶を掲げて見せた。

「さあ、水よ」

△来たぞ、女が。拷問だ。呻け。マゾヒズムの劣情は、許さない▽

△肉体の苦痛が目覚めに連なるのです▽

「神妙なこと。廻上の鯉ってとこね。ウント責メテクダサラナケレバオ氣ニ召スコトハ申シ上ゲラレマセン、でしょう？わたしもそのほうがいいのよ。ゆっくり料理させて頂戴。

おばあちゃんになると、立て続けには召上れないの。ホ、ホ、ホッ……」

そういいながら、初老の女は椅子を小卓に向け直して腰を降ろした。首を傾けて彼女を見上げると、ネットを被った髪の毛のうえに後ろの暖炉の棚の黒い壺が重なって、魔法の水を勧める魔女の冠のように見えた。ビール壺を片手に持ち、残る手でわたしの鼻を摘まんで優しくにいった。

「お口をあけて」

わたしは妖術に掛けられたように眼を閉じて口を開いた。冷たい水だった。が、わたしの歯のあいだに壺の口がはいるや、それはぐっと押し込まれて口を全く塞いでしまった。眼をかつと見開くと、口を歪めて固く結び、眼もとに冷たい微笑を浮べた彼女の顔があった。壺が小廻りに廻り始めた。それは長煙管の吸い口とは比較にならぬ口と喉の呵責だった。冷水に咽ぶ喉にビール壺の口が当り続け、激しい嘔吐を惹き起すのだ。

「フ、フッ。これじゃ飲めないわねえ。ぐずぐずしたら、こうされるってこと。零したら突き落すわよ。さ、召し上れ。おいしいからきれいに飲むんよ。そうら、零れる！犬みたいに床で嚙りたい？」

飲むのをやめると、鼻がきつく摘まれて息が詰る。壺を咥えた口を緩めて息をしようと

すると、水が溢れる。その窒息の苦しさとは紙の恐しさだが、ようやくビール壘一杯の冷水をわたしの胃袋に流し込んだ。

彼女はビール壘を床に置くと、鼻を捻り廻していた手を離して、含み笑いととも土瓶を持ち上げた。そして、わたしの頭を抱えるようにその手を延し、土瓶の吸い口を自分の向こう側からわたしの口に差し込んだ。

閨房の悪遊びと事業にはアイディアに富んだ彼女であるが、画紙を撒くことや、この土瓶のなかのものを「ネクター」と名づけることは、愛読している二、三の風俗雑誌から取り入れたのだ。感心してわたしに見せていたことがあったから。しかし、わたしはマゾヒズム小説の主人公ではない。画紙に脅かされながらいたぶられるのは忍べても、こんなものを飲んで喜ぶ趣味は毛頭ないのだ。

「もったいなくも、かしこくも、ネクターを嫌うときは、神罰たちどころに下って怖いわよ。フ、フッ」

女は笑って床へ手を伸ばし、ビール壘を片手で持ち上げるや否や、調理台の肉塊を叩き切るように、わたしの膝節に持ち下した。飲むのをやめるのを見計らって次々と処を変えて打ちつけた。恥骨、膝節、向こう臍。こつ

ん、こつんと音立てて電流のような痛みを走らせるのはまだ耐え易かったのだ。画紙のうえに身を落しても避けたい程苦しかったのはきねで洗濯物を叩くように、ぼんぼんと立て続けに腹を打たれたときだった。張った腹は喰い込んだビール壘を跳ね返えして、失心しそうな痛みと吐気とを惹き起すのだ。わたしは残る液体を一気に飲み干した。土瓶の口は遂に臭気だけを残して空音を立てた。

椅子に坐ったまま土瓶とビール壘を床のうえに降し、その両手を広げて、彼女はわたしの……と喉もとを驚嘆みにした。

「こうして、絞め殺して食べてしまいたい。可愛い……」

わたしの体臭と膚触りを愉しむかのように頬を、鼻を、摺りつける。幽霊に近づかれたような気味悪さが、ぞおっと背筋を走った。それは彼女について経験したことのない情念だった。

△この女の嗜虐の姿態と表情に魅せられるのは、激しい情欲に眼の霞んだ者だけがすることだった。敬愛する妻に逢って、その汚れを洗い落したわたしには、もうこの女に惹かれることはないのだ▽

わたしは満足だった。しかしその満足には

喜びはなかった。静かで爽やかな早朝の大気のような寂しさに包まれて、わたしの精神はただ冷静に冴えていたのだ。そしてそれは、手足を鎖に繋がれて冷たい卓上に身を傾ける若い男の体に、生暖い息を齒のあいだから洩らして頬摺りする初老の女の、その腐肉のよう臭いも感触も、冷たく捻ね返した。

△こんな女の心に空の青さを見たのはわたしの虐げられた精神の錯覚ではなかったか。下賤な女が人を捉えるために賤しい情愛の素振りを見せるように、この女もただ智的な媚態を愉しんでいたのではないか▽

卓上に置かれた肉体と関りなく、わたしの精神がようやく生暖い地獄の束縛を外して身を起し、冷たい大気の中に移るのを覚えた。

弄ばれている者がいまもなお自分に魅せられていると信じ切っているかのように、彼女は鼻に愉しみの含み笑いを洩して、脇あばら骨のうえの皮膚と肉を齒に挟み、右に左に捻り始めた。

脇腹が抓り責めに弱い箇所であることを、わたしはこれまでにじゅうぶん知らされている。が、わたしを狼狽させたのは、その操りを伴った痛みではない。

△このままでは隠しようもない処にながく残

る齒形を着けられてしまう！それでは何のた
めにこの私刑の密室を彼女に許したのか分ら
ないV

わたしは初めて声を高くしていった。

「よして！そんな、齒形、つけるなら、僕、
出て行く。あとは、勝手に、気の済むように
なさい。それで、ウム、ム、ムウ！」

喉を締めていた手がわたしの口を覆い、ひ
ときわ激しく狂ったように噛みついて、左右
に捻じ廻してから、ようやく口を離れた。

「綺麗に悲がついたわ。ギヤア、ギヤアいっ
た罰よ。こんで勝手に口きいたら、猿轡はめ
て朝まで帰えささないから。わたしは面白く責
めてるときに口をきかれるのが大嫌い。わた
しの好みなんか、もうお忘れ？」

彼女は右の肘をはって、わたしの膝のうえ
にしなだれかかり、口を覆っていた左手でわ
たしの頭を抱き起した。彼女が口を近づけた
だけで、いつもことあたらしく、縛られた裸
身を跳ねて声を立てざるを得ぬ、あの卑猥な
拷責を始めようというのだ。

「覚悟はいい？」

噛み締めた齒に呻きが洩れて一瞬全身が強
張ったが、わたしの胸の清澄な悲しみはその
ためにいささかの濁りも受けず、わたしの眼

は彼女の邪惡な微笑をただ映していた。

陰に籠った、鼻にかかる唸りが、その口を
歪めて洩れ、齒を立てる痛みが加わるや、再
び口を覆った手が指を動かして口を驚擱みに
した。噛み殺されるような激痛。跳び上った
足は弾みをつけて床を叩き、遂に足の裏に鍼
を突き刺した。

女は身を起して手を離れた。わたしはシャ
ンデリヤのしたで眼を閉じ、黒ずんだ黄色の
とばりのような喉に双の眼を包んで、身に振
り掛っている厄災の大きさを思い返えした。

八人が幸福だと心から喜べるのはその短い一
生に果して何回ある？しかもその欲びは永く
続かないのに、幸福の頂上に息づいていた者
を捉えて破局の地底を覗かせ、その恐怖に凍
む身をはしいままに弄ぶとは……V

騒がしい含嗽の音が起り、それがわたしの
顔面に吐き出された。頭を左右に数回激しく
振って目を開くと、ベッドの枕もとから取り
出したコップを口に寄せて、わざとらしく顔
を隠している彼女がいた。水をまともに掛け
るために、わたしの顔を片手で抑えた彼女は
さも汚らしいものを口に咥えたかのよう
に、また天井を仰いで水音を立てた。

わたしにはこんな素振りを示したことはな

かった。逐情のあと、わたしの腰を片手で抱
きかかえてわたしを見上げ、母親の乳房にす
がっているような気がするとさえいつていた
彼女である。わたしは、だから、その水音に
わたしへの侮辱とただならぬ悪意とを明らか
に聴き取った。そしてそれが、ゴム棒を咥え
させたわたしの頭を引き寄せたときにも、無
言のうちに示されていたのに気づいた。彼女
は金で買った男とは正常な関係は一切もたず
ただ一方的な快樂の道具に使うのである。下
賤な男同様に弄ばれる惨めさは、鼻に通る水
よりもなお狂ほしく、わたしを悶えさせた。

かつて彼女に誘われるままに待合へ行くと
中年の女高利貸（この惡どい女は彼女の家の
老婢の妹だった）が一人の青年を伴って待っ
ていたことがあった。あの憐れな若年の中学
教師は、返済期限の切れた借用証書を自分の
血清反応の証明書とともに彼女に買って貰う
ために、高利貸に拉致されて来たのである。
彼女はその青年に裸体になることを命じて全
身を眺めたのち、マゾヒズム傾向のないのを
確かめるのだといって、芸者上りの高利貸に置
屋の折監を実演させた。

裾を捲った女は伏臥させた青年の腰に跨が

り、細引きを口に咥えて手際よく高手小手に縛り上げ、次に向きを変えて頭のうえに腰を降ろし、両足首を縛り合せた紐の余りを引き絞って、背中に縛り付けられている両手に結び付けた。そしてさらに一筋の細引きを膝と脚のあいだに通して青年を引き摺り、酒席と寝室のあいだの襖を開けて、その細引きを鴨居に掛け、頭が辛うじて敷居から浮くところまで吊り上げた。

こうして吊された年期芸者は女将に後頭部を持ち上げられて線香の火がもつとも皮膚の薄い箇所近くを見せられ、なお意に従わぬと、火は皮膚を刺し、頭は突き放されて逆えびに縛られたまま逆吊りになるのだという。

それを聴いた青年は、後頭部を倒された脇息のうえに置いて、近づく煙草の火を見ただけで悲鳴を上げた。煙草を差し延べた手を口もとに戻してゆっくりと一服してから青年を冷たくたしなめた女は、彼女を振り返って手柄顔に微笑した。

「奥様、変態じゃございませんよ」

高利貸に金を渡して引き取らせた彼女は、青年をそのままにして、わたしを優しく寝室に誘った。責めも縛りもしなかった。

珍らしくわたしを上にした彼女に計画的に脇息を蹴り外されて、声を上げた青年教師はただ宙に浮いていただけだったが、彼女の屋敷で同じ恰好にされた養女弘子の頭は、老婢の膝と片手が支えていた。そして老婢は、折檻で萎縮したわたしにリングを嵌めるためその服で吸い口で彼女がわたしの肛門をいじった太い煙管を渡されて、汚れた吸い口を弘子の鼻孔と喉で拭いたのだ。折り畳まれた片足首と同じ側の手首とを縛り付けられ、残る片足首は床柱に繋がれて、拷問白州のような敷布団のうえで俯せになっていたわたしを仰向け、寄り添って身を横たえた彼女は、わたしの自由な片手をその股間に当てさせ、ひとしきりキスをしてから、うなじを老婢のほうへ向けた。

「麝香の匂いがしたやろ、弘子。あんたはその煙草を入れるんだよ。さあ、おカツ（老婢の名）、可愛がっておやり。手緩いことはしなさんな。いいから奥まで突き刺すんよ」

立ち上った老婢は、煙管を逆手に握っていた。犠牲の娘を求める、服んだ吸い口の鋭い尖端。長い髪が畳のうえを乱れて動き、妻同様童女の面影を残した弘子の顔が、悲鳴とともに歪んだ。

僅か二通の手紙をわたしに書いただけなのに、弘子はそのために再三再四彼女の嗜虐の好餌となった。

「あんたが可愛い余所のお嬢さんを貰うのなら、それも却って面白いと思ってたんよ——これは失意を籠めて口にされたのではなく、残忍な計画が秘められているのではないか？ わたしの妻もこの地獄に引き入れたいという……」

背中まで濡れてようやく鼻に掛る水から解放されたわたしは、じっと眼を閉じて動かなかった。地を裂く地響き、耳を劈く雷鳴の遠鳴りのように胸に浮ぶ彼女の呟きの不気味さは、品替えて加えられようとしている未知の拷責の恐れを消して、なお余りあった。

何か小道具を取り出すために彼女がポストンバッグを膝のうえで開いている気配がてしまもなく、ぶちんぶちんものを切る音がした。

眼を開けて顔を傾けると、彼女が眼前でテープ状の絆創膏を化粧鉢で短く切っては手の甲に付けていた。五つばかり切り終え、鉢を容器に納めてポストンバッグに入れた手が、一本のいちじく灌腸を掴み出した。ポストン

バッグを床に降ろした手でヘアピンを抜いて穴を開け、そのピンをまた髪の毛に差し入れた彼女は、身を傾けていちじく灌腸を差し延べて来た。

「おまちどうさま。素直だから、少しだけにしといたげる」

小突かれるのが嫌で不自由な股を開いたわたしに、彼女はそう声をかけ、注入を終ると同時に絆創膏で肛門を塞いだ。ようやく迫って来た尿意のうえに、さらに惨たらしく便意を加えられたのだ。

「バスへ行くのよ」

わたしを抱き起しながら、彼女は微笑を浮べて続けた。

「さっさと足動かしてごらん」

踵に突き刺っていたいくつかの画鋏のために、手錠で繋がれた両足を爪先立てて、ようやくバスのドアのまえに辿りついた。振り向くと、浴衣を脱ぎ棄てた彼女が黒い牛皮のベルトを手にして歩み寄った。彼女はその手でわたしを抱きかかえてドアを押した。そこは手術室のように白かった。

胸をかかえて引き摺り込まれたのと突き倒されたのが同時だった。折り畳まれた腕の関節の一つと同じ側の頬骨とがタイル床に激

に突し、眼底白い閃光が出て、鼻が一瞬詰るような気がした。

何をしているのか、蛇口を開く音がしたがわたしは冷たいタイルのうえに眼を閉じて伏したままだった。

「這って、腰を上げるんや！」

背中を、足で叩くようにして踏みつけられた。喉から胸にかけて苦しい吐き気が湧き起り、わたしは生ぬるい水を喉から二、三度絞り出した。

「きたない！我慢せんか！」

彼女は残酷な遊びに興じてくると、もう女性言葉を使わなくなることがよくある。でもいつもなら、合図さえすれば嗜虐の昂り抑えるゆとりがあるのだが、嘔吐を咎めて脇腹を小突いた足の熱さにも、遊びではない憎しみの殺気があった。

へんに障ると、きょうは何をするかわからない……V

わたしは吐き気を抑えて身を起した。額と一双の膝節だけで身を支えて這ったのだ。彼女の試しの一蹴りに、ひとたまりもなくのけぞった。

「股を一杯開けてるの！すぐこけるがな」身を立て直すと、熱湯の出ている蛇口のみ

たの桶に革ベルトの止め金の部分がはみ出し、ているのが見えた。それを彼女の手が握り締めた。わたしを初め幾人かの青年や娘を緊縛し、鞭打って古びた穴あきの革ベルトがするすると蛇のように上って行ったと見るや、バシッと音立てて、焼けつく痛みが、腰を断ち割るように走った。

「イツ、ヒーッ」

わたしの悲鳴に答えるかのように、彼女は怒鳴った。

「はよ腰上げえ！」

びゅっと空を切って振り降ろされた革ベルトが、俯向けに倒れたわたしの頭のすぐうえのタイルに炸裂した。

わたしの腰と床のタイルとをこもこも打つてようやく冷めた革ベルトが、タイルのうえに投げ出された。痛みと疲れに耐えて、わたしはなお凝然と顔を上げていた。そこへ腰を落して跨がって来た彼女が、頸輪に縛り付けられたわたしの両腕を手綱に取って、重みを掛けずに騎乗した。と、鞭打たれた腰から臀部にかけて熱いような尿が走り、泌みる痛みが湧き起った。

用を足した彼女は、「手綱」から片手を放した。

「さあ、しなさい。吐いてもいいんよ」

自分の尿が、鼻に、口に、腋のしたに、彼女の思いのままに勢よく当る。にじり潰された火傷の痛み、生温い黄泉に顔を潰けられて溺れるような苦しさ。

そのあと、吐きながら身悶えるわたしの胸を、彼女の太い両腿が挟み潰すように締めつけた。苛む者の鼻孔が吐く息に鳴り、苛まれる者の喉奥の呻きを誘った。

手を放した彼女は、わたしを横倒しに押し潰して立ち上り、手錠に繋がれた足首を持ち上げて、壁際に引き摺った。辛うじて宙に浮いたわたしの重さに洗面を作りながら、手錠の鎖を天井近い小窓の把手に掛けると、わたしの体を半回転させて壁に向けさせ、踞って頸輪とその鎖を解き放した。

自由になった両手で体を支えて顔を上げたわたしを前にして、べったりと尻を降ろした彼女は、片手で桶を引き寄せ、残る手でわたしの片手を持ち上げた。タイルに残るわたしの手の指へ桶が叩きつけられた。一撃、二撃三撃。わたしは喉を潤して悲鳴を上げた。「しぶとい！こんなにされてもまだ一言お詫びがいないの？」

痛めつけた手を持ち上げて、彼女はわたし

の顔を覗き込んでいた。その朱の唇が怒りの言葉を吐き終えて歪むや否や、持ち替えられた桶はまた鈍い音を立てて新しくタイルに降ろされた手を打った。それを狂ったように反復したのち、最後に頭を打ってタイル床に落ちた。

彼女は立ち上って浴室を出て行った。

便意は直腸を焼くように刺激して体内に泌み通り宙吊りになるのを支えている手は打たれた痛みのうえに痺れまで起して来た。

間もなく這入ってきた彼女は責道具は持たず、タオル一枚だけを手にして、煙草を啜っていた。その臭いが湯気のなかに混って、苦しみに喘ぐわたしの鼻に泌むように臭った。

白い足がわたしのまえを素通りして浴槽に這入り、溢れた湯が響きを立てて排水口に吸い込まれて行った。

彼女は煙草を口もとに近づけたまま湯槽の縁を枕にして横たわり、わたしなどいないかのように首筋をタオルで流し始めた。

わたしは遂に声を出した。

「黙って結婚したのは、悪かった。もう」

彼女がわたしの言葉を遮っていった。

「悪ウゴザイマシタ」

わたしはそれとおりのいい直した。

「悪うございました。もう、やめてください！」

「いいでしょう」

身を起しながら彼女は声を落して娛しげに続けた。

彼女がわたしのそばに立つと、肛門のあたりに熱気がして来た。煙草の火で胖創膏を焼いていたのだ。焼け火箸を突き刺されたような痛みとともに、彼女はさっと身を引いた。

それから熱い湯を全身に何杯も浴びせられたのち、ようやく把手から足を外されたときは、タイルのうえに俯せに崩れ落ちたまま、わたしは身を動かす力もなかった。

「起きて、起きて」

顔を上げると、わたしに背を向けて流し台に腰を降ろし、わたしを肩越しに眺め降ろしている彼女がいた。いつものように体を洗えというのだ。体を起し、手錠で繋がれた足を引き摺って膝で歩み寄り、石鹸を彼女の体に塗っては、肩から下を隈なく素手で、揉み、こする。

「もっと、奥まで。よく洗うのよオ」

背中を凭れ掛けてくる肥り気味の大柄な女体を胸と片手で支えた。

「あんたは臭うのいやでしょ。フ、フ」

含み笑いに揺れる腐肉を抱えて、痛みの残る指先に疲れを覚えた。

「いいわ、もう流して頂戴。怒った？これもあんたを愛しているからヨ。女って怖いノ。愛している人に冷たくされると。ああ、いい気持、どんどん流して頂戴」

わたしは黙って浴槽の湯を汲んでは彼女の肩に空け続けた。

「きょうはもういじめないわ。さ、洗ったげましよ。俯伏せに寝なさい」

わたしの方へ向きを変えた彼女は流し台を足蹴にして外し、タイルのうえに立て膝をして坐った。いわれるままに冷たいタイルに伏したわたしの髪の毛に石鹸を塗りつけて、入念に指で掻き廻す。寝室でわたしの髪を口に含むのが好きなのだ。わたしの頭に湯を流し終えてから、手を取り、足を攪んで、石鹸を塗ったタオルをわたしの体に擦っていく。傷跡には力を抜いて。

わたしは仰向けにされた。化粧を落した黄色い皮膚が小皺を寄せている顔の面には、責め苛むのを止めても柔和な表情は見られなかった。緩いパーマの前髪は緑の髪の色艶を失ってほの白く、その乳房は夜叉のそのように垂れ下っている。顔の輪郭だけは三十数年

前の身の盛りの頃の面影をとどめてはいるが凋落の蔽うすべもないその女体がただ醜くかった。

「四年もこの体と親んだのよ。突然結婚してしまふなんて残酷だわ」

わたしを執拗に洗いながら彼女は続けた。

「子供がないから、親子ほど年の違うのが一層いいの……。体だけの付き合いじゃなかったのに……。わたしが今夜したことなど文句をいわれるほどのことじゃないわ」

わたしはその言葉の響きに女の哀しさなど微塵も感ずることができず、逆に女の悪性の強さを聴き取って暗然とした。

洗い終えたわたしの体に湯を流すと、タオルとともに取って来たのであろう、傷跡の湿りを拭い、足の裏の画鋏も取って、メンソレタムを擦り込んだ。

「これぐらいの傷はすぐ消えるのよ」

わたしの胴を抱きかかえて、湯槽へ引き摺りながら続けた。

「さ、湯冷めせんようによう温もりなさい」わたしを湯槽に入れて彼女はまた出て行った。浴衣を纏って閨房用の厚化粧をするのである。

蛍光灯を内蔵して明るい萌黄色に透き通っ

ている湯のなかに胸から下の体が蠟細工のように潰かり、足首を繋ぐ手錠はプラチナの輝きを見せて沈んでいた。湯はぬるく、じっとしていると痛みはなかった。両手を揃えて前を覆い、足を心持ち折って延し、湯の面に入る。厚い色ガラスのように静まった湯のなかに、数限りなく白い微塵が緩やかに動いていた。彼女の首筋から落ちた脂粉と粒子だったのだろうか。

△愛、男女の愛、それをわたしは妻に逢うまで知らなかった。わたしは肉の穢れに深く捉えられて来た人間である。けれどもいま、わたしはその穢れを恐れる。わたしの頰を暖く癒しながらわたしの子を育てる人の眼を見出したとき、穢れた情慾はすべて洗い落されて、涙を誘わずには措かないすがすがしい歓喜だけが残ったのだ。それが愛というものだった。わたしの未熟な前頭葉の制御を超えた肉の動きやうずきとは関りはない。しかし、そのためにもっとも傷つき易いものなのだ。帰りたい。いまずぐ体を拭いて服を着たい。惨めな愁訴を敢えてしても、あの白い柔らかな玩弄の台のうえにだけは置かれたくない。と、彼女の声が湯のなかから響いてくるように思い出された。

ハあんたを始めて誘ったときそのままの新鮮な感じだわ……新鮮な感じだわ……V

ハそうだ、もの悲しげな表情さえ一つの刺激なのに、抗議や哀願は彼女のどす黒い情炎を煽り立てる油でしかない。わたしにできることはただ一つ。ただ祈るのだ。彼女の四肢にこの体を委ねる日の、今日を限りに断絶することをV

わたしはもうこれ以上この夜の回想を続けたくない。彼女との最後の醜行をここまでこまごまと描写して来たのは、その醜さを冷静に見詰めてから完全に身を引き離すためだった。しかし、あの妖気を常びた醜さは、あまり見詰め過ぎると、その醜さを心にしみ出させ、それを拭い去ろうとする気力まで侵してくる。わたしは厳しく身を持して白鳥の自負を持ちたい。二度と醜いあひるの子にならない。

彼女が数日後役所宛にくれた手紙をここに転記して人に秘めた手記を終える。

(前略) ベッドにスイートピーの花があったのをご存知でしょうか。その花もすこし萎れていましたが、もう二度とあなたのような人には逢えない、たとえ逢えてもわたしにはも

うあなたと初めてお逢いしたときの気力も体力もないのだと思いますと、何かぎりぎりのところへ追い詰められているような、夢の残りを貪っているような狂はしい気持でした。自分の情慾をかき立てて、娛しげにまた憎々しげにバスやシッティングルームでひどいことをしていたときにも、その気持はわたしの胸底に重く沈んでいたのです。女が敢えてこんなことを申し上げるつらい気持は、まだお若いあなたには、とても分って頂けるとは思いません。

実は、不意にご結婚のことをお聴きしましたとき、嫉妬の余り、思う存分にいたぶり、もてあそんでから、帰りにわたしの方からもう付き合わないと傲慢な素振りというつもりだったのです。そして、理性が嫉妬を抑えようとしてきますと、こうして別れるのがいいのだと自分自身にいい聴かせるようにして、惨たらしくあなたをもてあそび通そうとしたのです。しかし、帰る支度を調べて、何の恨みも憎しみもなく、ただご自分を深く恥じておられるかのように、美しい深みのある眼を腰掛けた膝のうえに向けておられるあなたを見ていますと、愛した人とは必ずすぐ別れなければならぬわたし宿命をと共に悲しん

頂きたいという切ない気持がして参りまして涙が溢れそうになったのです。そして、それを抑えるためにふらふらと立ち上ったのです。あなたは帰るのだと思って椅子をお立ちになった。あのとき、あなたを抱きかかえたとき、口にしようとしてできなかったことを申し上げたくて、このお手紙をしたためたのです。

もうわたしからお誘いすることは致しません。最近はいつもわたしから誘ってばかりでしたから、これがお別れの言葉ですわ。いいご主人、いいお父さまになってくださいますよう。ご病気をなさらないで。ご出世を念じます。

わたしの手元にあるあなたに関するものはみな焼却致しました。ただ遠出をして勝景の地で仲の良い親子のように並んでいるいくつかの写真だけは、誰にも見せずに持ち続けます。わたしたちは遠出をするといつも親子だと思ひ込まれましたね。楽しゅうございました。はしたない罪深いことは、それに浸っているとき以外は夢のようにはかのうございましたが、母と子のようにのどかに過ごしました憶い出は本当に尊いものでございました。有難うございました。(後略)



友に わびるの記

葛山英二

彼と私とは二年來の知己である。といつても、それは文通の上の知己であつた。或る風俗雑誌が、取りもつ縁にて文通交際がはじまつたのである。

勿論それは秘やかなる、心と心のふれ合いをお互に披瀝し合うものであつた。こう書きながらも私はそれが何であるかを文字にすることに、ほのかな抵抗を感じる。

ではそれが恥ずべきことかと反問されれば私は否と答える。一般の人々が知らない、いや意識の外にある、言いかえれば、一歩進ん

だ第三の、敢えて言えば第三の性の感覚といふか、例のA感覚なのだ。

こう言えbaumういい、すばり浣腸趣味それである。世の中には、案外浣腸趣味の人は多いらしい。いや少いらしい。何れも真といった感じがする。数多く現れては、泡沫の如く消えていった雑誌にも、案外浣腸マニアの記事が見受けられた。

しかし、いざ我が身の廻りを見渡してみても、浣腸趣味の人が発見されるかと言えば、まず絶対に否である。勿論、やたらに公

言出来る趣味ではないから、たとえば、喫茶店で後の席にマニアがいても、汽車で前の席に居ても、それは分らない。私だって、

「私は浣腸が大好きです」

なんて、言えたもんじゃないから。

薬局の店頭で、たまに平然として、イチジク浣腸を買う人を見受ける。平然として

「イチジク浣腸二つ下さい」

なんて、私の居る前で言える人は、まずマニアではないと思つてよい。

にもかかわらず、あれ程多くの軽便浣腸が汚水処理場に、郊外のこやし溜に、路傍の畑に、発見されるからには、必ずしも、便秘痔疾患者のみとは言えないような気がするのはマニアの空想だけであらうか。

それはさておき、今はなき或る雑誌の投書欄に、堂々と我は浣腸マニアなりと謳いあげた人がいた。その名は秘そう。プライバシーの問題だから。

それを見た時の、天にも上る気持とはこのことだろうか。我が友あり、それも身近に。いや身近ではないのだ。急行で四時間の距離だもの、でも、それがつい隣のように思えるのだから、マニアとは愛すべき存在だと、我ながら思つた次第である。

早速書いた、わが履歴を。勿論僅かだけれど誇張した。子供の時、毎晩のように浣腸された。毎晩なんて嘘である。でも、発熱すれば、お腹が痛いと言えば浣腸されたことは事実である。今も、グリセリン浣腸器三本もっている。実は二本しかないけれど。写真百枚コレクトした。実は二十枚しかないのが、書きながら恥ずかしかった。でもそれは愛すべき空想の虚偽であり、許さるべき嘘であらう。

すぐ返事が来た。資料交換致したと。先方も、同様な履歴と、コレクションの内容が書かれてあった。私は三割引した。他人事と思えなかったからである。

早速、私は貴重なコレクションの写真二葉を、下手な横好きでしつられた、押入暗室で複写焼増して送った。彼からも返礼として二枚の珍しい写真が送られてきい。日頃の浣腸随想もしたためて。

私が手紙を書く。彼から返信。

彼から写真。私から返礼。

こうした文通が二年にわたって行われた。その中、交換する資料も尽きてきた。尽きるのも当り前、子供の頃から長年にわたって集めた資料も、こう再々の交換では、やがて種

切れになるのも当り前。事が事だけに、そうそんじょそこらに浣腸資料なるものが、ころがっている訳がないから、補充がつかなくなる訳である。

にもかかわらず、私達の文通は続いた。

昨日薬局へ眼薬を買いに入った途端、若い女性が、ヒタタくるようにイチジク浣腸を買ってとび出していったとか、電車の中で、中年の奥さん同志が、子供が便秘して困るけど、浣腸の方がいいか、下剤の方がいいか、話し合っていたとか、婦人雑誌の八月号の附録の浣腸の図は気がきいているとか、マニア以外の人には愚にもつかないような見聞を、報告し合う文通の日日であった。

彼は言った。

「住所を書いたので、随分多くの人から、（この随分が気になったのだが）手紙をもらい、一時は返事を書くのが億劫になる程だった。しかし、資料の尽きるのが縁の切れ目か、或いは、単なるいたずらか、一人減り二人減りで、今や長年の文通交際は貴方一人だ」と言ってきたものである。我が友、真のマニアである親友は君一人、私は有頂天になった。さあ、それからがいけない。頭に来るとはこの事であらうか。

偶々私は彼の住むO市の近くのK市に出張することとなった。所用を済ませてK駅までくれば、今急行は出たばかり、次の急行まで四時間はある。不図見れば、O市行きのバスが発車合図をしているではないか。

フラフラと、反射的に私は彼の事が脳裡に浮んで、そのバスの車中の人となっていたのである。空想は夢を、夢は空想を産んで、O市に着くのが、待ち遠しくも、また空恐ろしくもあった。

突然彼を訪ねたら、一体どんな顔をするだろう。前もって連絡もしないで、失敬な奴とおこるだろうか。いや、十年の知己の如く迎えてくれるだろうか。

文通ならいい、顔が見えないから。でも相対してみれば、お互、顔に、私は浣腸に魅せられていますと書いているのと違わないではないか。この手に、しょっちゅう浣腸器を握って、私の肛門はグリセリンの注入を待っていますでは、聊か辟易せざるを得ない、なんて考えると、あっ、来なければよかったと、車外の風景も念頭になかったのである。

不図、バスのフロントガラスに、O・C・I・T・Yと書かれた標識がとびこんできた瞬間、ルビコンの散子は振られたと私は感じた。

ままよ、なるようになれ、私は彼を訪問するのだと決心した。

訪ねる彼の家はすぐ分った。

街はずれの静かなたたずまい、玄関の呼鈴を押したが、返答なし。耳を澄ませば、どうやら呼鈴は故障らしい。鳴っている気色はない。電池でもきれているのだろうか。

「ごめん下さい、御免下さい」

何度呼んでも返答なし。今考えれば、初対面の訪問故、やや気おくれして、呼ぶ声も低かったのだらう。純情なる私のこと故。

思い余って、よせばよいのに、半開きになった枝折戸をぐりぬけて、私は大してためらうことなく、何となく庭先に廻った。

よく手入れされた芝生、つつじが赤い花をつけて、小さな池には、緋鯉か金魚か、静かに遊泳している。実に静かな住宅街の、土曜日の午後である。

よき家庭を営んでおられる、私は感に打たれつつ、ひよっと主家の方に眼をうつした途端、そこに見出された光景には、――

彼のために私は筆を折らねばならない。しかし、ここまで記して結末を記さぬ訳にはゆくまい。

兎に角、私はそこに浣腸の、まさにこれか

ら行われんとする浣腸絵巻を見たのだった。

二枚の座蒲団の上に、こちらに真白いヒップを向けた女性、いわずと知れた彼の奥様に違いない。その後には膝をつき、手にグリセリン浣腸器を持ち、今や挿入せんとする刹那、私は我と我が眼を疑ったのである。

しまった。大変な所に来てしまった。恐らく、土曜の静かな午後を、人知れず便秘に悩む奥様を癒すために、或は夫婦の人知らざる浣腸プレイか、何れにせよ、見てはならぬものを垣間見てしまった後ろめたさ、この最高の瞬間では、恐らく私の呼声も聞えなかったであらう。

しまった、これはいけない。踵を回らそうとする瞬間、人の気配を感じるとは恐ろしいもの、何か感じたのであらう、彼は挿入の瞬間、不図後を振り向いたものだ。

彼の眼に写ったのは、縁先で、今や踵を回らそうとする私、

「誰だ、そこに居る奴は！」

一喝。そして、こちらに向けられたグリセリン浣腸器から、正にピストルの発射よろしく、浣腸液が私眼がけて一条の糸の如くとんできた。思い切って押すピストンの力で、かくの如く、液がすばらしい力でとんでこよう

とは、私も今まで、随分浣腸器をもて遊びながら気付かないことであつた。

問答無用、ほうほうの体で私は門外に転り出た。垣間見たものが見たものだけに、私には彼に弁解する余裕はなかった。勿論、事が事だけに彼も追ってこなかった。

よかった、お互に誰とも知れず、一瞬の出来事として済んだことは。私は服についた僅かのグリセリン液を、当然彼の奥様の直腸内深く注入させるべき液を、貴重なもののように思えるのだった。

その後、彼から何度か手紙がきた。心にやましさを感ずる私は、ぬけぬけと白ばくする図々しさはなし、かといって、過日の不礼を詫びる勇氣もなく、敢えて返事をしたためることもなく、鬱々たる中に半年以上経過した。返信なきを訝る書信を最後に、彼からの音信が途絶えてから久しい。やはり、一時的の文通友達であつたかと彼は思っていることだらう。しかし私はなつかしい。我が不徳の致す所、許されよ。

或いは、この一文を、読まれて、私を許すお氣持があつたら、あの過ぐる日の御不礼を不問にする寛大さがあられたら、私達の交遊を再び復活させて戴けないであらうか。

マゾヒスチック・ストーリー

モッキン・バード

(続)

三 原 寛

一、ユニヴァーサル・フッドの

新方針

ユニヴァーサル・フッドの東京支社には、四月から、新しく十人の女子社員が営業幹部として採用された。富村梨枝子のアイデアによる新しい職務組織である。マネージャー秘書の彼女の卓絶した販売手腕によって、このセールス・マン・システムの食品会社は驚異的な発展を示していた。

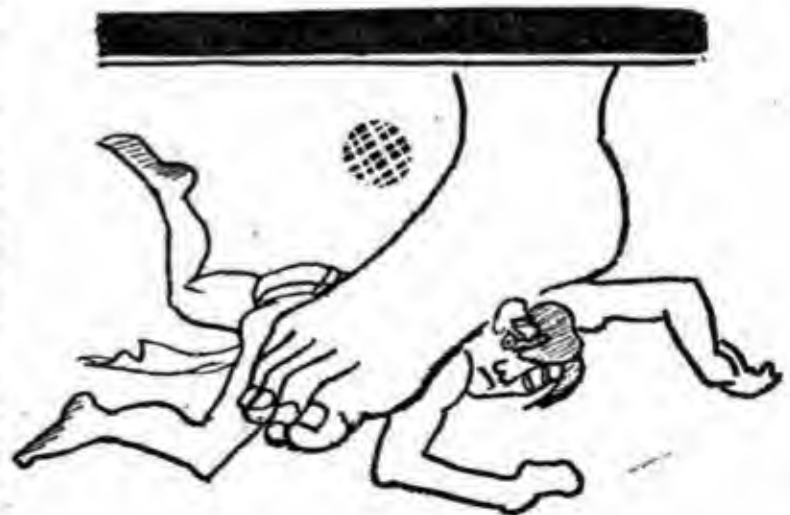
本国のアメリカから赴任して来たマネージャー・チャーリーと、その秘書、富村梨枝子

の下に、三十人のセールス・マンを使って、全国のデパート、食料品店、スーパー・マーケット等に、輸入品のインスタント食品類を売り込んでゆくのだが、富村梨枝子の徹底した高効率、実力主義によって、今や業界の独占的地位にのし上る迄に至っていたのである。

この四月から、富村梨枝子は、新しく採用した十人の女子社員を、販売主任として、その下に、今迄いた三十人のセールス・マンを夫々三人宛に分けて配属せしめた。そして、セールス・マンに対する一切の人事権は、この十人の主任に委任される事となった。十人

の女主任は夫々自分の下に配属された三人のセールス・マンの生殺与奪の権限を握ったのである。女主任には、月々二十万円の給料が払われるが、セールス・マンに対しては会社は一銭の給料も払わないことになった。

主任は、自分の下に配属された三人のセールス・マン達に、自分の受取った二十万円の中から彼等の給料を支払ってやらねばならない訳だが、その代り、幾ら払おうと、それは主任の自由だし、又、配属された三人のセールス・マンを何人に増やそうが減らそうが勝手だった。ただ、夫々の主任に対しては、富



村梨枝子は厳しいノルマを課した。ノルマさえ達成すれば主任の二十万円の月給は保証されたし、ノルマを超過した分については歩合給が出た。

そして、この歩合の分を富村梨枝子に貢ぐことによって、主任は、ノルマを増やされることなしに、本給の二十万円を更に昇額して貰える可能性があった。各主任に対するノルマ額の設定、本給の決定は総て富村梨枝子の裁量次第だったからである。

こういうセールスには断然、女性の方がその本領を発揮した。デパートの厳めしい仕入担当の重役や勘定高いスーパー・マーケットの経営者、頑固な食料品店の主人、男のセールス・マンでは頭から追い返される所でも、弁舌爽やかな美しい女性には軟化させられたから、販路は旧に倍して拡大され、ノルマ達成に自信のある主任は働らきの悪いセールス・マンをどんどんクビにした。いずれにしても、一旦、自分の手にした二十万円の中からセールス・マン達に分けてやらねばならぬのは、主任達にとって、まるで自分の給料を割いて養ってやるような気がしてどうにも惜しい気がしてならないのだ。

その為、セールス・マンに対しては徹底的

に辛く当たったし、情容赦なくこき使った。自分達は、大口のデパートや、出張するにしても、大阪、京都、名古屋、札幌などの都会や、温泉地などで注文をとり、セールス・マン達には、小口の食料品店や、地方のスーパー・マーケット等を足が摺り切れる程、歩き廻らせてノルマを稼がせた。又、自分のとって来た注文の整理、出荷手配、集金、清算事務等もセールス・マン達に押しつけたので、昼間くたくたになる迄酷使され綿のように疲れ切った身体に鞭打って、殆んど徹夜の勤務が続いたのである。

主任達は、広い重役室で茶菓の接待を受けて談笑したり、一緒にゴルフに出かけたりしては、大口の注文を次々にとって来たが、セールス・マン達は、あてがわれた小口の得意先を必死になって、かけ廻ってみても、実績を上げるのは容易でなく、成績が落ちると、あっさりクビを言い渡されるのだった。

ユニヴァーサル・フッドの東京支社では、毎朝、朝礼が行われた。朝礼の始まる八時には、勿論、マネージャーのチャーリーも、秘書の富村梨枝子も出社してない。セールス・マン達は、夫々の席についた自分の主任の前の床に正座させられるのだ。セールス・マン

達は、先ず、主任に対して、感謝の意を表し、そして、勤務を続けさせて戴く為にお慈悲を乞わねばならないのである。椅子にゆったりと腰を下して、高々と脚を組み、傲然と煙草をふかしている女主任の前に土下座して、額を床にすりつけ、自分がこうして生きてゆけるのは、すべて主任様のお蔭であること。だから、どんな辛い仕事でも容赦なく命令して欲しいこと。そして、今後共、何とか今後とも、主任様の下で働らせて戴けるよう、御慈悲を乞うのである。

セールス・マン達にとっては、この毎朝の朝礼も、夫々の生活がかかった必死の行事であった。ここで、女主任の御機嫌を損ねても、直ちに解雇される。女主任は各自の配属のセールス・マン達に対して、その日の課業を、セールス・マン達の能力の限度にはお構いなしに、自分のノルマ達成の計画に従って、冷酷に言い渡すのである。

女主任が自分の都合で組んだ計画だから、セールス・マン達にとって楽な訳がない。一日中足を棒にして戻って来ても、出荷伝票の整理や在庫品の引合せ、入出金の計算等事務処理が山積しているのである。六時には、その日、一日の反省会が行なわれるのである。

はじめから、とても、それ迄には消化しきれないようなハード・スケジュールを押し付けられているのであるから、言い付けられた仕事を全部完遂出来ている者の居る筈がない。

そこで、この事務所は旧軍隊の兵営と化すのである。古いストックキングを口に咥えて床の上を這い廻る男が居る。柱にとまって蟬の鳴き声を上げる男が居る。床に土下座して、体中、所嫌わず、ハイヒールの洗礼を受けている男がいる。下半身を露出させられて、物指しでピシピシ打擲されている男がいる。そろばん責めで悲鳴を上げている男がいる。揚句の果ては、女主任の使用した便器の中に顔を押しつけられている男迄出て来る。

彼女達は、二十万円の月給を取っているのだ。セールス・マン達に多少恵んでやっても十万円は手に残るのである。勤めが終ると、毎晩、たつぷりと楽しめるのだ。これは、お出かけ前の一寸した気晴らしである。奇抜なアイデアを思いついた女主任は仲間の賞讃を浴びた。一人の主任の発案で、そのライバルの主任と賭がなされた。

部屋の両隅に、夫々の主任の排泄したアムプロウジアが皿に盛って配置された。二人のセールス・マンが指名されて、下半身を露出

させられた。兩人は、古ストックキングで固く連結された。この兩人は夫々の主任の御下賜品に早く到達して、それを食べ尽してしまわねばならなかった。珍妙な試合が開始された。ぶざまな恰好で引っぱり合っている兩人を、夫々の側に賭けた主任達が手に手に、ベルトや物指しを振り廻し、脚を上げて、ハイヒールで気合を入れたりで大騒ぎした。

漸く皿迄辿りついては引摺られして、兩人とも口の辺りに汚物を一杯につけ、汗みどろで死斗を繰返したが、遂に勝負がつき、勝った方の男はほうびとしても一方の皿も空にする事を命じられ、そして、負けた方は、その月の給料の中から、賭けに負けた側の主任達の支払いを負擔させられた上に、その場でクビを申し渡された。顔中汚物だらけにした男が、床に額をすりつけ、涙を流して哀願したが、彼女達は大声で笑い合い乍ら出て行ってしまう。後に残ったセールス・マン達は、それ迄に果せなかったその日の課業を徹夜し、でもやり遂げねばならないのである。

二、富村梨枝子の新しい玩具

濃く吊り上った眉は上睨の線すれすれまで

垂らして切り揃えた前髪でかくされ、くつきりと、アイ・ラインの入った大きな眼、柔い長髪を肩の辺りから背中になで波打たせて、富村梨枝子は磨き上げた陶磁器のようなすべすべした脚を両手でしごくようにさすりながら、欲求不満のいらいらした気持で煙草の煙を天井に吹きつけていた。

思いもかけない東京支社の発展ですっかり気をよくしたチャーリーは、仕事の事は全く富村梨枝子に任せっきりとなってしまうのはよいとして、クラブ・リーのイルゼと遊び続けてこのところ、一時は偶に義理でお相手をしてやった富村梨枝子のことも、思い出さなくなっていたのだ。

チャーリーにとっても、富村梨枝子のファッション・モデルをしていたマネキンのような理想的な八頭身の肢体は食指を動かさせるのに十分だったし、それに、マネージャーの地位に安閑として、この旨い商売を続けるには、どうしても彼女を繋ぎとめておく必要上、偶に相手をしてやっていたのだが、「黄色い便器」は飽く迄、「黄色い便器」であって、そういう迄も倦きずに長く使ってやる程の根気の持ち合せもなかったし、イルゼを知ってから、便器遊びの興味もすっかりなくしてし

まったのだった。もっとも、チャーリーは生来の怠け者で、仕事の方はからきし苦手だったが、女性の心理を読むことにかけてはそつがなかった。どうも、富村梨枝子を少し構わなかったようだ。

岡島啓子は社のパーティから、仲間とナイトクラブに廻るから今夜は遅くなるというて出かけていた。金森が以前に勤めていた会社である。富村梨枝子が一人退屈し切っている所に、アパートのドアにノックの音が聞えて来た。

「チャーリーに、こちらへお伺いするようにって、いわれましたんでねー」

連続組写真Mフォト

二人の女性の餌食

大手札 三十六枚一組 六〇〇〇円

略号(ほや)

〔MS女性……刺青女性山原清子他一名
M男性……Mモデル志願者M・H氏〕

男性をいたぶることについては定評のある刺青女性山原清子が、他に一人のアシスタントの豊満な肉体の女性と共に二人して一人のM男性を、こてんこてんに虐めめしめ尽す有様を、順を追って刻明に写真化し、ローソク、浣腸器などの小道具を用いマゾファンの思わず、ぞくぞくする場面ばかりを連続組写真に編集しました。

傍若無人に、ドアを押して入って来たのは譲だった。相変らず、パチュラー・ジャックのポケットからは、サングラスの柄をぶらさげ、ビートニクな六フィートマフラーをはね上げていた。はだけた胸の金鎖のペンダントが、盛り上った筋肉の上で揺れ動き、レスラーのように逞ましい上半身だったが、細身のデニムのズボンがコンパスの長さを強調していた。

「俺の会社で使っている女の子さ。よかったら譲ってやるから、行ってみなよ」

チャーリーが言うものだから、どうせ、男に餓えたオールド・ミスぐらいにしか考えてなかったのだ。今、奥の間の扉をおして、怒りに眼を吊り上げて立ち上がった富村梨枝子は、思わずその前にひれ伏してしまいたくなる程、美の女神としての威厳を備えていた。すっかり圧倒された譲は、慌ててポケットを探り、チャーリーからの紹介状を、おそろおそろ差し出した。

チャーリーらしい、いかにも虫のよい手紙だった。此の男を貴女の秘書として紹介する。自分は今、出社しないでも貴女が十分やって行けると思うから、毎月、給料だけ届けに来てくれ。マネージャーとしての署名委任状

は明日渡すから取りに来て呉れ。というものだった。

要するにチャーリーは毎月、三千円の収入さえ確保されればよいのである。どうせ、仕事は富村梨枝子に任せ切りで、判りもしない書類にサインするだけなら、もっと早くサイン権も彼女に委任してしまっておけば何もせずに済んだのだ。仕事一切を態よく彼女に押しつけてしまい、収入の途だけ確保しておくと同時に、新しい玩具を当てがってやったのだ。

ユニヴァーサル・フッド東京支社の全権を一任された富村梨枝子は支配人代理の地位につき、譲はその秘書という事になる。富村梨枝子は、応接間のステレオに片手をかけて立つ譲にあらためて眼をやった。どこことなく、ニグロのタフさを思わせる、人を食った面構え、日本人離れした体格、セールス・マン達の去勢されたような蛆虫共とは明らかに別の人種に思えた。こんなのを飼ひ馴らしてみるのが一興とみえた。

富村梨枝子は、譲を奥の間に招き入れた。扉を押して、一步、中に足を踏み入れた譲は眼を疑った。一人の男が口にスリッパを咥えて天突き体操をやっているのだ。男の顔から

汗が滴り落ちて床を濡らしている。もう何時間も、この単調な運動を一人で続けていたらしく、男は息を切らし、喘いでいた。

「スピードが落ちたわよ！」

男の背中がパシッと鳴り、何時の間にか革鞭を手にした富村梨枝子が後に立っていた。

男が顔を上げて譲と眼を合せた。金森である。この男から、イルゼと組んで五十万円巻き上げたのだ。譲は再び我が眼を疑った。それよりも驚いたのは金森の方だった。自分を此処迄墮落に追い込んだ憎いイルゼと一緒にいた男なのだ。そして、その事よりも、その恨みの男の前で、素裸の惨めな恰好でいる事に身のすくむような恥辱を感じた。

「止めていいとは云ってないわね。怠けると又、この間みたいに一晩中やらせるわよ！」

富村梨枝子は鞭を上げていた。

「わたし達の飼ってゐる奴隷よ。いずれ、お前も、この通りの扱いを受けることになるんだわ」

富村梨枝子は譲に、紙とペンをつきつけ、誓約書を口述した。「誓約書、中島譲。私は、ユニヴァーサル・フッド東京支社支配人代理富村梨枝子様の秘書として、次の事を誓います。

一、私は富村梨枝子様の忠実な秘書として如何なる命令にも絶対服従し、社業発展の為に全力を尽すことを誓います。

一、私は勤務に対する報酬は一切請求致しません。

一、勤務時間外は富村梨枝子様の奴隷として、凡ゆる快樂の道具となつて御奉仕致します。又、同室の岡島啓子様に対しても同様に隷属致します」

翌朝から譲の六二年ジャガー10型三七八一台が富村梨枝子を送り迎えする事となった。

富村梨枝子に対しては女王様と奴隷の關係を強いられた譲だが、セールス・マン達には横柄だった。

「今日から俺が支配人室付きでお前達の面倒をみてやる。俺に楯つく度胸のある奴は今のうちに申出て貰い度い。その男は、こういう目に遭うのだということを覚悟することだ」

譲は、いきなり、手近な男のレバーに強烈なフックを叩き込んだ。その男は身体を海老のように折り、唇を紫色にし、手足を痙攣させながら床の上をのたうった。セールス・マン達は女主任の冷酷なノルマと譲の暴力で二重に締め上げられる事になったのだ。富村梨枝子は辣腕の経営者である。女主任制による

新しい組織でセールス・マン達の血と汗を絞り上げた上に、譲をも利用して一層の利潤を追求しようというのである。

その富村梨枝子は昼頃に事務所に顔を出した。譲はとんで行って、支配人室の扉を開け、彼女の革張りの豪華なひじかけ椅子を引いた。前日迄チャールリーの坐っていた席である。此の時間には女主任達もセールス・マン達も、夫々の得意先廻りにとび出して、事務所に残っている者は少なかった。女主任が二人だけ残っていて、それぞれ、セールス・マンを一人宛、呼びつけていたぶっている。一人の男は、何を謝っているのか、土下座してしきりに床に額をすりつけているのを椅子にふんぞり返った女主任が口許に残忍そうな薄笑いを浮べて見下していた。

「何度言ったら判るのよ！ この能なしめが！」

彼女は立ち上ると床の上にべっと唾を吐いて、それを踏みにじった。そしてそのハイヒールの底を、男の鼻先に突き出して舐めさせる。今一人の女主任は机の上に仁王立ちになっていた。男は机に向つて、机の縁にびったり身体をつけて直立不動の姿勢をとらされている。

た事に對して更に苛酷なお仕置きを受けねばならないのである。

こうして富村梨枝子は、この女性王国に絶對權力をもつて君臨する女帝として、又、女主任達も、男共の血と汗で保証された高収入の女天国にすっかり満足し、讓も金森も、富村梨枝子と岡島啓子の共通の奴隸として呻吟する事になるのである。

マゾ 画集 豊臀の下に喘ぐ悦楽境

大判印画紙焼付 五枚一組 一五〇〇円 略号△こね▽

女性の逞ましい臀部の下に出すことは出来ないと自負い
うごめくことに最大の悦楽をたします。

◎内容の解説◎

一、人間便器の構想

トイレにて

作をものしました。予告以来十数旬、待望久しい画集が、ここにファンの期待にこたえて、絶妙の場面のかずかずを、展開いたしました。何卒、座右の宝典として保存下さるようお願い致します。かかる徹底したM画の集成は、天下広しといえども他には絶対に見

トイレの便器の上に仰向けた寝て口を開いた青年の顔をまたいだポニイテイルの髪を垂らした清楚な美しい女性が、遅ましいヒップをあらわして、人間便器である青年に御馳走を与えようとしているマニア垂涎のポーズ。かがんだ太股、脛がはちきれそうにふくらんで、この大胆な女性の魅力をいっぱいにしてゐる。

二、妖婦のいけにえ

△バーにて▽

三、股間にて窒息

股間にて窒息

△浴槽にて▽

肉づきのよいバスト、ヒップを誇る肉体美の裸身をすくくと浴槽に立たした美女の股間には青年の顔面が挟まれている。女が腰をかがめてお湯の中へ入ろうとすると男の顔はブクブクと水面に没してゆく。万力のような両股に挟まれた顔は、どんなにもがこうが、わめこうが、女の意のままに水に浸

四、股挟みダンス

△ホールにて▽

五、咽喉輪股間絞め

五、咽喉輪股間絞め

△応接間にて▽

敷かたの美少女の臀部がデーンと押さ
 感のつけ、ひろげられた両手には、重
 い膝とハイヒールが押さえつけまし
 身動きすることもない。息も
 絶え絶えに頸を挙げて暴れるが、し
 め足は爆笑をうかべて、断魔の男
 の動きを冷やかに楽しむのだ。

「続・可愛い小悪魔の群れ」^む

辻 村 隆

「続・可愛い小悪魔の群れ」

忙中閑は気紛れなひとときの真空地帯である。毎日忙がしい忙がしいと暮してい乍ら、何かの拍子に、多忙の軌道で、そんな空白の数時間が、予定もなく浮き上ってくる。

晩春の午後三時、私はその日、一日じゅうかかる所用をスラスラと終ってしまい、家には夕食は外で済ますからといって朝出たので、準備もなし、夜までの数時間を、他力本願で浮かしてしまった。

一人では喫茶も食事も何か莫迦莫迦しく、といって映画を見る気にもならず、睡気を誘うような陽射しを背に浴びて、何の目的もなく天王寺ステーションビルの入口で、放心状

態で立ちすくんでいた。こんな場合、約束もなく、行くあてもない雑踏の中の一人が、貴方がたなら、どう処理なさるだろうか――。

忙がしいくせに、時間をもて余すなんて勿体ないハナシである。目的も用事もないのなら、いっそ真すぐ帰宅すればよさそうなものだが、この自由に与えられた数時間を、ムザムザ捨ててしまうのも惜しい気がしてならない。こんな時間こそ、忙がしいさなか、あれもこれもと考えていたことを充当すればいいのだが、思いもかけず浮き上った空白時間は、咄嗟には使いようがないのである。

目まぐるしく、カメラ・ハントのあの娘、

この娘を走馬灯の如く脳裡に思い浮べたが、何の連絡もせず、突然電話したり、訪れたりしても、どうなるものではない。

兎も角、そこで私は箕田編集長にでも電話して見ようと思いついた。ここ半月許り音沙汰なしである。

ツイていない時は、えてしてこうなるものだ。彼は雑誌の校正で印刷所へ出掛けて留守だという返事。私はいよいよ手持無沙汰になった。その時、私はゆくりなくもユリコのことをふと思い浮べた。マスキに私の住所をきいて、二度許り、少々稚拙な字で、たどたどしい便りを私に寄越している。彼女の可愛い



い手紙の中に、自分もマスキのようにうつして欲しいと申し込んで来てあったのだ。その目的は奈辺にあるのか文中では分らないが、どうやらマスキに与えた腕時計も、その一つの魅力なのではなからうか。

私は急に思い立って、ユリコに一度電話して見ようと考えついた。ポケットの手帳を探ってパラパラと繰って見たが、迂かつにも、私は彼女の便りにしるしてあった連絡の電話番号を、書き写しておくのを忘れていた。これじゃあ家へ帰って、彼女の手紙を改めて見直すより仕方あるまい。まさか家内に電話し

て、その電話番号をしるした手紙を調べてしらせてもらうわけにもゆかない。どうもよくよくツイていないな。私はあきらめて手帳をポケットにしまいかけたが、フトそのメモ帳に、小原真澄の連絡番号の記してあった事に気付いた。

そうだ、マスキに電話してユリコを呼出させ三人で食事するのも悪くないだろう。そう思い立つと、私はマスキが会社にいることを心に念じ乍ら、赤電話のダイヤルを廻した。勤務中の娘を呼び出すのは気が引けるが、そうも構っておられない。交換が出てマスキを

呼んで貰うよう告げると意外に快よくつないでくれた。各職場に切換えて通じるらしい。しかし交換手が盗聴しているかもしれないので、うかつには喋れない。

「モシモシ、小原ですが……」

「ああ、マスキちゃん。辻村だよ、ツジムラ……分った？突然だけどね、夕方食事を一緒にしない

か。よかったらユリコもよんでネ」

「へえー、どんな風の吹き廻しやの。そら喜んでどこにでもゆくわ。どこにします？」

「何時に終るの？」

「五時半よ」

「じゃあ、午後六時半、近鉄上六駅の改札口でどう？」

「ウン、きつとゆくわ。ちょっとぐらい遅なっても待っててネ。ユリコにもすぐ連絡しますワ」

「じゃあネ」

私は電話をきった。どうやら二人には逢えそうである。彼女達のことだから約束した以上、必らずやってくるだろう。となると、私のカメラハンターのハイド氏の心が俄然蠢めき始める。しかし、今日は朝家を出る時、こんなコトになるとは、まさか夢想もしていなかったから、準備は何一つない。家に一旦とりに帰るのは憶効だった。ひとつは、家内に「仕事なのに、又ですか」といわれかねない。昨日今日の忙がしさだからである。

或いは今夜、うまくゆけば、マスキとユリコの連縛をとれる機会に巡り会えるかも知れない。二人は私の申し出をきくと許容するだろう。とすれば、こんなチャンスはそうそう

あるものではない。暇を見てやる気でいるくせに、いざとなればたった一日のその暇がなかなか見付からず、そのうちそのうちと思い乍ら、ずるずると日が経っているのだった。

マスマやユリコのことは、常に絶え間なく脳中にあっても、私はこの可愛い小悪魔達と出逢った一月末以来、あれから一度も出会っていないかった。そのくせ、彼女達との繋ぎの切れるのを恐れては、月に一度や二度、気が向けば電話して、そのうち頼むよ、といっても連絡はとっているズルさである。

この若鮎さながらにピチピチした、飼育ずみの小悪魔と、その俤縁の切れることが惜しかったのである。三月に芳野眉美が突然訪れた時も、電話でマスマに連絡してやったが、私はゆかなかった。芳野眉美に心行くまで愉しんで来て貰ったに過ぎない。芳野眉美とマスマの一件は、彼の『濡れにぞ濡れし』で既に御存知の通りである。

そして悪くいえば、今私は忙中閑にありつき、やっと会う気になったに過ぎず、若し忙がしかったならば、その俤になつていた筈である。彼女達はいわば私のヒマツブシの相手を選ばれたというところか。中年男のずるさと厚顔ましさと勝手さに、我乍らいい気なも

のだと反省はしているのだが――。

いざ今夜、プレイの可能性が擱めたとなると、私の心は急速に弾み出し、これからの時間がワクワクと愉しくなり出した。数分前の私の空ろな放心状態とは、何という違いだろう。ハイド氏はいきいきと働らき始める。

懐る具合は幸いに、今日の集金で、使っている金が三万円近くあり暖たかった。

(そうだ、カメラを持っている同好の士に、とりあえず、カメラを拝借しよう。それでいいことなのだ)

唐物町の繊維会社のK氏(夫婦プレイで知合った人)なら、大抵いるに違いない。彼はカメラ道楽で、私がいいと奨めると、早速オリンパスペンを買っていた。現在たしか四台もっている筈である。電話をすると、出たのがK氏。会って頼みたいことがあるというと、
「よっしゃよっしゃ」と気軽な返事。うまくゆき出すと万事こうなる。

急ぐわけでもないから、地下鉄で本町へ。御堂筋に出て、ぶらぶら井池筋を歩き乍ら、彼の店にのそりと立つ。

古いソロバン片手に、K氏は商談の真最中だった。佇んでいると、逸早く私を見付け、
「何してまんね、はよ中へ入りなはれん

かいな」と眼顔で奥を示す。色とりどりの夏物生地の間隙を縫って応接間へ入った。小さい店舗だが、土一升、金一升の土地柄、地方から出て来た小売客を相手に、かなり手広くあきないをしているらしい。店の真中辺にビラがぶら下り入ろうと客及び小売はおことわりと大きく書かれてある。K氏の話によると、この辺り一帯、昔は卸し専門の間屋街で、戦後小売客が安さを求めて殺倒したので、あちこちで小売りを始めたが、それは邪道だと頑張っている一人である。

K氏の自宅は東淀川にあつて、毎日ここへ御出勤である。うまくカメラをおいてくれるだろうか。

待つことしばし、あきないを済してK氏はあたふたと入ってきた。

「えらい珍らしい、何でんねん？」

「ええ、突然だけど、カメラ貸してほしいと思ひましてネ」

私はことの成り行きを彼に話した。

「へえ、あんたはんはほんまにうまいことやりまんあ。なかなかそうはいかんで。ワテなんか、そんなええ娘と知りおうたら、一日も放つとけへんけどな。そやけど、そうして放つとくさかい、恋しがってあんたがいうた



ら、すぐ出てきよりまんねんやろうな」
 「いやいや、Kさんの夫婦プレー振りには、いつも敬服しているんですよ。徹底的に飼育したんですからね」
 「その代り、人一倍可愛がってもやってまっせ。それより、新宮明夫さん一ぺん紹介しと

くなはれや。ワテとことWプレイやったら、さぞかしええやろなおもてまんねん」
 「是非そのうち紹介しますよ」
 「あんたはんはいつも、そのうち、そのうちばかりや。ほんまにたのんまっせ」
 「ところでオリンピック、ここにあるんですか？」

「ええ具合に、おととい（一昨日）店へもってきてますねん。うちの若い衆が、運転の免許とるんで、それでパチパチやったりましてん。フィルムまだどっさり残ってます」

「Kさんの分は私が現像し、新しいフィルムを入れてお返ししますよ。ところでストロボはないでしょうね？」

「そらおいてませんわ。よっしゃ、向いのおやじの借りたげまひよ。ほんなら細もいりまんねんやろ。細なら商売柄うちにどっさりおます。ようけもっていきなはれ」

親切なK氏は、一通り揃えた上、バッグまで貸してくれた。

「ええのん撮れたら、少しばかり廻しとくのはれや。頼んまっせ」

K氏の言葉を背にして店を出る。どうやらこれで僥倖をたのんでの準備は出来た。陽はまだ高い。私は心齋橋筋をぶらぶらと歩いて

ゆく。そごう・大丸の間の道を左に折れて、カメラ材料の卸屋で、少し多いめにフィルムを買い求め、人浪にまじって戎橋通りへと辿って行く。休日でもない午後、どこから来てもどこへ行くのか、いつも乍ら、大阪一のこの商店街は人出が多い。時計は五時半、歩き疲れて、戎橋畔の喫茶で疲れを休める。この喫茶へ入ると、もう数年前になるが、この混雑の中で始めて出逢った梨花悠紀子との出会いを思い出すのだった。あれからもうかなりの歳月が経って、私は今日も又、こうしてよく飽きもせず、カメラ・ハントに浮身をやつしている。豊かだったあの頃の頭髮も、今は少し毛が抜けて少なくなり、白いものが、抜きようもなく多くなって来つつあった。

私はミックスジュースをストローで啜り乍ら、先程別れたK氏夫妻の事を思い出していた。K氏夫人は後添えて、K氏とは二十才以上も年令の違う、三十才になるやならずの、美しい人だ。K氏の長男とは、まるで姉弟ぐらいにしか見えない若い豊かな人である。

夫婦プレーの山本氏を通じて知合い、夫人のプレーフォトを拝見した時、その美しさと強烈さに息をのんだ。K氏はフォトは開陳してくれるが、夫人を私に紹介しなかった。い

つか冗談に紛らわせて、K氏夫妻の夫婦プレーを撮らしてくれと頼み込み、キッパリ断わられた事がある。K氏の持論によると、夫婦プレーは所詮夫婦のみの特権であり、他人を交えるべき性質のものでないと仰有る。その思想は健全であるし、現在のK氏が、夫人を掌中の珠と愛している最中であるならば、いかに強引な私の願いも、遂に叶えられなかった。夫婦のSMプレーを通じて、K氏は残されたあと数年の男の盛りを、只管に追及しているに違いない。だからこそ、仕事にハリが出て、しかも精力的に活動しているのではなかろうか。

大阪の一流料亭に出ていた夫人も、初婚ではなかったが、今のK氏夫妻は、プレーを通じて、懸命に愛情を確かめ合っているかに見えた。その夫人は、今日のK氏の話では妊娠五カ月とか。私がいい出すまでもなく、前月より、毎月妊婦フォトを出産まで続けて撮って行くのだと、目を細めてきかせてくれた。K氏にとって千載一遇のチャンスが巡りつつあるのだ。私は心からK氏夫妻に幸あれと祈りたい気持であった。何れ何か月か先に、そのフォトは見られるに違いないが、妻を一心不乱にいたわり、愛情をそそぎ乍ら、妊娠の



夫人を逆吊りにしようとするK氏の気持は、SMの探求者ならでは、恐らく理解出来ぬ心理ではなかろうか。

「辻村はん、まあまっとくはなれ。きっとそのうち、ワテの家内をあんたはんには撮ってもらいまっさ」

いつかミナミのスタンドで、酔余にいったK氏の言葉を、私はいつまでも忘れず、気長く待つつもりである。

道頓堀川に陽がかけり始め、早咲きのネオンが、黄昏迫る川面にポツリポツリ点滅し出した。西の空は茜に染まって赤い。さあそろ

そろ、私の出番だ。伝票を掴むと私はK氏の追憶を振り切って立上った。

× × ×

約束の午後六時半、近鉄上六の大阪線の改札口で私は二人を待つ。帰宅を急ぐ通勤者の群れで構内は相当の混雑振りである。

国分、高安方面から入ってくるホームに電車がつき、降車客に交って二

人の姿を逸早く認める。小原マスマは私の姿に気付き駆けよってきた。二人共春物のツーピースの軽やかないで立ちである。

「おじさん、待ってくれはったん？」

「いや、ほんの五分足らずだよ。ユリコも一緒に誘ってくれたんだネ。兎も角、ミナミへ出よう」

上六から千日前まで、ひどい車の洪水で、停滞又停滞、約三十分以上もかかった。

車中でのハナシ。

「マスマ、芳野眉美と会ってどうだった」

「うちは又、おじさんも一緒かと思ってたん

よ。それがあのひとりでしょ。まごついちゃったワ。うちはあんな変なこと頼まれたん、生れて初めてやったもん」

私はマスマの耳に口を寄せる。

「——だろう？」

マスマはニヤニヤ笑い、照れて頷く。

「すっかり聞いたよ。彼は至極満足だったらしいよ」

傍らからユリコが急に話しかけてきた。

「まあ、あの東京の人又出て来はったの。水クサイ人やわ。今度大阪へ来たら、きっと逢おうねっていったくせに。ウチが気にいらなかったんやろか」

「違うんだ。彼は私の家で一泊した時、しきりにユリコに逢いたがっていたよ。でもかなり盛沢山なスケジュールがあつて、その間がなかったのさ。今度夏に大阪へ来る時は、一番にユリコに逢いたっていったよ。気にしないで……」

今度はマスマが話しかけてくる。私を真中に挟んで左右に坐る若い娘二人。こうなると気が若くならざるを得ない。

「おじさんの正体知ったわ」

「正体？」

「奇譚クラブって本に小説書いてるでしょ。」

芳野さんがそういつてくれたわ」

「おしゃべりめ、彼がそういつたのか。それで他に何か言った？」

「うちのことも書いたんでしょ。知ってるわよ、まだその本見たことないけど」

「芳野眉美だって、あの時のユリコとの事やこの間のマスマとのこと書いてるよ」

今度はユリコが驚く。

「ウチかなわんわあ。あの晩したこと皆かいであるんかしら」

「そうだよ」

「あれノンだことも。ほんと？」

「ほんとだ——」

「シェッ——」

ユリコは飛び上って例の恰好をして驚いてみせた。

三カ月逢わぬうち、二人のいでたちはすっかり変っていた。マスマも僅かの間になんかなり髪を伸ばし、化粧はややスマートになつていし、ユリコの髪も背近くまでのびて、それを無難作にお下げに二つに分けてリボンで結んでいた。パーマはのびて、自然にもどつていた。やや地味な化粧に普段着姿のユリコはどこから見てもごく平凡なスタイルで、あの一月にミナミで初めて見掛けた、小悪魔的ス

スタイルは、彼女のどこからも窺えない。

「髪が長くのびたね。私は長い髪の人が好きだよ」

「そうかしら、あの時だってアップにしていたんよ。三カ月ぐらいで、そうそう一ぺんにのべんわ。そやけど、これから暑くなるさかい、もう剪るか思えますねン」

「いや、よしたまえよ。折角ここまでのびたんだし勿体ないよ」

「おじさんがいつも逢うてくれはるんやったらきらへん。そやけど気紛れに、いつ逢えるか分らへん人のこと聞いてられしまへん」

私はのぼせと命ずる権利は、なさそうである。この娘のいう事に耳が痛かった。事実今こうして逢っていることも、暇つぶしの気紛れだったといえなくもないではないか。

やっと千日前に到着。車を降りて道頓堀の方へと歩く。

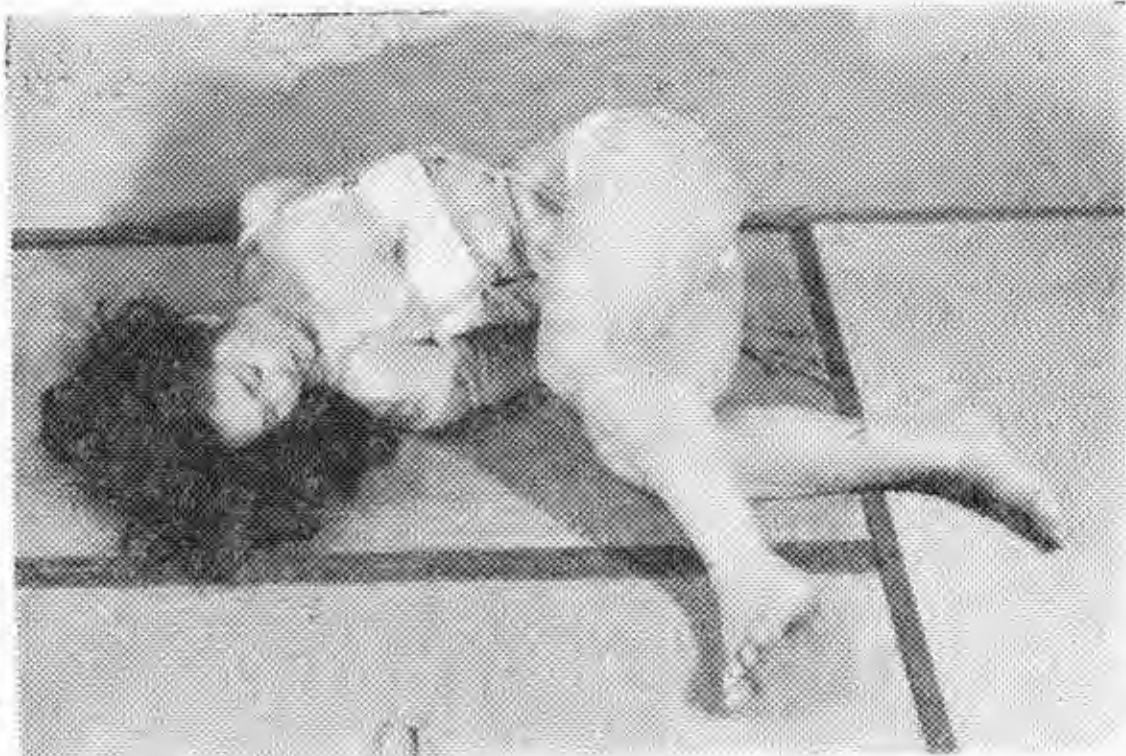
「前に行ったニューミュンヘンの『大使館』へ行こうか？」

「あすこもええけど、ウチはあっさりしたもんがたべたいねん」

マスマは遠慮なく自分の意見を述べる。

「ユリコは？」

「ウチも、その方がええわ」



じゃあと私は方針を変えて、若い娘のために千日前から道頓堀筋に突当るそこにあるエビ料理へと足を向けた。

娘達の健啖振りに苦笑し乍ら、私達の話はつづく、二本許り注文したビールの、それぞれコップ一杯程度ずつ彼女達はあけて、ほん

のりと頬が赤い。

「ユリコに手紙もらっただろ。それに書いてあったけど、フォト撮ってもいいんだね」

「……………」

彼女はかすかにうなづいて、心の中の羞恥を押しかくすように、車海老の磯焼をムシっていた。

「フォトのこと、マスマミに聞いたの？」

「ええ」

「マスマミは何もかも喋べったの？」

「ユリコがね、自分から進んであの夜の芳野さんとのことウチにいうもんだから、ウチかておじさんとのこと喋べったんやわ。悪気はあらへんし」

「二人は何でもいえるんだな。もう一人いた仲間、何とかいったね」

「チン」

「そうそう、そのチンちゃんも知ってるの」

「あの娘は仲間やないわ。あの時一緒にいつてきたけど、ウチら、あんまりつきあいしてしまへんネ」

「マスマミとユリコは、何でも話し合うの？」

「大抵のことはいうわ。ボーイフレンドのこと、いろいろ遊びしたこと……」

「いろいろ遊びつて、例えばどんな？」

二人は顔を見合せて、口ごもった。一寸いえない秘密らしい。ユリコがやや羞らい乍ら口を切った。

「遊びいうてもショウムナイことやけど、例えば、去年の盆踊りの晩、久宝寺の若い子とアソんだことや、睡眠薬遊びしたことや、夏に須磨浦で一晩中踊ったことや、そんなことですねん」

「ちっともショウムナイことないよ。若さに溢れてエネルギーを爆発させたんだろう」

「そやけど、もうそんなこと、何や阿呆らしなって来ましてン。ウチらもとしとったし」

年を経ったといってもハタチそこそこの筈である。私は妙な気になって来た。

「ウチらこの頃は半分落付きましたン。いつまでも若いコを相手に遊んでてもしょうないさかいな」

マスマミは分別顔にいった。

この小悪魔達は、確かに年齢に比して考えがマセていた。とすると、彼女達の所謂遊んだというのは十六、七才頃なのだろうか。

「二人とも人生経験豊富だネ。驚いたよ」

「そんなことあれへんわ。おじさんや芳野さんに逢って、世の中には、ウチらのまだまだしらん世界があることを知ったんよ」

マスマは真面目な顔付でいった。こんな具合に世の中を割切っているのか。この娘達は私達のいうプレイの世界に対して、明らかに興味を持ち始めているに違いなかった。

「君等がそんなに私達のやることに興味があるのなら、一度、奇ク編集長を紹介してやろうか。私などのパパアと違って、外車をのりまわしているパリパリのおじさんだよ。話も分るしネ」

私はかねてから、箕田氏が、マユミやユリコを一度紹介してくれといわれていた事を、この刹那フト思ひだした。そういえば、この小悪魔達は、奇クと全然関係のない、いわば私がフト巷から拾い出した娘達であった。

カメラ・ハントでマスマを紹介すると意外に反響があり、一方芳野眉美がマスマの友達のユリコとの一件を書いたりしていたので、箕田氏も何かなし、一度実物を拝見したい気にかられたに違いない。あわよくば分譲フォトにも使えないかという意図もあり、モデルのレギュラーの一人に加えたかったのではなからうか。

マスマやユリコなら、交渉次第では或いはその可能性がなくなかった。

「その方、例の本の元締めね。ユリコどうす

る、逢って見ようか」

マスマはユリコに聞いた。

「マスマがよかったら、ウチもいいわ」

ユリコの返事は一步マスマを立てている。

「じゃあ、いるかいけないか分らないが、兎も角電話して見よう。おったらすぐ来るよ」

私はカウンターの方へ歩んで電話を借りると、箕田氏につなぐ。

「ひる頃電話したけど留守だった」

「そうらしいネ。編集部の子がそういつていたよ。何か急用なの？」

「今ミナミで、例のマスマとユリコと一緒に飯を喰っているんですよ。よかったら出て来ない？口説き様で分譲モデルになる可能性ありそうだよ」

「でも、もう八時前だよ」

「そうだね。今夜は駄目かも知れないが、紹介だけではしておくよ。いいチャンスだから重い腰を挙げなさいよ」

「ウン、テレビが今いいところなんだが、じゃあすぐ行くか。場所はどこ？」

「今は道頓堀のエビ料理なんだけど」

「じゃあ、いつものモータープールの隣の喫茶で会おうか、半時間後に……。それでフォトの準備して行くの？」

「手軽にどうぞ」

「かさの低いダンダラのロープ二、三本もって行くか」

「私も持っているけど、連縛ならもう少し必要だから、もって来て下されば有難い」

「すぐ行くよ、じゃあ」

私は席に戻る。飲食した二人は、ひたいをよせてしきりに何か話している。私や芳野眉美、はては未知の編集長のことについてであろうか。

「くるそうだよ。兎も角ここを出て、少しブラ歩こうじゃないか」

街の空気は既に初夏の夜のようになまめいて、ビールにはてった頬に快よかった。

二人の若々しい娘に左右から挟まれて、中年の酔余者は、やや足許をふらつかせ乍らネオンの林の中を歩いて行く。何か人生が愉しくて仕方のない気持で一杯だ。

「おじさんの顔ったら、MMKづらやわ」

「何だそのMMKって……」

「モててモててコまるいうこと、頭文字をとってMMK」

「フーン、いい言葉だ。私は正にMMKだ。右と左に若い女の子を抱いて、いい気なもんだな」

「これから何処へ行くの？」

「編集長のネグラとする喫茶店だ。モータールの隣りで、便利なのでいつも利用している。編集長の車で送ってもらうから、今日は少しぐらい遅くなってもいいだろう。な」

「うちはかめへんけど、マスマは？」

ユリコは私の肩越しに、マスマに声をかけてたずねた。

「たべて遊ぶだけやの？ それとも前見たいに又シャシンとるの？」

「多分撮ることになるだろうネ」

「ウチら二人で？」

「それが一番いいんだが」

「ウチ、いま一寸困るんやわ。昨夜からあれなの？」

「生理？」

マスマはうなづく。生理ってやつは、どうもこんな時に限って邪魔をしゃやる。

「ユリコひとりで行きなさいよ。ウチは今夜は遠慮するわ」

「ウチひとりで……」

ユリコは心細い顔になった。

「でもウチ、未だ経験あれへんさかい、何も分れへんわ」

「おじさんがいい様にやってくれるわ」

「そやけど……」

ユリコはたじろいた。マスマと一緒にだとう安心感が、ユリコを支配していたのに、いざとなつて自分一人になると、どうしてもいかならなかつたらしい。

「ウチかてあれなかつたら、そら一緒にいくわ。そやけど、何ぼなんか一寸無理やわ。食事だけやと思つてたもん」

「まあ仕方ないさ。それなら無理もいえないしね。まあいいや、兎も角、編集長に会つてから、段取りをきめよう。気にしなくてもいいよ」

「おじさん、カンニンね」

「なあに、マスマがあやまることはないさ」
素直にうなだれるマスマに、私はいつかの夜のいとしさがマザマザと蘇つて来た。

私は右手に提げていたバッグをユリコ側の左手に持ちかえ、あけた右手でマスマの掌をぐっと握りしめた。反応は強くかえって、手を離そうとすると、握りしめたままマスマは離さない。それを知つてかしらずか、左側のユリコは私と肩を並べて無言で歩いている。やがて目指す喫茶のネオンが夜空に紫に光つて、その店の名を浮き上らせて見えてきた。

× × ×

箕田編集長の姿がノッソリと現われる。愛用のカーハットを夜も離さずカブっている。

ものにこだわらぬ磊落な性質が、一向にみなりにこだわらぬのだろう。

彼がキチンと背広をきていた事は過去二十年ついぞ見たことがない。ネクタイなんて一本でも持っているのだろうか。そんな飾り気のなさ、彼を知る人々にとってはタマラぬ魅力にもなつていたのだ。

初対面のアイサツはいつもない。既にテーブルに近づくと彼は喋っている。

「えらい停滞やなあ。ミナミはこれでいやだよ。ほうこの子らだな。ええ子じゃないか」

二人はあわてて、前にドツカリ坐つた箕田氏に同時にペコリと頭を下げた。

「こちらがマスマ、左がユリコ、先程食事と呼出してすませて来たよ」

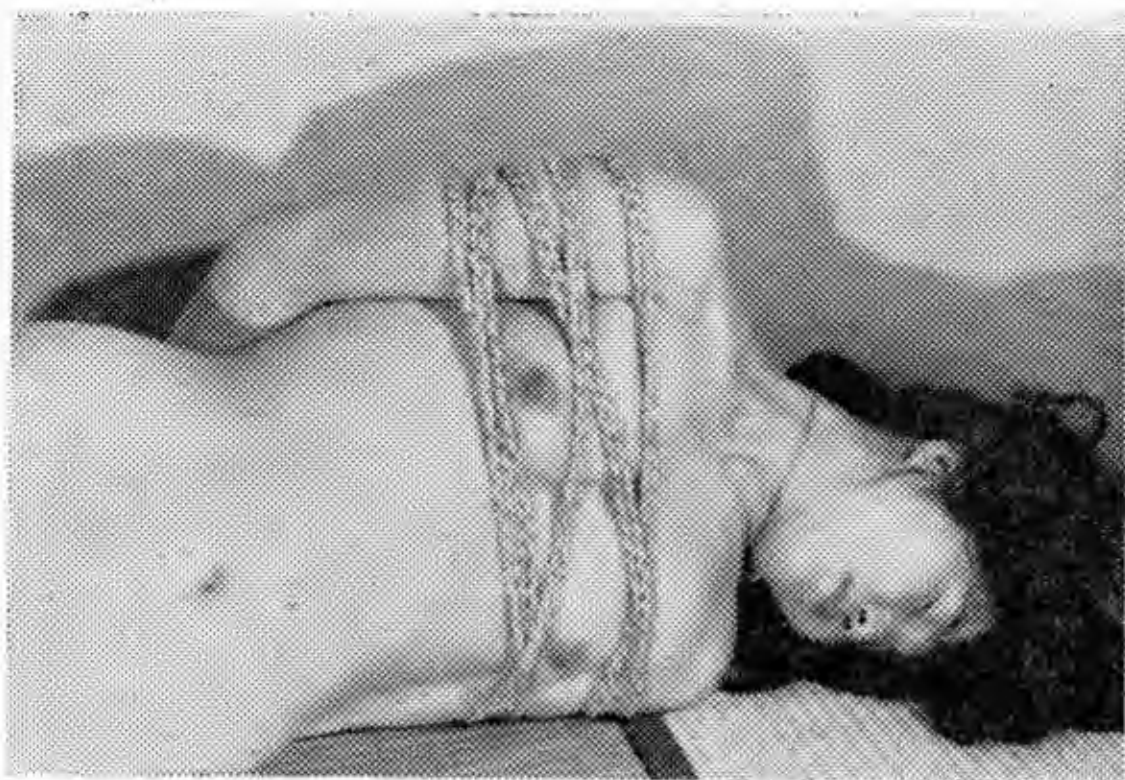
「やれるの？」

どうもソツ気もない単刀直入さである。

「それがマスマの方は生理でネ。今夜は都合悪いらしい。ユリコはO・Kだけど、一人じや心細いらしい」

「いいさ、又マスマ君には改めて頼むとしようよ。そろそろ出掛けようか——」

箕田氏はもう立上りかけていた。あれこれ



と思索の時間を与えさせぬ、馴れたやり方である。この手につられて、その瞬間まで進退をきめかねていた子がつい誘われてフワッとその気になってしまふものらしい。ネチネチと口説くのは彼の苦手でもあるし、口説きが長ければ長い程、女性はずきずきしてしまうもの

であることを永年の経験で会得していたのかも知れない。すべてがすべてに当てはまるわけではないが――。

外へ出ると、彼はマスマミに正面から相対した。

「君どうする、じゃあ帰る？」

「ええ」

マスマミはドギマギして、そう応えてしまった。これからの夜の時間に未だ未だ未練はあるらしいが、こう出られると、ついそんな返事になってしまう。プレイの出来ぬマスマミは世にもみじめな顔付になった。

「じゃ、これ車代」

編集長はさっとマスマミに握らせていた。

「上六を廻って、この子（マスマミ）を降していつものところへ廻ろうか。時間がおそいから愚図愚図していると、余りフオトとる間がないぜ」

私も彼のペースに巻き込まれてしまって、あれよあれよといううちに、話はドンドンと進んで行く。ムードも何もあったもんじやないや。

箕田氏の行動で、マスマミとユリコは最早あがらいようもなく別行動をとらされる羽目に陥っていた。

タウンラス20Mはスルスルとモータープールから滑り出て来る。無言でドアをあける。私は意識してユリコを助手席にのせ、マスマミと私は後部シートに乗り込む。

上六までは停滞がなければ五分そこそこ。

マスマミはすっかりシヨゲている。桃色のツ―ピースも心なしか色あせた感じ、あの豊かな胸の隆起さえ、今宵はしばみ切っているように思えた。

車にのり込むなりマスマミは私の手を強く握りしめていた。そっと囁やきかける唇に、かすかにビールの微薫がただよう。

「こんな別れ方、あんまりやわ。ウチ悲しいわ。こんどオジサンと二人きりで会って。ネエ、お願い。きつときつとよ」

私はうなづいて手を握り返す。バックミラーにニヤリとする箕田氏の顔がうつる。何もかも知ってやっている行動なのだ。

マスマミの握った手を、彼女の背に握り合せた俣廻す。もう一本のマスマミの手が自分の意志でうしろに廻ってくる。私は背後の二つの手を組み合せて握る。まぎれもない緊縛のポーズ。マスマミの私を見る眼はうるんでいる。

生理期の若い娘の欲情は殊更に激しいのである。人眼がなければ、この俣倒れ込んで

くる脆さになっていた。

ユリコは無言で、脳裡に何が去来するのかじっとフロントグラス越しの夜景の前面を直視していた。

「何か欲しいもの、あったの？」

小声で大きくとマスマミは首を振った。

「誕生日いつ？」

「七月十五日」

「誕生日に指輪プレゼントするよ。その日に逢おう、必ず。一泊旅行しようよ、よかったら」

「きつとよ」

「ああ」

「嬉しいわ。待ちどうしいわ、ウチ」

瞳がパツと輝やいて、マスマミの全身に新鮮さが溢れた。

車が止る。上六だ。

× × ×

否応なしに引ずり込まれた感じで、私はユリコが少し気の毒になった。マスマミとの甘い感傷が、未だに仄々と胸を温めている今、これからのユリコを対象に、プレイは早くも始まろうとしている。

まるで操り人形のようにユリコはここまで運ばれて来て、自分の意志をなくした人のよ

うに、箕田氏の言葉につられて、今入浴中である。

「マスマミと約束してたようだね」

「ああ」

「プレイの約束？」

「になるだろうネ。誕生日にプレゼントしてどこかへ一泊旅行しようといった」

「可愛い子だよ、あの子は」

「連縛が出来ず残念だね」

「なーに、チャンスはこれから又あるよ。ところでユリコの方も、あんたに任すよ」

「箕田さん、撮らないの」

「二、三枚とって行くよ。若い娘のムードづくりに弱くてネ。あんたと私はどうもプレイに対応する素質が違う。あんたはフェミニストだし、私はしらずしらず職業意識が働いて、そんな眼で見してしまう」

「分譲モデルになる様子を待ちかけるよ」

「それなんだ。それだけ頼むよ。いずれ私は私なりの方針で彼女をとって行くよ。今夜のところ、それだけ約束出来たらいいのさ」

「でも帰らなくてもいいじゃない」

「やりにくいでしょ私がいちゃ。いいんだ気にしなくても、辻村隆式で行き給えよ。この旅館はすべて私のツケだ。金は一切心配しな

さんな。泊りたければ泊っていいんだ」

「偶には一緒にとるつもりだったのに」

「私は金銭で割り切ってあの子をとるし、あんたはムードで行けばいい」

所詮、私と箕田京二との間には、プレイに對する異質なものであるのであらうか。

彼はまるで私のために、さっさと事を選んでくれたようなものであった。すべて何もかも心得え、不要な夾雑物はすべて切捨て、目的のみに向って易々と遂行出来るように配慮した。彼の心遣いでもあったのか。

一宮百合子は、上気した素顔で、やや羞らしい気味に、旅館備付のゴワゴワした浴衣を身に纏って、手持不沙汰に襖の蔭に佇んでいた。

すべて万事諒解した私達は目配せして立上った。私はユリコに声をかけた。

「こちらへお出でよ。あのネ、箕田氏が急に用事が出来て、もう十分許したら帰るそうなんだ。それで大急ぎで数枚許りとおきたいっていつているから、よろしく頼むよ。いずれ改めて会いたいって云っているが構わないかい？」

編集長が帰るときいて、ユリコの顔に複雑な表情が走った。安堵と疑問であらうか。

「急に又どうしてなの？」

それに対して箕田氏が応えた。

「ロクロク挨拶もせず、一人よがりで急いだのも実は気がせいいていたからなんだよ。今夜の夜行で上京するんだが、一眼だけ君に逢いたくてね。何しろ辻村君や、芳野眉美氏からさんざんあんたの事を聞かされていたので、いわば、その素晴らしい君を見たさに、僅かの時間をさいたのさ。噂に違わずあんたは素晴らしい人だよ。この戻帰らないと時間が間に合わないが、せめて十分許り君のその体をしっかりこの眼で確かめた上立去るよ。じゃあ辻村さん支度してよ」

ユリコの眼に不審のとけた明るさがまし、覚悟したのか、浴衣をサッとズリ下げた。

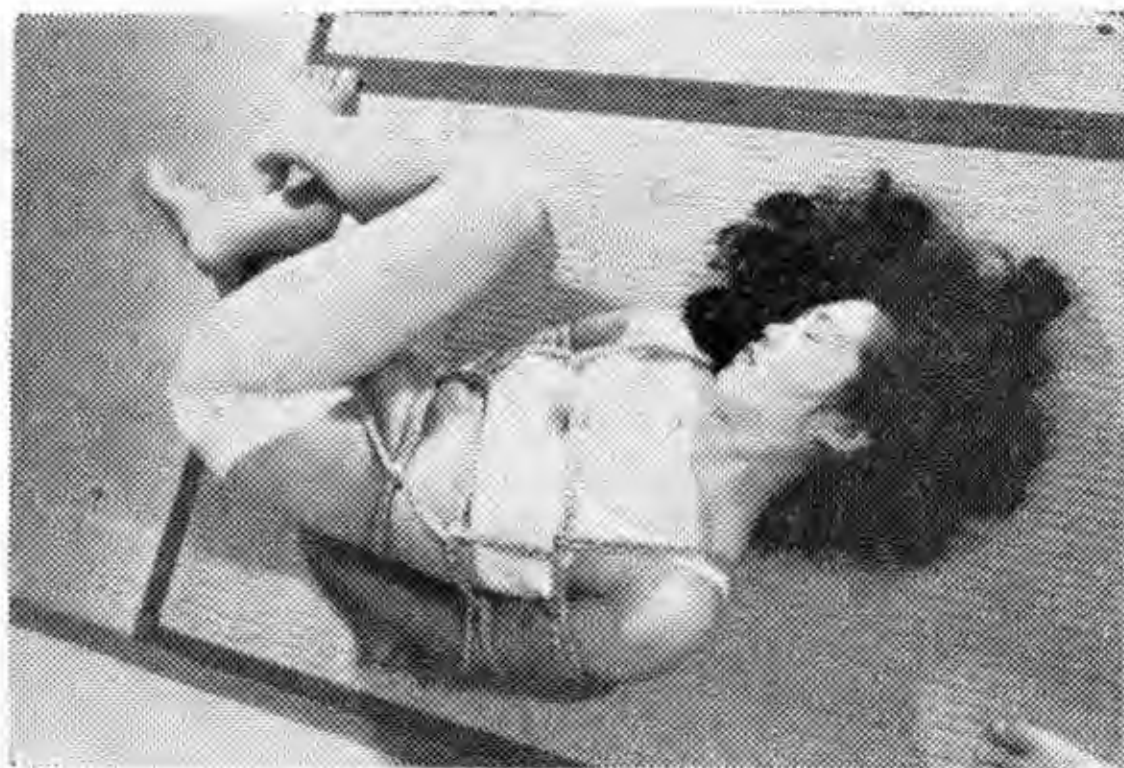
マスキに勝るとも劣らぬ豊かな肉体が、私達二人の前に惜しげもなく露呈された。

「どうしますの？」

胸をかかえて佇立した儘、ユリコは艶な眼付を私に送って来た。すっかり度胸を据えたりらしい。

「私のを使っているよ。おいて行くから」

箕田氏は縄やパンティ類を入れたバッグを指さした。私もK氏の好意で持参したが、麻縄なのでゴツゴツしていた。それに引換え、



箕田氏のロープは使いなれて、しなやかになり、袋物の芯に使うんだら紐なので、初めての女性に対してはこの方が遥かによかった。

私が兎も角胸に縄をかけ、縛り始めると、箕田氏は、私の姿をもカメラに入れて、素早く閃光を光らせ、私が後手に縛るため、ユリ

コの背後に迫ったところを、又数枚カメラに納めた。

あわただしく、ストロボを片付け、カメラバッグを肩にかけると、私の肩をポンと叩いて、

「頼むよ。これ渡して上げて」

と数枚の紙幣を私に托す。ユリコはそれをチラリと見て眼を外らした。

「明後日帰ってくるが、恰度日曜日だ。出られる？」

と彼はユリコにきいた。

「出られると思いますけど」

「じゃあ、午後一時、今日の喫茶店で待っているからね。さあ、これは約束のしるしだ」

箕田京二は、新らしい一万円札をビリッと半分に引裂くと、縛られたユリコの胸縄にさつと挟んで、残りの半分をヒラヒラさせた。

「日曜日の午後一時、この一万円札の片割れが、あんたのその片割れとキス出来るのを楽しみにしているよ」

心憎いやり方で、彼は目で私にさよならをいって部屋を出ていった。果然とユリコはあつげにとられたように彼の立ち去った方に視線を向けていた。

「変った方ね」

ユリコは呟やいた。しかしその声は濡れて彼女は既に箕田京二に激しい興味を感じている事を如実に匂わせていた。

残ってこれからプレイしようとする私より見事な引け際を演じた彼の様なやり方に、若い女はたまらなく弱いものらしい。

私に緊縛の体を任せ乍ら、ユリコは急にセキを切ったように、あれこれと箕田氏について知ろうとして問いかけてきた。

見事な退却のため、俄然私の存在は弱くなってきた。去る人を慕う妖しくも微妙な女心か――。

私は内心、日曜日の箕田氏とユリコのプレイが絶体的なものであることを、まざまざと感じとった。あの芸当は誰にも出来るものではない。若し女がこなかったら、無念や、一万円札は右と左の泣き別れになるかも知れない、冒険だったからである。

数分前まで、ユリコは心なしか箕田氏の退却を喜こんでいる風に見受けられたのに、今や主客転倒し、ユリコの私に対するプレイ振りはさっぱり身が入らず、瞳のみは、中年のプレイボーイの鮮やかな変身に魂を奪われて去った彼を追っているといった体であった。何とか、この虚脱した空気を変えないこと

には、私の立場がみじめになった。私はやっこの時になって、箕田氏の仕組まれた計算に気付き、ヤラレタと思ったのである。

タウナスを走らせ乍ら、ほくそえんでいる箕田京二の姿が、ありありと私の脳裡をよぎり過ぎた。

× × ×

女の敏感さで。ユリコは今夜の御膳立てがすべて箕田京二によって仕組まれ、現在残っている辻村隆も、彼に踊らされている一人に過ぎないと、早くも感じとったらしかった。

謎めいて見えた私の存在も、箕田京二の前ではカラキシ意気地がなかったのも、眼に移ったに違いなかった。

ユリコにとっては、去った箕田京二の底知れる大きさがのしかかって来て、今や私など彼にくらべれば、ほんの三下奴的存在に感じとったに違いない。

独善的な彼の行為すら、一つ観点をかえて見ればすべて魅力に感じるものなのだ。

ユリコを撮るには撮ったが、私自身さっぱり興味がのらなかった。まるで魂のない人形を縛っているようである。私は箕田氏の依頼もあって、努めて分譲的なフォトを際限もなくパチパチとりまくった。しかし彼女の表情

には、苦悶も精気もなく、唯、なすが俚になっっているうつろさだけが、おおいようもなく漂よっていた。

緊縛もプレイもすべてはムードである。ムードもなく事務的に緊縛ポーズのフォトをとって行くのは、むしろ私にとっては苦痛すらあった。

私は正直いってもう投げ出したかった。今や、どうあがいても、再びムードは盛り上がりそうもない状態にまで追いつめられていた。もうこれを最後にと、ブラジャーパンティの上から、ユリコを縛った俛ころがし、両足首を揃えて縛り後手につないだ。

乳房はマスキに比して、かなり見劣りしたが、腰の線、それにぬめぬめと輝やく肌はつややかで、ポリウムがあった。マスキより遙かな成熟をユリコの肉体よりかぎとった。

最後の白々しい緊縛をとり終えて、無言の俛私は縄をといいた。

「もうとれへんの？」

事務的に彼女は問いかけて来た。

「ウン、どうもさっぱり気分が出ない」

浴衣を蔽って彼女も氣拙げに沈黙した。デコラ貼りの机上には、一万円札の片割れが、ユリコの心を見透かす様に、これ見よがしに

のった俤になっている。

「君が編集長にすっかり心を奪われているから、全然やる気になっていないんだよ」

「そんなことないわ」

否定したものの、その声は弱々しかった。

「もう帰る？　ここからならタクシーで近鉄の布施まで五分少しだ。間に合うよ」

ユリコは否とも応とも答えず、顔を伏せて沈黙している。

「どうする？」

少し声が荒くなる。何故ともなく心がイライラして来たのだ。その声に驚いたように顔を

を挙げて、ユリコは私を直視した。

「何だかおじさんに悪いわ。気をわるくしはった見たいやもの」

「それなら、帰り給えよ。編集長に預かったのと、これを持って……」

私は意地悪く、箕田氏よりことづかった俤の紙幣をよみもせず、その俤つき出し、ついでに机上の一万円札の片割れをとり上げて、ヒラヒラさせた。

「そんな言い方はしたら、余計帰られへんわ」

ユリコは事実困惑しているようであった。

さっさと帰りたい気持ちと、現在の私とのこじれた気持との板挟みになって弱っているらしい素振りだった。

「君は編集長が凄く気に入ったんだろう」

「云わずもがなのイヤミな言葉がつい口に出た。」

「でも、おじさんかて、マسمミと許りイチチャイチヤしてはったやないの」

売言葉に買言葉がはね

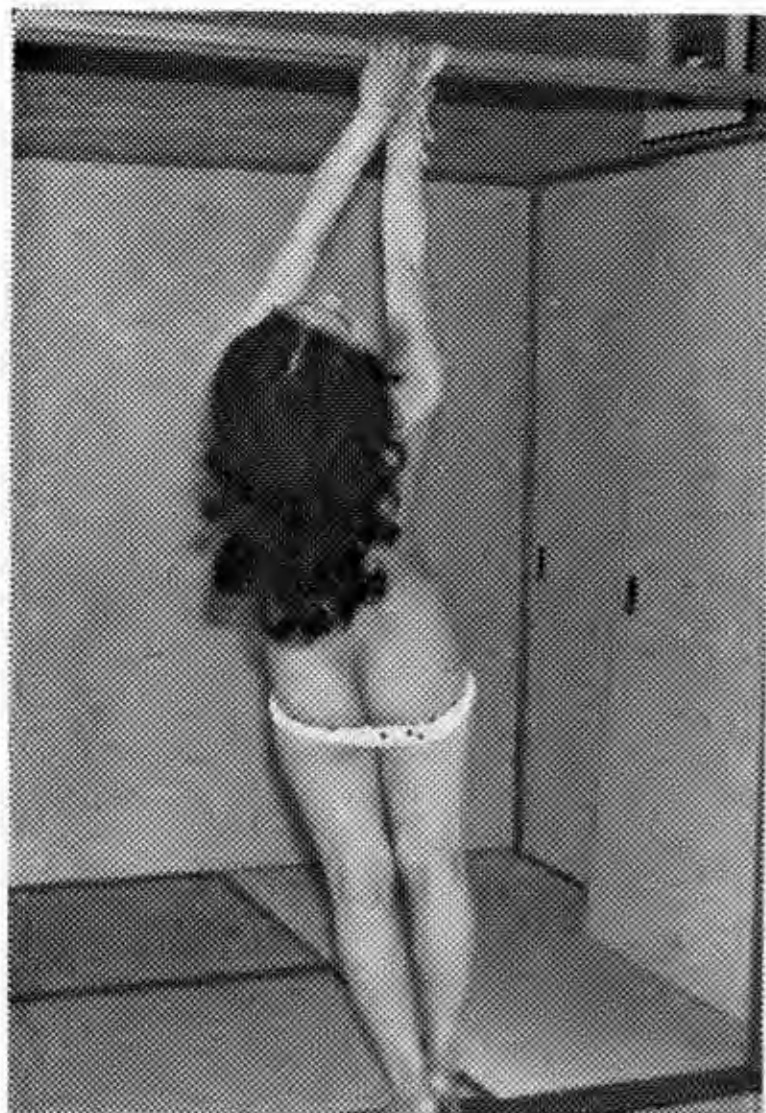
かえって、私は声もなかった。

私の日頃の陽性も姿を消し、ユリコの明朗さも深沈して、重苦しい空気のみが渦を巻いていた。こんな別れ方はしたくなかった。それはユリコにとっても同じ想いではなからうか――。

（辻村隆らしくないぞ。何を独りでプンプンしているのだ。もっと心を静めて大らかになれよ）

私は自問自答している。荒やいだ気持は少し静まって来た。考えて見るとユリコは私の云いなりにポーズをとり、ユリコにとっては生れて始めてであろう緊縛に、易々として従っているではないか。箕田氏に対するコンプレックスは、或いは私一人が感じ、独りでそんな敗残的妄想に耽っていたのではなからうか。それがいつもの私らしくなく、無口になり、粗々しくなあって、ユリコに澁ね返っておりはしなかっただろうか。ユリコが箕田京二の事をきいたのは、初対面の彼に対する好奇心とうけとれば、それに過ぎないのだ。独り劣等感を感じ、独り焦り、独りつまらなくしている。これは、私の道化たひとり芝居に過ぎなかったのではなからうか。

そんな反省が、徐々に身内に湧き上ってき



た。きっと私の顔は、ユリコに対して、きびしく冷めたい、よりつきにくいものになっていたに違いない。

私は独り恥じた。そして仄々とした明るさが急速に私の体内にあふれて来た。考えて見ればユリコに何一つツミはないのだ。

「体が冷えただろう。おじさんとお風呂へ入らないか」

私は硬ばっていた顔をといて、優しく声をかけてみた。

顔をうかがってユリコは黙ってうなづいた。ハタチになったばかりの彼女にとって、硬化してしたこの場の雰囲気は、何とも負担にたえかねるものであったことだろう。

私は素早く服をぬぐと、ユリコの眼前で裸になって浴室に向った。底の浅い浴槽の湯は生ぬるくなっていた。大急ぎで熱い湯をひねる。湯気が次第にこもり、熱気が充満し始めると共に、私のかたくなになっていた心も、淡雪の如く融け始めていた。

恥じらい気味に扉が開いて、ボリュームのあるユリコの体が浴槽に近づいて来た。私は無言で手をさしのべた。私の手に誘われて、ユリコの体が、この狭い浴槽につきり切るとザーツと湯が激しく溢れてこぼれ、洗い場を

時ならぬ洪水にした。

「痛くなかった？」

優しくいたわるように囁やくと、コクリと大きくうなづいた。

「おじさん、何か怖くてかなんかったわあ」
ユリコの口がほぐれて、恨めしそうにいてベソをかいた笑い顔になった。

「おじさんも、こんなつもりじゃなかった。御免だよ」

「怒ってはれへんのやろ」

「怒ることなんか、ありやしない」

「よかったわあ。さっきから帰れ帰れいいはるし、ウチどうしようかと思った」

「コンプレックスだったんだよ」

「コンプレックスってなに？」

返事に困って、私は大きく笑った。ユリコが私の首に腕をまいてきた。

「日曜日編集長と会ってくれよ」

「おじさんさえ何もなかったらゆくわ、構へんの？」

「ああ、行って貰わないと困るんだ」

「大人の考えてること、ウチちっとも分らんわ。どないなってるの」

私にだって説明のしようがない。ひとり芝居はもうここら辺りで幕だ。とも角ユリコが

箕田氏に逢うことは間違いない。よきモデルとして分譲フォトに華を咲かせてくれるに違いない。

「ユリコ、モデルになってもいいだろう」

「やっぱり、さっき見たいくくらはるの」

「まあ、そんなところだ」

「ヘンなシャシンをとりたがるのねえ。構へんけど……」

所詮、ユリコの現在の心境では理解出来る筈もない。

「芳野眉美はバスに入っていて頼んだのだろう、違う？」

ユリコは顔を伏せてイヤイヤした。云わないうでくれという素振りだが、私には肯定にとれた。

「おじさんに彼と同じことをしてくれない」

私は、フト刹那的に倒錯した神酒奉戴論者の経験を実行して見たい衝動にかられて、さりげなくいった。ユリコは既に供給者だったからである。

「おじさんかてそうなの？ 何でこんなこと

皆たのまはるのやろな、ウチ分れへんわ」

洩れた軽侮の口吻りに私は内心恥じたが、その気持は益々たかまっていた。近頃とみにM的感觉を求めようとしている自分の変化

に、私は自分自身の気持が分らなくなってきた。
 湯から上ると私はアグラを組んだ。立ちは
 だかったユリコの偉大なヒップが私には、い
 やに遅ましく見えた。

× × ×
 ほろ苦い味を噛みしめて、私とユリコはタ
 クシーに揺られている。終電車には充分間に
 合ったが、この俤別れるのが惜しいような残
 春の気配が、つい思い切って彼女を家近くま

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

予約申込者月毎増加中です
 毎月確実に二十五日発売!

一月分	一冊	三〇〇円
三月分	三冊	九〇〇円
半年分	六冊	一八〇〇円
一年分	十二冊	三六〇〇円

○本誌は只今の情勢から場所によっては入手
 が困難な所もあると思われましますので、確実に
 毎月御入手されるためには、是非直接予約お
 申込み下さるようお願いいたします。

○直接御予約下されるのには、天星社宛に
 (阿倍野局私書箱第十四号) 予約購読料をお
 払込み下さればよいのです。

で送ることに、私の心をきめさせた。

「マスマミと何か約束してはったでしょ」

ややシットめいた小声が私の耳にふれた。

「ああ、パースデイに何かプレゼントして、
 どこか旅行しよう」と約束した」

私は隠さなかった。この場で隠しても、そ

の一事は仲良しのマスマミからユリコの耳に入

るにきまっているからだ。私の頬をユリコの

手がかるくつねった。

「きらい——おじさん、マスマミ許り可愛がる
 から……」

仲良し同志の。取り残された一方のこれは

ジェラシーに違いなかった。

「ユリコとも約束するつもりだったよ」

「いや、あとでうまいこと……」

「本当だとも。ユリコの誕生日いつ?」

「八月四日、暑い時に生れたのよ。それでこ

んなにヌーツと大きくなったんやわ」

「いいじゃないか、マスマミには指輪をプレゼ

ントするといった。ユリコには何をやろう」

「何でもいいわ。でも本当にプレゼントして

くれるのなら、真珠のネックレスがええわ」

「ウーン。こいつはピンからキリまでだ」

「人造でええのよ。二重に巻ける長いのがい

いな」

値段の見当もつかないが、私は約束する。

約束した以上守ってやらねばならない。二人

の娘にがんじがらめにされて、私はヘソクリ

の思案を早くも考えねばならない。

カサをかぶった月が、生駒の中天高く、鈍

い光を投げかけていた。車の窓をあけて煙草

のけむりを出すと、あたたかい風が快よく疲

れた体にはね返ってくる。

「うちも誕生日に、どこかへつれてってえ」

甘えるように私の肩に首を凭せかけてユリ

コは呟やく。それもいいだろう。車は河内平

野を時速八十キロを出し乍ら吹っ飛ばしてい

た。

(蛇足乍ら……)

箕田編集長は予定通り、分譲フォトをとり

ました。私が編集部に送ったものと共に、新

らしく一宮百合子のポリウムある、ピチピ

チした緊縛の女体が、諸賢のお目にとまる日

も近い事でしょう。ここ当分彼はユリコに熱

を上げる事でしょうが、それもよし。

このカメラ・ハント。肝心の緊縛シーンの

描写さっぱりなしで申し訳ありません。

その代り、近々マスマミとユリコ連縛の予定

ですから、その節は何卒乞御期待——。

本誌二〇〇号突破記念原稿

アリアドネ

黒淵 嬰 一

ビブリオテーケー さいへんせい
△希臘神話の再編成▽

ホルコモシオン

「正義女神^{ディケ}が定め給うた人の世の掟を改める事は国王にも許されない筈です。死者を葬る事は生き残った者に与えられた義務ではないでしょうか」

ソフォクレスの名作に依れば夏の暑い日とになっている。併し筆者の仮定では早春の寒い朝でなければならない。

所はボエオチャ一州を領する都市国家テーベの中央広場。(エジプトの首府テーベと混同してはならない)

今日王位に即いたクレオンが裁判官の席に

坐っていた。新王が布告した最初の法律が忽ち破られたのだ。それも王族の者に依って。

「生きている間は敵と呼ばれても死んだ後に迄憎悪や敵意を残す事は良くありません」

後ろ手に縛られて、被告席に引き据えられているのは二十才前後の美少女だった。白い亜麻織の長衣を両肩で留め、宝石を組み込んだ編紐の飾帯を腰から肩へ襷袢に引き廻し、髪には銀製の橄欖を挿していた。ギリシヤ風の古代衣裳で両腕は肩の附根から指先迄露出して見えた。瘦形の一見纖弱そうな少女である。併し態度は毅然としていた。

「実の兄を葬った事が罪に当るのなら、どの

ような刑罰でも受けましょう。ラプダコス王族の一門は既に凡ゆる不幸を嘗め尽くしました。死は寧ろ望む処で、わたしにとっては生きてゐる事自体が苦痛です」

少女の白い手首は背に廻り、革紐で固く縛られている。燃えるような長い金髪が後ろに垂れ、固定された両手を蔽い隠していた。

此の美少女が、テーベ王オエディプスの娘で、ギリシヤ悲劇の作者達に幾多の題目を提供したアンティゴネー王女である事は説明する必要もあるまい。

数千のテーベ市民が広場に溢れて判決の結果如何と見守っていた。女が大部分で、数少い男は殆んどが傷を負っていた。テーベ市民

の壮丁大半が失われた犠牲の上に今日の平和が購われたのだ。押し寄せたアルゴス勢がポエオチャ平原を死屍で満たして敗走したのは昨日の事である。此の戦乱を惹起した一人の男—ポリュネイケスは激しい憎悪の対象となった。新王クレオンが即位最初の布告でその埋葬を禁じた時、全テーベ市民はこれを当然の処置と感じた。併し一少女が死刑の威嚇を恐れずに、鳥獸に荒らされている死体を埋葬したと知るや、すべての者が冷静を取り戻した。王女は容姿以上に精神の美しさで敬愛されていた。

「わたし自身はポリュネイケス様の死体に手を掛けませんでした。併しアンティゴネ様が此の事を為されようとされた時に同意した事を認めます。姉上に従って、神々の賞讃と現世の罰を分ちたいと存じます」

傍にもう一人の少女が後ろ手に縛られていた。十七才位に見える。共犯の嫌疑を受けた妹のイスメーネーである。姉によく似ているが容姿、気品共幾分劣っていた。

オエディプス伝説に就いては、フロイドの精神分析学に謂うオエディプス・コンプレックスの名と共に、筆者が詳説する迄もない。知らずして父を殺し、母と婚した此の王は二

男二女を生んでそれが成長する程の期間を平穩に統治した。突然の退位の直接原因はテーベを襲った天災と悪疫である。筆者は此の伝説の中に、クレテやエジプトを襲ったと同性質の世界的災変を看取する。

オエディプス王は自ら両眼を刺して乞食になった。年長の男児二人は譲られた王位を争って父を顧まない。娘のアンティゴネーだけが盲目の魔王と共に乞食になり、ギリシヤ中を放浪する。これを救ったのがテセウスで、老オエディプスはコロノスに於いて大往生を遂げた。

此の間に息子二人の内、王位継承争いに敗れたポリュネイケスはアルゴスに奔り、アドラストス王の援助を受けてテーベに進撃、兄弟のエテオクレスと相討にたおれる。アルゴス方は敗走し、エテオクレスに代ってテーベ王になった救父のクレオンはポリュネイケス以下の埋葬を禁止する。丁度帰国したアンティゴネーは妹イスメーネーの諫めを斥け、禁令を破って兄の埋葬を行い、従容として生理めの刑に服する。

ソフォクレスの三部作は、余りに有名であり、筆者が再説するのは蛇足であろう。話が個人の趣味に亘って申し訳ないが、筆

者の愛好する主題は女性の強さである。併しそれは精神力の強さでなければならない。筆者は所謂S的シーンを歓迎する。だがそれが繊弱な女性が暴力に屈伏するだけの場面ならば寧ろ嫌悪を感じる。縛られても撻たれても屈伏せず、所信を貫き通し、暴力を撓ね返す強さ。筆者は其処に美を見出す。

テーベ市民の中に、髪の黒い、丈の高い女が一人混っていた。彫の深い美人だがギリシヤ的ではない。黒い瞳。逞しい四肢。浅黒い顔。女丈夫と呼ばれたくなる程な姿態。

当然疑われそうな異分子である。市民が氣附かないのは裁判の緊張した雰囲気のために他ならない。併し何処かで見た顔である。

その筈だった。クレテ遺民中に武勇随一の女戦士として知られたモルパディアだった。

詩人や悲劇作家に好題目を提供したテーベ七門戦役が彼女の眼前で展開された。テーベとアルゴスが如何に戦い、何れ程な損害を受け、戦後に幾何の余力を残したか。これを探索する事がアリアドネから命ぜられた使命だった。嘗てはアリアドネに次ぐ牡牛の舞の名手として知られたモルパディアは斯かる諜報活動にも適任だった。

アルゴス軍五千はイストモス地峡に沿って

北上し、キタイロン連丘の北麓を西から東に進撃し、全軍を七隊に分ち、アドラストス王やポリュネイケス等の七将を各軍に配して七門に攻め掛った。テーベ王エテオクレスは七勇士に七門を守らせて邀撃した。近世の発掘から見るとテーベは七箇もの門を必要とするような大都城ではなかったらしいが古代の詩は尊重しなければならない。

交戦は電光閃き、雷鳴轟き、河流逆巻き、大地も裂ける天変地異の中で行われた。結局アルゴス方が敗走し、アドラストス王を除く六将は兵の大部分と共に戦没するのだが、六将中の二人は落雷に感電したり地震で埋ったりして死んでいる。戦死者の三分の一が事故死とすれば紀元前千五百年代の世界動乱が此処にも想起される。勝ったテーベ側もエテオクレス以下戦士三千の殆んどが死傷して追撃出来なかった。要するにアテネの強大な隣国が相争って共に傷つき、一時的に戦闘力を失ったのだ。

モルパディアは、此の情報を確認すると、未練なくテーベを後にした。使命は完全だった。併し、惜しい事に、彼女は生粋の軍人だった。関心は純軍事的事物に限られた。裁判を受けている美少女の末路を見届ける事は任

務の障害として故意に回避した。幼時から親衛隊の一員として教育され、訓練された彼女にはそれが当然だった。

若し、代りにアリアドネが此の場に居合せたら、必ず違った結果を生じたであろう。或はアンティゴネーの救出を企てたかも知れない。遺憾ながら古代の伝承は、それを許さない。美少女の刑死とクレオン一族の最期はソフォクレスの名作に譲る他はない。

全市民の注視が裁判に向けられている間にモルパディアは、エレクトライ門から脱出した。丁度姉妹に対する判決が下される処だった。アンティゴネーは生きながら墓に埋められる。イスメーネーは死一等を減じ、終身禁錮に処せられる。

後ろ手に縛られたイスメーネーは面も掩えずに泣き伏していた。同様に縛られたアンティゴネーは王族の標章すべてを剥奪され、正に刑場へ曳かれようとしながら、哀切限りの中にも毅然たるものを感じさせる言葉でテーベ市民に別離を告げていた。

× × ×

同じ頃。紀元前一四九二年の春。

二十二才のアリアドネは、コリダロス山の中腹に登り、建設中のアテネ市を樹蔭から観

察していた。此の山は東方に新興アテネを望み、ギリシヤの有力都市アルゴスとテーベを結ぶ街道は西麓を走っている。危険も多いが情報を集めるには最適の場所だった。天体観測で鍛えられたアリアドネの視力は遥か彼方のヒメットス山麓に建設されつつあるアテネ市を明瞭に観察する事が出来た。

都市計画地域はアクロポリスの岡を中心として東西五百米、南北千米。丘上にアテナ神殿と戦時城塞を築き、麓には政庁、邸宅が一日毎に整備されて行く。エーゲウス時代の木造住宅群は既に影も見えない。新興アテネの脈動。その財力。住民の勤労精神。そして青年指導者テセウスの澁澁とした統制力が距離を隔てながらも膚に感じられた。

「自由民一万。その内戦士三千。此の富強。アテネと戦うのに尋常の準備と覚悟では徒に後世の嘲笑を残すばかりでしかない」

アリアドネは秘かに思った。

ギリシヤ的な容姿。焦茶色の髪。訛りの無いアケーヤ語。何処から見てもアテネ婦人である。加えて敏捷な体躯と驚嘆すべき運動力は諜報活動に最適の要素だった。

幾千もの人間と牛が車を輓いている。石や材木はパラリア方面から運搬されていた。働

いている者の一半はアケーヤ自由民であり、残余はクレテ島から連行された捕虜らしい。

「暫く辛抱して下さい。必ず、救ってあげます。放浪して見て世界の広い事がよく解りました。遙か東の何処かにクレテ王国を再建する土地が有るでしょう」

アリアドネは自分に聞かせる為に言った。

その夜半。王宮内のテセウスの寝室では垂幕が音も無く開かれていた。黒衣が静かに床へ落ちた。現れたのはアリアドネだった。

テセウスは専制君主ではない。プルタルコスも記しているが古代には珍しい民主的指導者だった。その宮殿も大きな邸宅程度で警備は手薄だった。自身の武勇に対する確信からか寝所附近に衛兵も置いていなかった。室の一隅に祭壇があり、余燐が燃え、その火明りの中にアテナ女神像が見えた。等身大の武装女神は厳然と直立し、それに見守られるような位置に寝台があった。

「テセウス」

アリアドネは口の中で言った。金髪の青年王は女も伴わず一人で寝ている。恰もアテナ女神と同衾している観すらあった。

アリアドネは用心深く室内を見廻した。人の気配は無い。併しアテナ女神像が気になっ

た。唯の木像に過ぎないのだが顔に見覚えがある。何処かで見た顔。

その筈だった。アテネ人が理想とする文明の保護者は正しく四年前のアリアドネ自身の顔をしていた。何故似ているのだろう。

併しアリアドネは思い直した。懐中の短刀を引き抜いた。擦足で歩み寄った。咽喉部に白刃を擬した。テセウスは醒めない。

だがアリアドネの腕は動かなかった。額から脂汗が流れた。脚が震えている。恐ろしいのか。そうではない。もっと他の何かがある。何か。それは解らない。

アテナ女神像、もう一人のアリアドネが黙然と見下している。テセウスの静かな寝息は少しも乱れていない。

「アリアドネ。遂に来てくれたね」

眼を閉じた佯テセウスが言った。アリアドネの影は壁際迄飛び退った。

「俺は君の父を殺した。そして君の国を亡した。それでも君を待ち続けた。五年間」

テセウスは寝台に横臥した佯動かない。

「更に暫く待とう。君が何をしようとも動かずに居よう。アリアドネ、君は俺を刺そうとしているのか。それとも抱こうとしているのか。それは君次第だ」

アリアドネの荒い呼吸が闇の中に聞えた。
「アリアドネ、俺がダイダロスに頼んでアテナ女神像を君の顔に似せて作らせた意味を理解してくれるか」

アリアドネの手から短刀が床に落ちた。
「ダイダロスも天寿を終った。過去は塵へ。

君の欲する物が俺の血なら最後の一滴迄流しても悔いはない。俺の心を取ってくれるならアテネ全部を附けて進上しよう」

アリアドネの声が一度だけ聞えた。叫ぶような、泣くような声だった。次の瞬間その白い姿は風を捲き、一閃して消え去った。

「アリアドネ、待ってくれ。今更去る位なら寧ろ一思いに俺を刺して行け」

テセウスは挽ね起きて窓に駆け寄った。だがアリアドネは既に彼の脚力を以てしても追及し得ない所に居た。遙か彼方を疾走する後姿が暫く見えていたが、それも忽ち闇の中に没して行った。

×

×

×

「アッティカ進攻の好機は今を置いて他に望めません」

戦略に長じたエウクシノミアが宣言した。クレテ王国遺民軍の大本営たる天幕の中だった。正面にはクレテ三神を象徴する太陽神の

黄金円盤、地母神の蛇連環、海神の剣が安置され、最高祭祠アリアドネがこれを奉持し、議長席にはミノス五十五世たる九才のエウクサンティオスが着き、クレテ遺民の全幹部が揃っていた。

「兵力も装備も完全とは言えません。併し昔から準備完了を待って行われた戦もありません。次代を担うべき男の子供達が成長するのを待つ間にアテネは今の何倍も強くなるでしょう。テセウスに味方する筈だった強大な隣国が相戦って共に傷ついた今こそ神与の好機と考えます」

クレテ遺民は主として女戦士より成り、その中には将校たり得る素質を備えた者も幾人か居た。併し政略や戦術を理解する総指揮官はエウクシノミア一人だけだった。加えて幼王の親権者という地位もあり、統帥権は自然とエウクシノミアに任せられた。

「アテネの強大な隣国たるアルゴスとテーベは戦って共に傷つきました。今アテネを討てば、これを援ける同盟国はありません」

情況判断の基礎となるものはアリアドネ以下の偵察結果である。エウクシノミアは粘土板の上にギリシャの略図を描いて説明した。

「テーベの王位は凡庸懦弱なクレオンが継承

しました。当分の間、対外積極策を採る事はないでしょう。一方アルゴスのアドラストス王はアテネに赴き、憐れみの祭壇に橄欖樹の枝を捧げて戦死者の死屍を引き取りたい旨の哀訴を行いました。義侠的なテセウスは直ちに仲裁の労を執った模様で、これに成功したら全ギリシャに於いて彼の名声は一層高くなるでしょう。最早一刻の猶余も出来ません」

クレテ遺民は艦船をスカマンドロス河口に留め、此処に小さな基地を獲得し、ギリシャ進攻に備えて食糧の貯蔵、艦船の整備、武器の集積、戦闘員の訓練等を行っていた。本来ならタナイス河口の植民地テミスキラが基地となるべきだがギリシャから余りに遠い。イリオン地方なら横漕数日でアッティカに航行する事が出来た。

併し、アテネに連れ去られたアンティオペー以下のクレテ人を奪還するには、テセウスの部衆に負けないだけの実力を養成しなければならぬ。それは容易な事ではなかった。抛るべき国土は無く、艦船は腐朽しつつあるも新造の見込は立たず、クレテ遺民は数に於いてアテネ戦士に劣り、壮丁は皆無に近かった。男は未成年に限られ、戦闘員の大部分は婦人兵士である。戦略を以てアテネ一国を相

手に限定する単一正面作戦を成立させたとしても戦術的に勝算が有るか。

「アテネは強敵です。或は、わたし達の最後の一人迄もアクロポリスの麓に屍を曝すかも知れません。それでも此の戦は行わなければなりません。伝統あるクレテ王国を再建するにはアンティオペー様やメラニッペー様を奪い返す事が必要なのです。勿論アテネにも弱点はあります。アテネの強さはテセウス一人に支えられているもの。テセウスさえ討てばアテネは必ず瓦解します。わたし達が女である事を忘れましょう。腕を磨き、戦意を高揚して、本懐を達するその日迄、戦士になり切りましょう」

エウクシノミアはミノス大王の感化を受けて一軍の総帥たる資格を備えていた。

軍令のエウクシノミアに対比されるのは軍政のアリアドネである。太陽神と地母神の祭祠長という地位は実質上の女王だった。且つ彼女の知識は艦船塗装に、金属精錬や武器整備に、医療及び薬物調合に余す処なく役立った。併しアリアドネは武勇の質ではない。刀槍弓箭の用法を一般教養とするクレテ女性の中で彼女は明らかに異質の存在だった。今日の会議でも終始何の発言もしなかった。意見

が無いわけではない。テセウスを刺す機会を得ながら果し得なかった自身を恥じているのだった。

「アリアドネ様、テセウスを刺せなかったのは誰の罪でもありません。貴女が女であり、彼が男であつた事が原因なのです。五年前に同じ危難を手を執り合つて遁れてから、この運命は避けられないものになったのです」

コルキュネが慰めたが逆に刺戟する結果となった。

「わたしは女であつてはいけないのですね」
夜になってからコルキュネは太陽神の奉安殿に当てられた小舎に呼ばれた。黄金円盤の前で香炉が焚かれ、火の中で青銅剣が灼かれていた。外科手術用の短刀である。「クレテ王国の祭司长として命令します。太陽神に誓つて違背はなりません。理由を問う事も許しません。解りましたか」

アリアドネが此のような厳格な態度で臨んだのは始めてだった。コルキュネは畏怖に打たれて床に平伏した。そうでなくても地位と太陽神を持ち出されては服従しないわけに行かなかった。

卓上には縫合針、オリブ油、蜘蛛の巣、土繭の一種、其他要するに外科手術材料一式

と麻綱一束、海綿、革紐等奇怪な道具が並べてあつた。アリアドネは炉の傍で椅子に掛け上半身の衣裳を腰へ脱ぎ下した。

「門を掛けて頂戴、此方へ来て。その綱を持つて。わたしを椅子に縛りつけて下さいな」
アリアドネは両手を椅子の背板に廻した。
「何をなさるのですか」

「質問は許しません。これは命令です」

コルキュネは半ば慄えながら麻綱を握り、アリアドネの剥出した胸を巻き締めた。

「乳房の上下は避けて、腕と腹で縛つて。わたしの身体が柔かなのはよく知っているでしょう。無意識で解いて了うといけないから、手首は縦横十文字に固く結んで」

コルキュネは漸くアリアドネの意図を察知した。

「ああ、アリアドネ様、まさか」

「言われた通りにしなければなりません。もつと固く、もつと。痛い、でももつと固く」

コルキュネの額から脂汗が流れた。縛られたアリアドネの方が励した。

「コルキュネの力量はもつとある筈ですよ。其処に葡萄酒を用意しておいたから飲んで勇氣を出しなさい。次に足も縛つて。床に着かないように少し持ち上げるようにして」

アリアドネは微動も出来ない位に緊しく自身を椅子に縛らせた。

「外科手術の仕方は教えた心算です。わたしは女であつてはならない。今度の戦はクレテ王国再興を賭けた大切なもの。テセウスとの縁をわたし自身の体内で断ちましよう。青銅剣が充分灼けたらわたしの乳房を切り落して下さい。これで指図は終りです。あとはコルキュネがやりなさい。わたしが呻き声を出すといけないから、執刀の前にその海綿を口に詰めて革紐で固く抑えておく事を忘れないように」

コルキュネは無言で頷いた。

「手が慄えていますね。落ち着いて。間違つてわたしの心臓を刺すといけないから。テセウスに対する未練が残ると災がクレテ遺民全部に及ぶのです。躊躇してはなりません」

アリアドネは自ら口を開いて猿轡を受け容れた。併し眼隠しは拒否した。両眼を見開いて自分の胸を見ようとした。コルキュネは灼熱した青銅剣を振り上げた。

間もなく、闇を劈くような絶叫が陣営中に響き亘った。エウクシノミア以下の幹部が驚いて駆け出した。続いてもう一声。どうやら奉安殿の中らしい。モルパディアが扉を叩き

破った。屋内は薄煙と異臭に満ち、胸部を露出したアリアドネは縛られた姿勢で意識を失っている。固く嚙ませた筈の猿轡が保ち得ず頬に跡を残した俛吐き出されていた。純白の右乳房は焼け爛れて大きな焦痕を留め、灼熱した短剣は乳房の断片と共に床に転り、傍にコルキユネが呆然と立っていた。

「アリアドネ様は両乳房共切り落すように命令されました。けれどわたしにはもう出来ません。この美しい胸を傷つけるなど」

コルキユネは半狂乱になっていたが治療だけは誤らなかつた。手早くオリブ油を塗り蜘蛛の巣と徹で化膿止めを施し、亜麻布で抑えた。エウクシノミアが感嘆して言った。

「アリアドネ様は武勇の質でないにも拘らず勇氣と決意の手本を示されたのです。本来右乳房は弓槍の障害になるもの。わたしも遅れずに続きましょう」

アリアドネの縄が解かれ、奥の寢所に移された。エウクシノミアが同じ椅子に掛けた。

「コルキユネ、頼みます。でも縄は要りません。わたしは縛られるのは嫌いです。手は自分で後ろに組んで、離しません」

続いてモルパディアが従った。

「左利でないから困難ですが、自分で切りま

す。あとの手当てだけして下さい」

クレテ遺民の幹部が我も我もと進んで見習った。感じ易い女性集団の群衆心理と表現するには余りにも凄烈な場面だった。

× × ×

紀元前一四九一年六月十八日の夜。

二十三才の青年王テセウスは正妃アンティオペーの寢室を問うていた。

アンティオペーは今年三十五才。テセウスの子ヒュッポリトスを生んでから二年しか経っていない。これはアンティオペーにとって始めての子供だった。三十才を過ぎての初産だから尋常の出産ではなかつただろうが彼女の遅しくも美しい容姿は聊かの衰えもなかつた。そしてこれが彼女と征伏者を離れ難いものにした。アンティオペーにとって十二年間の結婚生活は虚弱無能力のグラウコスが夫であり王の死後は政治責任と地位が性生活への溺没を許さなかつた。要するにアンティオペーは政治に疲れ果て、女の歓喜を知らなかつた。それを自覚したのはテセウスに征伏された後で、既に三十才を越えていた。

「俺は征伏者だぞ」

テセウスは冗談とも本気ともつかぬ調子で

言った。

「わたしは捕虜です。どうぞ御存分に」

十余年間クレテ王国の内治を預った偉大な女支配者は易々として屈伏した。クレテ王国没落に際しテセウス自身の手で圧倒されてから、アンティオペーの体内には被征伏に対する動物的条件反射が形成されていた。

「君を縛る。向うを向いて手を後ろに廻せ」
テセウスは高圧的に言った。併しアンティオペーは卸って血が滾った。

数呼吸の後、夜着を剥奪されたアンティオペーは亜麻紐で後ろ手に縛られ、寝台の上に転がされていた。上下から紐に圧迫された胸部は高く隆起し、膝は揃えて結ばれ、飾帯が跨間を走り、両足首は背の手首と連結されていた。身を振る事も出来ない緊縛なのだが、アンティオペーは寧ろ満悦の微笑を浮べていた。その陶酔は突然破られた。

「俺は君が好きだ。愛しているから、斯うした。自由を奪っておかないと、君は自分で破滅の中へ飛び込んで了うだろう」

アンティオペーは一瞬で変事を悟った。彼女も出身は戦士である。醒めると同時にテセウスの身体から立ち騰る殺氣を感じた。

「戦争ですね。敵がアテネに寄せて来たので

の人物であり、アマゾン伝説の大部分は此の二人に關して起る。アマゾン族が実在したとすれば、それは紀元前千五百年頃に出現したものであろう。

ヒブリオテラケー

希臘神話に記されるアマゾン族は、

アレクサンドリス

軍神と狩獵女神を祭り武勇を旨とする軍国

であり祭祠国家であるとされる。若い勇敢な女王が軍隊を統帥し、年長の神官が祭祠政治を行う。野蛮国と伝えられるがこれは文明化した組織である。年一回隣国の男子と交り、生れた男児は棄てるか又は去勢し、女児のみを育てる。これに依つて女性だけの国家が維持されると言うのだが、人口の半分を自ら淘汰するのは余りに不自然である。事実とすれば斯かる社会は三代を経ずして解体したに違いない。

筆者はアマゾン族を純粹の女性集團とは思わない。軍の構成要素に主將以下多くの女性が含まれ、それが勇敢に奮闘した場合、歴史はこれに女軍の誇稱を贈るであらう。一五九〇年小田原役に於ける「忍城女人軍」の如きはその適例である。アマゾン族も亦何等かの事情で壮丁の大部分を失った社会の過渡的な姿ではなかっただろうか。

アマゾン族に關するもう一つの信じ難い伝

説は、弓槍を振う便利の為に幼時に於いて右乳房を切断したと言う一事である。紀元前七世紀の人で医学の祖ヒポクラテスは、その著「古代医術」の中で「スキチヤの一種族は極めて勇猛で、その女性は幼時に右乳に青銅の型を固縛してこれを退化させ、左乳房のみを成長させる」というような事を書いている。併し彼はその種族をアマゾンとは書いていないし、女性だけの社会とも言っていない。若し此のような国家が実在したらアレクサンドロス大王の東征に際しヘレニズム的科学觀察者の記録に価したであらう。

昭和三十九年四月号にて『女闘美八景』の作者は、斯かる非人間的行為を真向から否定し、右乳房切断を無知なギリシヤ人共の噂として對話中に収め、本文では明確に「両乳房を震わせ」と記されたが、筆者はその勇断に感嘆を捧げるものである。併し一方に於いて古代の詩情を抹殺するに忍びないものをも感じる。筆者なりの結論を作りあげたのは、その為に他ならない。

筆者の描くアマゾンの軍事組織は歩兵集團であり、より正確に言えば、海軍陸戦隊である。颯爽たる女軍騎行図を期待される読者には申し訳ないが紀元前十四世紀には組織的な

騎兵も騎馬民族も發生していなかった。人を直接鞍上に乗せ得る程に改良された馬自体が中央アジアを除いては存在しなかった。ハルカリナソスのマウレソウム壁画にアマゾン族とギリシヤ軍の戦鬪を題目にした有名な場面があるが女軍は歩兵として浮彫されている。騎士としてのアマゾンをも有名ならしめたものは「咽喉に噛みつき、血に塗れて表現される極限に於ける愛」を描く鬼才クライストの戯曲「ペンテジレア」等後代の作品であらう。

プルタルコスに依ればアマゾン軍は突如としてアテネ附近に現れ、西方からアッティカに侵入した事になっている。テッサリヤを通過して陸上から進攻したのならエーゲ海北岸に多くの口碑を残したであらう。アマゾン軍がクセルクセスの如き大軍で押し寄せた痕跡は無い。此の疑問は彼女等が海路ファレロン湾に上陸したと仮定すると解決する。

ヒブリオテラケー

希臘神話はアテネがアマゾン軍に襲われた

理由を「女王アンティオペー奪還の為」と伝えている。後代のトロイ戦争も似たような原因から起った。但し誘拐された女性がヘレネという名の年増女であったか、不特定多数の女達であったかは問わない事にする。古代の伝説は概して真相を、少くとも一部は伝えて

いるものと信じたい。

希臘神話を分析すると、アマゾン軍はケラミコス区から芸術女神丘に到る正面に連続戦線を形成し、設堡陣地に拠って四箇月に及ぶ持久戦を展開した事になる。これは一種の封鎖戦であり、女性の本能が保守である限り妥当な戦略である。アッティカの地型で騎兵を主戦力とする活潑な運動戦が行われたとは思えない。

昭和四十年四月号に於いて「女闘美八景」の作者が、アマゾン軍の兵力を「二千騎の大軍」と形容された時、筆者は思わず苦笑したものだ。併し今度は筆者自身が「四箇月の持久戦」と書いて笑われる番になった。輕装聯隊にも満たない戦術集団が、それ自体本隊として数百軒の戦略機動を行う事は二十世紀的感覚では理解出来ないかもしれないが、此処では淡路と明石の戦争を仮定する必要がある。アッティカの地図を按ずるに、此の戦線に数箇大隊が展開されれば正しく大軍となる。筆者はアマゾン軍の第一線女兵二千、後方勤務及び艦船警備の少年少女三千と推定する。アテネ側は戦闘員三千で、多数の市民が協力した。

希臘神話の伝えるアマゾネス戦役はギリシ

ヤ側の一方的な大本營発表である。如何に言論自由のアテネであっても宣伝臭が有つてよいように思う。然るに、此の戦役に関する限り、大英雄テセウスの功業は何も伝えられていない。ペンテジレアを討ったアキレスに比すべき戦果は何も聞かれない。戦死したアマゾン女軍将校の名は全然記されていない。知られているのは、アテネに捕えられていたアンティオペーに起つた不測の災難と、女軍の勇猛を語る類の話と、テセウスの遅疑逡巡ばかりである。(戦闘綱要に依れば指揮官の最も戒むべき処である)アマゾン軍は結局アテネを征服せずに退去するのだから、もっとギリシヤ側に有利な伝承が有つても良さそうなものだが、そうでない処から察するに此の戦役がテセウスにとって相当な不首尾に終つた事を証明する間接証拠ではあるまいか。

エウクシノミアの作戦は、アテネ討滅の如き絶対戦争を意図していなかった。ミノス大王在世当時になんて達成出来なかったような過大目標を追求して攻勢終末点を超越する危険は冒さなかつた。奪われたクレテ自由民の回復が唯一の限定目標だった。

クレテ遺民軍の装備と給与はアリアドネが担当した。持久戦を保証する物資は充分に留

意された。各地で獲得した奴隷は戦略物資の集積が終ると同時に無条件で解放された。艦船の撓漕はクレテ人が自ら行った。これは口を減らす意味がある。農作物の不作で穀類は乏しく、食糧源は水産乾物に求められた。本来斯かる配慮は女性の方が優れている。アテネには長期戦の準備が不足していた。

ヘラ女神は天のヴェールを戦場一帯に投げ掛け、交戦は薄暗い中で行われた。これはイリヤッドの記事であるが、紀元前千五百年頃の世界動乱に際し、厚い塵雲が空を掩つていた様を思わせる。ホメロスに依れば此の雲から神聖食糧が降下して勇士に与えられた。可食性の炭水化物で、溶けて神聖飲料となり、香料にも用いられ、馬糧ともなり、ヴェールとしても使われた。封鎖されたアテネ市民が餓を免れたのは此の物質の恩恵だった。

アテネは苦戦だった。連年の凶作と、城市の建設で疲弊している上に収穫期の麦は蹂躪された。最初の急襲で農耕や伐木に従事中の市民男女多数が捕虜になった。城壁は未完成で市街中心部迄侵寇の危険に曝された。隣国のテーベもアルゴスも来援出来ない。何よりも困った事にアテネの武力を支える中心人物たるテセウスが今回に限って戦意を欠いてい

た。その理由は周囲の者には解らなかった。

紀元前一四九一年十月一日救援祭日にアポロ神託は決戦を命じた。実際アテネの持久力は限界に達していた。一日の交戦に興廃を賭するより他にない。テセウスは遂に立った。

「本意ではないのだが行こう。俺は自分が殺される事を恐れはしない。俺が向えば立ち塞ぐる者すべてを殺す。それが恐いのだ。殺してはならぬ人を殺すかもしれない事が」

テセウスは、武装していた。馬尾を飾った兜。真鍮の胸甲。梟を描いた楯。短剣を佩き棍棒を帯びている。

正面の太柱を背にして正妃アンティオペーが立っていた。両手は後ろに縛られ、縄尻は柱に幾重にも繋がれていた。暴れたのか、髪は乱れに乱れて肩に降り掛っていた。革布の猿轡が固く口を掩い、足は縛ってなかった。「俺が戻って来る迄動くのではないぞ。尤も動けないだろうが」

テセウスは自嘲に似た微笑を浮べた。

アテネ軍が右翼に重点を置いたのはポエオチヤ方面に血路を開く為だった。テセウス自身が此の翼を率い、集結地のリカベットス山からケラミコス区に進んだ。中軍はアクロポリスを出て議事堂丘から西進し、左翼はプニ

クスに向って芸術女神丘を出撃した。

アテネ全軍が高地を下って平野決戦を求めたのを見て、エウクシノミアも持久策を棄て設堡陣地を出た。ファレロン湾に在る艦船を擁護する目的で主力は南翼に在った。

白兵戦は早朝に始った。ギリシャ戦士の獸的な咆哮と、アマゾン女兵の金属的叫喚がケフィソス河畔に激突し、押しつ返しつ揉み合った。戦略も戦術もその用を終った。個々の武技と勇氣と熟練と信念の集積がすべてを決する場面である。主神は雷火を投じ、海洋神は大地を揺るがせ、アテナ女神は血の雨を降らせ、軍神は天を震動させ、冥府女王は新しい死屍を求めて駆け巡った。

クレテ遺民の女軍は数と体力において劣った。併し青銅製武器の使用に幼時から習熟し更に数年今日あるに備えた女軍の奮闘は凄じかった。且つ女性の興奮は男性に勝る。女軍は実力以上の敢戦を試みた。恰も狩獵女神が原野を駆ける様に似ていた。

本来戦闘の勝敗は死傷者の増加に依って決するものではなく、生存者の恐怖心と潰走に依って生起するものである。逆上し切った女軍にはそれが無かった。流血も殺戮も恐れず屍の上に屍を積んで奮迅殺到を繰返した。

アマゾン軍の右翼には剛勇無雙のモルパデイアが居た。テセウス配下のギリシャ戦士が幾人も彼女の槍先に落命した。クレテ遺民軍はピレウス門を突破して市街南部に侵入し、アテネ軍を芸術女神丘に追い上げた。

太陽は塵雲の上に隠れ、拡散した白光を見るばかりだった。併しアマゾン軍の上には黄金の太陽像が輝いていた。太陽神の下から決死の女兵が駆け出した。アリアドネは御神体を押し進め、プニクスの頂上に中軍の大牙を掲げた。前衛はアクロポリスの一角に達し、勝利女神黄金像の祠を奪取した。オデオン劇場附近の地下牢に幽閉されていたクレテ人の一部が救出された。アテネ軍もアクロポリスの要衝を堅守して譲らず、市民の婦人小児に到る迄丘上から弓箭を把って抗戦した。太陽像を擁して議事堂丘の麓に進んだアリアドネは乱箭の焦点となり、これを庇おうと身を挺したコルキユネが重傷を負った。

アテネ軍は戦線の北翼から攻勢に出た。テセウスは無敵の棍棒を振って暴れ廻った。エウクシノミアの指揮もテセウスの突進を阻止し得なかった。テセウスの通過する処、噴血の泉流が湧き、死屍の堆積が丘を成した。早朝に南北を向いていた戦線は両軍共右翼

を推進して漸次旋回し、徐々に東西へと方向を転じ、且つ両翼間の距離を短縮してアクロポリス周辺に集中しつつあった。密度の増加と共に戦闘は愈々激烈の度を加えた。男と女がヘラ女神の掟に背いて互に掴み合い、殺し合い、共に倒れた。

此の頃、アクロポリス北麓の王宮では、独り残されたアンティオペーが雄偉な身体を揺すりながら不自由を歎いていた。テセウスは剛力なだけでなく技巧も優れている。締めつける縄は少しも緩まなかった。両手の感覚は既に無い。汗は両眼を犯し、胸の縄を湿らせ腰から脚に向って溢れた。アンティオペーは固い猿轡の中で呻いた。若し言葉が出せたら斯う言っているのが聞えたに違いない。

「戦の響きが近寄って来た。すぐ其処迄来ている。わたしの身体を得ようと争って多くの人が死んでいる。此のアンティオペーが生きていたばかりに今日の惨禍を招いたのだ。早く自由になって戦を止めさせたい。それなのに。噫、縄が固い」

それでも、必死に腕く内に、後ろ手と柱を繋ぐ縄尻が少し宛伸びて軋みだした。振って引いて、踏張った。切れるのは縄が先か手首が先か。

遂に大きな音と共に、アンティオペーの身体が柱から離れた。前屈みの姿勢から突込んだ。雄偉な巨体が床を転って壁に激突した。縄尻が切れたのだ。

後ろ手の自由は回復出来なかった。併し足を縛られていなかったので立って歩く事は可能だった。アンティオペーは猿轡の上に鼻血を流しながら漸く起き上った。壁に頬を擦りつけて何とか猿轡を押し下げ、膨れ上った海綿を口から吐き出した。

アンティオペーは喘いだ。肩を揺すって太息をついた。気力も体力も尽きかけていたが為さねばならぬ事は寧ろこれからだった。

若し充分な時間があつたら休養の後で上半身の縄目を自力で解く事も出来たかもしれない。併しアンティオペーにはその余裕がなかった。一刻遅れる毎に誰かが一人死ぬのだ。

アンティオペーは走り出した。両手の自由を奪われていたから、老人か少年でも居合わせたら再び拘禁される他はなかっただろう。

だが幸にして宮殿には誰も居なかった。市民悉くが弓箭を把って前線に立っていた。

玄関を一步出ると同時に、無数の剣光が眼を射た。怒号が渦巻き、金属が打ち合い、鐘鼓、喇叭の響きがそれに和した。白兵戦は正

に最高潮である。その両軍の上に高く、黄金の太陽が燦然と輝いていた。

「ああ、太陽神^{ヒュペリオン}」

アンティオペーは神聖な標章を、深い畏敬と複雑な感情を以て眺めた。

戦場の真只中を真紅の旋風が吹き荒れていた。間断なく八方に撒き散らされる血漿の飛沫。テセウスである。棍棒に触れる者悉くが一撃で頭蓋を粉碎された。恐る可き猛威。

その突進が急に止った。女将校一人、テセウスの真正面から挑戦した。微塵になれと打ち下す棍棒が二度、三度空を打った。必殺の打撃を一髪之差で外す手練は只者ではない。

「来てはいけない。戦場に手加減は無いぞ」女将校の兜が飛んだ。偶然ではない。距離を測って、テセウスが兜だけを打ち落したのだ。兜の下から長い焦茶色の髪が現れた。テ

△お願い▽と△お断り▽

○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢達の住所氏名の照会には一切応じておりません。手紙の転送や文通の幹旋、或は読者の紹介といったことも原則として行っておりません故御諒解願います。読者間の文通交歓は、すべて読者通信欄にて行って頂くようお願いします。

セウスの想像通りアリアドネだった。

アリアドネはモロク神を征伐した海神の剣オケワヌス

を抜き放っていた。牡牛の舞で牛角を相手に修練した技術が役に立った。テセウスの棍棒が急に鈍った。アリアドネは上段から斬り下げ、テセウスの棍棒がそれを払った。刃尖が棍棒に喰い込んだ。

「アリアドネ。本気で俺を斬る心算か」

アリアドネの腕は、テセウスに遥か及ばない。剣は棍棒に支えられて動かなかった。併しテセウスが敢てそれ以上の動作に出ようとしないので、外見上は力量の均衡した二人が争っているように見えた。

「貴方の一番入用なものを献上に来ました。」

名誉を贈ります。わたしは、クレテ遺民の女王。この首を取って下さい。その代りに、捕えられているクレテ人を返して戴きたいのです。貴方の俠気にお縋ります。さあ、早く殺して下さい」

押し戻すように見せながら、アリアドネが顔を寄せて早口に言った。

「出来ない。俺に君が殺せるものか。君に俺を刺す事が出来なかったと同様に」

テセウスはアリアドネを突き放した。彼我の兵が周囲に群って相争った。最早これ以上

の慣れ合い鏖闘合いは出来ない。アリアドネは地を蹴って跳躍し、距離を開いた。

「去年とは違います。わたしは変わりました。女である事を止めたのです」

此の意味はテセウスに理解出来なかった。

アリアドネは言うと同時に襲い掛った。頭上を飛び越え、側背に駆け抜け、閃々と切尖を突き入れる。テセウスはその剣から演出ではない真の殺気を感じた。アリアドネの剣技そのものは拙劣極まる。併し活潑な運動は牡牛の背で舞踏したあの神技だ。故意に防禦ばかりしていたテセウスは漸く脅威を覚えた。これは危い。殺さなければ殺される。

テセウスとアリアドネの決闘は議事堂丘にアレオパゲス続く小高い斜面だった。戦線の両翼及び前後からよく見えた。女軍の右翼に居たモルパディアはこれを認めると同時に正面を放棄して猛然と駆け出した。蛇桿の短槍を振り廻し、進路を自ら開きながら走った。全く同じ時、もう一人の女が王宮の方から此の場所に向って駆け下りていた。

テセウスの棍棒が遂に空中でアリアドネを捉えた。爪先を払われたアリアドネは一回転して地に落ちた。安定を失って倒れた。起き上ろうとする頭上に棍棒が閃いた。

「アリアドネ様。危い」

モルパディアは百歩の距離で人渦に妨げられていた。もう間に合わない。他に策なしと判断したモルパディアは短槍を右肩に構え、群兵の頭上越しに、一杯の射程からテセウスの幅広い背を目標に投擲した。大きな弧を描いて銀光が飛んだ。

「モルパディアが、槍を。手が使えないのが口惜しい。あの槍を宙で受け止めるのに」

アテネ軍の戦列後方からもう一人の女がすべてを見ていた。アンティオペーである。両手は依然として背に縛られた俥だった。本来が武將の質であり、戦場観察眼は発達していた。槍が正確にテセウスの背に向って放たれた事と、呼び掛けても戦場の騒音に遮られて達しない事を即時に判断した。アンティオペーは槍の落下点に自分自身を叩きつけた。

三人が同時に驚愕の叫びをあげた。テセウスは背後の異状を察して振返った処であり、アリアドネは半ば起き上りかけた姿勢で、モルパディアは未だ幾らか離れた位置に居た。超遠投で拋物線を描いた蛇桿槍は殆んど垂直に落下した。アンティオペーはテセウスの背を掩うようにして立ち、槍は右肩から肺を貫いて脊椎に抜けていた。

「余りにも多くの人が死にました。もう沢山です。両方の目的だったアンティオペーは失われました。わたしが最後の犠牲になりましたよう」

女丈夫は槍を負った俣、暫く立っていたがやがて静かに膝を落した。後ろの手を固く握りながら俯伏せに倒れた。倒れながら呼び掛けた。

「わたしの血を無駄にしないで」

敵も味方もなかった。等しく駆け寄って抱き起し、縄を解き、槍を抜いた。併し血は既に気管に侵入していた。

「クレテ王国を治めた栄光の日々。テセウス殿との楽しい思い出。両方共持つて冥府に行きましょう」

テセウスとアリアドネが顔を見合わせた。何方からともなく頷いた。静寂が周囲一帯を支配し、それが次第に、慟哭へと変わって行った。軍神は去り、平和女神が現れた。

アンティオペーが血を流した場所に一基の石碑が建てられた。彼女に対する祭典はプルタルコス時代にも行われていた。その地名はアマゾン族に関する伝説と共に今日に至る迄伝えられている。

（ホルコモシオン）
媾和条約締結地と。

（次章完結）

限定版写真集 美しき縛しめ (第五集) 完成!

アルバム

女性刑罰拷問特集

△日本版▽

待望のグラビヤ印刷によるアート紙の「刑罰拷問写真集」成る
モデル………美木乃々子………山原清子
頒価 一〇〇〇円 (送共) 略号「美5」

△アルバム (写真集) の内容▽
（刺青の女王山原清子、演技派の美女美木乃々子の熱演による女性刑罰拷問写真集）

木馬責にあって苦悶する女囚八葉（美木乃々子）
木乃々子（山原清子）
折檻を受ける女囚四葉（美木乃々子）
連続四葉（美木乃々子）
連れる女囚二葉（美木乃々子）
子ら（美木乃々子）
女囚八葉（美木乃々子）
を掛ける女囚二葉（美木乃々子）
乃々子（美木乃々子）
えぬ女囚八葉（美木乃々子）
責める女囚八葉（美木乃々子）
女囚八葉（美木乃々子）
くびれる女囚八葉（美木乃々子）
々々々（美木乃々子）
四葉（美木乃々子）
拷問（美木乃々子）
乃々子（美木乃々子）
三葉（美木乃々子）
喘ぐ女囚八葉（美木乃々子）
悶する女囚八葉（美木乃々子）
裸に折檻される女囚八葉（美木乃々子）
葉（美木乃々子）
吊りに（美木乃々子）
以上合計七十四葉



喜代司の鼻責めシリーズ

愉しかった

扮装の

SMプレイ

増田喜代司

御多忙の辻村隆氏に御無理をいって、辻村氏の貴重な時間をさいて頂いたのは、四月の中旬のことでした。

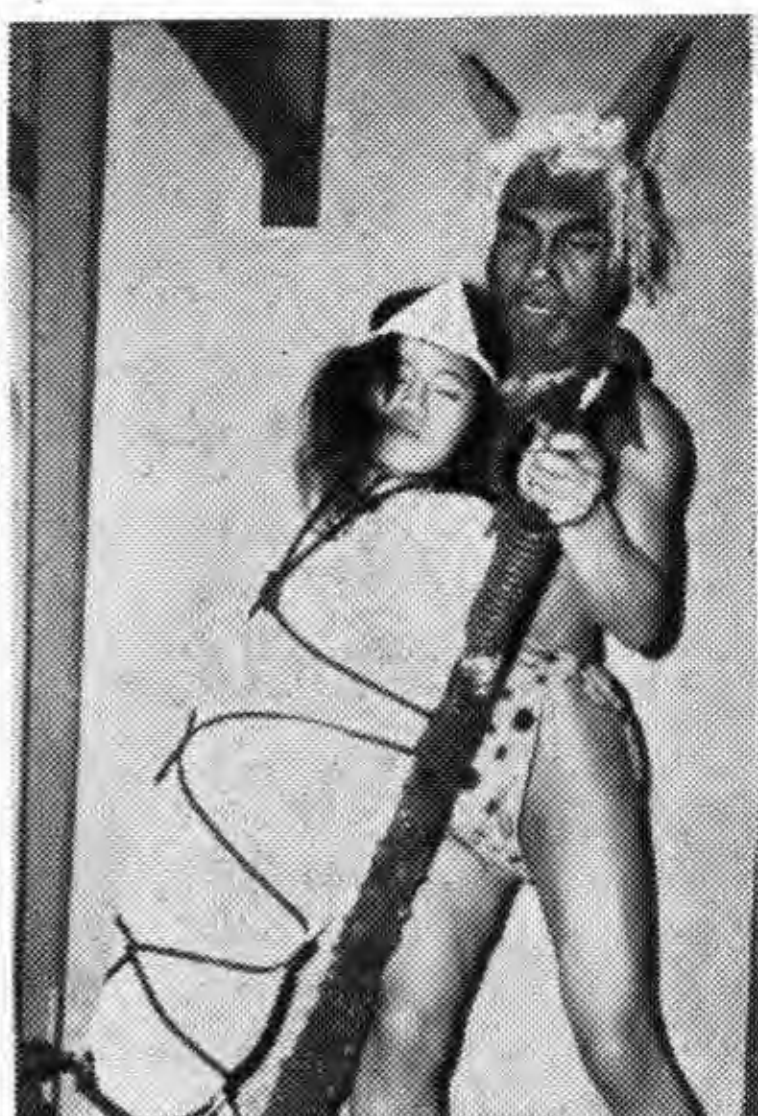
土曜日におじゃまして、車で行きましたから、遅くなっても帰るつもりでしたのに、御好意に甘えて泊めて頂き、その上、素晴らしいプレイをとれる恩恵に浴したのです。ボク達夫婦にとっては考えても見ない夢のような一夜でした。

ボク達のおじゃました少し前に、新宮明夫

氏夫妻がこられたそうで、その時にかつらとチョンマゲを借りられたのが、そのままあったのです。ボクはボクなりに、少し趣向をこらして、ボクの友達に無理をいって、鬼と亡者の扮装をもっていって、辻村氏をビックリさせて上げようと思っていたのですが、嬉しいビックリが二つ重なり、まったくまごついてしまいました。

新宮氏夫妻もこの同じ場所ですったのだとおっしゃる、離れの間を提供してもらって、

ボク等は早速扮装しました。妻のみゆきは唐人囃子というそのかつらが意外によく似合いました。辻村氏の奥様の夏の浴衣を拝借して、ボクもすみでいろいろ顔を非人のようにつけて、チョンマゲの上からほうかむりし、いかにも雲助か非人が町娘を襲うという設定のもとに、次々辻村氏のいわれるように芝居をしてゆきました。パチパチとひっきりなしに辻村氏はうつされますが、これがもしハミリカメラだと本当によかったのにと、残念でた



まりませんでした。

緊縛プレイから町娘を襲い、最後の一線までいって、この巻は終りです。ついですぐさま扮装をかえて、今度は鬼と亡者です。地獄の鬼が亡者の娘を責める設定で、これは相当大胆にやりました。ただ残念なことには、この両者を通じて、全然鼻責めはなく、それがボクにとっては最も物足りない事実でした。しかし辻村氏とすれば鼻責めもプレイのうちの一つに考えられているらしく、時々妻の鼻をつまむ程度のことにみに終わってしまいました。ボクは机の上に外した腕時計を見るときも午前三時です。しかしボクも妻もかなりコ

ーファンしているのか、さっぱり眠くありません。辻村氏は少し疲れた顔で、

「もうやめましょうか」

といわれましたが、折角の機会で、油が乗り切っていた時だけに、このまま終るのは何か物足りない気持で一杯でした。ボクは

「そうですネ。もう少し構いませんけど」

といって、妻にどうかときくと、妻は、

「私も構いませんわ」とボクの胸中を察して合槌をうってくださいます。こんな時の妻はやはり一緒に毎日暮らしていて、ボクの気持がよく分っているだけに、よく協力してくれるのです。

「ほんなら、次は何をとりましょうか。ストーブの熱気で少し頭が痛いんだけど」

と、辻村氏は、やや疲れ気味で口重そうにいわれました。

「辻村さんの縛って見たいと思われるものをやって下さい」

ボクはその時、みゆきと二人でひしひしと二つの体を合せて縛ってもらいたかったのですが、さすがに照れていいかねていると、察しのよい辻村氏は

「じゃあ、あんた方二人では出来ない連縛をとりましょうか。もう相当おそいから、ぐず



ぐずしていたら夜が明けてしまう。早いとこやりましょう」

「といって、暑いのか、

セーターとズボンをぬいで、縄をもってボク達に近づいて来ました。二人とも扮装をとってハダカでしたが、その俛の姿で辻村氏はボク達を立たせて、二人を一緒にかなりきつく背中合せに縛り合されました。ボクの後手とみゆきの後手がピッタリと腰のあたりで重なっています。ボクは力強く妻の手を握り、みゆきに協力への感謝の意志表示をしました。

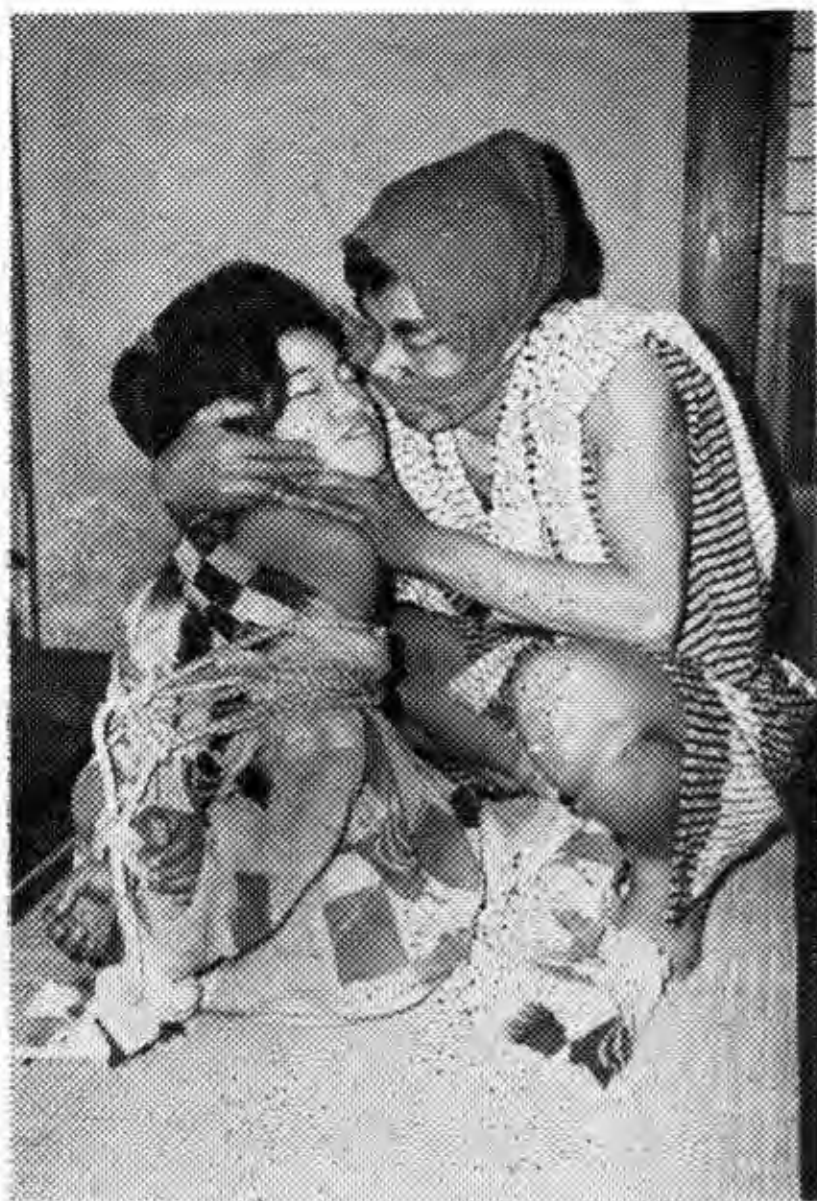
それこそ、足首まで、ボク達二人を縛り合された辻村氏は、ボク達の立姿の連縛を前後左右からとられ、ついで、いきなり私達をその場に押倒し

ました。ボクがうつぶせに下になり妻の体はボクの上で足をバタつかせて、亀がひっくり返って縛りつけられたようにあえいでいました。

縄が急に腰の辺りでひどくしまり出し、苦しくなり出しました。今度はボクと妻の体が並んで横になりました。辻村氏のカメラは、どうしてもボクの方より妻の方へ多くシャッターがきかれていました。その俛力を入れてぐるりと二人の体を転がされたので、縄の喰い込みが一層はげしくなります。

妻は苦痛のうめきをあげませんが、痛みはボクと同じはずです。とうとうボクも悲鳴をあげてしまいました。スゴく楽しいひとときであり、もっともっと、この俛にしておいてほしいと思い乍ら、やはり女より男の方が耐久力がなく、ボクの方が先にマイってしまったのでした。

二人を起して立たすのは辻村氏にしてもスゴい努力でした。ウンウン力を入れて延そうとするが、そうされると全身の縄がよじれて尚更痛く、ボクは心底から音をあげました。やっとよろよろして立上った時、辻村氏のひたいも汗でズブ濡れでした。



縄を解くのも一苦勞でしたが、解き放たれてしまうと、すぐその尻から惜しかったように思われました。みゆきは案外ケロリとしていました。

ボクは少しワイワイいったのが恥かしくな
って、みゆきに

「痛かっただろう?」

と、きいてやりましたら

「そうでもなかったわ、あなた一人で私を縛る時の方が、いつももっときついわ。これぐ

らいならいい方よ」

といわれギャフンと参りました。やはり人の体だから、その強弱が分らないのです。みゆきはいつも、こんな痛みをジツとこらえていたのかと思うと、急にいとさがこみ上げてきました。

このプレイで、辻村氏の疲れは一層ひどくなったのか、やはり病氣をもっておられるのでこたえるらしく、ふうふういっておられました。辻村氏に悪いことをしたと思いました

が、その時、彼が

「相当強烈だったネ、もうこのくらいにしよう。私もつかれたよ」

といわれたのでボク達は大急ぎでちらかった部屋を片付け始めました隣室には奥さまが早くから床をとっておいで下さっていたので、ザッと片付けて、明日にすることにし

て、クリンシンクリームで顔を拭いて、すぐ寝ることにしました。

辻村氏は、そそくさと立去りましたが、とうとう、その夜は陽が高くなるまで、夜っぴてのプレイの感激で眠れませんでした。

辻村氏の話では、カメラ・ハントにしないとおっしゃり、ボクにかくようにいわれましたが、なにしろ平常文章を書いたこともないので、やっと拙ない文ながら、以上のようなその夜のプレイの有様をまとめて見ました。

今後又、いろいろと書くつもりですが、シリーズとはいいい乍ら、毎月書く自信がありませんので、ボツボツ発表してゆきたいと思っています。辻村氏に真似て、ボクのカメラ・リポートです。

最後に、千葉の鼻責生様——何とかしてお会いしたいと思いますので、よろしく御指導下さるよう、お願い致します。

今日は鼻責めシリーズといい乍ら、辻村氏にとっていたいたもので、鼻責めはフォトにはありませんが、プレイ中には少しありましたので、やはり鼻責めシリーズに加えた次第です。

(おわり)



「菱縄」に憑かれて

早 木 夢 二

乳房の上に一筋縄をかけて、後手に縛っただけの簡単なものであったが、そのため一層くつきりと、豊かな白い全裸の体が浮き上がっている女の姿を見ていると、ああ、とうとう私の願いが叶ったという満足の思いが、縄尻を握っている私の手から全身へ伝って来た。

立て！

私は女にそう命ずると、縄尻をひいて、いかにも罪人を白洲へ引き立てる役人のように、鏡の前に連れて来た。

女はうなだれて、軽く眼をつぶっている。どう？ 縄の具合は？

私にうながされて、女は薄く眼をあけて、

鏡の中の緊縛された自分の姿をながめた。そして、ポーツと赤らめた顔を私の方へ向けていいわ。でも少し、恥しい……。

恥しいには違いなかった。私が縄をとり出して、

これで、君を縛るんだよ。

といった時の、女の軽い驚きは、ほんの先ほどの事であった。

これ迄も、私は折にふれて、女に様々の縛りの写真や雑誌などを見せて、それとなく私の欲望をほのめかしていた。

初めの内は、

まあ、嫌だわ。

といていた女も、その内に段々、少しずつ反応を示し始めていた。

一糸も纏わない女が、縦しほりを施されている写真を見る眼の内に、未知の世界にあこがれる光りが見えるような気がして来た。

そして、やっと、私は女を、こんな簡単な形ではあるが、とに角縛ることが出来たのである。

私は、鏡の前の女の後に廻って、二の腕にかかった縄目を眺めながら、この次から、この女に色々な形の縄をかけることを想像して、突き上げるような胸のときめきを覚えていた。

○
十二、三才の頃であったか、私は薄暗い映画館の中で、いま写し出された画面に、ギューッと身内の引き締まるようなおののきを感じた。

それは、今の大映の前身である日活の、「義に鳴る虎徹」という映画であった。河部五郎という古い俳優が、近藤勇に扮して、敵である勤皇の志士とその恋人を救う筋書だった。新撰組に捕えられた志士と、その恋人の芸者は、散々な拷問を受け、遂に市中引き廻しの上、斬首の刑に処せられることになる。その引き廻しの場面が、スクリーンに写し出されているのであった。

志士には故人の葛木香一、恋人は沢村春子であった。二人とも菱縄をかけられ、裸馬に乗せられて、街々を引き廻されてゆく。

髪をがっくりと乱し、襟元のはだかった沢村春子の、菱縄をかけられた姿が画面いっぱいパッと写し出された瞬間から、私はハッと息をのみ、胸をワクワクさせながら、ジッと画面を見詰め、眼をこらした。

恋人の妹がかけつけ、許されて裸馬から下され妹と面会する時、背中にも菱縄がかけられているのが判った。

私は、それ迄にも、雑誌などで菱縄をかけられた男女の姿を見ていたが、映画で生きた人間―特に女が、菱縄をかけられているのを見たのは、これが初めてであった。

私は幼ない頃から、縛ることに異常な興味を感じていたが、自分で他人を縛る機会はなく、勿論自分を縛って貰う機会もなかった。

唯雑誌などを読んで、さし画にそんな姿が出てくると、むさぼるように眺めた。

私が叔母の家で遊んでいる時、叔母が、私の読んでいた「少年倶楽部」をのぞき込んだ。

私はハッとして、慌てて本を閉じようとした。

叔母はお構いなく、私から、ひったくるように取ると、私の読んでいた所を見た。

まあ、責められてるのね。

私は、その時の叔母の声を、今でも覚えている。私は、この若い叔母に、そんな所を見られたのを、非常に恥しく思いながら、一面では、いたずらっ子のような意地悪い快感も覚えていたことは確かである。

それは、有名な天野屋利兵衛の拷問場面であった。きびしく菱縄をかけられた利兵衛が三角木の上に坐って、石を三枚抱かされている、有名な責め場であった。

私は努めて、雑誌や映画で縛られた場面、それも女が縛られている場面を、さがし求めた。男だとそんな場面はしばしば発見されたが、女となると、簡単な後手縛りのものは沢山あったが、菱縄をかけられているものは、仲々見当らなかった。

私は、映画館の前に陳列してあるスチールを見て歩いて、それらしいものがあると、切符を買って入った。勿論、菱縄をかけられた女優のスチールがあれば、文句はなかった。私は暗がりの中で、その場面が写し出されるのを、今か今かと待っていた。

新興キネマという会社で作った「情熱の不知火」では、当時のグラマー女優志賀睦子の扮する女主人公が、菱縄をかけられて護送される場面があった。病気の彼女が役人に両脇を支えられて、菱縄姿で恋人の片岡千恵蔵と対面する場面には、一抹の哀愁が漂っていた。スチールや筋書きなどでは、何の予感もなしに、不意にそんな場面にあつかつて、思いがけない歓喜を味わうことがあった。

マキノキネマの「続斑蛇」を場末の映画館で見っていた時であった。私は友人と、学校をサボっていたのだが、当時はまだ二階席で見られた畳敷きの上に寝そべって、甚だ横着な

恰好で見ていた私は、ある場面が写し出されるとハッと胸をときめかし、俄かに体を起して画面をしげしげと見入った。

マキノ智子が、女賊「斑蛇^{まだら}おりえ」に扮していた。彼女は召し捕られた牢内で、恋敵の女と会って、自分の恋人を取られたことを知り、カッとなって恋敵の女を殺して仕舞う。その女には、グラマー女優大林梅子が扮していた。

おりえは再び殺人罪で役所へ護送される。捕り方につきそわれて、舟で護送されるシーンが写った。

獄衣を纏ったおりえが、菱縄をかけられて憂いに沈んだ表情で坐っている。その菱縄がきちんとかけられていて、私は長い年月の経った今でも、ありありと思い出すことが出来る。

私はその後も、例えば『ごろん棒浪人』という新興キネマの映画の中で、巴蝶子[？]が菱縄をかけられ、さらされている場面、『松平長七郎』で望月礼子が菱縄姿でハリツケ台にかけられている場面、等々を思い出すことが出来る。勿論簡単に縛られている女優の出る映画は数多くあったが、私は殊更に菱縄をかけられた女優を探し求めていたのである。

その間にも、雑誌などでも『菱縄の女』を探したものである。当時あった小型の「講談雑誌」という雑誌を覚えておられる方も多いであろう。

私はこの雑誌の中で、変態の旦那に、長襦袢一枚にされて縛り上げられ、責められている芸者のさし画を見ては、こんな世界に驚きと激しい誘惑を感じていた。

この雑誌に、『無残拷問史』という読物が載ったことがある。日本における拷問の歴史を書き、その実例をいくつか書いていた。その中に、有名な大阪屋花鳥の石抱き責めの図があった。白い獄衣をまとひ菱縄姿の花鳥が型のように三角木の上に坐って石を抱かされている。拷問役人が責め笞を握ってその傍に立っている。鈴木朱雀の絵であったと思う。いかにも責められる女の感じが滲み出ている。

私は後年、終戦後にこれと同じさし画を見た。やはり小型の雑誌であったが、巻頭読物に花鳥を扱った小説があって、お馴染の拷問場面が、木俣清史によって画かれていた。獄衣の上に菱縄をかけられた花鳥が、石を抱いて苦痛に顔をのけぞらしている。その菱縄が綺麗にかけられていたので、私はそのさし画

を切りとって、永い間所蔵していたものである。

その頃、同じような雑誌に『湯文字の女』が載っていて、そのさし画に湯文字一枚の裸体の女が、菱縄をかけられ、後手に縛られ、裸馬に乘せられて引き廻されているのがあった。私は買おうと思いついたが、つい延び延びになっている内に、店頭買いそこなって仕舞った。それは、姦通した女の処刑で、相手の男も同じ様に引き廻されているのだがそれが獄衣を着たまま菱縄姿で裸馬に乘せられているのが、裸形の女に比べて奇妙な感じであった。

戦争中は、映画でも雑誌でも、女の縛り姿勿論、殊に菱縄をかけられた女の姿を見つけ出すのは難しくなっていた。

その頃、子母沢寛の『天狗の安』の、週刊誌にのった女の縛り姿は、一糸纏わない文字通り全裸の女が、柱に縛りつけられている姿が、後から画かれていた。豊かな裸体で後手に縛られ、首うなだれている姿は私にとっても今でも忘れがたいものの一つである。『天狗の安』は再三映画になったが、この場面は流石に全裸では出来ないの、長襦袢一枚の縛りとなっていた。私は戦前の桜木梅子、戦

後の入江たか子の縛り姿を覚えている。

長い戦争が終って、いわゆる出版の自由の波にのって色々な、戦前は仲々お目にかかれなかった類の雑誌が出始めると、私は再び縛られた女―殊に菱縄姿の女を探し求めた。

その頃、最も脚光を浴びたのは伊藤晴雨であろう。私も様々の雑誌に発表された氏の責め絵や責め写真を数多く見たし、氏が演出して浅草の百万弗劇場で上演した責め芝居も見ている。又氏の監修した責められる女の特集写真集を、上野の夜店で買ったが、氏一流のどぎつい、暗い、いかにも「責め」といった感じの写真が一杯であった。その中で特に石を抱かされている女の二枚の写真が印象に残っている。

その外にも、伊藤彦造の責め絵や、大小さまざまな画家の責め絵が、その頃沢山出版されたこの種の雑誌に氾濫していた。

特高が女の党員に加えた拷問を特集した雑誌もあった。

そうした中で、私が初めて奇譚クラブを見たのは、昭和二十七年の春ごろであった。

まだ大版の雑誌で、縛られた女の写真も少く、緑猛比古の盗賊の拷問を描いた『海老責縁起』という文章を覚えている。私はすっか

りファンになった。

高瀬忍嬢が全裸で菱縄をかけられた写真が巻頭に載っているのを見た時は、全く驚くと同時に嬉しい気持ちで一杯になった。この号には、外にも全裸のモデルが色々な縄をかけられていて華かな縛りを見せていた。

私は奇クを読みふけり、多くのモデル嬢が色々な縛り方をされているのを見るにつけて改めて私の菱縄への願望を強く感じた。極端に言えば、菱縄でなければ満足しなかった。

永い間の菱縄へのあこがれが、又強く私の胸の中に湧き上って、私は毎号毎号の奇クを待ち兼ね、純粋な菱縄とまでは行かなくても、それに似た縛りがあれば、むさぼるように見入ったものだ。

伊吹真砂子嬢をモデルにした「縄の四十八手」という連続写真では、真正面から写したパンティだけをつけた裸体の菱縄姿があって私はその後随分永い間、この写真を秘蔵していたものだ。

勿論、菱縄姿の写真は、そうそうある訳ではなかった。私もその他の色々な縛りも楽しんでいた訳だが、いよいよ私は、私も又実際に女を縛ってみたいし菱縄をかけてみたいと思うようになった。

そう思っても、モデルを雇う訳には行かないので、結局は私の身近にいる女を縛るより外なかった。

私はその頃、戦争や何やかで結婚しそびれたまま、戦後の享楽の気風の中に浸って、毎晩のように、渋谷のあるキャバレーに通っていた。そして、そこでK子と知った。美人とはいえなかったが、頭の回転の早い、そして豊かな肉付きの女であった。かなりの売れっ子でもあった。そのK子と私は、ある寒い夜、渋谷の旅館で体の関係を持った。彼女は処女ではなかったが、豊かな肉体と、柔順な性格が私をひきつけた。

私は段々、彼女を私の縛りの願望の中に、引き込もうと努め始めた。

その為に先に書いたように、夜の会話の中にそれを匂わせるような話題を入れたり、奇クを殊更に見せたりした。そして、やっと簡単な形ではあるが、裸の彼女を縛ることが出来たのである。私は縄を手にとって、全裸になって正坐した彼女の後に廻ると、さあ、両手を後で組んでと命じ、彼女がそうすると、縄をしごいて乳房の上を一巻きして、それを後に廻して両手を縛った。

画でも写真でもない、現実の生きたピチピ

チした女体が、縄で緊縛されてはち切れるような肉の躍動が感じられた。

最初は十分位で、縄を解いたが、彼女の白い体に縄目の跡がくっきりと残っていた。

私は昂ぶった気持を抑えることが出来ず、そのまま彼女を畳の上に押し倒した。そして嬉しいことには、彼女も又異常な昂ぶりを見せていたのであった。

よかった？ と聞くと、

ええ、よかったわ。又縛って……。

私にとって、予想外の答が返って来た。とうとう彼女は私の欲望の中に立ち入って来たのだと思うと、私は思わず知らず、一層強く彼女を抱きしめた。

○

それから、私たちは愛し合う前は必ず縛りを行うようになった。

彼女は殆んど全裸になった。時にはパンティか腰巻を纏っただけの時もあったが、私はそれを好んだし、彼女も、どうせ縛りを受けるのなら、裸の方がいいわ、といって一糸纏わない全裸になる時が多かった。

その内に、私は菱縄だけをかけるようになった。大体、私があれ程強く望んでいたのは菱縄であつたし、彼女も一度菱縄をかけられ

てからは、他の縄は喜ばなかった。

体がしまつて……菱縄が一番いいわ。

よくそういったものだ。

私は縄を二つに分けて彼女の首にかけ、どの下で結び、左右に分けて二の腕に巻きつけ、再びそれを前に廻して乳房の下辺りで結び目を作った。そしてその縄を後に廻して、彼女の両手を縛る。それで菱形の縄がかかった訳だが、その内に段々私も彼女も、背中に縄がかかっていないのを物足りなく感じ始めた。

私はもう一本の縄を用意し、一応菱縄をかけ終った所で、その縄を首縄の後に通し、前と同じようにして菱縄を背中にもかけるようになった。伊吹真砂子嬢の『縄の四十八手』にあった、前後とも菱縄であった。こうすると彼女の体は一層よくしまつて、彼女はそれだけでもう顔を上気させ、いい縄だわ、といいながら、激しく燃え立ったものである。

菱縄をかけ始めた時、私は彼女に先に書いた木俣清史の『花鳥拷問図』や伊吹嬢の緊縛写真、高瀬忍嬢の緊縛写真等を見せて、縛り方の研究をしたのである。縛り方の順序などは違っていたかも知れないが、とに角彼女の菱縄縛りはこうして始まった。

時には、彼女に簡単な一文字縄をかけることもあったが、一旦菱縄の味を覚えた彼女はもうそんな縛り方では満足しなかった。

私は一度縛った縄を解いて、又菱縄をかけ直さなくてはならなかった。

ある日、私はふと思いついて、夕方アパートへ帰ると、彼女をすぐ裸にした。不審な顔をしていたが、彼女は命ぜられるままに、腰巻一枚になった。私は縄をとり出した。

あら、もう縛るの？

そういう彼女にお構いなく、私は何時もの通りに菱縄をかけた。然し今日は両手を縛らず自由にしておいた。

さあ、それで仕事をするんだよ。

彼女は諒解した。まだ陽が残っている時間なので、少し恥しそうだったが、菱縄姿の裸体で炊事を始めた。私は寝そべって夕刊を読みながら時々彼女の姿をながめた。

恥しいかい？

ええ、少しね。でも私はあなたの囚人だから。

彼女はそう答えた。

あなたの囚人。私は彼女を縛っている時は私が役人で、彼女はその役人に取り調べられている女囚という想定で、彼女を訓練してい

た。従ってその間は、彼女は私の愛人でも女房でもなく、白洲で調べられ責めを受ける囚人にすぎなかった。

私がK子！と呼びかけると、彼女は必ずハイ、ときちんと答え、丁寧な言葉で返答をするようにしていた。

私もすっかり、罪人を責める役人のような気になって、どうだ、気持は？とか、さあ、一切を申し上げ、んだとか、それらしい責め言葉をかけた、彼女もその都度、ハイ、ようございますとか、ハイ、申し上げますお役人さま、などとすっかり罪人のような答え方をするのだった。

あなたの囚人だから、という言葉を聞くと私はもうすっかり彼女が、私の縛りの世界に入り切ってくれていることが判って、いじらしい気持が一杯になった。

ある冬の日に、私が珍らしく、着物の上から菱縄をかけて、しばらくそのまま抱いていたことがあった。その時も彼女は、

不思議ね。こうして縛られてると私、罪人のような気持がして来るわ。

といったことがあった。

私の永い間の夢であった「菱縄への願望」は、こうしてK子という女によって、一応満

たされ、私は毎晩のように彼女を裸にして、菱縄を楽しむことが出来たが、こうなると又K子を色々に責めて見たい欲望にかられて来るのであった。

私はある晩、全裸の彼女に菱縄をかけ、あり合せの板を打ち合せて作った即成の拷問台の上に正坐させた。それだけで彼女も何が始まるか想像出来たと見えて、

拷問ね、といった。

私はひそかに用意していたブロック石を二三枚彼女の膝の上にのせた。それは唯、石抱きの拷問を連想させる程度の貧弱な、責め道具であったが、彼女は今までに見た花鳥の拷問場面を思い出して、たまたまその日の菱縄が大変よくかかっている、豊かな裸体を具合よくしめつけていたためもあって、結構拷問される女囚の感じを味っていたものと見えてじつとうなだれて膝の上のブロック石を見詰めたが、時々ウーンと呻いた。

そんな彼女を見ていると、私も段々拷問場の雰囲気を感じて来て、時々縄尻をグイグイひきながら、どうだ、白状せい、などと責め役人のような言葉をかけたりした。

そんなに重い石ではないから、とても石抱き責めの苦痛は味うべくもなかったが、むき

出しの膝の上にザラザラした石を積まれているので、少しの苦痛はあるらしかった。

彼女は私に縄尻をひかれるたびに、アッ！とかウーンとか、呻いたりしたものだ。

又、ある時は、菱縄のままの彼女にあぐらをかかせ、両足首を揃えて縛り、その縄を首にかけて、ギュッとしばった。そして、彼女の首が股間に近づくほどにしばって、暫く放っておいた。海老責めの積りだった。甚だお粗末な責め方だったが、しばられた裸身には血がのぼり、苦しそうな息を吐きながら、彼女は私が縄を解くまで耐えて海老責めの感じを出していた。

○

戦後現われた映画では、縛りの場面が数多く見られるようになったが、依然として菱縄に憧れる私にとって、印象に残っているものをあげて見よう。

松竹の『江戸群盗伝』で福田公子の花鳥が拷問される場面。既に書いたように、花鳥は女性拷問史上で話題に残る女であるが、この映画では完全な菱縄ではなくて、首から二の腕へ廻されただけの縛りであったが、その彼女が吊し責めで気を失って倒れている。水をかけて気を取り返えさせた役人が、縄尻をひ

いて引き起し責め言葉をかける。やりとりの後、縄尻を天井の吊り環にかけて強く引っ張り、足で彼女の裾を押え、両手や胸をしめる拷問にかかる。揚句の果、彼女はなぐらわれてぶっ倒れる。福田公子の責め姿が、いかにも遊女の花鳥らしい勝気さと哀れさを現わしていた。

同じ松竹の『大盗小盗』では、泉京子が菱縄をかけられて、延々と引き廻される。グラマーで有名だった彼女の菱縄姿は一寸した見場であつたし、その引き廻しシーンの長いことも菱縄マニアの私にとっては、共に嬉しいことであつた。序に、この映画では三橋美智也、名和宏も菱縄姿で泉京子と一所に引き廻されていた。

新東宝の『日本拷問刑罰史』が製作された時は、名和弓雄の原作をのぞいていたので、私は大きな期待に胸ふくらませて公開を待った。

結局三回、場末の映画館に通つたが、私の期待通りに文字通り全篇これ、縛り、拷問、刑罰という凄じさに圧倒された。

裸身に菱縄をかけられ、笞打ちで責められる場面や、石を抱かされる場面は、昔の牢間い拷問もさこそと思われるものだった。

唯、刑罰に必然的に伴う引き廻しの場面がシルエットになつて、菱縄が漠然としていたのはいただけない。矢張りはっきり菱縄をかけた引き廻し姿を、十分に見せるべきであつた。それと、縄のかけ方が色々あつて、石抱き責めの娘の場合は、乳首を軸にして、横、縦に廻してあつたが、こんな縄のかけ方もあつたのか。映倫を考慮しての縛り方ではないかと思われた。

この映画で珍しかったのは木馬責めの場面であつた。これは仲々映画では出て来ない拷問で、この映画がこれを取り上げているのは当然だが、場面としても良く出来ていた。湯文字一枚で後手に縛られ（菱縄でないのが残念）身悶えしながら、木馬に跨っている女の姿が印象に残つた。その前に女が役人の手で木馬に跨らされるシーンがあり、女の足に石が重しとしてくりつけられるが、その都度、絶叫する女の呻きも迫力があつてよかった。

同じエロダクションでの作品『赤いしごき』も縛りファンにとって、仲々興味深い映画であつた。

開巻、いきなり字幕のタイトルバックに、豊かな肉体の香取環が、囚衣をまとい菱縄を

かけられた姿で写し出される。大いに迫力のあるシーンで、次にはハリツケにかけられ、槍で突かれて苦悶する。これが字幕で、本篇になると又驚いたことには、略全篇に菱縄姿の彼女が出てくるのである。

処刑を明日に控えて、菱縄をかけられた彼女と、相手の男が、これも菱縄をかけられて刑場にさらされている。

非人に乳房を握られたり、近くで男女が愛し合う呻き声で、堪らなくなつて身悶えするという場面もあれば、捕えられて拷問される場面もタップリある。吊されて責められ、ギザギザのついた笞で体をこじられたり、縄をとかれてグツタリ横たわつた彼女の胸の辺りを、笞でつつく等、盛り沢山の責め場面があつた。

香取環という女優が、仲々豊富な肉体で全篇菱縄をかけられ放しの役柄を悪びれず演じていた。

映画『花と蛇』は奇クの連載小説『花と蛇』を基にして作つたものだが、内容は似ても似つかぬものであつた。然し時々出てくる縛りの場面は仲々興味があつた。殊に最後の静子夫人が全裸で縛られているシーンは仲々感じを出していた。

最近ではテレビでも菱縄姿を見かけることがある。

男の菱縄姿は随分あるが、女の菱縄姿となると少ないが、最近のテレビから私の目に止ったものをあげて見よう。

これは舞台中継ではあったが、有馬稲子が中村錦之助と共演した『裏切った女』で、最後の刑場のシーン、菱縄をかけられていた。ここでは女中も同じ菱縄姿。尚有馬はその前の場で捕えられる場面、長襦袢一枚で縄をかけられるシーンも仇っぱかった。

最近始まった「NHK」の『池田大助捕物帖』の第一回では、女賊が捕えられた一味と共に、白洲へ引き据えられている場面で、皆菱縄をかけられ、彼女も細身の体にやや太い目の菱縄をかけられている。後手もキチンと縛ってあって、それを前後から写して見せていた。

○
ある日、私は着物を着ている彼女に、下着をとるようにいった。

彼女はいつもなら裸になるようにいわれる所なので、一寸不審相な顔をしたが、それでもすぐ命令に従った。

私は縄を取り出した。そして、どうするの

？と問いたげな彼女には何もいわずに、彼女の着物の裾をまくりたくし上げさせた。手に持った縄を腰のくびれの辺りで前後に廻しかけた。へその上辺りで結び目を作り、その二筋の縄をそのまま下し、股間を割って後に廻した。

彼女もやっと事情が判って来たと見えて、いやだわと呟くようにいったが、後で縄止めをする少し痛そうな顔をしただけで、股間縛り？　とつい先日雑誌にのっていたのを私が見せてやったのを思い出したらしかった。

裾を下してやると、外からではとても股間縛りを受けているとは思えなかった。

それから、私たちは散歩に出て映画館に入った。私は人混みの中を歩く彼女に、わざと数歩おくれ、後から彼女の歩く姿をながめた。特に変わったような所は感じられなかった。

どうしたの？と、彼女がきいた。私はいい加減な返事をしてごまかした。まさか股間縛りかけた君の歩く姿を見ていたんだよといふ兼ねた。

映画をみていると縄が段々しまってくるのか、彼女は時々お尻をもぞもぞさせていた。縄が喰い込んでくるのでジッと坐っているのが苦しくなる風であった。

縄は大丈夫？　ときくと、それでも、うーん大丈夫、と答えた。

途中で便所に立った彼女は席に戻ってくる、にが笑いしながら、

縄が少し濡れたわといった。

それが、私が彼女に股間縛りを施した初めであった。その頃私は彼女の上半身に散々菱縄をかけていたので、そろそろ何か変わった趣向の縛り方を欲していた。そして、彼女の体に、菱縄をかけて眺めていると上半身はよいが、下半身が全然空いているのが物足らなく思うようになっていた。

奇くでも段々縄のかけ方が上半身から下半身へ移っているように思われた。下半身にかけて様々の縛り方が施されている写真が沢山現われていた。

股間縛りでは、ずっと前の奇くで全裸の後姿にビニール紐を全身隈なくかけられ、それが中腰になった股間に廻されている写真や、タイツ姿の縛り写真で股間縄がかけられているのを見たことがあったが、私も段々彼女に股間縄をかけて見たいと思うようになった。

然し、彼女はその頃ではすっかり菱縄になれて自分から菱縄をかけて！というようになっていたが、股間縛りをしようという出ず勇

気は仲々出なかった。

思い切って着物の下で股間に縄を廻した日から暫く立って、私はいよいよ彼女に、本式に股間縛りを施して見ようと思った。

いつものように、全裸になった彼女は両手を後に廻し、胸をそらせて縄を待っていたが何か様子が変わっているのに気づいた。

縄かけないの？ と彼女がきくので、私は、かけることはかけるけど、今日はいつもと違った縄をかけたいんだ、といった。

それ、なあに？ と彼女が再びきくので、私は遂に股間縛りだよという彼女はすぐ先日のことを思い出したと見えて、ああ、こないだのあれね、といった。

私は全裸の彼女を膝をついて中腰にして立たせ胴縄をかけた。そしてへその上辺りで結び目を作った二筋の縄を、縦に下して後に廻した縄を再び前に廻して、縦の縄に結んでキユーッとしばった。むっちりとした油のつた下腹に菱形の縄が出来て喰い込んだ。

後で縄止めをすると私は彼女を鏡の前に連れて行って、今日初めて試みた下腹の菱縄を写して見た。

まあ、と彼女は鏡の中の緊縛姿を見て一寸驚いたように叫んだ。

どう、気持は？ ときくと、いいわよ。時にはこんな変わった縛り方もいいわね。

と、答えた。

それから、私は彼女に菱縄をかける時は必ず股間縛りも加えることになった。上半身に菱縄をかけ終ると、余縄を使って下半身に二筋の縄を股間から後へ廻すだけの時もあり、それを中心に菱縄を作ることもあった。

彼女もすっかり縄に慣れて来て、時としては、私が催促されて慌てて縄を取り出すというようなこともあった。永い年月の間に縄も何本ととっ換えなくてはならなかったが、使用中の縄がある程度痛んでくると、彼女は黙って自分で買ってくるのだった。

私は真夜中に菱縄をかけ、股間縛りを施した彼女の体に、浴衣をひっかけさせて、縄尻をつかんで、人気のない近所を引き廻して見たことがあった。

途中で遠くに人の影が見えて、私たちはハッとしたが、それを旨く避けて三十分余りの近所を引き廻して歩き、いよいよ人気のない所に来ると、浴衣をとり、裸のまま引き廻したりした。

○

こうして、私とK子の縛りを中心とした生

活も、もう十何年と続いている。今でも週に一回は必ず、K子に菱縄をかけ、時に股間縛りを施して夫婦の緊縛プレーを楽しむことにしている。

最近の奇ク誌上には、私たちと同じように夫婦の緊縛プレーを楽しむ人たちの記事がのっている。グラビアのモデル嬢たちの緊縛写真が見られなくなりましたが、この人たちの緊縛プレーの写真は、素人ッぽさは否めないがそれなりに仲々楽しい。

新田夫妻のプレー写真は、豊満な裸身に縄が綺麗にかけられていて、緊縛を楽しむ夫妻の姿が想像されて羨しい位である。確か三月号に載った夫人の緊縛写真は、下半身に菱形の縄がクッキリかけられていて、同じ型の四月号の写真と共に見事なものであった。唯、惜しいのは、二の腕に縄がかかっていないことで、そのため両腕を後に廻しているが、これが緊縛されていないのが明らかなことである。

今後ともこうした人たちの緊縛写真が奇ク誌上を飾ることを期待すると共に、私たちも益々緊縛プレーにみがきをかけて行きたいと思っている。

(完)